

狂った黒い月と私

(´・ω・)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2018年冬

人類と深海棲艦の戦いは膠着を極めていた
しかしそれは破滅への序曲ですらなかった

あえて言おう

遅すぎたのだ

一人の少女の願いや奮闘は虚しく

もはや世界は終演を呼び起こした

では始めようすべてが終わるその一瞬まで

終章あらすじ

空っぽの器は砕けた

どす黒い悪意は次の器に継がれ

そして器は再来を望んだ

この喜劇に終わりはなく

全ての歪みは終焉へ至りそして

私の願いは

きつと……。

『目下無駄な部分』

おまけ編を信じるな全くためにならんw(虚無好きは見たらいいん

じゃない)

うるさい画面(ほんとうっさい)

ステータスなんて飾りですよ、アホな人にはそれがわからんのですよ、そんなものがなくてもストーリーは100%の性能を出せます(リプレイの小説化に無理がある)

絵が本命の癖に絵の無い文(だって面倒だし)

人間の屑(いつものこと)

敵味方にいともたやすく行われるえげつない行為(別に人間ちやうしええやろ)

に注意してくれよな。

『タイトルってどうでもよくね重要性がわからん』

目次

関係ないよ

第0話 再確認七これ☆仕様 | 1

番外編 一話愚痴米に新作 | 7

番外編 式話 IFもしもクリスマス計画が出来なかつたら

11

番外編ドライ 教えて!!つつちーせんせー&ミアアニメ | 22

番外編トロワア♪ 本編if やっぱり真面目なやつの方が戦争

楽しくなりそうよね | 35

番外編 ファイフス ここまで本編の裏話をするのも面白い | 38

一部終結記念 THE乾杯 | 43

祝 七これ完全終了& a m p ;三分で分かる一話から最終話

48

本編だよ 第壹部 人類戦争

第1話 狂帝降臨 | 54

第2話 建造なのです | 59

第3話 独帝空母 | 66

第4話 資源基地奪取作戦(前) | 71

第5話 資源基地奪取作戦(後) | 75

第6話 横須賀大演習壹 | 82

第7話 横須賀大演習貳 | 88

第8話 横須賀大演習参 | 93

第9話 真相と欠片と力 | 97

第10話 演じるものと決めるもの | 105

第11話 ヒトラーになりきれなかった男 | 112

第12話	ミッドウエーとクリスマス	115
第13話	クリスマス計画	121
第14話	ミッドウエーの攻防	126
第15話	怪物	136
第16話	平和の形	141
第17話	空母と空母と空母	147
第18話	青い悪魔	153
第19話	ミッドウエーの激戦	162
第20話	横須賀立つ	167
	重要? いいえ重要です	170
第21話	追撃! 独帝艦隊!	179
第22話	轟砲よ全てを砕け	187
第23話	月下美人	197
第24話	希望が絶望に	202
第25話	審判	215
第26話	勝者と正義	224
第26・5話(番外)	空白の二年纏め	229
第27話	開戦	234
第28話	人類の願望	241
第29話	武器も士気もあるんだよ	247
第30話	演じるもの	252
第31話	狂帝	257
第32?話	閉幕	261
第999話	エピローグ	275

第貳部 極帝死闘

打ち上げじゃあああああ	罪	Q	破 空虚	■ ■ ■ ■ ■ ■	???	???	???	???	最終話 l a s t d a n c e	第39話 最高の相棒	第38話 役者	第37話 独帝再臨	第36話 黒き月は鉄十字の世界を見るか	第35話 蘇る恐怖	第34話 三年間	第33話 真の敵
371	366	362	357	352	343	337	329	326	319	312	307	303	298	294	288	

関係ないよ

第0話 再確認七これ☆仕様

ピコピコといつものようにゲームの効果音が鳴り響くある一室

余だよ「はあ、上げすぎたレベルでモンスターを蹂躪するのμονにかを失った感じがしますねえ」

いつもどうり動画編集や漫画版のリメイクをすつぽかして有名RPGをやりこんでいると、またまた面倒くさい事を呼ぶ悪魔の足音が聞こえてきた。

余だよ「刀どこだっけな」

足音が近づいて来たためとりあえず迎撃用の刀を山のように積もった積み^塵ゲ^山ーから引つ張り出し先に抜いておく

主人公(笑)「閣下、しんさくやr「フォーウ!!」ったぶねえ」

まあ、いつもどうり首狙いで斬ってもそりやあ避けられる。

閣下「あーあ、避けちまった」

このパンいい加減にくたばらねえかな？

仏「閣下、新作やr「カエレ!」…「カエレ」何も言ってねえ。あ、紅茶だして」

とりあえず帰りそうにないから紅茶(下剤入り)とカステラを用意し和室のちやぶ台に置いてゲームの電源を切り音楽を流す

赤軍のマーチ♪

仏「総統閣下がソヴィエトのやつ流すんじやねえよ」

独「エリカとかよりはこつちの方が雰囲気あるしおーけーおーけー」

お互いがちやぶ台を挟み座った後に「で、用件はなんだ」と聞くそれに対して彼の答えはこうだ「投票の結果新作は七これだ」と。すぐさま眼鏡をちやぶ台に置く。

なんか他のやつもそろそろ入ってきたけど知らん

相当カツカ「はあ!?またあれかよ!!」

仏「空耳タイム始めんな」

相当カッカ「なんでき！やっぱお前ら嫌いだわヴァーカ」

仏「いつもいつてないか？」

相当カッカ「いつもつていつだよ」

仏「つっちーシリーズのリメイクとか今回のやつとか諸々」

相当カッカ「てゆうかき、お前ら艦これ最後にいつやったそして今何やってる」

仏日英ソ伊米「・・・」

独「やってないんだね、わかるとも」

あまりの無計画さに呆れて投げる机も戻してしまった。

あほかいね

独「わし怒らないから言うてみ最後にやったんいつや？」

仏「アイオワ実装」

英「三年前」

ソ「パンと同じ」

伊「ローマ」

日「ずいずい」

独「まあ、そうだよなあ、塩GO辺りから完全にやめたよなあ」

とりあえず所詮この程度だと解ってはいた、月パワーに擬人化が勝てるわけがないよな。

独「ほな、今何しとる」

仏「多分ここにいるやつら全員だいたい同じ」

独「だよなあ」

手詰まりじゃねえか。

ソ「本編やるどころじゃないぞこれ」

独「まあ、そのあれだ、ほら、やるゆうても準備いるしその間にまたやればいいよ」

仏「まあ、そうだよなあ、じゃあとりあえず今回は数年前の仕様確認で済みますか」

とりあえずいつものExp絵でメモ表を投げ渡す。

独「えーと音楽音楽」カチツ

つけた音楽はやっぱりこれ

旋風一択

ソ「そこは摩天楼で良かったらうに」

独「いいんだよめんどくせえ、はいパンちゃんその仕様を適当に読んで今から流すから」

仏「おk」

独「3、2、1、はい」

同時に録音を開始する。

仏「どうも、今回は三年ぶりにやる七これの仕様の再確認をしよう
まずはこれはTRPGシリーズみたいに別ゲーでプレイしたのを
無理矢理ニートの閣下を過労死させて物語にするやつです。「ニ
トにさせるレベルじゃないと思うの」

使用するゲームはみんな大好きh o iシリーズ今作はM o d製作
の都合で先送りになった4でのプレイです。「ニートにさせる仕事じや
ないと思うの」知りません。

戦力格差

じゃ、本気で説明しましょうとりあえず戦力格差ですが
人類20（艦娘抜き）に対して深海側は10万ですはい

え？詰みゲーだって？

へーきへーき、艦娘は固有ユニット扱いで生産がすごく困難だけど
アホみたいに強いですしおすし

え？下らん語りはいい早く重要事項出せ？

まあ仕方ないですよねはい

まあ戦力差なんて飾りですよ飾り

核乱射すれば一瞬でひっくり返るし。

一番の問題そう、七提督の補正

そもそもこれ初めは「モッドでガチガチに強化して閣下を集団リン
チすれば閣下に勝てる」つてのをやろうとしてたんですよ（エイリ
アン軍や火星軍が糞雑魚ナメクジレベルの世紀末戦争）。それでも何
回やっても何回やっても総統閣下が倒せない。

まあそれもそのはず。

まず閣下の補正

研究梓+3

研究スピード半減

未来技術のデメリツト0

全部隊の基礎ステ+50%

戦車系の性能二倍(超重戦車は4倍)

航空機性能80%上昇

潜水艦がすごく強くなる

式系統率低下がないむしろ上がる

閣下の部隊を包囲するとむしろ攻防が跳ね上がる

あつちがしても上がる

宣戦布告直後一年は全軍の性能+150%+研究スピード+30

%

核兵器の威力がマジモンの核になる(文字どおり一撃粉碎)

地形デバフ無効

戦争面のみでこれ

資源も鉄、石油が1.5倍

建設速度が+50%

「軍需工場二倍」

「造船所1.5倍」

戦車、航空機系の生産スピードドイツ系限定で二倍(アンリミテツ

ドチハたんワークスはできない)

週間空母ならぬ月間核兵器

正当化工作速度が1日(もはやいい加減ないちやもんつけて殴つて

るだけ)

クーデター、政党の工作をほぼ無効化

他にもあった気がするけどこれらが主だったやつ

ただのチートやチート

補正で歩兵部隊が攻防1200突1000というクソゲー

独「せやな」

仏「わかつてるならどないかせい」

独「しーらねつと、後他の奴等のは他の方で個別紹介しとけばええ

やろどうせ資源も工場も糞もないからな」

ソ「まあ、今回はもはや国でのリンチじゃ無いしな」

日「せんせー、深海側も出ときましようよ」

仏「あ、はいはい。ちよつとまって」

深海棲艦

工場7980

造船所10000

陸軍0

海軍

空母1000

戦艦2500

巡洋艦2万

駆逐艦15万

航空機 たくさんです

その他 たくさんです

資源無限（ある意味）

は？

は？

独「敗北確定ワロタ」

日「万wwてwwおいおいww」

伊「鋼鉄世界じゃないんだからあ」

ソ「領土が範囲雑w海に赤円書いただけかよ」

米「資源無限ってw」

仏「うーんこのうちの特性でマジノ線（海上）敷いても無理やろ」

英「うわー」

仏「ま、まあ閣下は最前線だし最悪人類ぽいでリンチ」

独「ふざけんな」

仏「で、イデオロギーってか派閥があんだなこれ、空母系と戦艦系を4：4に残りは東西南北の姫でわってんのかな？」

独「まあなんか関係最悪の設定だしそこ煽って内部崩壊狙おうとしたけど人類側もなんか派閥割れてる」

仏「作成者いわく日本は割れるものだそうですし」

独「うーん、人類も割ればいいか」

ソ「対処法考えろよ」

独「まあどうでもいいか、賽をなげりやあどうなるかわインチキせんかぎり運じゃけえ」

日「一番インチキしてるやつが運ゲー言うとる」

独「せやかてにっちゃん、どーせこんなやり方で覆せるやろ」

日「まあ、できるだろうな」

仏「ま、今回はこれでいいでしょう、後は閣下が辻褄合わせするし」

独「ええ」

仏「それでは皆さんごきげんよう」

番外編 一話愚痴米に新作

独「……（。ロ。）」

加賀「もつきゆもつきゆ」

独「…… あ、えーと皆さんこんにちわ、本日の七帝これくしょんリターンズ番外編の司会をします、ウィルキア帝国東洋艦隊旗艦兼大東亜艦隊総旗艦兼ドイツ第三帝国艦隊主力艦隊旗艦兼元大日本帝国海軍総旗艦で現霧の艦隊総旗艦安土型重戦艦一番艦安土です、好きなものは苦しむウジ虫という人類と艦長と姉妹で、嫌いなものは生きてる人間と仕事をすべて押し付けてくる糞上司の摩天楼とことあるごとに変な服着せに来る糞BBAですはい」

加賀「提督、これラジオじゃなくて映像です」バリバリ

独「…… あ、そうなのね、じゃあ今日のコーナー教えて」

加賀「これです」

独「えーとなになにに、コメント返し、裏話、新作寄越せ？ふっふっふ、ならばやりましょう、そのために時間を取ったんですから」

加賀「アズレン……」ポチポチ

独「じゃあコメントから…… といいたいところですがもう万もあるんじゃないあ、ほーんと身内だけでこんな乱射するな」ペラペラ

この男、アズレンに浮気してんじゃねえのか

独「ちよつとこれはシベリアですね」

なんかいやつても何回やつても真鋼鉄クリアできる気がしません

独「ルート選択とプレイスキルが全てですからね、ただなれてくると超兵器戦以外は楽になりますよせいぜい核が百単位で飛んでくるだけですし」

顔w w溶けてるw w

独「溶けたたっていいじゃない人間だもの」

シーズン10シーズン10

独「もうつつちーいじめ飽きたから新たな犠牲者作りたい（*・・

ω・）」

海で戦車を走らせろ!!w w w

独「改めて言うとなんやこのパワーのあるワード」

(仕様確認) あっ察し

独「メインメンバー全員ろくでなし確定」

三武艦かw w w

独「うーん、この自然三大将みたいな感じ」

ビス子ビス子敗北者お山の大将敗北者

独「はあ……はあ」

開幕からクズ度カンストしてる加賀さんw w w猫かぶりしてもばれてるw w

独「私の目はごまかせません」

矢が曲がるってw w まあ、閣下も出来るし、別におかしくはないか

独「実はですね、私以外にも矢の軌道を曲げる変態がいましたね」

夢w w w 夢w

独「まともな夢は見れません」

スタちゃんw w ひでえw w

独「あいつと駆け引きするときは自分が鉄の塊を押し引きしてると
思え……動かねえのかよ」

一人だけ画風が違う人がいますねえ

独「くーちゃんだけおかしいですねえ」

核好きすぎて草

独「核は偉大です、ガンディーも乱射しています」

懸賞金みたいな感じになってるw w

独「面白いでしょ、頑張ってみた」

初期が数千しかないのにw

独「仕方ないね、初期から数千万とかするとバグるから建造ラッシュで増やすしかないんだ、まあそのせいで現状数百万は軽く越える」

敵も味方もアホみたいに艦娘ぶつけるから海上えぐそう

独「実際えぐい、艦娘視点だと海が血で赤くなってる海域がある事を確認できる」

※復讐終了して弱体化してます

独「たとえフルスペックじゃなくてもあいつらを始末するなら十分なのです」

人の心無いと言っては誉め言葉

独「しょうがないね、わしもうなんか人間じゃないもの」
ぷにぷにぷにぷに

独「ぷにぷには正義」

加賀「エンター……ぷらい……ず」（———#）

独「さて、加賀さん次のコーナーよろしく」

加賀「あ、はいえーと次は撮影中の裏話ですね」ポチポチ

独「えーと、あーこれねこれ、プレイ中ね……悲惨だったなあ、話したくない、ただただイタ公とか三枚舌の喘ぎ声だけだったからな、わしやスタちゃん、外道は超強化艦娘がいたからいいけどあいつらは結構先のNFが必要だからなあ、いくら産業補正あっても戦力がなきや意味ないのよ、次」

加賀「えーと新作ですね」

独「チツ……一瞬で嘘予告ってバレた」

加賀「まあ、あれだけパロったらバレます」

独「一応わし七これ、糞姉観察日記シリーズ、白銀騎士、魔砲少女播磨を日刊でどれかひとつやってんだがなあ……鬼か」

加賀「そうは言うけど有るんでしょ、黄金期よりはましですし」

独「ましかけどさあ、ましかけどさあ、ましかけどさあ……もうちよい待てよ」

加賀「まあ、今回じゃ予告だけですし」

独「ぜってえいしなげてくる」

加賀「では、予告編どうぞ」

その歴史はどこへ続くのか

その炎に終着点はあるのだろうか

終わりになき闘争

終わりになき悲劇

終わりになき運命

この世界はきつと
壊れきってしまったのでしょう
革新を無くし
心を無くし
魔物などもはや存在しない世界
勇者など意味がなかった
共通の敵を失っただけの世界
結局は同じこと
敵を失えばまた新しい敵を作るだけ
さあ、始めましょう。
幕をあげなさい
剣を持ちなさい
世界は破滅に一直線
ならば我は全てを破壊するもの
救いはない
もはや落ちるだけ
さあ楽しみましょう

「最悪の時間を」

独「疲れた、一応言うておくけど予告しかないからね」

加賀「提督」

独「ん？」

加賀「ミニアニメは」

独「次回」

加賀「(*・ω・)」

独「では、次回もまたお会いしましょうさよなら」

番外編 式話 IFもしもクリスマス計画が出来な
かったら

12月25日

……

……

……

熱い

これ風邪だ

寒中水泳なんてしなければよかった

白「(・ω・)」ズリズリ

白「(・ω・)」ズイズイ

白「(・ω・)」チーン

どうしよ、こんなんじゃあんなもんぶっぱなせるわけないだろ

でもなあ、クリスマス後はミッド作戦の本軍出撃でわし中將で強制

出勤だし

あれわししか使えんしなあ……

でもなあ

くー「総統さーん、朝……」

白「ん？どったの？」

くー「いや、ずいぶん酷い熱なので、計画やめます？」

白「いや、計画は進め……うーんしんどい」

くー「まあ、かわりにクリスマスパーティーでもしましょう」

白「……やだよ、寝たい」

くー「……ただ楽しみたいくないだけでしょがこの戦争キチ」

白「うっせえ、俺はあくまで俺だ、あいつらの前とかでならあぁも
言うが今ぐらい仮面をはずさせてくれ」

くー「はあ、人の前では狂人気取ってその仮面の内側は善人どころ
かただの「闘争心」や「殺意」の塊、よくある王道的なあれはありま
せんねえ」

白「例え現実だろうが異世界だろうが俺は俺、ただ身内に甘く敵には冷酷で無慈悲な戦争を愛する殺人鬼」

くー「…だからって全作品であなた一ミリもキャラぶれしませんよね、もしかしたらあっちにいた方がもっと過激でしたよ」

白「言うなよ、言い返せないだろうが」

くー「言い返さなくても手は出すでしょ」

白「そりやまああ、こんな状況なら口より先に手を出す方が楽だしな」

くー「いつちやたよこのひと」

白「さてと、今日はもう要塞内でごろごろしてますかねえ、どうせ体は限界だし…」

別の面白いことを思いついたことを胸に秘めそつと…… 立てない

白「…（・ω・）」

白「（・ω・）」「グツ

白「（・ω・）」「グググ

白「（・ω・）立てない、と言うよりなんかすぐくきつい、同期切つたからか知らんがすげえ重い」

くー「艦娘もドン引きの仕事量ですしねそりやあそうもなりますよ」

白「たった23時間なんだがなあ」

くー「たった一人ですからですよ」

白「しょうがないだろ、誰か置くと他の誰かが砲撃してくるんだから」

くー「押しても引いても動かない戦争キチにそう焦りを感じる必要も無いでしょうに」

白「そうだね、まあ、強引に奪いに来るつても嫌いじゃないかな」

くー「流石身内コミュ内で大量の逆レが描かれる男、女みてえな顔しやがる」

白「… やめてくれ…」

くー「まあ、まどろっこしいのが嫌いですしシンプルで良いですよ

ね」

白「うーん、よし、立てた」

くー「うわー、がっくがく」

白「でえじょうぶ、風呂はいればなんとかなる」

くー「あ、いいですね、私もつい先通りで戦闘があつたので怪我してたんですよ」

白「……そんな血塗れなら誰だつてわかるわ」

くー「（・ω・）」

風☆呂

今、すごい選択肢を迫られている白です

白「……」

くー「……服、ですね」

白「いやだれだよ、さつき整備中書いてたろ誰だよなんで整備中置いて酒持ってきてる間に服あるんだよ」

くー「うーん、なんで下着とかだけなんでしょう」

白「うーん、こんな朝っぱらから出撃するやつうちには……いた」

くー「いやあ、あの人がいつもの服忘れるとは思いませんよ、特にコートなんて毎日総統さんの部屋から一着つつ着てますし」

白「知ってるよ、てゆーか他のやつにも着られてるからな、まあ、変だな誰であつても変ではある」

くー「あ、これ罨ですね」

白「どうして？」

くー「ほら、あれですよあれ、ホラー映画である気になってしかないからさきつちよだけさきつちよだけって覗いたら手が出て引きずり込まれて殺されたりするやつ」

白「ほむほむ」

くー「つまりですね、こうつ」ガラガラガラ

彼女はそういうとおもいつきり扉を引き……

何もなかった何もなかった

わけもなかった

白（うわあ、なんかわかりづらい所に小さい竹がある）

くー「あ、居ませんねひやつほー」

白「南無」

もうさつせるだろう

くー「ちゃんは死んだ

おもに策敵不注意だ

白「お（い）しい人を失った…… らあめん」

くー「死んでない!!ぎゃあああ」

白「…… うまいな、何があろうと水面から出てない、それにそこ

は潜水艦専用ドックに繋がっている、無理なら逃げればいい」

くー「はあ…… はあ…… 一体だれよ」

面白いことすんなあ

白「はあ…… まあいいか」

くー「とりあえずもうだれもいないのでこっちはいりませんか？」

白「いいよ、入ろうか」

そういうえばあいつの体よーボロボロで来るから見るけど何でだろ

うな

くー「…… もう少し…… 近寄ってくれませんか？」

白「…… それを君が望むなら」

くー「／＼」

白「ね、加賀さん」

か「…… え」

白「だってよ、ここ潜水艦ドックの下じゃん、んで降りるときは排水するだろ、でも減らなかつた、当然だ「注水しながら排水する」んだ、減るわけもない。いや、暴れていたから気付くはずがない」

か「……」

白「まさか艤装でぶん殴るとは思うかよ」

か「……」ピトツ

白「はあ、何から何まで真似しやがって、かわいいなあもう」

くー「おいこらああああ!!その糞猫被り空母!!朝来るときに邪魔するには気にしないがなーに台無ぎやふん」

台無し…… ふーん（……）

てゆーか、さつきから隠れるなよ

か「うるさいですね、そこで寝てください」

白「加賀さん、敵艦直上急降下」

直後、上の鉄格子が外れ

アイオワ「もらったわ加賀、これがアイオワ流 special attack
tack Oh」

か「こつちだウスノロ」

おもいつきりアイオワが吹き飛んだ、これ言ってなかつたらさらに上から大和がボディープレスかけてくるから仕方ないよね、いやまあ、いまアイオワがすごい死にかけただけどこドックだからいいか」

白「(・・・ω・・) やめとけ、いまはダメだ」

大和「(*・・ω・)ゞ」

ペニーワイズは死んだが

彼女は賢かった

だがな、とうの昔にロックオン済みなのが悪かった

か「: : :」パシユツ

放たれた矢は天井に刺さった瞬間爆発しネズミ一匹水風呂に叩き込んだ

氷を満載した水風呂にだ

白「空w母w一w隻wにwなw一wにw苦w戦wしwてwんwだ
w」

くー「あれ空母じゃないですって、普通空母が戦艦を蹴り飛ばしますか?」

か「そうですね、早くこの席を奪ってみなさい」

白「煽るな煽るな: : :」

ああゝゝ

ああゝゝ

(・・ω・) やつべ、今でないと間に合わんな。

気配を殺し、音を消す。

一流の狩人は気付かれない

背後の爆発音を無視し、戦艦寮に向かう。

戦艦察

クリスマス計画は出来なかったら、だが別の計画は立てた。

総統「ながもーん、新しい計画だ」

なが「」

白「」

え？首輪？

きつと幻覚

扉を閉め、もう一度開ける。

白「なーがもん♪新しい計画だよ」

長門「そうかなら確認と考察が必要だ、提督……少し、近寄ってく

れないか？」

拘束道具丸見えだ……鏡と影ぐらい気を付けろよ

白「その後ろの玩具下げなさい」

長門「な、なぜ」

白「直感」

なが「……」

白「よろしい、でだ、これが計画書ね、一応今回は加賀さんじゃな

くてながもんに指揮の全権渡すから見ててほしい」

長「わかった……これはミッドウエーか」

白「わかるでしょ」

長「ああ、あれのテストだな」

白「嫌？」

長「提督が私たちの遠くにいくのは皆嫌さ、それでも」

白「……悪いな、俺はこれしかできんだよ、戦争が好きで好きで

仕方ないんだよ……全て終わったら」

長「その時、提督は居ないではないか」

ははは、こりやまいった

白「そうだな、じゃあこれを言いに来ただけだから」

長門「……」

白「それとき」

長門「なんだ？」

白「お前一人で俺の普段着のコート3着も奪うな」

長門「その自作の服をとられてないだけましでは？」

白「そうだな、まあ、なんだ、欲しいなら一着だけにしてくれ」

長門「わかった…：二人にも言っておこう」

部屋を出て金剛の私室に向かう

今日は紅茶の日らしい

加賀さんいわくメンバーは金剛姉妹や駆逐艦、ウオspaだけど現状はいいからボツチらしい。

白「ヘーイコンゴータータイムにきたネー」

扉を開けた直後、わしに電流が走る。

そう、この戦艦

例えボツチだろうと

常に優雅に紅茶を飲んでやがる

この優雅さ

このもちもち感

後ろから太いモノを刺したくなる。

か「アゾットです」(小声)

白「早い」

金剛「提督ウ」

白「どった？クツキー☆か？ずいぶん機嫌悪いな」

金剛「アズ」

白「あばよ金剛そんなの見なかつたイイネ」

とつきに窓から飛び降り急ぎで執務室のパソコンを起動させる

白「…」

悲しいかな

開始日から頑張ってたデータ

せっかくエンプラ大量に揃えたのに

みーんな消えちゃった

ああ、こんなのあんまりだよ

そこからはやけ酒しながら明日の本隊の支援のために艦隊を向け

るための艤装選びと陣形や行動の紙をまとめていたら夜になった。

白「取り敢えずレーダーとか対空砲でいいだろうけど……はあ、せっかくアトバズまで完全再現して作ったのになあ……夕立にでもあげよ」

くー「まあ、そういう日もありますよ」

白「ん？居たんだ、そろそろ帰りなよ」

くー「いいですよ、今日は防御固いので」

白「どれくらい？」

くー「境界線にレ級をずらっと」

白「それ明日大丈夫か」

くー「まあ、明日は姫級総出で警戒してそれからまたいつもどおりにもどしますし」

白「そうなの」

くー「察しが悪いですねえ」

白「俺は行かん、正直あの空気に行けるほど俺は丈夫じゃねえ」

くー「あ、大丈夫ですよ、色々ひどいことになってるんで」

白「酷いこと？」

くー「主に戦艦と空母が樽を押し付けあってもう皆ぶっ倒れてますから」

白「二日酔い確定じゃないか」

くー「まあ、色々ひどいので見に行きましょ」

白「そうだな、寝てるなら行こうか」

月を見ながら廊下を歩いているとき急に携帯が鳴り出す。
アホらしい

通話を押し声を変えて口を開く

白「こちらそーしやるねっとさーびすでござい」

仏「助けて!!」

独「性技の味方だろおまえ」

仏「ああ、俺は皆を幸せじゃなくて!!助けて」

独「うっせえ切る」

仏「やだーやだー、死にたくなーい死にたくなーい」

独「どうせお前が撒いた種だろ、種無しなつても文句言うな屑、外道、オタンコナス、十股」

仏「いやだあ、あ、ああ、窓に窓に」

独「クトウルフじゃねえよ」

仏「ああ、もう無理ぽ」

独「なーんでお前はそう手を出しまくって自滅するのだろうか」

仏「やっぱお前みたいな超人の体が欲しいよ」

独「そう、少なくとも俺はお前みたいに下半身に素直にはなれんな」

仏「お前は惚れる女のレベルが高過ぎて誰にも反応しないだけだろ」

独「高くねえと、争いに身を置けないだろ」

仏「そうだな… いつてくるよ俺」

プチ

白「よし」

くー「うわー、台無し」

白「なんでさ」

くー「そこは最後まで話して最後にね」

白「すまんがやるなら人の聞こえないところでしてくれ」

くー「… 人の結婚式に高濃度の媚薬を料理に混ぜたり、新郎新婦の初夜を隠しカメラでとマイクを使い身内コミュで生配信した究極の屑野郎にそんなこと言われても」

白「酷い言いがかりだ、ワシは仕事人じゃ、依頼されたからやるだけじゃ」

くー「依頼者だけですか」

白「仕事人は依頼人を言わない、これ鉄則」

くー「はあ」

食堂の扉を蹴り飛ばし

静かに入る

え？蹴り飛ばしただろって？

気にしたやつは肅清リスト行きな

そう入ったはずなのになぜか目の前がサラトガ
いやこいつ化けもんか

扉とかの構造上つま先の力だけでたつてやつがのか？

いや、そんなわけ無い

衝撃の流れからして前

か「……」

あ、やっべ

あかん

また腹ぶち抜かれるぞこれ

サラ「きゅー」

くー「あ、ダメみたいですね」

白「ターキー……」

サラ「スヤア」

加賀「寝ましたね……」

くー「……まあ、あれだけ酒をかけあつてたら寝ますよ」

白「それあかんくないか？」

加賀「はあ……今回は腹パンはやめましょう」

白「うせやろ、毎作国外艦に腹パンする加賀さんがしないだと」

くー「あの敗北者ラップを毎度毎度かます独帝の加賀が」

加賀「……」シユツ

白「あばらっ」

くー「肋骨」

加賀「クリスマスぐらい、変わっては？」フニフニ

白「なぜのびていないとばれた」

加賀「直感です」

白「……加賀さん」

加賀「なんででしょう？」

白「俺はさ、お前らといっても俺でいられるか？」

加賀「提督が望まない限り、誰も止めはしません」

白「……ありがとう、これ、プレゼント」

加賀「……これは」

白「ふふっ、全員分はまだだけど今いる分だけはね」
あ、意識切れる

番外編ドライ 教えて!! つつちーせんせー&ミニア ニメ

音楽はまあ、糞花のテーマでもかけてのんびりしておくれ

土「あーあー、マイクテスト」

く「総統さんまーたふざけてますよ」

土「今の私は総統さんじゃなくてつつちーですよーだ」

く「あ、はい」

土「それでいいじゃあ手っ取り早く始めようか」

く「いつでも今回もいつもどうり真鋼鉄やスパこれ大戦の攻略やアドバイス、それに七これ本編のコメント返しにミニアニメだけなんですがね」

土「いがいと真鋼鉄全クリできる人いないなあもう配信三年目だぞ」

く「まああれ一つで鋼鉄の咆哮、ラノベ、スマブラ、ACに無双シリーズできますからね」

土「わしの考えた最高のゲーム」

く「尚最新型程度じゃクツソ処理落ちするから改造PCや国が使うスパコンがいる模様」

土「はじめはPS3レベルだったのがなあ……ちよつと砲弾とかの無制限化が響いたな」

く「超兵器が超兵器しちゃったのが不味かったですね、特に播磨」

土「そう、私が悪い、だが謝らない」

く「そういえばそうでしたね、秒間10000発の女、雷はおまけ、雷なんかより前に基本死ぬ、デスエンカ(向こうから来る)、即死雷撃(そのまま)とかいう悪名ばかりですからね」

土「妹殺したオメーが悪い」

く「そういう配備にしたのあなたでしょ」

独「たまにそうやってこっちにとぼすのやめなーい?」

く「まあ、そんなことはおいておいて」

土「置いとくのね」

く「えーといろんなお便りがありますね」

土「取り敢えずほんへ優先でいいか…」

1：加賀さんの中身どこのマグマ小僧に刷り変わったww

く「ほんと口を開けば敗北者」

土「提督の影響を受けるって設定のせいで技術性格趣味嗜好が汚染されてるからね仕方ないネ」

2：よくある戦争系アニメより戦争しててなおかつギャグしてる閣下くおいてい

く「俺は偽善者でも英雄でも神でもねえ、戦争してんだよ、だから死ぬ…からのショットガン発砲とかいいよね」

土「第三者からすればどう見えるだろうか… まあその後にも何もなかったかのようにギャグする連中だからしゃあないね」

ア3：所詮敗戦国の艦、恋愛に勝てるわけなし

く「ちよwwネームwwお便りネームww」

土「誰も勝てないでしょうがww」

4：なwがwもwnw誇りねえww

く「誇りは死んだもういない」

土「誇りなんざ沈めとけと言ったらまじで沈めやがったよ」

5：瑞加は記憶保持してるから複雑だろうね

く「記憶保持のせいで永遠と経験値をつみ重ねた結果バグった」

土「片方死ぬと強制ループする世界線なのに両方が殺し合うせいで永久ループ」

く「第三次なら行けたはずなのに要望で台無しにされたという」
土「両方を生かしたいけど両方が何があっても殺し合うのが最高に

イかれてる」

5：各側近艦を変えると面白そう

く「戦争不可避」

土「よろこべ少年、その願いは叶う」

6：こいついつつもうどん食ってるな

く「せやな」

土「SEYANA」

7：ナチュラルにサブマシンガンぶっぱなすな

く「試射（気分）」

土「そこにいた虫が悪い」

8：知るかボケはまだ？

く「そういえばまだこの台詞いってませんね」

土「ほんとだ、てゆうか、まだ戦争起こってないからやる気無いんだよあほらし」

9：※人類と深海棲艦が戦争してるように見えますけど閣下には見えてません

く「愛国心も形や度が違えばこうなる」

土「その考えを押し付けた作品がありましたね、つつちーシリーズって言うんですが」

く「宣伝乙」

10：隙有らば核攻撃

く「ここだけ真面目になる」

土「究極の外道」

土「さて、ほんへお便りも時間の都合でお開きにしましょう、次はまた気分で、じゃあ次」

く「(*・ω・)」

1：スパこれ仏ルート序章最終話「クリスマス計画」がクリアできませんってゆうか核攻撃阻止無理ですこれ

く「あーこれか」

土「まあ、戦力比悲惨だからね、つてことでくーちゃん黒板G○」
がらがら

教えて!!つつちーせんせー

その恋は毒のようにあたりかけとこ

つつちー「はい、勉強のお時間ですよ♪」

く「うわー、選曲センス… 明らかに狙った」

つつちー「はいそんなこといわない」

く「はい」

がらがらあ

つつちー「じゃあまず、今回は敵の大まかな配置、能力、攻撃方法を確認しましょう、今回は敵の配置上北西をブロック1南西をブロック2、北東をブロック3、南東をブロック4に分けましょうまあ、部隊ごとに特定の動きもありますがそれは後でまずは各ブロックごとの敵の配備の再確認です」ドシヤッ

ブロック1

敵

空母ヲ級改フラ1

空母ヲフラグ4

空母ヲエリート10

空母ヲノーマル15

マウス20

味方

米国ミサイル巡洋艦2

米国原子力空母1

サラトガ3

ブロック2

敵

空母ヲノーマル4

戦艦レ級3

空母水鬼1

味方

プレイヤー選択12

ブロック3（ここ重要てかクリア目標いる）

敵

みんなの白さん（撃破目標）

空母棲姫（総旗艦）

黒加賀（副目標）

超巨大戦艦Vカイザー（副目標）

空母棲姫5

装甲空母姫 5

飛行場姫 3

駆逐棲姫 2

空母ヲ改 2 フラグ 2 0

空母ヲ級 フラグ 2 0

空母ヲ級 エリート 3 0

戦艦レ級 改ノーマル 3 0

ラーテ 5

マウス 3 0

味方

みんなの英雄 ずい

赤城 (独)

ブロック 4

敵

レっちゃん (副目標)

ちび加賀 1 0

輸送ワ フラグ 2 0

輸送ワ エリート 3 0

輸送ワ ノーマル 5 0

味方

アイオワ 7

ビスマルク (日)

響 (ソ)

く「… クソゲーかな」

土「じゃあここで真鋼鉄播磨カオスルートエピソード 5 0」

く「それはやめろ」

土「(*・ω・)」

く「と、とりあえず絶望的戦力差ね、それで、どう覆すのかしら」

土「まあ、まずはプレイヤーとか捨ててもいいです」

く「え？」

土「ずいずいとかの特殊メンバーを最大限に使わないと間に合いま

せん、一見敵が多いから稼ぎだと思えますがフツーに間に合いません、ある程度は諦めてください」

く「は、はい」

土「また、はじめはブロック1の艦隊はずっと回避をとらせてください、一定数居ると特殊イベントで核攻撃のタイミングがずれたり
囿…… 米国艦の増援が来ます」

く「囿って」

土「あとMAP兵器、高燃費兵器もバンバン使ってブロック4の輸送船を全部沈めてください、イベントで味方の弾薬全回復&予備弾薬多数獲得&敵全艦の攻撃力、回避率、自然回復にデバフがかかります、ボーナスをうまく決めればこれは1Tで行けます、まあそうするとずいずいと赤城が間に合わない可能性もありますがそこはプレイで」

く「いつもーん、補給が強すぎます」

土「そうですね、ゲームでも普通に強い輸送ワフラ幸い超広範囲中火力マップ兵器を持ったずいずいがいるので手前の補給を潰して戦意をカンストさせたらセーブ&ロードでなんども試し輸送を消しましょう、ついでに護衛のちび加賀も半壊や大破多数ですそれをプレイヤーでハイエナしましょう」

く「なるほど」

土「また、赤城はやるなら1T目からボーナスを利用して加賀と白を攻撃しましょう、イベントでダメージ0ですが変わりに加賀なら加賀と赤城が退却それとちび加賀の増援、白なら加賀さんが庇ってダメージとくーちゃんか戦意カンストと加賀が戦意カンストと独帝モード発動三ターン後退却、退却までずいずい支援に赤城の煙幕と電磁パルスで援護もあり、因みにどっちを選んでも直後に味方増援でアメリカ海軍（囿）がきます」

く「ほえー」

土「問題はそのあと、頑張って化け物集団から15ターン耐えてください、そもそもこれ開始最速6ターンで核攻撃終了でゲームオーバーなので」

く「なぜ15」

土「15T経過してなおかつ加賀が居ないと時間超過ということで加賀さんが連れ戻しに来ます、フツーに歴代最強の化け物艦娘が使えます、とゆーか使わないと無理、まあ30T目に着水で強制クリアも狙えるんですがねそうとうですよ、さらに加賀さん登場で全敵艦の指揮、戦意が大幅ダウンかつ味方特殊艦の指揮戦意上昇、ずいずいが居ると二人が同時に独帝と仏帝を発動、すごい殲滅力で敵をボコリます」

く「それまでが恐ろしくきつい」

土「全員に回避重視装備やアイテムを持たせて後は命中率の高い武器で白を殴る、以上、ちにみに近くには姫が困ってるので拳銃はめとかは不可能、まあ、切り払い持ちですし無理なんですけどね」

く「お空とんでも切り払い可能」

土「あと、おまけで副目標キャラやくーちゃんを撃破すると全体に指揮デバフと戦意バフがかかります」

く「かかったな、所詮私は・・・総旗艦だった」

土「まあ、他のイベントもバンバン乱用しましょう、しても結局本隊とは殴りあいですがまあ」

く「他のイベントってなんですか？」

土「えーと」ドシヤツ

マウスラーテ全撃破↓米国海軍増援&戦意上昇

瑞加賀戦闘↓敵味方全部隊ダメージ&戦意上昇

瑞鶴でブロック4のちび加賀殲滅↓加賀移動開始（ずいずい）

赤城でちび加賀殲滅↓加賀、白の戦意大幅ダウン&くーちゃんの移動開始（赤城）

くーちゃんと赤城の戦闘後赤城強制退却

赤城退却3ターン後味方増援夕立（独）

夕立対くーちゃん↓くーちゃん大ダメージ&一時的退却（二ターン

後HP10万回復でプレイヤー母艦付近に再登場）

夕立対加賀↓加賀大ダメージ&戦意ダウン

25ターン目全独艦退却&白戦意カンスト固定化

加賀で各キャラ攻撃（白、くー、レっちゃん）↓対象キャラの戦意
変動&核攻撃猶予発生

プレイヤー艦隊で白包围↓核攻撃猶予10T増加&敵援軍&部隊
集結を開始

核攻撃後↓一発ごとに戦意低下&一部敵戦意上昇

加賀が味方でHP80%以上で核攻撃3回目の場合↓ゲームオー
バーの変わりにEXミッション開始、白のHPを削るミッション開
始、この場合味方夕立、赤城等独艦は全退却と同時に敵援軍で登場H
Pは全快、加賀のみ味方配置のまま

土「… あれいがいと多いぞこれ」

く「EXの難易度ひどいw発動まできついのにそれからもかよ」

土「ま、まあ、落ち着いてここからは主な敵味方のステテックで
も」

く「はーい」

土「因みに命中率の記載がないものは基本の80で考えてくださ
い、それ以外はプラマイです」

とりあえず撃破目標

みんなの白

HP500万

エネルギー500

特殊能力

切り払い10

プレッシャー10

底力

逆境10

直感10

狂帝

兵装

アトバズ改（マップ）射程50 範囲20 威力99999999

消費100（本シナリオは使わない）

業物桜月射程1 威力50000 消費0 命中1000 栗1

00

く「まあ、これぶっぱなすだけですしそうですね」

土「さらに本人は動けない上に命中率10%以下じゃないと桜月を使わない」

く「ただまあ頑丈だし、能力のせいで当たらない、弾くの二段構え」

土「ま、次」

空母棲姫（クーちゃん）

HP 200万（400万）

エネルギー 80（300）

能力

直感 3（8）

切り払い（2）

兵装

ジェット爆撃機 射程 10 威力 20000 消費 20 栗 0

ジェット戦闘機 射程 13 威力 2000 消費 5 栗 0

ジェット戦略爆撃機 射程 3〜20 威力 8000 消費 30

栗 10

（試作型カイザー） 射程 20 威力 30000 消費 100 栗 15

0 命中 100（ビーム&物理&二連）

く「ちよつとどつちがラスボスカわかりませんね」

土「上が中ボス、下がラスボスです」

く「ネオグラゾンとグラゾンじゃないのだから」

加賀さん（味方時）

HP 600万（500万）

エネルギー 1000（400）

能力

切り払い 10

狙撃 10

直感 10

底力

逆境 8

プレッシャー2 (1)

狂帝

兵装

爆雷矢 射程20 威力100000 消費20 栗20

神風 射程10 威力50000 消費1 栗100 命中30

試作型カイザー 上記

超大型戦略爆撃機 射程20 威力30000 消費200 栗2

0 命中100 (10連)

格闘 射程1 威力8000 消費0 命中80

特殊兵装

煙幕 消費10

く「やっぱあつちがラスボスやんけ」

土「イベント必須のステータスww」

く「毎度お馴染み爆雷矢」

土「あれ…… もともと私の」

く「なぜかとられたw」

レっちゃん

HP20万

エネルギー100

能力

直感1

兵装

406mmガトリング砲 射程5 威力4000 消費20

ビーム砲 射程8 威力3000 消費40

16インチ砲 よく見るからなし

猫耳爆撃機 よく見る

4連装酸素魚雷 よく

対空機銃 よ

土「ただ強だけのレ級以上」

く「これでもオバスペなんだがなあ」

ちび加賀

HP 100万

エネルギー40

こがたがとりんぐ 射程3 威力1000 消費8

たいかんみさいる 射程12 威力2000 消費10

土「弱い」

く「なお数」

土「まあ、これだけを頭に叩き込めばあとはなんとかなるでしょうね」

く「…… 絶対嘘だ」

土「次の更新までにはちゃんて敵のデータ見れるようにしとくよ」
く「それでいいんですか」

土「えーとつづきましてえ…… あ、これか」

く「SD劇場 ななこれ」

土「何でこんなの作ったんだろう」

な[^]な[^]こ[^]れ[^]

1：瑞加賀

独「コツコツコツコツ…… ハッ」

仏「クイクイ」

独「…… サツ…… (ノ・ω・ノ) チラッ」

ずい「うへえもうらめえしゆきかあん」

かが「…… ヒック」

ずい「あれえしゆききやん？なでてえ」

かが「…… ナデナデ

独「…… ドスツ」

仏「バタツ…… トウトイ」

2：瑞加賀

加賀「所詮どの作品でも私に一度の勝利もない敗北者ごときがなんですか？いい加減敗けを認めなさい」

瑞鶴「ハッ どの作品でも提督居なきや死亡確定のあんたなんか怖くないわよ」

加賀「はあ、所詮まな板戦略を知らない青二才ですか」

瑞鶴「イラア：．．．ほーんとこのでかさあつても何もできない生娘がぁ」

加賀「(．ω．) 姉に遅れた敗北者が何だつて」

瑞鶴「：．． 相方の変わりがなんだつて」

加賀「いい加減身の程をわきまえろ雑種」

瑞鶴「フツ今のあなたなんて子リスみたいなのね」

加賀「？」

瑞鶴「そう、今のあなたはSDキャラ例え本編のようなラスボスじみた邪悪な笑顔も無意味」

加賀「しまった、ならしね」

瑞鶴「ブツリイイイ→」

3：プチ交換

ずい「：．．．」

白「：．．． 襲わないで」

ずい「(*、・ω・)」

白「(*、・ω・)」

ずい「(*、・ω・)」

白「：．．． おいで」

ずい「(．ω．)」

白「はあく暖かい」

ずい「：．．． (こういうのもいいね」

仏鎖

仏「あかんこれ目覚めちゃう」

かが「：．．． これもなんか違いますね」ズブツ

仏「もうお嫁にいけない」

ガタツ

4：じえつとすとリーむあたつく(三人とはいってない)

白「：．．． ササツ

こんごう「とおおとおおう」

白「ぴょーん」

こんごう「!?私を踏み台に」
ながもん「とおおお」

白「…」ドン

夕立「マチルダさ… じゃなかったナガトさーん」

サラトガ「う、うおおお」

白「…」ぺちっ

サラトガ「あいた」

武蔵「でかさこそ正義」

白「ガシツ」

武蔵「て…」提督

白「邪魔」

大和「ぎゃあああ」

武蔵「うわああああ」

チュドーン

加賀「… たかが提督一人、私が押し倒して」

白「ドドドドド」

ドカツ

加賀「勝てなかったよ」

番外編トロワア♪ 本編if やっぱり真面目なやつの方が戦争楽しくなりそうよね

黒い黒い無数の兵

何万何億何兆の砲

この世界は愉快だ

無数に砲撃が飛び交い

無数の思想がぶつかる

さあさあさあ

終われ終われ潰えてしまえ方の正義

勝てよ勝てよひとつの正義よ

勝者は常に一人

その頂に立つのは一人

「故に勝者は俺を越える……なあ、このままじゃあ人類は滅ぶよなあ」

「よかつたので？あの子達と敵対してまで」

「構わん、あいつらも俺がただ戦争でしか生きていけないのは知ってるさ、だからこの頂で待つ、くるさ」

「八百万隻を越えるこの布陣を抜いてですか？」

「来るさ……そのために俺は全権を握ったんだ……来ねえと泣くよ」

あ、チエツクメイト

「……待った」

「……駄目だよ（・ω・）」

「ノーカンノーカン（っ・ω・）っ」

「……あのー」

……悲しいな

「何かしらっ？」

「敵対勢力の排除を完了しました」

「…… あらあら貴方の読み外れましたね」

話しかけないでくれよ

「…… ふん…… ならもういい、戦争がないならこの世界に用はないまた別の方法をとるだけさ」

「…… 一体何時からですか？」

ずいぶんなもので

「……」

「…… 自分の望んだ地獄なんてそうそう上手くいくものではありませんわ…… 物事には妥協も必要です」

「…… 俺を誰だと思っている」

「もう四桁は越えているでしょうに」

「さあね…… 記憶もこの一瞬だけだまた俺らは全員すべて忘れて戦争さ」

「命の取り合いにそこまで熱心になれるのも…… ですね」

「さあ、あの二人が何をしようが興味しないのが悪い」

「…… わからなくもないのが辛いですね」

あーあ、最悪だよ

海が赤い

空は黒い

風は血生臭い

すべて終わったのになあ

「敵」を殲滅してもまだ戦いは終わらないさ

残りの人類の処理もあるしな

実に面白くそして愉快なものだ

ある人間はギロチンで斬られそのまま放置され

ある人間は焼かれて全身をバラバラにされ

ある人間は内蔵をぶちまけられてその臓器を握りつぶされ

ある人間は泣き喚いてすべての尊厳を捨て命乞いをする
ある人間は絶望し自らの命を絶ち

ある人間はそのちっぽけな刃一つで立ち向かい死ぬ

無数の囁い声

無数の視線

無数の意思

なにもないからこそ…か

なあ

総「今回はずいぶん頑張ったな…二人とも」

まあ、返事はないか…

「そうだなあ… 次の俺に何を渡そうか、次の君に何を贈ろうか…
ああそうだこれをあげよう」

彼女には一本の短刀を

彼女には一つの勲章を

そして未来に答えを

「最後の最後に… 望んだ姿ではなく素が出てしまうのはなおらん
な…」

さあ、もう一度ゲームをやり直そう

別に本気出せばクリアは余裕だけとおふざけも大事だよね

次の奴

番外編　ファイフス　ここまで本編の裏話をするのも
面白い

さあ、ショータイムだ
……

やっべなんもねえ

白「……」

おーいちよつとー

えーと

忘れた

忘れた忘れた忘れた

あ、そうだ、皆さんはよくネカマに貢ぐときに何を出します？

私はコンピューターウイルスですね

え？何故かって？

それはもう皆さんが一番ご存じでは

なんか面白いから

でしょうよ

ほら、適当に甘い言葉打ってるだけで金が入るって言うじゃないですか

面白いですよ

じゃあこう考えます

のせられたふりしてウイルス送って弄くり回せばもつと面白いのでは？

そうですね

まあ、ほぼ無償ですしね☆粗悪品の程度別にでしょ

ほらー、あれですよあれ

アニメってさあ

なんでもかんでも基本的に戦わせるじゃないですか

あれっていわば喧嘩を眺めるのが好きなだけでしょうか

別に命の価値なんて知りません
もつと言えばそんなものなんになる

はい、こんな感じで今回はもうなんもありません
タイトル？

あれは嘘だ

今日は完全にボツチですはい

まあ、どうでもいいか

さてと、どうしましょうか

ああ〜こんなところに目安箱があゝ

てなわけで

鋼鉄の咆哮の音楽でも流しながら別の事でもしましょうか

まあ、今回は自棄半分ですはいはい

さてと

Qランサムウェアって売ってますか？

A直接取りに來い、それとランサムウェアって知ってる？面白い

よ

Qエヴァとまど☆マギs s希望

Aあの2つは何しても本編とそう変わらないさ

Q I Q 2 4 0 越えの天才(笑)の菊つちが毎度毎度つちーぶん投

げてるだけなのが草

Aつちーが強すぎるのが悪いというよりも武装の関係上単艦で

ぶん投げた方が圧倒的に火力出るのが悪い、なお

Q 菊花父娘が思考回路フルで使ったらつちーなしでもつちー

世界線のw w 2勝てます？

A可能 ただ結局異端過ぎて死刑確定というか、あいつらの連合国
への殺意高すぎ問題、戦争で妻と親を失っただけで連合国の国民根絶
やしはイカれてる

Q 毎度毎度菊つち妻のことどうとでもいいと思ってる？

A あいつ実はミッドウェー海戦で皆殺しにした米国兵を見て満足
してからもうつつちーの火力中毒引き起こしてバグってる、一応w w

2のssもあるけど、復讐できちゃって壊れた、まああれ自体両親の無理矢理ですし正義感が強くても壊れたらしようがない

Q 糞上司がいなけりやつちーも拗れないのか

A まあ、上司が不甲斐なさ過ぎてあつちが部下の寿退社を済ませようと権限回収しに来たらまさか人類滅ぼすからはよ目から覚めろと勝手な誤解をしますしね、話し合いもできない。もっといえば霧の艦隊のメンタルモデルもいじったりせず拗れもしない

Q 七これは後なんかい人類消えるのだろう

A 知らない、気が済むまで滅ぶ

Q 連合視点まだ？

A つつちーシリーズ自体もう10年だからな、資料多すぎてまとめに時間が

Q 真珠湾が消えたと聞いたルーズベルトはなぜ戦争始めた？いくらなんでも無茶言うちゃ過ぎるって思うだろう

A まあ、相手が超兵器なんて思わないし実はあれ宣戦布告はちゃんとしたけど菊つちがアメ公絶対ぶっ殺す病出ちゃつてつつちーが菊つち気に入って消したんだよね、アメリカはドイツ海軍の時点で苦しんでるから正直日本有利の交渉しようとしたけど菊つちがアメリカ本土消滅の直接的原因なんだよな、まあそのせいで終戦後菊つちだけは米国の底力で殺されるけどまあ、不意討ちされたらしょうがないよね

Q 菊つち独裁ルートどこ、ここ？

A 菊つちがあのときつつちーの手を握っておけば、愛国心高すぎたのが悪い

Q 貴方さえ望むなら私はあなたの敵をすべて焼き払うわ、だから来てつてこれ完全に告白ですね

A 顔がほぼ死んでるww2で唯一人の顔をしたシーン、つまりそういうこと

Q そういえばつつちーシリーズの資料のなかに一つも被害表がないのですが

A なんかもう枢軸連合共産全部が被害が悲惨すぎてもうね、めんど

くさい、だから作中では簡単には米英国民は一万にも満たないほどになつたと軽くいつた

Q 結局つっちーの介入で勝者いなくない？

A まあ連合国は本土植民地含め九割焦土、離島の一部は消滅もはや中世まで戻つてもいいぐらいの悲惨な状況、ナチスと日帝の共同裁判で上層部全員死刑で植民地。ソ連もルーデルが十割消し炭にするとか言う意味不明なことになって実質ソ連そのものがまずない、実際シリーズでもロシアは形だけある陸。枢軸も枢軸でつっちーのお陰で早期介入できたといえでも米国の命がけの反撃の核攻撃で首都と海岸部が消し炭、国民の七割が死ぬとかいうもう無理だろ状態、イタリアは終盤ムツソリーニ暗殺されて連合入りした瞬間ドイツの光学兵器と核の実験と内乱でローマが沈むとかいう悲惨な状況に、アフリカ戦線もいつそ全部砂漠の方が良いほどの死の大陸に。日本も日本で菊っちとか海軍が暴走したせいでアメリカの諸島を沈めたり現地人送り返せつて本土の命令がなん無視で拘束したりアメリカがもう止めようつて言つてるのにそれすらがなん無視でロサンゼルスが2016年でもまだ灰になる程の事をしたせいで完全にな、とゆーか日本国民の八割は連合絶対ぶち殺すな時点でな、終戦後に海軍将校全員殺すかブタ箱ぶちこんだらまーたデモおっぱじめて結局勝つてたくせに建て直しに二十年近く必要になるとかいうことになつたし。被害的には勝者にはいるのはドイツだけだけど、そのドイツもヒトラーワシマン政権なせいで終戦後すぐちよび髭が病死したせいで内閣無茶苦茶で産業とかも悲惨なことになって結局純血のユダヤ人も10人だけ残らせたし戦争には勝つたが目標は達成できずちよび髭有能になりすぎたせいで足元ふらついて結局米英仏が生き返つちやうしでな。誰も勝つてねえ、総人口もドイツだけで50%とかいう頭おかしいことになつたし。因みにインド中国ソ連合計でも2%程度というヤバさ。

Q 七これ閣下が完全に菊っちかつっちーになるときあつて草

A ボケるのが実にいい

あ、
時間

一部終結記念 THE 乾杯

独「なんですか」

あ、どーも、画面の向こうからまだこの糞やってんだって思っている読者視聴者諸君。

お前らが望むから悪いんだよ

もう骨組みだけ投げ捨てて良いか？

だめか（*´・ω´）

さてと、こっからぐーたら話すのだるいなにしよか

そうだ、あれしようあれ

ブツピガン☆

そう、ステージ攻略だ

今回はフルボイスでするぞ

え？お前が作ったんだから攻略本もつくれ？

無茶言うなよ

じゃあ始めるか

テーテテーテツツテテレツテー

ロツクマンに似てるとか言つたやつ帰れ

stage24 「狂帝」

糞高難易度というか最新ステージとかうん、ちよい前にあつた一部最終話だね

ポンポンポン

おいしい加減止まれ

ポンポンポン

ポンポンポン

さて悲惨

箇条書きマジック&超簡易ステ

敵

最終勝利目標 狂帝 HP1億 運動性780 装甲値666

自動回復& a m p ; 三回行動

加賀 HP 8000万 運動性340 装甲値666 自動回復

& a m p ; 三回行動

こつからまもだな確認だるいてかおおすぎる

大和 HP 3000万 運動性40 装甲値500 二回行動

武蔵 HP 3000万 運動性40 装甲値340 三回行動

長門 HP 6000万 運動性100 装甲値290 二回行動

アイオワ HP 6000万 運動性120 装甲値240 二回行

動

金剛型四姉妹 HP 2000万 運動性100 装甲値200 二

回行動

赤城 HP 2000万 運動性20 装甲値100 二回行動

翔瑞姉妹 HP 4万 運動性20 装甲値59 二回行動

長いてかまじでほぼすべてだからな

プレイヤーは平均二万三万なのになw

まあほぼ全キャライベント前提だしいいか

雷巡大井、北上 HP 2万 運動性34 装甲値40 三回行動

夕立 HP 10000万 運動性999 装甲値0 三回行動

その他無数にいる艦娘 HP 7万 運動装甲共に計70(固体差あ

り)

マウス HP 2万 運動性0 装甲値100

え? どうでもいい?

ほんへまだ?

いやだなー

あるに決まってるじゃないか

勿論真シリーズやるぞ

平成前にはほぼ全てをしまったのはそのためだろうか

豪華に沢山持ってきたぞ☆

じゃ、一本目

それは終焉であった

それは終止符であり、始まりをならす鐘でもあった

「これが本当の戦いか」

「第二ラウンド? いいえ、これは弔い合戦であり停戦終了の知らせよ」
「各艦隊に通達」

これは全ての終わりでもあったのだろう

「……どうして」

「無駄だったんだよこれまでの全ては」

七帝これくしよん 二部始動

「これが全ての答えさ」

絵だけで2000枚はかかった、ほんとひで

え? 二本目? あるよ

これが全ての始まりだった

「これが俺の望みだ」

これが全ての運命の始まりだった

「……そうだなあ、名乗るとすればお前の使い魔とでも言おうか?」

これが全ての出発点だった

「行くぞマスター!! これから行くわ無限の世界、貴様の願いを叶える
ためにこの自己愛にまみれた尼を討とう!」

そして冒険はここまで至った

「……は?」

「なるほどそう来たか」

特異点

「聖杯!?!」

「えっ」

カルデア

「仕方がない、交渉は決裂か」

「そんな」

魔術王

「……おいてめえ、よくまあ俺の前で立っていられるな……
いや、別人か魔術王?」

「ハハハ……それは答えないでおくよ」

いつものAI

「B B c h 「わしじゃ」ちよつと」

ソワカソワカ

「ちよつ、マスター、わし帰るわ、何でいるの尼」

「まって私も」

f a t e / e x t r a m o o n m e m o r y / o r d e r

この冒険に果てはあるのだろうか

久しぶりすぎて忘れた

てゆーか設定上抑止力案件なんじゃがw

え?三本目?

うん

特報

火星、地球に接近

衝撃のロマシユ登場

「人類はあまりにも地球にこびりつき過ぎた故にこの藤丸が粛清する
と宣言した!!」

「なぜです！なぜそんなことに!!」

今宵全てが決着する

「彼女を失ったときの苦しみを存分に味わえ!!」

「まさか、っ先輩!!」

f a t e / g r a n d o r d e r 逆襲のぐだ男

12 / 25 上映

おわり？

うん

これ以上はまだ計画止まりさ

てかもうつかれたんじやが

祝 七これ完全終了& a m p ;三分で分かる一話から 最終話

独「いえーい」ドンドンパフパフ

その他「・・・おいこらちよつと待て」

独「ん？」

加「・・・」マツシロ

瑞「・・・」ナデナデ

仏「あれどーみてもバッドエンドだろ」

独「うん」

ソ「おれら何回ぶつ殺されたもってんねん」

独「知らん」

曰「なあ、どこでバッド確定させた」

独「一周目の最終話の最後の加賀さんの言葉『私は貴方を絶対に殺します、狂帝。私がほしいのは貴方だけです』」

伊「うわひで、こいつはひでえ」

英「まあ、バッド原因はPSゴミなおれらにもあるけどありやねえわ」

米「まあ、閣下のシリーズって前作でバッドフラグ立てて最終作で回収なんて普通に起きるからなあ」

独「一応ハッピーエンドルートもあったけどお前らのPSゴミ過ぎてな」

仏「条件なんだったんだいったい」

独「取り敢えず内戦を五年足らずで終わらせる。そしたら深海棲姫が復活するイベント無くせてハッピーエンドかノーマルエンドだった」

ソ「ああ、イベントバフで暴れまわるより先にしないといけないのか、てつきり戦争厨だから敵を消せばいいと思って皆で雑魚掃討してたわ」

曰「そーういや進行緩いな思ったけどそれがヒントかよ、無理だわ」

独「これがラノベゲーなら、ただ加賀さんにどことなく教えるだけでも良かったのにな」

ソ「いや無理、なんかもう途中から無理臭く感じたけど初期段階で詰みっておまつ」

英「ルート分岐！ルート分岐！」

独「駄目だ」

仏「あああああ!!! (某一般ry)」ブチチチブリリ

伊「ドン引きするほどひでえオチだ」

独「土虚よりまし、誰も消えないからね」

仏「いや、お前消えてるやんけ、あれ誰や数年前のお前か」

独「やっぱ下手だったかあれ」

仏「うん、あれほど中身のない汚物を見るのははじめてだよ」

ソ「世界からすりや一番不安定要素を消せたけど本人たちからすれば地獄だな、何万年もかけた計画が完全におしゃかとか」

日「でもあれ、下手すりや記憶よみがえってループでしょ、なんだあの詰み」

独「良くあることじゃないか」

英「自分の作品限定の事を当然のように言わないでくれ」

米「(*・ω・) カップ麺できたよ」

独「・・・」ピツピツ

次回作予告

正義を

戦争を

自由を

理性を

狂喜を

殺意を

悪意を

復讐を

全て溶かして

また悲劇を生みましょう

虐殺を

殺戮を

破壊を

支配を

私は全ての兵器を愛し

護るべき国を護る

はずだったんだがなあ

所詮人なのかな？

「そう……て……ん……貴様だけには……絶対に……

私は……お前だけは、絶対に……」

「……もう、それ以上動かないでください、もう、これ以上戦わない
でください、私は……撃ちたく」

「……こっつ」

「播磨さん!？」

「……ああ、そうか」

「……」

ただいまシリアスつつちー

鋼鉄なこれくしょん

だけど今回はちよっぴりカオス

昨日の敵は今日の戦友

同じ兵器なら心のそこから好きだからこそこんな未来もあつたか
も

そう、それがそうならね

結末は変わろうと

きつとそれは

尊いものなのかもしれない

鋼鉄これくしょん3がんなー 東の鬼と蒼の龍

公開 未定

独「シリアス足りないから補給するね」

曰「徹底的追撃」

ソ「つつちーいじめ」

仏「心おれちやう」

伊「虚ちやんシリーズまだー」

米「なお原画は去年から撒かれた模様」

英「絶対人類滅ぼすウーマン」

独「私は人々の総意だ、望まれるから作った」

仏「人々（一部のみ）」

ソ「人々（人類ではない）」

英「人々（人間は道化だから除外）」

独「おまえらあ・・・」

曰「知ってたよ」

独「まあエエか、じゃあこれで最後だね」ピツピツ

三分で分かる七これ 一話から最終話

一話

独「ここは誰、私はどこ」

キキーダダダダダ

独「止まるんじゃねえぞ」チーン

最終話

独「さあ、計画を 加賀「先手必勝!!」げふう」

一話

独「この白夜にい過程や方法などどうでもよいのだあ!!」

仏「ぬうつ」

独「勝った!!どうだパン野郎、血の目潰しはあ!!」

星の瑞鶴「」

独「え?」

ドゴオ

最終話

独「姉さん!?!どおしてここにまさか自力で脱出を」

扶桑「えっ？」

日「彼女は姉さんではない」腹パン

独「」

一話

独「ハハハハハハ。バイツァ・ダストは無敵だあ。この」

仏「白夜さん、年齢27歳、タバコは吸わない、酒は嗜む程度（酒

豪）ry」

ニブニブニブ

独「・・・」

最終話

独「考え直せ鶴野お!!」

仏「・・・」

独「こ、こいつ死んでるじゃねえか」

一話

独「やあ、僕は白べえ、鹿目 まどか。唐突で悪いけど僕と契約して魔法少女になってよ」

ソ「一体何時から俺がまどかだと思った馬鹿め。女装ならお前には負けんよ」

独「うわああああああ」ピチューン

最終話

エエery

深海棲姫「絶望せよ、恐怖を知れ、無力な人よ」

独「・・・お前を殺す」

深海棲姫「え？」

加賀「ターゲットロック・・・」カチツ

1000／1000↓0／1000

深海棲姫「」

独「誰も俺がとわいてないからな、油断したお前の敗けだ」

一話

独「バレなきや犯罪じゃないんですよ」カクミサイルポチー

加賀「今の録画しました」

独「ゆるしてください」

最終話

独「ハハハハハハ所詮艦娘、空は飛べまいなあ、俺はジェットパツクで帰るごふうっ」

加賀「ふっ、死ぬなら一緒です」

独「ええええい、エンジンがあ」

加賀「？」ピューン

独「・・・宇宙空間・・・カアアアズしたのか・・・
そしてワシは考えることを止めた」

一話

独「フウフウフウフワツフワツフワツフウ」

加賀「・・・上に落ちた」

最終話

独「アタタタタタタタタタ」

深海棲姫「ビターンビターンビターン

加賀「・・・壁ハメコンボ」

一話

独「(*・ω・)」

加賀「(*・ω・)」

最終話

加賀「・・・」ズタボロ

独「お疲れさま、ハッピーエンドだよ」つ

加賀「ああ・・・やっと」ギョツ

独「俺の記憶が書き換えられてだがなあ!!!」

加賀「ウワアアア」

ー七これ完ー

分の悪い賭けだったよ全く。

「なあ、そう思うだろ君も」

「はい、提督…」

「泣いているのかい？仕方がないか五年も待つていたんだ」

彼女はあのとときと比べるとやはり変わっていた。

こんな狂人に全てを捨ててついてきたのが悪かったんだ。

「皆居なくなったね」

「はい… 皆、最後まで…」

今にも崩れそうな彼女を抱きしめいつもかぶっていた自分の帽子をかぶせる。

「もういいさ。計画はなった。後は全てを終わらせるだけさ、人類も、

深海棲艦も。そして艦娘さえも」

「… はい」

「199回目お疲れ様、 ■■■」

そつと彼女を運ぶ。ただただ、静かに。

「次の俺にはどういふ対応をするんだろうな。まあ、記憶なんてここまで来ないと保全も確認も出来ないけどさ」

そつと彼女を空母の甲板の上に寝かせたあと彼女の心臓を握り潰す。

これで終わった。

そして始まった。

「何度だって挑むがいい。宿敵^{我が友}よ、俺を殺してみろ」

この特等席から全て見させてもらうさ。

この狂帝を越えるときをな。

世界はいつも面白い。

人間の善悪という下らないものは実に愉快だ。

正義と善意は別物だし、悪と悪役も違う。

戦争とは実に素晴らしく、そして悲しいものだ。

発展の犠牲になる人の数。

明らかに釣り合っていない。

それはいけないことだ。

百万人死んだのならそれだけの発展が必要だ。

敗北から持つのは平和への志ではない。

本当に持つものは新たな刃だ。

戦って、闘って、たたかって。

己の正義を示す、それが戦争。

実に愉快ではないか。

下らない正義

下らない思想

下らない戦争

これを愉快と言わずなんと言う？

ただただ人間の本性を剥き出しにして争っているのだ。

ああ、実に愉快。

下らない代理戦争で死んだ無数の命。

それに意味はないからいけない。

祖国を守るために死んだのか？

それならばよかろう。

それ以外なら？

さあ。

……と、真面目にふざけるのも止めようか。

わしじゃ「俺に起こったことをありのままに話すぜ。俺は確かに動
画編集を済ませ投稿準備をしていた、確かに椅子で寝落ちしたはず
だ、なのになぜか起きてみると訳のわからんことに島にいた、これは
トリックとかそんなちやちなもんじゃねえ、もつと恐ろしい片鱗を味
わったぜ」

「ガス室でいっても意味ありませんよ」

独「良いじゃないか、こうあれな感じで」

「しりません」

さつきから話しているこいつは妖精さん、正直第一印象は最悪だ。
このチビとんでもない脅しをしゃがった。

数日前

独「ハッ、ここは誰だ。私はどこだ」

妖精「ここは太平洋のなかでも最前線の海域の中にある島です、そして貴方は」

独「は？」

妖精「元横須賀鎮守府提督で全実装艦娘に指輪渡してフル開発（意味深）しているいろやった元ランカー勢で、皆を幸せにすると誓った性技の味方です」

は？（決意）

独「てめえ、ミンチとガスとペンチから好きなの選べ」

妖精「そんなこととしてみる、首だけでも抵抗して全艦娘を意地でも呼び戻しててめえの考え揉みくちやにすんぞ」

独「・・・艦娘など所詮消耗品新しいのに記憶はな「別に艦娘というPCに記憶というUSBを差し込みダウンロードしてもかまんのだろ？」it、s判断力が足らんかった」

取り敢えずこんなのだった。

まあ、それから数日は建物を建てて一応の施設を揃えるだけの作業だった。

そして現在滑走路で寝転がって重要な決定を下すか迷っている。

独「で、究極の選択を迫られたと」

妖精「まあいいじゃないですか、誰かを引けば残りすべてから狙われる、そういうのも」

まるで他人事かのように茶をすするこの非常食。

独「艦娘出さなきや最前線だから危険だし、出したら出したで変な争い始めると。やだなー」

妖精「初期化して作れなんて言われてもしませんよ」

独「常識人粹っているの？」

妖精「居ませんよ、前にもいったとうり好感度Ⅱ配属日く今日ですから、常に最前線を走ったランカー勢が、ねえ」

独「あのパンが同じ目に遭うのは愉快だよ、だがな、俺は一度の飯より戦争がしたいんだよ、ほんとどうにかならない？」

妖精「ほんと性欲とか食欲とかの人間が持つべきものがないですねえ」

独「わりーか」

そつとデコピンする。

妖精「アイタツ いやー、じゃあよんでもあまり大差無い人呼びます?」

独「あまり大差ない……」

妖精「ながもん」

独「却下」

妖精「なぜです、あの人他と比べるとましでしたよ」

独「あいつは俺の行動についてこれない、性格上多少無理してついてくるだろうけどそれは俺が許さんてか気に入らん」

妖精「まあ、真面目で正義感強いですしね。ながもん。提督の勝つためなら敵に核を平気でぶちこむイカれ具合には苦しみながらついてきそうですね」

独「だろ、いやまあ、核を乱射しても平気でいられるやつがいるわけないか」

妖精「核ぶっぱいれるとダメな人だらけなんですが」

独「だよなー」

といった直後なんか肉がすこし考え出した。

妖精「いや、数人いますね核程度なら耐えられる人」

独「ファツ!? 誰だよ」

妖精「第一主力艦隊の皆さん」

独「第一主力艦隊…… あかんわすれた」

妖精「この放置」

独「しょうがないでしょ、あんときはつつちーいじめと虚夜録を本格的にしていたし」

妖精「はあ、一度しか言いませんよ」

独「おーす」

そして妖精から語られた艦娘の名は……

第2話 建造なのです

妖精「本当に一度しか言いませんよ」

独「分かったから、伸ばすんじゃない」

ちいぱつぱがうなずいた瞬間何かゴニョゴニョいい始めた。

もともとコイツら手のひらサイズなせいで全く聞こえん。

妖精「……です」

ええ。

独「ちよつ、おまつ」

妖精「いや、言いましたよ」

嘘つけ唇全く動いてないぞ。

独「はあ、白さん悲しいよ、せつかく好き放題させようとしてあげてるのに」

妖精「いやいやいや、実はですね」

独「ん？」

あ、これ出来ちゃったのね。

妖精「実はちょうど言うてから建造し終えた艦を開けて無理矢理ね」

独「おいこらおめえまさか「実は今までの全部茶番で建造終えた瞬間無理矢理認知させればええかと思っただけど施設作りに夢中になって建造完了忘れていた上に建造直後は全裸だから数日間全裸待機させた上に提督に忘れられた事を察させないようにやろうとしたけど施設作りに夢中になってしまてどうしようもないからもういつそのこと碎ければいいか」なんて考えじゃないだろうな」

あ、脈の流れと顔色変わった。

これ凶星だ。

妖精「べ、べべ、別にあれ防音ですしおすし、そんなこと思てないですよ」

独「……何日放置した」

妖精「えーと、引っ越しが三週間前提督をあつちから引っ張ってきたのが先週、工事始めたのが六日前、建造施設関連が5日前……あ」

独「つまり、ね」

妖精「やっちゃたぜ☆」

約5日放置。

これは酷い、作り置きだめ、絶対。

独「そういえば誰を建造した？あの口ぶりからして指定できるんだろ」

妖精「まあ、一度作った上に指輪までぶちまけましたし、隠蔽工作に全員解体はしましたがちよつと裏道でできちやいますよ、因みに作ったのは「加賀」「夕立」「ビスマルク」「赤城」「北上」「金剛」デーヌ」

独「…：ちよつとガチなの混じりすぎじゃない？」

妖精「まあ、全員「レベル間にした時間の短さ」が共通点ですね」

独「そーいやコイツらだけ意地でもやったな」

てゆーか。

独「コイツらながもんレベルのガチガチの軍人すぎてむしろ反対しそうなんじやが」

妖精「そう思うでしょ、そう思うでしょ。違うんです」

独「どういう風に？」

妖精「スタちゃんのところの響ちゃんみたいに隅々まで知っているから着いていけるって感じになってるんです」

独「へえ、知らなかった」

妖精「まあ、少なくとも提督がいつもどうりに核をぶっぱなしまくるぐらいなら気にしませんし実のところ人類駆逐しないレベルなら全員オツケーって感じなんですがね」

独「それはそれでいいの？かな？」

妖精「どんな人が知ってるからよほどのことでない限り見逃す。よくあることですよ」

独「核を撒き散らしてるのが余程の事にならないのか」

妖精「言うて世界焼けるほどでもないですし、大丈夫なんじやないですか？」

独「言つちやあれだが、第三者の一般人から見れば俺はただのクレ

イジーシスコンな上に人間が持つべき感情の一部が破損して殺意にガン振りした上に身内判定したやつ以外は気分でもツッコボコにするしでまともな人間には見えんやろ」

妖精「でもまあ、よくスレ板出もあるように何処に居ようがどんな状況だろうが変わらず、善悪、秩序、正義をガン無視して人生を自分なりに最大限に楽しむつてのが惹かれるんじゃないですか？」

「そうやってぐだぐだしていた方がいい加減やらないといけないことを思い出した。」

独「さてと、眠り姫を起こしますか」

妖精「この鎮守府全艦入るぐらいでかくしたのはまちがいですね」

独「まあ、ワルキューレ計画的には最終的にやることだし」

妖精「そうですね」

移動中

工廠

「ここは南部に位置する工廠だが、なんだこれは。」

独「……ひいふうみい」

ちび加賀「……」もち

ち賀2「……」ほて

ち加3「きゅっぷい」

以下ループ

妖精「なんか増えてますね」

独「ぷにぷにしてるなあ」

妖精「そりゃあそんなどこぞの背景が白いやつの絵じゃそう感じますよ」

取り敢えず一匹捕まえようと手を伸ばした瞬間。

ちび「……」スー

消えた。

いや、正確にはワープした。

なんか地面にめり込んだ瞬間少し離れたところから生えてきた。何を言っているのか俺にもわからん。

独「後回しにしよ、それより他の方だ」
触れぬぷにぷには後回し。

妖精「そうですね……あれなんか穴空いてる」

独「ほんとだ、なんか内部で爆破したのか開いた形で穴空いてるな」

妖精「うわあ、酷いことになってきた」

独「うーん、もういいか、ワルキューレ計画のために妖精増やそうか」

妖精さんを頭の帽子に寄せ取り敢えず執務室に戻る。

妖精「ま、そうですね、こうなっては仕方ありませんし、ワルキューレ計画のあとに艦娘はどうにかしますか、寧ろ艦娘六隻作るよりこの人間卒業に艦娘レベルの火力がある武器持たせた方が強いですし」

と、半ば面白半分でいつてきたからこちらも乗って。

独「ハハツ、俺も所詮は人の子よ。悪魔だ化け物だ言われても心臓ひとつの男だよ」

と返した。

妖精「人間は素手で熊や鮫を×ません」

独「しるか、俺は死にたくないから強くなった。別に変なところはないだろ」

適当に話をしていたら執務室のいつもの場所に戻っていた。

取り敢えず引き出しから下らん書類の下に隠した計画書を取り出す。

独「さてと、この拠点の基礎的な部分はやったし、こつからはワルキューレ計画を中心に進めるが他にやるなら何がいいだろうな」

妖精「まあ、取り敢えずワルキューレ計画で人体に艦娘の装備をつけれるかを試さない限りはですしね」

独「そもそも人間で耐えれなかったらこの計画書全部御陀仏だぞ」
妖精「理論上可能なのは実証済ですし、まあ我々主導ならば絶対に成功させますよ」

独「人間も馬鹿だよ、こんな力をつかむリスクさえ犯せない」

妖精「人間、自分より強い存在、理解できない存在はできるだけ作

りたくないんですよ」

独「まあ、自分の手に負えなくなるぐらいなら多少の制御はするか」
妖精「艦娘だつて、あの根幹とゆうかシステムの問題であまり反抗的になれないだけですしね」

独「ま、そうだな。じゃあ計画はワルキューレ計画の後にゼーレ、B
Z、ビスマルクのどれかにするかでいいかな？」

妖精「どれを取っても人類に喧嘩吹っ掛ける気じゃないですかや
だあ」

独「別にM I計画でもいいんだけどこれをすると大本営とか上層部
が文句だしそうじゃん」

妖精「実質マンハッタン計画なゼーレ、近代兵器武装作成計画のB
Z、艦娘改造のビスマルク、どれ取ってもアウトなのに最後の手段が
M I計画って」

どうせ一択なのに悩む妖精さん。

まあ、人類は現状劣勢で何かしないと詰みは確定。

独「他のするには規模も艦隊もねえし、なあ」

妖精「確かに前者三つやればM I計画は達成できますが、双方から
リンチされそうな状態ですなこれ」

独「そこでだ、敵の力を借りよう」

妖精「ああ、なるほど」

要素外の反応だ。

内部割れ狙いつて解ったのかな？

独「まあ、そういうことだ、ここはうんよく最前線、前方海域の大
本は空母系中心の穏健派ときた」

妖精「ああ、つまり仲の悪い双方を対立させるために片方に加勢し、
M I計画の欠点であった「戦力不足」を補うということですか」

そつと飴をあげる。

独「ピンポン☆まあ、ただただ話し合いじゃあ無理だし「土産が
いる」だからだ、B Z計画を進めつつその技術の一部を提供、あいつ
らにジェット機辺りを上げたらまあいいやろ。そして同士に誰にも
ばれないようにごく少数でゼーレ計画を進める、ビスマルク計画は現

状態娘揃えるために凍結、まあ先は長いけどなんとかなるやろ」

妖精「ほふほーへいほひほひふほほふへひは」

独「なにいつてるかわからんがまあ、言いたいのはこうだろ「ワルキユーレ計画の真の目的はその「異常な技術」を見せつけ、かつ、前線の提督が直々に乗り込むとか言うアホみたいなことやって印象付けして、交渉の場に立ち、組んで価値のある存在としていた方が今後の展開にも有利になる為の布石」とでも言いたいのであろう」

妖精「ふんふん」

独「まあ、そういうことで進めようか、早速ジェット機、ジェット機対応の大型飛行甲板、後はかk「だめです」そんなー（*・ω・）」

妖精「それと今日で五徹ですしそろそろ寝てください」

独「わし睡眠の欲求とか決意に自動変換されるからありませーん☆」

妖精「それをリアルでしまくって過労死しかけたんですがね」

独「うぐつ、戦争の臭いがして騙された」

妖精「なんですかその腐った卵の臭いで周りにガスが充満しているのを気付かない状態は」

独「よし、眠れる気がしないけど寝よう、なんとかなるやろ」

そう思い寝室の扉を開けた瞬間異様な光景に少し立ち止まった。

独「… なんか膨らんでない？」

妖精「ですぬ」

なんか少しだけ布団が膨らんでいる。

いやうん。

なんか直感とか関係なく嫌な予感はしてた。

入ったらbadENDだこれ。

独「罨だ!!これは罨だ!」

妖精「まあ、ええ」

独「艦娘なんかに屈しない」

妖精「おもいつきり死亡フラグじゃないですかやだー」

独「言ってみたかった、言っても相手の死亡フラグにしかならずじまいで悲しいよ」

取り敢えず布団を捲る。

独「……ぷにぷに」

妖精「ですね」

天使かな？

天使だな。

かわいい

ぽいぽい「ぽい」

独「……かくれんぼかな？ 待ちすぎて寝ちやっただね……」

うりうり」

ああくぷにぷにへへ

妖精「まあ、これなら何処に誰がいるか見当がつきますね」

独「少し寝たら食堂行くか、絶対いるわ」

妖精「ですね、私も他の仲間を集めて開発してきます」

独「おう、かk「核はありませんウランとかプルトニウム有りませ

んし」おやすみ」

第3話 独帝空母

数時間後

独「寝てない…寝て…寝てた！」
すぐに起き上が…れない。

何故かだつて？

ぽいぬ「ぽい」

犬がいつの間にか上に寝てたら動けるわけないじゃないか。

妖精「あ、起きました、ジェットエンジン出来たので試作型の爆撃機作つてみたんですが見ます?」

独「…今すぐ見よう」ぽいつ

ぽいぽいを雑に布団に投げいつもの服装に着替える。

妖精「うわあ、雑」

独「いいんだよ、でだ」

妖精さんを帽子の上に乗せ工廠へ走る。

妖精「爆弾ですよ。クラスターですよ…あんなものを対艦レベルにしるとはまあ無茶言い張りますよ」

独「上出来だ」

南部航空基地

妖精A「うらー」

妖精B「うらー」

妖精C「新型万歳」

なんだこれ。

黒い翼。

無理矢理なのかつまれている大型のエンジン。

予想や設計より酷いではない。

上出来だ。

だがな

独「誰が「ステルス能力持った大型の戦略爆撃機」とかいう意味不明なのを作れといったあ!!」

妖精「いやー、そのね、研究チームがね」

ほわんほわん

空軍研究委員1「新しいのを考えたら更にその先にものを思い付いちやった☆」

空軍研究委員2「ワルキューレ計画終わって戦車に費用九割とられる前に一円でも多く費用を奪え」

兵器開発委員「何をやってもこっちは儲かる、よってこっちにつく」
艦娘研究委員「ちよつ、おまえら、分ける」

陸軍研究委員「いいもんいいもん、ワルキューレ計画の本当の恐ろしさは艦娘の歩兵化を実現させるためだもん、あれさえ終わればマウスやラーテの装甲を艦娘の砲撃や爆撃がただ機銃レベルに押さえられるもん」ボソツ

艦娘研究委員「え、今君なにか恐ろしい事を言わなかった？」

ぽよんぽよん

独「ええ」

妖精「結果大型機というステルスが難しいものをステルスさせるという事態が」

色々酷い事になってきた

※H o i 4でモッドとかやってるならわかるかもだけど研究速度が時代ペナルティ無しで尚且つ期間八割減+ α するとまじで数日で研究枠が完了します

独「うわあすごい、君達は研究が大好きなフレンズなんだね(棒)」

妖精「喋りながら、死んでいるだと...」

独「一週間でこんなえげつない試作機作るかよ」

妖精「ま、まあ、研究に全力投資でしたし」

資源問題... やだなあ。

奪うしかないかあ。

独「よし、この最新鋭の鉄屑で敵の資源基地狙うか」

妖精「最新鋭の鉄屑ww、まあ、カイザーIIIとか作る予定ですしね」

え？

独「ん？」

妖精「なにか問題でも？」

独「カイザーⅢってあれ？」

妖精「あれですあれ、あれこそロマンの結晶ですよ」

独「あの、貧姉のあれ？」

妖精「もちろん、研究プランのあるつつちーシリーズの兵器はすべて作りますよ」

独「……まあいいか、取り敢えずこの鉄屑を用意して」

妖精「あとで数十機入れときますね、取り敢えず食堂行きましょう」

独「そういえば、寝る前に言ってたな」

また妖精を回収し「普通なら」誰もいない食堂へ行く。

食堂も始めに麻婆作って以来一度も入ってない。

独「……明るいな」

食堂には「あり得ない」筈の光があった。

まあどうでもいいから普通にはいる。

独「たのもー……え」

妖精「そーいう細かい事があーなるんですよ……え」
確かにいた、予想道理いた。

一航戦の赤い人

赤城「」

だが、なぜか麻婆に顔面から入って動かない。

麻婆を抱いて溺死したのか？

あ、脈ある。

独「よいしょ、うわ白目向いて気絶してる」

妖精「あー食っちゃいましたか麻婆」

独「誰だよこんな空母が即死する威力の麻婆作ったの」

妖精「あなたですよ」

独「え……そんなわけ」

妖精「でも麻婆なんて貴方しか作りませんよね」

独「……厨房行くか」

妖精「カモン救護班、この空母を風呂にぶちこんでください」

女神妖精「りようかい」

担がれて運ばれる彼女をガン無視して扉を開ける。
そこにはある意味の地獄だった。

ビス「」

北上「」

金剛「」

麻婆のついた小皿やお玉からして食って死んでやがる。

近くを見るとそこには。

ちび加賀「……」ごぽごぽ

わしの作った麻婆のなかにウルトラデスソースを何本もぶちこむ
ちっちゃい加賀さん。

瓶の数からしてえぐい、食えなくは無いだろうが常人なら死ぬ。

即死確定すぎる。

妖精「ひえっ」

独「あ、これデスエンカですね（*・ω・）ゞ」

ちび加賀「……」ジーン

刹那、妖精の口にその麻婆とっていいのかわからない兵器が突っ
込まれた。

テ、テテン

ちび加賀の攻撃（麻婆）▼

妖精に114514のダメージ▼

妖精は気絶した▼

妖精「」

かっか「あ、これあかんやつや」

このバトルからは逃げられない▼

ちび加賀「……」

かっか「まあ、食えるだろうしいいか」

……どこぞの神父だって麻婆にHP削られながらだけど激辛麻
婆食えたんだ。

俺にできないわけがない。

独「……」ガチャ

ちび加賀「……」キラキラ

無言でその朱色の飲食兵器を飲み込む。
それはあまりにも。
麻婆とはいえないレベルの辛さだった。
少し喉を通るだけで感覚が狂う。
味覚が狂った。
嗅覚が狂った。
視覚が狂った。
食感が無くなった。
理性が壊れた。
体はただただ汗をかいただけ。
もはやなんのためにこれを飲んでいるのかも忘れた。
ただただ静かに。
ただただ穏やかに。
無限に溢れる衝動を押さえながら。
男はただ、麻婆を飲み干すのみ。

閣下「コフツ」

落ちる金属の鍋。

その中にはなにもなかった

飲み干した。

獅子さえ殺す究極の麻婆を。

飲み干した。

ちび加賀「……」すりすり

独「もうだめ、きつつい」ドサッ

gameclear

第4話 資源基地奪取作戦（前）

気絶より二週間

何事もなかったかのように次の次の戦争の準備を進める。

開発に資源回しすぎて予想より三倍は消えたのだ、計画は一から書き直す必要がある。

独「ここら辺の海域は全部戦艦姫の領海なのね…核でぶつとばせたらなあ」

偵察班より入った情報を元に細かく地図に記載、そこから一番「敵の強い」基地を探し出す。

別に今回は資源より大事なものがある。

資源なんて最悪大陸にいきやあある程度の確保はできるのにわざわざリスクを犯して基地を狙う必要はない。

今回はあくまでも「交渉の材料」を撮るのであって、「資源奪取」はおまけ。

最悪敵の基地を吹き飛ばせばいい。

あいつらは過去の二十年程度の交戦記録、基地攻撃後の行動の資料を確認したところ「同じ所に何度も同じものを建てる」しかできない。

恐らくあいつらには基地とかの建設能力はあまり無く。

元々あるものを復元して再利用しているだけ。

まあ、そのせいで鎮守府その物を奪われて面倒なことになったのは核で解決するしかない。

計画書をまとめたと同時に妖精さんが入ってきた。

妖精「艦隊の準備は揃いました、そっちはどうです?」

総統「姫三隻、鬼五隻、ル十五、その他で五十、空母、潜水艦はなし」

妖精「十分な見せしめですね」

総統「ワルキューレ計画は終わったよな」

妖精「ええ、空軍担当の妖精さんたちが全員血涙流してました」

総統「まあ、成功しちやっしたしね、うん、機甲師団ができたらまたあげよう」

妖精「それにしてもずいぶん思いきましたね、まさか「憲兵」を利用するなんて」

悪い顔してる妖精さんもまあまた。

総統「いやあ、定期調査の憲兵が居て助かったよ、おかげで実験は確実に成功出来るしな」

妖精「まあ、実験でも見たとうり、「ダメージは解除後乗り」ますから心臓とかぶち抜かれたら数日は動けませんけどまあそんなこと基本的にありませんか」

総統「まあ、ないとは言い切れんな」

妖精「あ、それと、客ですよ」

総統「おーけーおーけー、紅茶出すから入れといて」

すぐに書類を箱に入れ、紅茶とマカロンを用意する。

これが成功すればいいのだが。

「こんこん」

総統「どうぞ、マカロンありますよ」

ドアを開け、彼女を誘う。

空母棲姫「どうもー」

総統「ほらくーちゃん、座って座って、ここには誰も呼んでないし拳銃もないから」

こうやって見ると面白いものだ。

「戦争したいだけの狂人」が「人類の敵」を「ただの茶会」に誘ったのだ。

戦争をしたいのに敵とお話とはな。

白「いやー、大丈夫だった？敵とかと遭遇してない？」

くー「そういえば、この辺の海域には他に四つほど鎮守府が有りますけどここ所属以外の艦は見ませんでしたね」

白「まあ、今はちようど本土で大規模演習があるからな、今なら周辺海域は取れるが、反撃が手痛いぞ」

くー「んー、じゃあ止めておきます、それと総統さん」

白「白でいいって」

くー「びやくって呼ぶよりあのとときの総統さんって方がもう皆定着

しているんですよ」

白「そうなの」

お互い「真面目に茶会」をしているがそろそろ話さないとと思いかップを置き、ちゃんと話す覚悟を決める。

白「それでなんだけどさ、「今夜」戦艦棲姫の領海にある資源基地を狙う、これ資料ね」

そつと侵攻ルートの紙を出す。

空母棲姫「うわー、大きい基地、なぜこんなところを？」

総統「まあ、一応これから手を組む仲だしね、力を見せておかないと」

空母棲姫「あらあら、その気になれば全てを粉碎できる最強の艦隊がですか？」

総統「ハハツ、毎度毎度破壊しまくってたら「俺らの理想」を自分で壊すはめになるだろ」

空母棲姫「ふふっ、それもそうですね、あんな猛獣達を放ちまくっては、ね、奪えないですよ、貴方を」

刹那、空いていた窓から三本の矢が空母棲姫の頭を貫通するように飛んできた。

総統「地獄耳かい」

すぐに短剣を投げ三本の矢の軌道をずらす。

空母棲姫「うわー、総統さんもてるねー」

総統「まあ、目の前でそんなこと言ったら射たれるわな」

空母棲姫「いやー、ほんと、なんですかあの娘、さすがに2ー4単艦突破しただけありますよ」

そう言いながら矢でペン回しをするなよ。

総統「まあ、愛されてるのは嬉んですよね、私、家族の愛とか無いですから」

空母棲姫「それにしても嬉しそうですね」

総統「無くて嬉しい・・・か、まあいいか」

空母棲姫「でたよ、まあいいか論」

そしてまた紅茶を入れる

白「さてと、M I計画成功のための土台作りを成功させるためです
がまあ」

くー「ちゃんと周辺海域と島くださいよ」

白「分かってるって、取り敢えず技術の暴力をお見せしましょう」

くー「いえーいいえーい、今夜は宴だあ」

白「ただ、そっちもこれ成功したら物質くれよ」

くー「もちのろんさ、と、ゆうより、総統さんが死後こっちに来る
なら」

ズダダダダダン

重火器の音がしたから聞こえるときには部屋は穴だらけ。

白「ハハハハツハ、ほんと凄いなあもう」

くー「うう、路上駐車ジェット機が壊れちゃう」

白「まあまあ、工場と補給は沢山有るからね」

箱から量産済みのジェット機を取り出して並べる。

くー「ほっぽちゃんのお土産にいくつか貰って帰ろつと」

白「いくらでも持ってけ」

すると彼女はかばんに大量のジェット機を積み、ドアの前に立つ。

くー「じゃあ今夜この海域で」

白「おう、パーティーじゃ」

彼女がドアから出た直後。

加賀「…： 提督」

独「おいで」ポンポン

もう、猫みたいなんだから。

第5話 資源基地奪取作戦（後）

満月が上り、風が冷たく吹き荒れる海。

海原にならぶは無数の少女たち。

遠くに見える島には無数の敵。

瀕死で倒れている無数の軍人。

挑んだが負けてしまったのか杭に縛られた艦娘。

これから始まる虐殺に

これから始まる戦争に

これから始まる未来に

誰も知っていて止めもしない。

ならば始めましょう。

心が焼かれ

身も焼かれ

そこに残るのは純粋な強さと感情。

始めましょう始めましょう「誰も残らない最悪の戦争を」。

総統「全艦、攻撃準備」

狙撃銃に実弾を装填し、狙いをつける。

一撃で「頭だけ消し飛ばせば良かったな」。

引き金を引く。

銃弾は姫級の頭を抜き「弾薬庫」に誘爆する。

爆破を確認し、すぐに手を下ろす頃には全員、攻撃を行っていた。

そう「軍人」「艦娘」関係なく、無差別に。

総統「いいできた」

くー「適合率50%... それでも扱いはできのね」

酒臭い。

白「... あれ？妖精さんは？」

くー「あ、カリスマーしなくなっただけ」

白「なんだそれ」

くー「え？総統さんが戦争してる時に出示してる雰囲気」

白「そーなの」

とりあえず残った弾を他の姫に撃ち込みさっさと適合率を下げる。

白「ぎゃあああいてー」

直後まるで体に鉄球でもぶつかったのかような痛みを感じた。

くー「そう言いながら転げ回りはしないのね」

白「その程度で苦しんだら、なんでもしんでるちゅーの」

くー「だよねー」

銃をトランクに戻し紅茶とクッキーを取り出す。

白「ティータイムは大事にしないとネー」

くー「敵友軍が苦しんでる戦場でのむティーはうまいか」

白「美味しいわ」

くー「…： やっぱその声で言われるとだめだわ…：」

白「腹かかえるぐらい面白いか？」

くー「だってねえww。つつちーと菊っちのあの会話全部総統さん

一人でやってるんだもの」

白「ただの一人芝居だと思うと内容がないようなせいで確かにおか

しいところもあるな」

くー「」

急にくーちゃんが黙り出した。

白「…： 死んでる」

くー「死んでないわー」

とりあえず背中に刺さっていた毒矢を抜きガムテープを貼る。

白「スレタイ　うちの空母が他の女と話してるだけで矢を乱射して

くる件」

くー「乱射（殺意あり）」

白「まあ、ティータイムでもしておちっこう」

くー「この男、ハーレムだろうが一人の少女が純粋に愛してくれよ

うが戦争よりは優先度下なのがほんと」

白「女抱くより戦争してるほうが人生百倍楽しい」

くー「知っていてあえてガン無視してるのはほんと悪い男」

白「お、ドラム缶が流れてきた」

すぐにドラム缶を回収し、中身を取り出す。
安全が確認できたから直ぐに輸送船を島につけ物資を回収する。

鎮守府

かえってすぐ面倒なことになった。

独「でだ、お前ら二人はなぜそうなった」

ビス「だって、加賀がビスコビスコ敗北者欧州大将敗北者言ったから」

加賀「もう一回言いましょうか？」

独「どこかの敗北者ラップやめい」

くー「そうですねよ、お互い味方なんですからほら、にっこにっこにー」

ビ、加「貴女が一番おかしいでしょ」

あ、正論怒鳴ったから泣いた。

くー「… ひっぐ」

独「いや、心よえーなおい」

ビス「それよりも admiral、この空母ちよつと admiral と話ただけで矢をぶっ刺してくるのよ、どうかしてるわ」

加賀「提督はそういう人が好きですから」

ビス「… え、うそ」

加賀「いえ、提督は欲しいものためならなんだってするような人が好きですから」

ビス「じゃあ… 私」

あれ？ ワシ放置？

加賀「敗北者ですよ」

ビス「うわあああ」

勝手に絶望するな。

独「だ、大丈夫だよ、俺は」

ビス「あどみらーる」ウルウル

あ、ダメだこの子。

独「よしよし、一緒に寝てあげるからね」

くー「… あ、そんなこと」

加賀「……あどみらーる」

独「しょうがない、三人でねよつか」

くー「おいこら戦争中毒」ドスッ

ちよっ、股間蹴るな。

白「うぼっ、しぬっ」

くー「今ここで寝落ちしてみろ、動画時間くっそなくて石投げられるぞ」

白「。ロ。」

くー「あと、さつきまでの戦争に生き生きしてたのはどこ行つた」

白「今は戦争の臭いがしない、だからこれでいい」

別に問題はない。

戦争ないときぐらいこうしないとちよつと心が悪意で焼けちゃう。

くー「うーんこの戦争中とそれ以外の時の格差」

白「さてと、寝よ」

くー「……MI」

総統「紅茶とサンドイッチもつてくる」

くー「もうマルマルマルだよ」

総統「なんだ、夜襲の時間か」

くー「いやもうやったでしょ」

総統「まあいいか、とりあえず今回の件を上にあげれるわけないし、数カ月は確認の憲兵も来ないだろうし、うちの地下にでも寝床つくつていいよ」

くー「じゃあ、明日には資源と一部の艦を持ってきて引越すね」

総統「来週はこの周辺の鎮守府潰すか」

くー「ですね」

ビス「……目の前で行われるえげつない会話」

加賀「じゃあ、沈めた艦娘が一番多い艦娘が提督と寝れるというところにしましょう」

笑顔で言う言葉じゃない。

独「いいなそれ」

でも好き。

くー「ちよつ、おいつ」

ビス「ひえっ」

独「まあ、艦娘沈めんくとも提督をヘッドショットすれば良いだけだし、しなくてもいいんだよ」

くー「うーん、この」

独「誰も「正義の味方」や「悪の敵」とも「人類の守護者」でもないんだ、どちらにつくかは気分次第」

くー「でも、「悪の味方」でもないんでしょ」

独「そうだよ」

加賀「……この泥棒猫」

くー「あだだだ」

あ、なつちやいけな音がなってる。

独「はいはい、今日はもう寝るよ」

翌日

朝から大本営より送られた昨日の夜に起きた謎の資源基地襲撃によりおこった「深海棲艦」「艦娘」「軍人」が同じ場所で倒れていた件の調査書がとばされた

独「はえーよ、いくら前線でもやり過ぎたか」

加賀「一応すべての艦に毒矢をヘッドショットしたのですが……」

独「あー、多分それで周辺の警備隊もやってしまって薄くなったから進めたと」

加賀「……すみません」

独「いーのいーの」

珈琲を飲み、直ぐに書類をシユレッダーにかける。

さてと、次の戦争の準備をしよう。

独「加賀さん、現在用意できている戦車と対艦狙撃銃とかの数ってまとめてある？」

加賀「現在、私達分のマウスは素材だけ用意できましたがまだ、師団分は」

独「まあ、今日からなんだ、三ヶ月後M I計画を開始、それまでに他の艦の建造をするか」

直ぐに書類を書きまとめ、提出用意だけを済ませる。

加賀「提督…… 例の改装計画ですが」

独「あ、ああ」

加賀「要求材料です」

指輪「設計図20」

独「おいこら、変なの混じってるぞ」

加賀「ですが、ジェット機や大型機を大量に運用するには」

独「指輪ってなんだ指輪って、もう一つあげたでしょ」

加賀「」

独「これ一枚まるまる偽造なんでしょ、実はもうしてるんでしょ」

加賀「…… はい」

独「はあ、三日後、俺らも元帥主催の大演習に参加する、それまでに指揮慣れしとけよ」

加賀「はい」

そういうと彼女は小さい彼女をおいて直ぐに外に出ていった。

それと同時にいまだに布団にくるまっているビスを起こす。

独「ほら、朝だよ」

ビス「もう三分」

こういうときはな。

独「…… しょうがないなあ、一緒はいるよ」

いうじやろ

ビス「…… 早く」

布団から体を引っ張ってきたから隠していた冷却材を張りつけるんじや。

独「起きなさい！」

ビス「ひゃっ」

冷やした瞬間とても冷たかったのかプルッと震え起きた。

独「はい、珈琲」

ビス「くしゅん」

こうやって一日が始まる。
戦争という最高の娯楽が始まるその時までには。

第6話 横須賀大演習壱

糞花のテーマ

独「人間という生き物は、というより生物というものには死ぬ直前にでる火事場の馬鹿力というものがある。しかしそれは別に危機的状況にしか出ないというわけではない」

それはなぜかって？

証拠でもあるのかって？

あるさ、少なくとも自分自身が証明というより確認した。

じゃあ今それを証明しろ？

馬鹿らしい

今貴様が自分は紐なしバンジーを東京スカイツリーの天辺からし
てるとでも思えそれでおk。

簡単に言えば死中求活だ。

人間は技術のために自分をすてるのか

人間は発展のために自分をすてるのか

人間は国家のために自分をすてるのか

くだらない

そんな人生狗にでも食わせておけ。

凡人は無力ではない。

自分を無力だと思いついて込んでなにもしないのが本当の凡人だ。

一回吹っ切れて熊でも虎でも人間でも何でもいいから自分の思う
強いやつを自分の使えるすべての技能を使って排除でもしてみれば
いい

越えてみるよ、案外いい景色が見れるよ。

え？くだらないかたりはいらないから加賀さんをぶにぶにしろ
だって？

せやかて

独「今はそれ以上にツツコミどころがおおい」
船に船が乗ってるっていいのだろうか。

別に演習は負ける気がしない。

こちらら性能はマネーパワーで理論上最高値を叩き出してるしそれに

加「すやあ」

ちび加「……」ぴよんぴよん

なんだあれ、てつきり分裂しててスライムみたいなものだと思っただら実は違った。

何回か観察してたがわからん

簡単にまとめると

「十匹ぐらい出てくる」「なんかワープする」「爆弾もって特攻する」「武装はジェット機三機と飛行甲板型ガトリングシールドと海蛇」「たまに空飛ぶ」

グフカスに飛行機能積んでる何かみたい

この生物もどき、わからん。

ほかにも増殖するだろうが観測を続ける。

メモ33 著者わし

横須賀要塞

船が横須賀港に入ったとき、そこには異様な光景が広がっていた。

万を越える対空砲

海岸全域に建てられた巨大な壁

空が灰色に染まり

無数の軍艦が港には揃っている。

独「要塞化しているとは聞いたがこれはひどい」ぷにぷに

街が見えんビルすらえない

加賀「……はっ」

独「ついたよ、取り敢えず大演習場に行こうか」ぷにぷに

加賀「……悪い人」

独「おいおいおいおい、どこまで読んだか知らねえがそりやねえよ

俺は「傍観者気取りの狂人」さ」

ちつちやい加賀さんを頭や肩に乗せ、彼女をエスコートする。

周りを見渡せば艦娘艦娘艦娘提督艦娘艦娘提督なんかいっぱい
一部の艦は軍の配給品にない独自の改造が施されているがどれも
これもせいぜい機関や主砲に細工しただけ。

まだ先を行かなくてもいいだけいいか

大演習場

巨大な水上コロシウムとでもいえばいいだろうか

無数の配属の違う艦娘が同時に演習を行い来るべき大作戦に備える
訓練所。

そこには見知ったやつらもいたし知らんやつもいた。

今は金剛を連れて観戦中

金剛「提督う今のなんですか、すごい速度で大和を沈めましたよ」
彼女が見たのは恐らく「赤を主軸にした服を着た響」だろう。

ソ「よお閣下、うちの響がどうかしたか」

独「えらくぶつとんだことしてるな、顔面に魚雷叩きつけたあとに
他の艦、それも雷巡を叩きつけて誘爆させるとはな」

ソ「そうか？お前んともみにいかんのか？」

独「いいよ、どうせ勝利は確実だ」

ポップコーンを買いながら場所を聞く

ソ「行きたいのかよ」

独「早く言え」

ソ「第二七演習場」

独「そうかい」

ソ「あつちは呉、横須賀がいるからな、そうとうだぞ」

独「ふーん、俺の加賀さんが負けるわけねえだろ」

ソ「まあ、こんな祭りに来ないお前だと思っただしなんだ、席はある
からよ、いこーぜ」

独「いいのか？」もつきゆもつきゆ

響「……きゆう」

ソ「あらら、疲れたか」

は？

独「おいこら、そいつさつきまで会場にいたよな、ここまで飛んで

きたのか」

ソ「まあ、ロケットエンジン持たせてるし」

独「ええ」

とりあえずポップコーン食おう

足を進め第二七演習場の観客席に座り、艦娘のは位置を確認した。

確かに東西に横須賀、呉の第三艦隊がいる。

面子も豪華

ただ、それより気になるのが金剛

さつきから汗の量が異常すぎる。

別に加賀さんも今から始めるのに毒矢をぶっぱなしてくることもないだろうに。

独「なあ、スタちゃん」

ソ「ん？」

独「おめーさ、なんで金剛がこんなに冷や汗かいてるかわかるか？」

ソ「さあ」

ホットドックを食べながら加賀さんを探す。

ただ、数が多すぎてまったくわからん、このパンフレット大きいところしか写さないので悪い

響「司令官……あの艦娘、他とは違いすぎる……あれには個じや

勝てるわけがない」

ソ「お、あれって」

独「どうした？あ」

ソ「いたな」

独「お、こっちに気付いた」フリフリ

あ、振りかえしてくれた……可愛い

金剛「……やっぱり、響ちゃんも気づきましたネ」

独「ねえ、こんごー、なんかあったの？」

金剛「それは「それでは開始です!!」……」

直後だ。

その直後、勝利候補の呉鎮守府のエースであり第三艦隊旗艦の武蔵が「海上から観客席まで吹き飛んだ」。

そして、飛んだ方向、位置、爆風からして飛ばしたのは加賀さん
独「……なんだと……」

金剛「提督は画面のデータでしか知らないからしりませんが、加賀ちゃんはその海域を本来は「瀕死ではなく、無傷」で帰ってきたのデスネ」

響「……そっちの司令官……あの空母の出撃回数は？」

ソ「あれだけすればあもなるか」

独「俺の記憶の範囲なら単艦出撃、複数出撃共に万越え、さらに全海域につれ回した」

ソ「……これはショーなのかもな」

同時に砲撃が鳴り始め空は無数の航空機が飛び交い戦闘は始まった。

独「……おーおーやりなさる」

さつそく加賀さん潰しに来やがった

ソ「お、大和四隻の集中砲火か……まあ、そうもしたくなるか」

金剛「……」

響「無駄だよ、あれは練度性能の問題じゃない、純粋な「実戦経験」の差だよ、今あの海上で彼女にダメージを与えられる艦は居ない、それこそ横須賀第一艦隊みたいなトップクラスの艦じゃないと」

大和四隻の砲撃がたった一隻の空母を沈めるために放たれた。

しかし結果はどうだ？

爆煙が上がったのは大和の方ではないか。

周辺の提督や別の戦いを終えここに来た艦娘達の困惑してる表情よ

純粹かつ、単純な答えだ

ソ「まあまた、えらく芸達者なやつよ、まるでお前だな」

独「そりやどうも」

勝ったなターキー買ってこよ

金剛「相変わらずの技術ネー、あれが敵だったらと思うと……」

響「な、なにが……おこったっていうんだ」

独「簡単だ、「まずはナイフで砲弾の一部を吹き飛ばし、他の砲弾の

軌道をずらした後に一部の砲弾を指の間でなんとなくつかみ、威力が落ちないよう周りながらぶん投げたあとにもう一回転して後ろにいた北上から投げられた酸素魚雷を掴んで投げた「簡単だろ」

さあ、パレードの始まりだ

第7話 横須賀大演習式

無数の火砲は火を吹き

空には鋼鉄の鳥が空を覆うように飛び回り

水面下では大物を仕留めようと狩人が目を光らせる

練度、艤装にそれほどの差はない。

だがな

独「実戦経験の差が大きすぎるんだ」

命中率、回避率そんなもの、性能で変えられるものではない。

純粹に場数を踏めば自然と備わるものだ。

ソ「うわあ、酷い性能差が無いから戦い方をまだ基礎しか知らない
二軍三軍は秒でとけてやがる」

響「あれが……」

独「まあ、加賀さんも最強じゃあない、広範囲攻撃でもすれば一発
は当たるさ」

ソ「三式弾ないとだめなのか」

独「しるか」

金剛「あれだけ戦いながら私たちの方にもたまたま目線をあわせてく
るだけの実力ネ」

独「金剛、あんましゃべんな矢飛んできたぞ」

金剛「デスガ、提督のハートをつか「その前にあなたのハートを物
理的に掴みましようか？」ひえっ」

独「しゃべったぞこいつ」

しゃべったぞこいつ

遠隔操作かよ

ちび「私がおのの気になればダイアーさんなんて事もできるんです
よ、虎穴云々言いますが相手が虎程度だと思わないでほしいです他二
人が居ない現状ですから監視できるだけですから」

まだこんなのが二人いるのか

やっただぜ

独「二人もいるのね」

ソ「あつ察し」

響「こんなのがあと二人もいたら内ゲバで壊滅させる以外に勝てる気がしないよ」

ソ「そいつ無駄に統率あるから内ゲバ無理やで、簡単に言えば内ゲバが絶対に起こらない円卓だぞ」

金剛「（・ω・）attackは二人を呼んでからにするネー」

俺、そういうの興味ないんだけどなあ

戦争したい

独「雑談してたらもう、終わりかけかよ……で、何のようだ、憲兵」

ソ「あ、居たのね」

独「バツカお前、十分前くらいからいたぞ」

憲兵「実はあなたに会いたがってる人物がいて」

独「……」

なるほどねえ、大方内乱おこすからこっち側につけ、かなんか不穏なやつらがいるから注意しろの二択だな。

ソ「…フツ」

独「（笑うなよ）… ああ、ついていくよ」

憲兵「どうも」

ちび「……」モゾモゾ

憲兵の後ろをついていった先はビンゴ

「横須賀鎮守府 提督室」

執務室じゃなくて個室かよ

憲兵「大將殿はいつでもはいいと」

おおこわこわ

独「失礼します」

ドアをノックしてから入る。

そこにいたのはまあ、私腹を肥やして肥えた豚でなければ、歴戦の老兵でもない。

若いが瞳の奥にはとんでもない野心を持った男だ。

横須賀「どうも、少將殿気軽に座りください」

おいおいおい、周辺に艦娘忍ばせてるやつ言うこと

独「…… 殺意高いですね」

横須賀「あらら、バレましたか」

独「この刺すような視線はよく知っていますから……」

横須賀「わかりました、皆もういいですよ」

彼が椅子に座ると部屋に満ちていた気配もすべて無くなった。

こっからが本番

独「あまり話は好きじゃないんだ、本題をだしてくれ」

横須賀「じゃあ、あなたは今この国をどう思っていますか？「守りたい」ですか、「変えたい」ですか？」

なーるほど、この雰囲気からしてか

独「今のこの国に守るべき価値なんてありはしませんよ」

横須賀「なぜですか？」

独「今、国の内部では停戦、和平を望むやつらしかいないじゃないやありませんか、前線にいる私からすればねえ、あいつらに交渉は不可能ですよ、ならば、国をいや、主導者を変えなければ進みはしません」

どうだ… 戦争か共闘か

横須賀「…… 迎えましょう同士」

独「これはどうも」

横須賀「これはちよつとしたものです」

独「…… 中将進級とミッドウエー攻略作戦計画書ですか……」

横須賀「ええ、実はあなたの場合、艦隊の総合的強さからしても大将でもいいのですが、大将は人数制限がありまして、この内乱後空いた大将十人の席にあなたを迎えます」

独「…… 前線から下げないのであればこの階級は貰いましょう」

横須賀「困りましたね、実力はあるので上の階級に立ってくださいれば

前線にも安心感がありますのに」

独「前線に立って指揮する方針では」

横須賀「失ったときのダメージがでかいので遠慮します」

独「……」

横須賀「…… はっ」

独「?」

横須賀「じゃあ、前線も一步手前辺りの鎮守府に置いて、前線の総司令になって貰いましょう」

独「なるほど、それはいいですね」

横須賀「では、お受け取りください」

独「どうもありがとうございます、それでは」

敬礼の後部屋を出る。

流れてきたなあ。

横須賀要塞

まーだ、日が昇ってるよ

永遠の夜なんてないか

独「作戦計画書からして反乱をおこすのは横須賀を中心に呉、舞鶴、佐世保、大湊の五大府に中将でも三十、少将五十、それ以下ですら結構な数いる上に迷ってるであろうやつらが此方につけばまあ勝利は固いな」

問題はこちらからどれだけあちらに移られるか。

正直どっちにも国民からすれば正義はない。

別にあいつらに土下座してウランをもらうって手も無くはない。

と、ゆうかこれ、前線に中小の鎮守府の艦娘だけおいて盾にした後に本隊ぶつける布陣かよ。

くー「なーに見てるんですか?」

白「ん、ああ、これが、大本営発のミッドウエー計画……おいこら」

くー「うわ、これめんどくさいことになりますね」

白「このままいけば第一軍とこつちとあつちで三つ巴だな、今すぐ計画は廃止、終結後にやるように変えた方がいい、それとな、いつになるか知らんがそのうち国が割れるから艦隊を日本海辺りかウラジオストクに残しておくといい、内戦から少ししたら真っ直ぐ日本上陸すればいいよ……あと」

くー「じゃあ、これを利用して双方の戦力を削りましょう」

白「……クッソ」

くー「つてことで、開始日は数週間後と急かしますねえ、周辺鎮守府の制圧はほっときましょう」

白「あーはいはい、帰ったら行こうな、だから早く帰れ」

くー「はい」

「つたく、油断できないなんて久しぶりだな。」

独「なあ、英雄気取りの狂人」

ただ草がなつて彼は消えた。

なんだよ、しょうもない

さてと、ぷにぷにしましょう

第8話 横須賀大演習参

別に俺は正義の味方でも構わない

戦争に正義と悪はないからな、ならどつちを名乗っても良いではないか

独「……」

空母棲姫「つてことよ、遠くないうちにあなたの重要拠点が落ちるのは嫌でしょ、なら、今アメリカに向けた戦力を全部此方に戻しなさい」

ジェット機でここまで来るかよ普通

話聞かないし

無茶苦茶だし

パートナーとしては最高だよ

ただまあ、芝居とはいえ両腕右足を切断する必要はないだろ

戦艦棲姫「……なぜ数日前まで銃口を向けてたやつが」

空母棲姫「あんたが負けると中央がから空きになって各方面の姫と話ができないのよ、わかったら艦隊を戻しなさい」グリッ

ナチュラルに踏むな

戦艦棲姫「わかった、ならばもう帰れ」

空母棲姫「……そうするわ」

あつさりだなあ。

海岸まで引きずられ変えるのかと思ったらそこにはジェット機は無かった。

くー「さてと、バケツぶっかけて再生させてつと」

白「ふざけぶわっ」

直後全身に針でも刺さったかのような痛みと同時に切れた体なおつていく。

便利なのはいいのだが要塞外で斬られるのは二度とごめんだ

白「あーもう、服もズボンもマントもボロボロ、これ作り直すのかつたるいんだがなあ」

くー「一部は生き物血で染め上げてますしねそれ、いったいどこで

そんな技術使うんですか」

白「気分……てか、ジェット機どこだよ」

くー「あー、あれヲ級ちゃんにもって帰らせました」

白「おいこら」

くー「まあ、横須賀での予定いつでももうないじゃないですか」

白「そーだな、演習も終わったし後は好き勝手に帰れだしな」

くー「で、ですよ、これで帰りましょう」

そういつてなにかを隠していた布をとるとそこには

そこには

白「マリンバイクか」

くー「ええ、水上オートバイとも言うこれです」

白「俺がやれと」

くー「だめ……ですか」

白「……出来ないの?」

くー「……」

白「出来ないのね」

くー「……」

白「わかったよ、エンジンとかは改造してあるんだな」

くー「はいっ、性能だけなら通常の三倍ですよ」

白「じゃあ、横須賀要塞の外れにあった潜水艦用の水門まで飛ばす

か」

くー「れつつごー」

エンジンをかけさつさと飛ばす。

時間は無限だが有限でもある。

空は雲で覆われ周辺はまさに闇、ライトもつけずただ飛ばす

艦娘の定期巡回ルートに入った直後にくーちゃんが抱きついてく

る

くー「こーすれば顔は見られませんね」

白「残念だなあ、見られなくても矢は飛んでくるぞ」

くー「え」

相変わらず加賀さんはえげつないよ

なーんで軍艦が空飛んでるんだよ

くー「げっ、総統さん直上」

白「うっせえ、あんなインチキエムとファンネル持つてるやつに勝てる分けねえからな、ちゃんとしたこ焼きなり猫なり使って防げよあいにく俺はこいつを動かすのに精一杯だ」

すぐに速度を上げ「音速」で飛んでくる矢を回避する

くー「ぎゃああああ、前、まえ」

白「ちよ、ガトリングはあかん」

咄嗟にくーちゃんから猫航空機を奪い取りガトリング砲目掛けてぶん投げる。

なんとか間に合って防げたけどまあ、無理ですわこれ

白「八方位と上を取られた、なんやねこれ、空母一隻でこんなことすんじやねえよ」

くー「あのちっちゃい加賀さん、本人倒さない限り無限沸きですねこれ、それどころかまともにダメージ入ってるか怪しいですいまの」
白「あいつら、謎過ぎるが少なくとも小さいくせして長門クラスの装甲はあるからな、それにガトリング砲とジェット機搭載、普通に一隻でも厄介なのが無限沸きだからな、まあ、あれ増やしすぎると加賀さんの行動が鈍ってるるときあるから多分全部脳波でコントロールしてるよ」

くー「色々見てるんですね」

白「見てなきや提督やれねえよ」

くー「……そういえばですね、見てほしいものがあるんですよ」

白「今頃なんだ」

くー「昔、といっても数年前なのですが人類が私達を捕らえ研究した施設があつて」

白「怖いからついてきてと?」

くー「こ、怖くありませんよ」

かわいい(・・▽・)

白「興味持ったし行くか」

くー「ありがとうございます」

白「と、言いたいところじゃがな、八方位と上をとられなおかつ奥にはうちの主力と来た正解は？」

くー「おわた」

白「正解ッ」ドカーン

第9話 真相と欠片と力

街の観光もできずに戻っちまったYO
せめて宝石の一つや二つ

独「はあ、帰って早々工場の稼働具合に計画書の再準備、さらには列車砲と周辺海域の要塞化ねえ」

確かに「艦隊の練度」「兵器の技術水準」「艦娘個々の戦闘能力」は高くても所詮「戦術」だ、まだ核や遠距離の大型ミサイルはできちゃあいない。

これから下手すりや人類全部相手にするんだ「戦略」規模のことをするには「領土」も必要だ。

資源はくーちゃんやバツクに居るから短縮できただけだ。

少なくとも要塞内であれば俺は姫や水鬼、レ級さえ雑魚になるレベルの能力と不死身に近い超再生能力を保持し、俺が死なんかぎり要塞にダメージは入らない、ならばその領域を増やすのもてではある、問題は領域を広げるということは俺自身への負担だ。

確かに相手が列車砲だろうがなんだろうが「要塞に」ダメージは無いが別に相殺されるわけではない、ただ俺に流されるだけだ、被弾面積が増えるということは俺に流れるダメージも倍になる、それにこの体が耐えられるかが問題なのだ。

例え防衛力、体力がカンストして超高倍率永久リジエネがあっても減るときは減る。

独「どーするべきかねえ、ね、北上さくん」

北上「なんか考えがわかんなくてもないけどとりあえずこたつでミカンでも食べなよ」

独「せやな、もうすぐ12月、クリスマス作戦の準備全く終わってねえな」

計画書をすべてファイルにしまいとりあえずこたつにはいる。

尚、ミカンは無くなったもよう

北上「クリスマス作戦？」

独「聖夜のプレゼントに原子爆弾落とす計画だよ、とりあえずアメリカのロサンゼルスでいいやと思っただけど予想以上に計画が遅れてさ、ミッドウエーも取れてないし、ミサイルは準備できないし、ウランですらまだ確保できていない、そして冬もこれから、寒さつてのは意外と響くんじゃわ」

北上「うわあ……完璧主義の提督がねえ」

独「……俺は完璧じゃないさ、ただ完璧を目指して計画しているだけさ、イレギュラーという排除不能の存在がなあ、うん出来ないなら次の手をうつだけだ」

北上「その次の手に詰まってるんでしょ」

独「まあね」

北上「じゃあさあ、もつと提督らしいやり方すればいいんじゃない？」

独「もつとねえ、具体的になにやってるっけ」

北上「スナック感覚で建造したり、面白半分で核を落つことしたり、略奪したり」

独「なるほどねえ、建造と略奪か……いいねえ」

北上「提督さあ、逃げてるでしょ」

独「何から」

北上「私達から」

うーん、演技下手だったかなあ

独「どうしてそう思う？」

北上「あの人の目の前でその人が一番嫌がることをして楽しんでいような人がこうも奥手になられるとね、いや、奥手のふりだね、やればできるのにやらないだけさ」

独「ならなんだ？俺がお前らが戦場で戦っているのを無視して人類に核をぶっぱなせとでも？」

北上「まあ、そうなるね」

独「俺も甘いよ全く」

北上「その身内への甘さと敵への過激さが皆好きなんだよ、だからさ、もつと提督らしく、「救いようのない奴を容赦なく殺しそいつらの

恨みを笑って踏みにしれ」… なんだ、わかっているじゃん」

独「わかっていてもどこかで止めたくなるものさ…」

北上「やっぱり駄目だねえ、こりやあ戦火で焼いて氷を溶かさないと」

独「まあ、戦争でないなら俺はこの程度の男さ」

こたつを出て、銃の点検を済ませ、バックにしまう。

北上「ま、そうだね、少なくとも本当に誰も提督が何をやっても別に気にはしないからさ、やりたいようにやって満足して今を生きればいいよ」

独「わかったよ、なら、少しでかけてくるから帰ったら出撃をする、ミッドウェー作戦より前に戦車隊の実戦データを取らないとな」

北上「わかった、じゃあ部隊の準備をしておくから急いで帰って来てね」

独「おーけー」

扉を閉めそこから向かいの窓を飛び降り待ち合わせ場所に走る。

ついた頃にはもう彼女はいた。

まあ十分も遅れたらね

くー「おっそーい!!」

是非もなし

白「はは、ごめんごめん、寒くなってきてさ」

くー「総統さんねえ、私がここで待ってるまでに何があったかしてるの？私ねえ」

白「はいはい、ごめんね、これあげるからさ」

とりあえずポケットにあった指輪を渡す。

くー「… ちょ… ちよつと」

白「あーそれ？こつちにきたせいで要らなくなったからやるよ、百万以上したんだぞそれ」

くー「え… いや… その」

白「ん？どうした？」

くー「… はっ、違う違う」

白「なんだ？その指輪が告白でも思った？アホらしい、そんなん

じやあ俺は全員にプロポーズしてるようなもんじゃねえか」

くー「うわあ、酷い、つまりあの子たちにあげた指輪もぜんぶ」

白「性能向上の手段でしかない」

くー「うーんこの廃課金兵そりゃあ、内部での争奪戦も起きますよ」

白「話はいい、船でしよう」

くー「ですね、ヲ級ちゃん、船だして」

ヲ級改f「ヲツ」

とりあえず船内に入りソフアーにぶつ倒れ、軍刀を捨てる。

白「さてと、でだ、なんかまだいろんな事があるんだろ」

くー「ええ、さつきも言いましたけど全員に指輪渡してエンドって

そう安いものじゃ無いんですよ本来は」

白「ふーん」

くー「ほら、彼女たちっていつつも戦場じゃないですか」

白「せやな」

くー「で、ほら、戦場いったことならわかるでしょあの雰囲気」

白「戦場言うても紛争地だけだな、まあわかる」

くー「で、ストレスも多いのでたまっちやうわけですよ」

白「あっ」

くー「で、全員に渡す、結果ね」

白「死因腹上死はやだ」

くー「まあ、数を減らしても提督本人がうこけずに指揮が滞り、ね」

白「うわー」

くー「ですかわまあ、よほどの事でもないかぎり本来は死にます」

白「うーん、なんとさえばいいのか」

くー「あと、これはお願いなんですが」

白「が？」

くー「抱き締めてください」

お前は知らないかもな、後ろにいるんだよ。

機関銃構えて。

白「えーやだ」

くー「……いやですか？」

白「無理なもんは無理さ、ろくなことねえだろ」

くー「バレちゃいました？」

白「まあ、頭ぐらいなら撫でてやるからほら」

くー「うう、こうやっていろんな人が堕ちていったんですがねえ」

白「相手が悪かった別に気にするな」

くー「・・・じゃあ、抱き締めます」

あ、死んだこれ。

白「あーばかおめーやめっ」

加賀「……」

直後、無数の銃弾が身体中を貫通した。

それも一発一発が炸裂弾だから体内ポロポロ

いやー、やってらんねえ

くー「ごはっ、だれだ」

白「あいたた、適合させてなきやミンチだぜおい」

加賀「チツ」

舌打ちしながら再装填すんなよ

蜂の巣なるの結構いたい（・ω・）

くー「ひえっ、カガサンナンデカガサン」

加賀「流石に護衛なしだと思いましたが？」

白「まあ、そうなるな、てか加賀さんそんな馬鹿デカイ砲なに」

加賀「ああ、これ、実は80cm70口径砲ですよ提督が欲しがっ

ていたのでふぎけてた妖精を二十四時間労働で」

白「あーこれが艦娘でも使える列車砲かわいいなあ」

なんかすごいブラツクな単語が聞こえたけど無視は

くー「火力は凶悪ですけどごふっ」

加賀「このとうり砲身で殴れます、ちゃんとパワーもあってどこぞ

の戦車道のネズミのようなへまもしません」

白「ただこれでもデカイなあ、腕に巻き付けるのは無理だな反動で

装填ができませんこれまじでこのまま大筒としての運用だろうな」

くー「め、めでいがはっ」

ズドーン

加賀「火力も史実の列車砲に恥じないように姫だろうが鬼だろうが
ワンパンで沈めれます」

白「ちよつくーちゃん死ぬ、死ぬから」

くー「あかん……これ……バケツ」

加賀「……仕方ありません」

白「……うわあ、揚げ物じゃないんだから」

くー「ぶくぶく」

加賀「よし」

白「うわあ、ひでえ」

くー「そうとうしゃあん」

加賀「なんだ、そんなふざけられる体力があるんですね、じゃあ、今
度は」

くー「すみません、総統さんは死後引き取ります」

白「解剖されそう」

と、まあふざけながら大体二時間

目的の場所には来たがいいものやーぱり居る。

白「見られたくないんだろうまあ、ダイソンがいるよ」

加賀「面倒ですね、これ使いましよ」

くー「流石に80cmとなるときけんじゃない？」

白「だいじよだいじよぶ、てかこれ元々モンスターにつけるため
の砲身だろ、よくまあ」

加賀「まあ、これが出来る秘書艦です」

くー「やべえよこいつ、絶対裏あるよ」

加賀「明日の夕飯と今の砲弾どっちがいいですか？」

くー「何でもありませんからその物騒な兵器を向けないで」

白「しゃあない、うっちゃるか」

取り敢えず砲にスコップを取り付けゆつくりと胴体を狙う。

そのとてつもなく大きい鉄の塊を砲に装填し、ゆつくりと引き金を
引く。

すぐにわかった、こいつはえぐい、ちゃんとロケランをぶっぱなす
体勢をしないと吹っ飛ばされる

白「あ、痛つ。適合度三十じゃあダメだこれ、艦娘じゃなきや使えんわこんなん」

加賀「もう少し長くしてキャノン砲みたいにしましよう」

くー「ちよつ、本当にダイソンワンパンなんだけど、これ使ってあいつ暗殺できないかな？」

白「どうだろうね、姫や鬼だって同一個体でも耐久に差はあるんだ、ボスだと一発は耐えられるんじゃない？」

砲をしまい、施設の扉の前につ。

扉にはドアノブもセンサーもなくどうやって開けるのかはわからない。

だから蹴り飛ばす

くー「ちよとおおとおお、ストップ」

白「いいや限界だ蹴るね！」

容赦なく厚さ三メートルはある鉄の扉を蹴り飛ばし通路を確保する。

同時に異様な気配も感じ取った。

反応としてはまあ、知りたくないし認めたくないものだな。

加賀「提督」

白「加賀さん、くーちゃんの目を隠して、これは手遅れだ」

くー「……そんな」

暗い通路から聞こえる生を望む声、もう自分が何者でもないとかかっていないただの死体

一つの仮説が確定した。

疑問は無くなり、答えは出たが

■ ■ ■ 「タス……ケ」

■ ■ ■ 「シニタ……ヨ」

■ ■ ■ 「イタイイタイイタイ」

■ ■ ■ ■ ■ 「クルシ……」

見るに耐えん物だ。

苦しんでいる他者をネタに飲む酒が美味かろうと
こんな死体の嘆きなどあまり良いものではないな

もしこいつらがもう一つの仮説どうりなら尚更だ

白「くーちゃん……コイツらはもう無理だ、あの肉をみてみる、異常なまでに増殖、腐敗、壊死を繰り返してるのか完全に正常な物ではない」

くー「わかつてますよ……反応はこの子達だけ……苦しかったでしょうね」

彼女が銃口を向け、ただトリガーを引いた。

死体どもも痛がっているのかさつきから喚いているが興味ない。

早く諦めていればよかったものを。

銃弾がつきると同時にやつらも倒れた、もう再生する体力も意思も無いのだろう。

白「所詮人間か」

死体に引っ付いていた人間の腕をもぎ取りその腕の手首を千切る。

切れた手から流れたのは緑色の血。

不気味なもんだ

くー「……進むのですか?」

白「ああ、九割を十割にするためにな」

くー「……」

加賀「……あなたは」

さすがの加賀さんも止めようとはしたがもう遅かった。

くー「構いません、私は覚悟ができました」

おせーよったく

白「そうかい、なら入るぞ」

それじゃあまあ、奥でゆっくり答えを聞こうか

第10話 演じるものと決めるもの

我ながら実に下らないと思う。

答えがわかかっていて答えを見ようと言うのだ。

これでか違っていたらまあ、別の仮説が当たるだけだが。

血と肉のこびりついた廊下を進む。

もはや異臭もこうもひどいと関係なくなるようだ。

壁に腕

天井に足

床には頭蓋骨

研究員、艦娘、深海棲艦関係なく

ただ狂い

ただ苦しみ

ただ苦し紛れに肉を削ぎ

呪い

憎しみ

怨み

どれももはや下らん

こんな実験どうでもいい

妖精の技術を人間が利用なぞまだまだ先の話

解剖し薬を流し込み

感覚を改造し

細胞から遺伝子を抜き取り

クローンの作成

無意味無価値

それではダメだ

そんなのはダメだ

だから貰おう

救う力を滅ぼすために

総統「さてと、このデータを元手にいいものが作れそうだ」

くー「……ここは防音ですね」

「総統「ああ、好きなだけ騒げるな」

データを回収しいたるところに爆弾を設置する。

こんなものが出回ると情勢は一転する。

ならば無くせばいい

「そうすれば好都合だ

くー「……もし私が「私達の理想」をすて「七十年前の再開」を望むなら……あなたが私達の上に立ってくれるなら……私はいってっ」

総統「「なら」だつて？ふざけんなめんどくせえ」

くー「え……」

総統「お前が言うのは「したい」「やりたい」「おこしたい」だ、で、どうだ？」

くー「……私は、「人類を許したくない」ですか……え」

そつとマントと帽子とコートをぶん投げ、扉を開ける。

総統「めんどくせえ、さつさと行くぞ……俺が手を貸すんだ、それは予備のだしくれてやる、だからさつさとこんなしようもない所出るぞ」

くー「……分かりやすい人」

総統「うっせえ、そろそろ帰らねえと試験運用できる時間が減るんだよ」

階段を上り閉まっていた扉を開ける。

それと同時に零戦が突っ込んできた。

総統「ツ!!」

とつさに右腕を適合させ一発ではたきおとす。

周辺は地獄そのものだ

島全体が削れてもはや価値もなくなった。

そしてこんな芸当が「加賀さん」がいても出来る奴は何故か一人だけ知っている。

会ったこともない

見たこともない

知ってもいないはずのただの空母

総統「瑞鶴」

加賀「……すみません、少しやり過ぎました」

くー「ぎゃあああああ、なにこれなにこれ、ここに基地系姫でもいたの!? なによこの地獄あつっ」

瑞鶴「……やっぱりね」

加賀「提督」

総統「もういい、今ここで攻撃してもそいつは逃げれる、こっちは貴様らと本気で戦争するつもりじゃねえよ、あの狂人の相手は面倒だからな」

瑞鶴「嘘が下手ね、狂帝」

総統「……」

手詰まりになってきたから爆破しよ

総統「そいじやまあバイナラ鶴空母、あの十股野郎によろしくネ」キラッ

二人を抱えると同時に地下で起こった核爆発の爆風で無理矢理空を飛ぶ。

まあ、あいつは核程度じゃ沈まんか。

くー「いやあああああ、焼ける背中焼ける」

総統「騒ぐなっ！ そんなんで焼けたら……コートねえから熱いな」

加賀「提督……」

総統「どうした」

加賀「この方角鎮守府じゃありませんよ」

総統「……ごめん、さすがにハツタリかますのに集中してて何も考えてなかった俺のトランクに試作型のエンジン有るだろ」

くー「……うわ、これミサイルじゃないですか」

総統「試作だがな、一応艦娘にもダメージはいるように妖精さんに頼んだがまあ進まないつたらありやしない」

加賀「まず、ミサイルなんて世界大戦の兵器でもありませんからね」

総統「うっせえ!! ドイツがV3なんて実質ミサイルじみたもの用意するのが悪い、騙された」

くー「まあ、ジェット機や列車砲はあくまで「実在するから応用を

効かせた」であって「無いもの」はどうしようもないですよ」

加賀「固定完了、座標特定、エンジン点火」

あとはそのまま真っ直ぐかえって

おうちに帰ります。」

鎮守府

燃料の切れたミサイルを回収しそのまま部屋の窓に体当たりする。

白「ダイナミック帰還」

加賀「とおう」

くー「……」

北上「あ、お帰り（*、▽、）」

総統「あー寒い、部隊の用意できた？」

北上「一応出来ただけだね、問題ができちゃった」

総統「ん？」

コートを着ながら耳を貸す。

その声には別段大きな訳ではなさそうさだ。

北上「いやー実はね、無断でやっちゃた…… 建造」

白「ほえ？」

加賀「チツ」

くー「痛い痛い加賀さんそこだめ、ダメ人体壊れちゃう」

総統「何故にそうなった……」

ああ、もうやだ、大量に人がいるのって好きじゃないんだよもう。

出発から三分後

…… てか、なにげにこーゆー回想シーン少ないよね

まあ、視点別作品ばっかだしね

あ、そうそう、七帝これくしよんは七人の提督の個別視点と艦娘視点のネイビーとパン瑞鶴視点のグロワール、黒加賀視点のリッターがあるよ

え？そんな宣伝いらない？

是非もないね

ぽわんぽわん
ほむほむう

鉤十字の旗の下、円卓を囲む五人の艦娘

金剛「さて、諸君に集まって貰ったのは他でもない提督についてだ」
ドン

金剛 撃破艦 戦艦八百十二 空母百二十 巡洋艦八百 小型艦
八千

ビス「そうね、あの監視をこんな無惨に引き裂いて確認することと
いえばそれぐらいよ」ドン

ビスマルク 撃破艦 戦艦三百 空母三十 巡洋艦五百 小型艦
三百（撃破の三分の一は姫、鬼、レ級）

赤城「加賀さん……」ドン

赤城 撃破艦 戦艦百三十四 空母七十 巡洋艦二千 小型艦一
万

夕立「……ぽい」ドン

夕立 撃破艦 戦艦二千 空母五百 巡洋艦千 小型艦七千

北上「こんなこととしていいのかあ…… ああ、大井っちい」ドン

北上 撃破艦 戦艦千五百 空母七十 巡洋艦三千 小型艦二百

ちび加賀「……」チーン

加賀 撃破艦 戦艦十四万五千二百 空母五十三万 巡洋艦百二

十万 小型艦測定不能（姫等多数）

金剛「まず、この加賀さん一強体制を取り除かないと私達は一瞬で
蒸発させられるネ、そのためにもまずは作戦がいる」

ビス「…… 金剛、たとえ提督の私服を着てしゃべり方を真似ても無
駄よ」

金剛「（・ω・）」

赤城「ですが、たしかにそうですね、提督を独り占めするためにやつ
た事が裏目に出てこんな結果になったのですから」

北上「…… 何やっても無理だと思うけどなあ…… 提督は極度の
戦争厨だし、横には深海棲艦のまとめ役の空母棲姫、もう片方にはこ
の鎮守府内でも最強の艦娘…… ゼロでないといっても相当なものを

用意しないと」

夕立「♪」

ビス「余裕そうね夕立」

夕立「夕立はもう犬ポジを貫けるから」

金剛「島風」

夕立「……呼ばないで、絶対呼ばないで」

赤城「まあ、あそこら辺の子達は大丈夫ですよ、絶対ではないですけど」

金剛「そこで私は考えまシタ、そう作戦名諸刃の剣作戦ネー」

ビス「……察しはつく、だがそれは」

赤城「あのそれ、加賀さんを倒しても今度はその人が敵になるだけでは」

夕立「あ、だめっばい」

北上「……やめた方がいいよ」

金剛「ならば私はあなたたちに問います、あの化け物じみた空母をどうやってあの舞台から引きずり落とし、互角で戦う条件を作るのですか、あの三武艦は三人揃うからお互いに押さえ込めたのであって、一人一人が」

ビス「あなたねえ「長門」と「アイオワ」よ、あの二人がどれだけ意味があるかわかってる？」

金剛「?… 加賀さんを抑さえるという意味以外にありますか？」

北上「……はあ、金剛さん、「提督の長門に対する」信頼って知ってる？」

金剛「モチロンネー、提督は長門に「もしもの場合は後ろから刺せ」……あ……えーと」

ビス「そう、提督は長門の事を「もし完全に私情に駆られ、変なことをすれば殺しても止めてくれる」存在と思ってるの、もし呼んでしまったら」

赤城「アイオワさんはアイオワさんで提督の考え方に汚染されてるのか「無理矢理襲って奪い取る」な、人ですよ、今までは居なかつたから良いですけど今は本人がいます」

北上「そして問題はこれだよ、三人揃えば防げるけど長門があれじゃあね、で、揃えなければ彼女の「強時代」

夕立「提督さん自身、艦という過去の英霊に敬意を持つてる人にあるは相当答えるっぽい」

ビス「あの過去を見なさそうな人が一番見てるもの、気が狂っても長門、大和、武蔵はだめ、あの年中発情期の犬はダメ、あと海外艦も全員ダメ、略奪愛だもの」

金剛「デスガ力がないと意味もないデスヨ」(あなたがそれをいいマスカ)

ビス「だからこうしたんでしょ、まあ、そんな爆弾はダメ」

北上「じゃあさあ、その関連の人達でそのストツパーを建造して体勢をたててからでいいんじゃない？」

赤城「ストツパーといいましたら」

夕立「加賀さんは赤城さんを始めとした空母組、長門さんは陸奥さん、アイオワは……ぽい」

北上「しまった、アイオワは誰もいない、ストツパーのサラトガさんは提督のお気に入りだった……」

金剛「みんな死ぬしかないじゃないネー」

ビス「……駄目だ、提督のお気に入り艦の存在忘れてた……」

北上「よし、こうなったらやけくそだ、天に運を任せて六隻ランダムで建造しよう、私は取り敢えず出撃の準備がいるから先によるしく」

ほむほむう

北上「ま、まあ色々あってね」

白「まあ、いいか、じゃあ二時間後集めて」

第11話 ヒトラーになりきれなかった男

雪が降り続け月が昇るころ

無数の鉄十字の戦車が並ぶ。

そういえば明日…… というか今日はミッドウエーの前哨戦か。

総統「…… いざ見るとマウスって小さいな」

加賀「まあ、奥のラーテなんかと比べると小さいですね」

くー「さーて、あの馬鹿はちやんと戦力を配備してるかな？」

総統「さあ、将校は前哨戦がうまくいかなかつたら増援要請されるからしらんよ」

ミッドウエーの作戦と同時に火事場泥棒することになるけど許せ、周辺の提督は少佐中佐で総出で出払い。

いつもは巡回してる将校の艦娘も増援のために今回は監視も無し
精々妖精さんがちらほら砲撃してくる程度。

総統「でだな…… なにペンキ塗ってんだ？」

くー「まあ、あのままでしたら内乱で使えなくなるでしょうと思ひ、
深海棲艦風にアレンジしました」

いやまあ、鉄十字の上に髑髏って……

てゆーかさつきから設計図チラチラ見せるな。

これ答えたら是對あかんやつ

総統「……」

くー「でですね、これ」

総統「あ、言っちゃうのね」

加賀「提督」

総統「そうだな、「カステラです」ちよつ、なに重要なきにティー
タイムしようとしてる」

くー「まあ、これわたしたちの総意で作りましたし」

…… つまりなんだ

総統「わしがどっかほつつき歩かないようにでも？」

くー「理解早いつて楽だなあ」

総統「逃げれ無いだろうし聞くよ」

くー「まあ、基礎性能どうこうはどうでもいいんですよ簡単設計図にしましたから」

うわあ、楽

全部書きまとめるせいでぐっちゃぐちゃ

空母が大艦巨砲主義にはしってるけどきにしない

総統「これ、聞かないとダメ？」

くー「可愛く言っても無意味です」

総統「しよぼーん」(・ω・)

くー「ま、まあ、簡単にまとめますから、ね」

総統「うっそだあ、こんなばかどかい軍艦が簡単なわけがねえ」

くー「主砲80cm60口径三連装砲、副砲連装レールガン、試作で妖精さんたちが作ってた光学兵器多数あとはミサイルハッチを複数、あらゆる弾頭を発射できるように改造しました、もちろん核も発射できます」

総統「うわーシンプル」

くー「本来なら数百のミサイルの同時操作なんて不可能ですがこれは言ってしまうえば総統さん用の武装兼首輪ですし」

総統「おい、首輪ってよお」

くー「脳波コントロールってこう、ロマンあるでしょ」

総統「それ、最後に質量を持った残像を出す奴に頭抜かれそう」

くー「装甲も対80cm完全防御でちゃんと艦娘の砲撃程度はノーダメージです、電磁防御とか積めたらよかったですねえ」

総統「ん？」

どこかでこの設計図見たような

頭の中にある全ての設計図とこの設計図を重ねる

そしてひとつ、そこにあるものと同じものが出てきた。

総統「これ……しゅてるんじゃない」

くー「あ、ヴあれた」

総統「なんか変なの入れてるだろ、設計図と違うところあるぞ」

くー「ええ、入れました、艦娘射出カタパルト三基にハッチにと」

総統「おいおい、それもう強襲揚陸艦にでもしたいのか？」

くー「ドックとか保有してますし小規模ですが修理も可能です」
総統「それただの移動要塞」

くー「だって、だってこうしないと」

総統「と」

くー「死体からへぶう」

総統「ひえっ」

ざっと13メートル、ぐらいだろうか、ビンタで吹っ飛んだ。

何をいつているのか俺にもさっぱりわかんねえ

姫クラスが一撃だ。

加賀「…：ふう」

総統「いや、そうじゃなくて、死んでない？」

加賀「大丈夫ですよ、首の皮が繋がっていますし」

総統「首の皮が繋がっていても死ぬんだよ…：」

くー「あっ、脳細胞が粉碎された…： 立てない(´・ω・`)」

総統「だめだこりゃ」

数分後

くー「えーと、よし、もう出撃しましょう」

総統「…： どうしてこう面倒なことになるんだ、取り敢えず周辺の
鎮守府いこつか」

第12話 ミツドウエーとクリスマス

無数のネズミが海を走るころ

こちらもまた見届けるために前線よりかはかなり遠く離れた場所にいた。

総統「あつい」

くー「仕方ないですよ、ついさつきまでウォッカをがぶ飲みしてたんですから」

総統「まさか機動力がこんなにもないなんて」

くー「まあ、これは移動されるもんじゃありませんね、防衛なら強そうですが」

総統「うーん、空挺隊みたいに落とすか」

そう、火力と装甲こそあれだ

だがマウスには機動力がない

どこぞの艦砲積んだ戦車より遅いのだこいつ

ラーテはまあその大きさを利用してエンジンを増やせたりしたが

マウスにはそれほど大がかりなものではなかった

そのせいで予想の倍以上の時間がかかった。

総統「妖精さんたちだけで動かせるのは確認できたしもうちよつと場所削ってそこにエンジンと燃料積むか…… 砲弾も減らして劣化ウ

ラン弾にできればなあ」

くー「ウランほしいですか？」

総統「欲しいです」

くー「じゃあこの死後の引き渡しにサインを」

総統「勝手に殺すな」

くー「でも前は「俺は今はいつらの提督なんだ、死んでからなら手を貸してやる」って」

総統「さ、さあ、なんのことやら」

くー「もしかして、釘でも刺されました？」

総統「もういい、これ以上話すと矢が飛んでくる」
葡萄酒の栓を抜きそのまま飲み干す。

しかし何一つ得られるものはない
なにも感じない
なにも生まれない

もう、人間てしての感覚は死んだのだろう
されど我は虚無にあらず

されど我は炎である

総統「…」

くー「じんぐるべーるじんぐるべーる」

総統「… もう、そんな日か…」

くー「クリスマス作戦」

総統「ハハッ、そうだな急ごうか」

くー「うわー、アメリカへの核攻撃を言っただけで顔が変わったよ、
ほーんと生きる時代間違えましたね」

総統「どうかな、あんな事になるまではまともな人格はあつたよ」
コインを打ち上げると同時に目の前の島から煙が昇る。

総統「はい」

くー「裏」

総統「残念表」

くー「うへー」

総統「FXで溶かしたような顔をしても駄目です」

くー「むー、もう一回」

仕方ないからもう一度コインを打ち上げる

総統「横に注意しろよ」

くー「え？」

直後砲弾が彼女の頭に直撃した。

普通に直後したのである。

そう「46cm砲」の砲弾が直後

総統「はい」

くー「けほっけほっ裏」

総統「チッ」

くー「… 大和級なんているんですか」

総統「いや、増援部隊、あまりの進軍の遅さからバレた」

くー「知ってて放つとききましたね」

総統「無線ガン無視だからな、わしは囿寄せして卑雷針でかえる」

くー「どこの卑劣様ですか」

総統「じょーだんじょーだん、数は空母8、戦艦12、巡洋艦20、

駆逐艦45、潜水艦3」

くー「……少ない…… こっちはマウス30、ラーテ3ですよ、負け

るわけ無いじゃない」

総統「まあ、偵察艦隊を木っ端微塵に吹き飛ばしたからな情報はねえよ」

くー「まあ、砲撃は全くきかないでしょうしのんびりポーカーでもしましよう」

総統「えー、やだ」

トランプを取り出し積む。

一枚目はハートのQ

総統「ほい」

くー「…… 砲撃で吹っ飛びましたよ」

総統「……」バンバンバンバンバンバン

くー「台パンやめーや」

総統「まあいいか、ティータイムでも」

くー「こんな砲弾爆弾魚雷の雨あられでですか?」

総統「そうそう、落ち着いて」サー

くー「…… 壊れましたね」

ふざけんなよあいつら

くー「無言でメンチ切らないでください」

総統「…… よし、マウス追加発注しよう」

くー「あ、帰ってきた」

信号銃をとりだし空に赤色の煙弾を打ち上げる

総統「あ、やべ」

くー「あれ、赤ってたしか、「砲撃地点」

総統「お、空から沢山降ってきた」

くー「…あれ、全部「80cm」砲ですよね」

総統「そだよ、金剛とかに持たせてるからね」

くー「たしかあれ、20門かそこらありましたよね」

総統「うん、機動性皆無の砲撃支援専用艦装、火力だけだからすごい楽… だったらよかったよ… ブースターとかで反動なくすの疲れた」

くー「いや、そういうのいいです、これあかん」

雨のように降り注ぐ砲弾は確実に艦娘を沈めてはいったがうんそのあれだ

総統「椅子とかテーブルも吹き飛んだからうん」

くー「あ、マウスに当たった」

総統「いたつ… 頭に当たった」

くー「はうつ… 痛いです」

総統「あく自動回復するんじゃないか」

くー「簡易とはいえ適合化は強いですよ、これだけ撃ち込まれてノーダメージですよ」

ポケットにあつた饅頭を取り出し周囲の惨状を確認する。

数百発の砲撃で援軍は壊滅、マウスもへこみはしたが貫通はなし
ラーテも副砲が一部破損程度。

成果は上々。

総統「さてと、帰ったら全面的に再設計だな、とりあえず機動力確保を中心に水陸両用を目指さない」と

くー「マウス量産の暁には人類程度どうってことないわ」

総統「なお下からの攻撃には意外と弱い」

くー「弱い言ってもある程度は耐えられるなら安心安心」

慢心駄目、絶対

くー「まあ、これにて実験も成功ですし、クリスマス計画… 始めましょうか」

総統「今あつちで一進一退の激戦だと言うのにアメリカかあ」

くー「その為に妖精さんたちと協力の元「核弾頭搭載超遠距離砲」なんて馬鹿げた大筒作っただけですから」

大統領「……わしがアメリカにぶつぱなし、その直後にマウスや航空機で制圧、うまくいくかな」

くー「計画どうり、「ニューヨーク」「ロサンゼルス」「シカゴ」に撃ち込めば計画は成功です」

大統領「五発の核で三つの都市をねえ……衛星の観測でもあれば」

くー「無くてもまあ、だいたいの距離はわかりますし」

そつからは何一つ面倒ごともなくかえることはできた

なんか三回ほど救援要請が聞こえたけど無視

鎮守府

最近は何も思考を回す必要がなくてすごい楽になった。

なぜかだつて？

そりゃあ戦場の上ではなにも考えずただ流れと直感だけで動いているからだ。

思考なんてただ技を鈍らせるだけの邪魔者

…… え？……鎮守府だろつて？

放心したつていいじゃない人間だもの（・ω・）

いくらノーダメの不死身でも戦艦とか空母のダツシユは止めれないよ。

白「とりあえずウランはとれる用意はできたし、もうすぐクリスマスか」スツ

アイオワ「あどみらー」ガシヤーン

大和「ていとつ」チュドーン

武蔵「三度目の」改装中

加賀「ふつ、所詮後発組の敗北者じゃけえ」

金剛「最近の加賀さんは提督に似てきたネー」

サラトガ「はあ……はあ……敗北者？」

ながもん「戻るなサラトガ！乗れ!!」

加賀「提督を無理矢理さらって即撤退とは米国海軍はとんだ腰抜け集団のようじゃのう、国外艦娘組」

あれこれどつかで

加賀「旗艦が旗艦それも仕方ないわね、「アイオワ」は所詮良いとこ

ろ止まりの「敗北者」じゃけえ」

ビス「ツ……あの無敵空母、アイオワをバカにしやがった!!」

おいこらその流れやめろ

加賀「実際そうでしょ何年頑張っても「嫁艦」になれず、なにも得ず、終いにや終いにやバカ空母、サラトガという名の無能空母それらを希望と思い込み道を譲る、実に空虚じゃありませんか人生空虚じゃありませんか」

サラトガ「それ以上アイオワをバカにするなあああ」

白「おいバカやめろ戻れ!!勝てるわけがない、どれだけケツイを決めても勝てないやつもいるんだ」

加賀「……その心意気試してみなさい」ゴポゴポ

ヒエツなんか周辺の物質が溶けてるぞあれ過熱装甲か

サラトガ「勝負は一瞬、全機fire」ガチャガチャ

なんやこいつら、急にAC並に意味不明な兵器持ち出してきたぞ

まあ、勝負は決まったようなもの。

ぽこっ……ずぶっ

加賀「……あっ」

サラトガ「……」

白「めでいいく」

第13話 クリスマス計画

12月25日

まだ朝日も昇っていない深夜

バズーカを背負い暗黒の海を抜け

「太平洋の向こう」を目指す一隻の船。

この瞳に写る光景はただひとつ

「人類の叡知」が世界を焼き払う瞬間

それのみである。

総統「我は死なり…… 全てを破壊するものなり……」

船が傾き、艦首が天を刺し、月光は海を照らす。

空母棲姫「…… 総統さん、カタパルト射出準備完了です」

総統「了解、ちよつくら空の旅でもするか…… 射出後周辺の警戒をしてくれ、砲撃はこっちで全て計算する」

空母棲姫「わかりました、それでは」

直後、カタパルトから打ち上げられた。

すぐにバズーカの照準をワシントンに合わせる

勝負は3回、失敗は禁止

少しずつ高度を上げ上がりきった瞬間でニューヨークに一撃

落下中にロサンゼルスとシカゴにも一撃

この砲撃で数百万どころの話じゃない命と土地が消える

だがそれがどおした？

総統「俺はただの破壊者だ」

轟音と同時にニューヨークに砲撃

すぐさま射撃時の反動を計測しながら装填と修正を繰り返す

勝負は短くだ

総統「じゃあな」

二回目の轟音でシカゴに

更にロサンゼルスに修正と装填

空母棲姫「総統さん！六時の方向敵艦」

相変わらず手が早いもんだ

総統「瑞鶴……か」

こちらはこのバズーカ以外は無い、詰みだ。

わし一人なら詰みだった

ほーんとしようがない人だ

総統「ミツシヨンクリア…… 加賀さん帰るよ」

空母棲姫「核弾頭ももう防ぎようがないですね…… 爆発後機甲師

団で防衛網を突破してさっさと終わらせましょう」

総統「ほな、うちはもう加賀さん抱えてかえるやさかい。アメリカが降伏したらまたおいでやす」

空母棲姫「雑な京都弁ですな」

総統「…… もうちよい練習してくるわ」

バズーカを分解し、サーフボードに変形させエンジンをつける

総統「加賀さくん、ずいずいはいいから帰るよ」

加賀「ですが、あんなのを」

総統「あいつ、始めから俺らを狙ってねえよ」

加賀「……？」

総統「あいつの矢、あんな近距離やなくても射てばよかつたんだよ…… だって一発射てば俺は嫌でも回避運動をとってからまた再計算して射撃体制をとらないといけない、どう考えても無理だ、最終的に高度不足で威力が落ちる」

加賀「じゃあ、まさか」

総統「あいつ、酒臭かつたろてか加賀さんが凄い酒臭い」

加賀「…… たしかにそうですが…… あっ」

総統「嫌なもんだ、「愚痴相手」でも探してたんだろ、あいつ本命には弱いからなあ…… ほーんとやめて欲しいよ」

加賀「（*・ω・）」

そういえば何分だろうか

そう思い時計を確認する

…… 別にストップウォッチつけ忘れたとかそんなのじゃない

総統「…… 作戦開始から六分…… 上出来だ…… こんなのに十分

もかけてられんな」

加賀「……あの」

総統「？」

まさか、追ってきたなんてな

加賀「後ろ」

総統「……何も見てない」

加賀「あの」

総統「よし、しょうもない話でもしよう」

加賀「……まっすぐ来てますよ」

総統「……なあ、わしは相談所かなんかなのか？」

加賀「まあ、提督の回答なんて「いじめられた？じゃあそいつら暗殺でもしとけ」程度の無責任な答えしかありませんがね」

総統「自分がやった効果的なことを進めるのが相談じゃないのか？」

加賀「提督……人間そんなに命の価値は低くないんですよ」

総統「知るかわレエ……20世紀まで命の価値なんざそんな高くなかったのに急に尊い尊い言い出したでしょうもない猿の世界なんざ興味ねえ、まだ私利私欲や私怨に駆られて動いてる人間の方が見てて気持ちがい」

加賀「それと提督」

総統「……」

ジャボーン

総統「何もなかった」

加賀「うわあ……酔っぱらいを蹴落とした酷い」

総統「でもさあ、瑞ずいに気を付けろよいい始めたのは加賀さんじゃん」

加賀「あの鶴ろくなことしないでですから、酔ってなきや厄介だし、酔っても面倒ですし」

総統「ふーん」

毎晩毎晩肉盾持って布団に入ってくるやつが発言とは思えんがまあいいか

総統「……アカンこれ、行きは月見ながらのんびりきたはいいけど
帰りはただまつすぐなだけや、暇すぎる」

加賀「そうですね、それと」

加賀「もうへえ、そうとうしゃあんきいてよお」

加賀「（……ω……）」ボカツ

加賀「ぎやふっ」

……俺がやったら否定するのに自分はいいいのか……いいか

総統「しようがない、うちで寝かせたあとあのバカに送り返すか」

加賀「……」

総統「やめてくれ、その目はやめてくれ」

結局酔っぱらいを連れて帰るはめに

鎮守府

まだ朝日も昇っていないにもうフル警戒

わしが起きてる頃なんぎ昼寝してるやついるのに

総統「はあ……加賀さん、弓道着痛い、死ぬから、窒息するから」

加賀「この兎放っておくと襲いますから」

加賀「うへへ」

総統「なーんでこいつなら背中預けられるほど安心できんだろ、ただの年中発情期の兎みたいなのやつなの」

加賀「仕事はできますからね彼女」

ウオツカをずいずいの口にねじ込んでいると携帯が鳴り出した

保護者が生きてたのか

加賀「……着信音変えませんか？」

総統「これ好きなんだけどなあ……はいこちら白さん」

加賀「すまーん、うちのずいずい知らない」

独「お前が本命には下手すぎるから泣いて酒のんで酔っぱらって
突っかかってきたぞ」

加賀「で？お前はながもん任せに核攻撃か……ハッ……」

独「お前は大佐だろ、なんで話す時間あるんだ」

加賀「そりゃあいまは本隊が総攻撃中だからな、ただまあ知ってたの

か敵がクツソ多い上に待ち伏せてたりしててよお、損害がバカにならんよ…… どうせお前だろ」

独「なあ、その「なにかおかしかったら俺のせい」って感じにするのやめてくれ」

仏「ハハハ、そのせいでお前一時期はテロリストの黒幕とか暴力団全てのドンとか死の商人とか言われてたよな」

独「あーはいはい、そういうのいいからずいずい返すよ」

仏「いや、その、それはまてまだ心の準備が」

独「黙れ下半身……その首とろうか？」

仏「ガチボイスやーめて☆」

独「そか、じゃあ」

仏「まった、いやほんとごめん、いまお前で戦争して人類全滅程度で勝てるかわからんからやめて」

独「おまえ…… 頑張ってるんだな」

仏「お前みたいな技術力がないのが悔しいよ、力も知恵も負けてさあ」

独「うっせえ、黙れ」

仏「あーもう、あいつらに一目惚れの事言ってるやる」

独「アア!? やってみろやテメエ」

仏「あ、さーせん」

独「反省してないだろ」

仏「さーせんww」

独「ったく…… ちゃんと取りに来いよ」

仏「はーい」

電話をきり、机に刀と一緒に置く。

この目には何も見えない

この肌にはなにも感じない

恐ろしいものだ

この戦争はまだ序章なのだから

第14話 ミツドウエーの攻防

空はいつまで暗く

風は力強く

海は荒れ

この地獄をなんと言おうか

それよりも

独「……なれんなこの服」

大和「しよすがないですよ、こういうところは自由じゃありませんし」

独「はあ……加賀さん……コート」

大和「（*・ω・）まさか全部奪われるとは思いませんでしたねのんびりと空を見上げ無心になる

別に強制召集はいいんだよ、後詰めだし

独「さてと……ながもんどこだ……」

大和「長門さんでしたらえーと……七番ドックですね」

独「じゃあ、見に行くか」

そう思いすぐに七番ドックに向かう

七番ドック

なんだここ

どの艦も損傷もなく、轟沈した艦もないのにまるで葬式でもして
るかのような雰囲気だ

独「……まじか」

勝ってるのに葬式って

長門「提督……悲報だ」

独「どうした、敵の正体でもわかったか？」

長門「いや、それは伏せているが……ここでは話せない」

独「そう、じゃあうち以外の子達に指示出して終わったら来て、俺
は少し海岸で寝てるから」

長門「わかった」

大方アメリカが落ちたつてところだろうがな
海岸線

この島から見える煙や炎
きつと違うやつらが戦地に赴いているのだろう

誰が本当の敵で誰が味方か

そんなもの誰にもわからない

わかるはずがない

大和「…海が…」

独「言うな、辛くなるだけだ」

長門「…提督」

独「で？悲報ってなんだ」

長門「」

独「…おい」

一瞬世界が止まった

いや、理解したくなかった

そんなこと

最悪の結果だ

独「もう一度言え… 場合によっちゃ」

長門「… わかった、心を落ち着かせてから」

独「いま言え、今すぐだ」

もしその言葉が本当ならすべての計算が狂い出す

いや、狂うなんてレベルじゃない

「やり直しだ」

長門「… やつらは【艦娘に擬態】できる… そのせいで前線艦

隊は偽情報によって壊滅、轟沈艦多数、残りも大破」

最悪の結果だ

計画の練り直しだ

最高だよ

ああ、狂いそうだな、これが進化ならすべてがうまくいく

俺の計画はあのアホどものおかげで短縮できる

大和「ああ… 提督がいつもの歪んだ笑顔に」

長門「提督…今すぐ「総攻撃」の許可を…」

総統「全艦に通達「計画のために退却す」もう人類なんざしらん、くーちゃんに電話」

長門「了解した、今すぐ退却準備を整える、理由は鎮守府襲撃として通しておく」

大和「電話です」

こいつら仕事早すぎや

総統「おーいくーちゃん、今すぐ起きろさもなくば」

空母棲姫「うっさいですよ、あのバカがついにやりやがったので現在大急ぎで車両を向けてます…」

総統「最高だよ、「擬態」なんてよお…」

空母棲姫「あの頑固者もこう面白いことをできると証明できたのは好都合ですね、もう先行部隊を送りました」

総統「上出来、それアメリカ落ちたか？」

空母棲姫「ええ、ちゃんと住民は虐殺、一部を人体実験に利用、艦娘は…ね」

総統「はあ、そつちは連戦だが大丈夫か？」

空母棲姫「大丈夫です…実はすごいものを送りました」

総統「ん？なんかあった」

空母棲姫「加賀さん居ないでしょ」

総統「居ないよ、まさかなんか取られた？」

空母棲姫「いえ、実は極秘裏に作ってた総統さんを総統さんとするために作った重付属装備を取られました…せつかくジ〇を真似て作った特注品なのにです」

総統「さらつとえぐいの言うのやめよ、てゆーかそれ核でもぶっばなすの？」

空母棲姫「ええ、劣化ウランですが大型バズーカにしてぶっばなせます」

白「あら〜」

くー「他にも飛行や潜水も用意したんですよええ、それを奪うどころか自分専用に改造したんですから…」

白「いくらかかったの」

くー「人員の7割りを割いて24時間労働」

白「糞ww」

くー「じゃあ私アイス食べたらずぐそっちいくので逃げるなりなんなりしててください」

独「…… 欲しかったなあジオ」

大和「ま…… まあ、元があるなら」

独「(´・ω・｀)」

大和「……」

まあ、いつか

…… はあ、あれで隠れたつもりかよ

独「大和…… 先に帰ってて……」

大和「…… わかりました」

大和がドックへ向かうと同時に面倒なのがきた。

正直今話したくない

独「…… はあ」

仏「みえみえの演技すぎるわ」

独「ありやりや…… で？よくまあやるよ」

仏「お前ほど進んじやあいねえさ…… 答えを知ったんだろ」

独「ああ、敵も黒幕も倒すべき真の敵もな」

仏「…… いやだねえ、なーんでも知っているその態度」

独「…… どうだ」

仏「まーだ一時的なもんさ、おめえみたいに場所次第じゃ常時は無理だな」

独「あれのコツ教えようか」

仏「まじか頼む」

独「艦娘と深海棲艦…… 両方に言えるがな…… あいつらもともと実体のねえ概念だ、概念が身勝手に具現化しただけ、ならその概念を殺して纏うだけだ…… いうなら自分で熊狩ってその毛皮でマントにするかんじだ」

仏「わかるようなあわからんような」

独「お前は無力じゃないんだ、頑張りやできるよ」

仏「……なあ、擬態つてさ」

独「もう掴んだか……」

仏「はあ、面倒だなあ数は」

おつ（・ω・）生け贄来た

独「駆逐8 戦艦4 以上」

仏「もうここまで来てるのか……」

独「……」

あいつらトロイなあ

無言で周囲を囲んでいた擬態艦の一人の首を跳ねる

独「はあ……船も要塞もないんだ、勝負は一瞬で決めるぞ」

仏「……終わったぞ」

独「……？」

答えは簡単だった

もう来た

ワシントン辺りからほんの数分……

青い空母が音速で飛んできた

独「……あつ、音速はあかん衝撃で死ぬ……」

仏「すまん、背中借りる」

独「たいしようげーきたいせーい」

頭を抱え小さく屈む

刹那、空から降ってきたナニかに周辺全てが斬れた

交通事故、轢き逃げ

そんなちやちなもんじゃねえ

通っただけでばらされた

自分が斬られたと自覚することもなく

独「南無」

仏「きゃーしぬーたすけてずいずいー」

黒光りする装甲に入っている短い金色の筋

その重量感是他を圧倒し

六本の刀はこびりついた血を蒸発させる

その漆黒の鎧はきつと

パクられたやつだ

加賀「…速すぎて痛いですね…この策敵兼姿勢補助装置はず
しましようちよつと振り回されてる感じ」

独「うおおおおロボットオオオオ→」

仏「うわー、SF…こんなのが敵とかやだよもお」

独「…バイオセンサーでもあんのか」

仏「じゃあ俺はもう戻るよ、もうすぐ二次侵攻だし…お前は帰る
んか」

独「いや、少し下がる…あいつら裏に部隊回してるだろうしな」
下がらないとマウスに轢き逃げされるんだよな

まあ、何事もないなら鎮守府まで帰るんだけどさ

加賀「システムクリア…ふう」

直後装備が消滅し元のコートを着たいいつもの加賀さんに戻る

独「(w)」

仏「ただけほしかつたんだ」

独「帰って作ろ…ファンネルつけよ」

仏「サイコミュww」

独「怒ってない…」

仏「泣いてんな」

独「いいもん、帰ってウラン取りに行くもん」

仏「泣くなよ…」

独「…帰るよ加賀さん」

加賀「はい」

まあ、まともに帰れるかは知らんけど

軍艦一隻か

海上

独「まあ、帰れないよな、これからだし」

加賀「寧ろ帰れたら駄目ですよ…」

独「はあ…後方に下がれただけいいか…とゆうか、後方に居る

のどいつもこいつも横須賀の派閥か…」

加賀「そうですね… それと」

独「わかってる、もうすぐだな」

机をたたみトランプを取り出す

そこから五枚取り出す

独「ふふっ… ついてるぜ」

札は10、J、Q、K、Aのダイヤ

加賀「… イカサマしてますね」

独「してねーよ… 13の4で52とジョーカーそつからだ」

加賀「冗談ですよ」

独「… 零」

突然周辺が慌ただしくなる

それは予期せぬ奇襲なのだろう

通信を繋ぎ何事もないように落ち着く。

今動くのは無意味

独「… 前線の揚陸艦隊応答せよ我」

「たすけてくれええ!!」

その声は焦りや恐怖、そういったものを感じた… 愉快

独「… 何があった」

加賀「笑ったら駄目ですよ」ボソツ

独「… 失礼、電波妨害によき貴艦隊との通信が困難なり、用件を

まとめてください」(…ω…)

「せ、戦車が… よくわからない戦車が無数に突っ込んできた… 艦

娘の攻撃も一切き…」

爆発音と同時に通信が途絶えた

実に実に素晴らしい

独「プルプル」

加賀「(∨ω∨)」

長門「提督!! 大事だ」

独「どったの? 敵にやヴあいのでた?」

加賀「?」

長門「前線部隊が突如現れた機甲師団によって壊滅、更に深海棲艦、艦娘、人類に無差別攻撃……そして「上層部は情報収集のため全艦隊攻撃命令」を出した」

独「……アホかあんな無理だろうが……あの装甲46cm砲だろうが魚雷だろうが戦略爆撃機の爆弾だろうが弾くぞ……うちの技術の結晶やぞあれ、もつというどあれわしのだし……仕方ない全艦出撃……長門は上にこう言っとけ「我後方支援ヲ単独デ徹底セリ、各艦隊ノ退路ヲ命ヲカケ死守セリ」とでもな」

長門「わかった、これをすぐ横須賀提督に飛ばしたあとすぐに本部に出す」

独「加賀さんは爆撃機で周辺に居る伏兵も知らん深海棲艦を殲滅」

加賀「了解」

すぐに艦内に入り地図を取り出す

ぷにぷにしながら

独「ああつもうつ、なーんで総攻撃なんだよ、あんな列車砲なりレールガン持ってこなきゃ壊せないっつーのもう」プニプニ

くー「いやあまさか来るとは」

独「はあ……おかげで伏兵を殲滅するはめになった」

くー「まあ、死んでもらわないとこつちが壊滅しますしね」

独「とりあえずこの海域をうちで死守すればいい……どうせ半分は消えるだろ」

くー「……もうちよつと下触りませんか？」

独「ここがいいのここが♪」

くー「こんなところ見られたら針ネズミじゃすみませんね」

独「ふふ……そうだった」

くー「誰も居ませんね」

独「暇だからって……居ないな」

くー「誰もいない静かな世界……ちよつと辛いかな」

独「はあ……慣れろ」

くー「もう」

独「……ふん」

くー「素直だけど素直じゃないですねえ」

独「恋ってき……しない方がいいぞ……」

くー「えっ？」

独「……あんなもの……」

くー「私が誰かわかつてのそれですか……随分なことで」

独「望むなら答える、それ以上は無理だ」

くー「うっそだー」

独「君……いや、貴女だからこそ俺は……ん？」

くー「」

独「返事がないただの屍のようだ」

振り返りたくない、絶対だめだこれ

加賀「全艦沈めてきました」

独「そう……お疲れ様」

加賀「こつち見てください」

独「笑ってないでしょ」

加賀「笑える状況じゃあないですから」

独「加賀さんもわか……許して」

加賀「全てを知っていてその対応ですか」

どうしよ、これなにやっても詰んだ

独「うむ、詰んだww」

加賀「諦めないでください」

独「そうだな……ねえ加賀さん、俺がさ「何者でもない」もの

になってもついてきてくれるかい？」

加賀「それが提督の答えでしたら」

独「なるほど……忘れてくれ……きつと俺はこのままじゃあ空想

の怪物「狂帝」白夜を演じ続けるだろうさ……面白いことだ」

加賀「きつと、そんなものを捨てる日が来ますよ」

独「どうだろうか、そう易々と命を賭けた呪いは消えんぞ」

加賀「……消しますよ……絶対に」

独「ありがとう……百の偽名、千の仮面……そんなものが消える

日を待つのも悪くはないか」

くーちゃんの手当てをしながら面白おかしく考えるのであった。

ボランテイヤ、犯罪、正義の味方、悪、後悔しないなら全部正義だ
ほらみろ、まーたひとりつぶれた
面白いなあ

苦しむのも救われるのも

所詮第三者。当人からしたらたまたまもんじゃない
ただの見世物にされてるんだから

はあ…… 演じるのも疲れるな……

休めるなら休みたい

逃げれるなら逃げたい

誰が演じたいかこんな緩いこと

……く

……

痛い……

「痛い…… なんかあった？」

くー「…… もう、休みませんか？」

「何故」

泣くなよ…… 台無しじゃないか

くー「…… いえ、何でもないです…… それと」

加賀「提督が寝てる間に艦隊は無事退却現在はこちらとあちらでに
らみ合いです」

独「そうか…… なら退却しよう……」

加賀「わかりました」

加賀さんが部屋を出て船を動かしたと同時にカードを取り
出す

独「命ってさ…… 小さいな」

空「ですな」

独「…… なんか望みとかある？一航戦」

空「そうですね…… え」

独「そんな顔するなよ…… ほらっ」

空「ふえ」

独「うりうり」

空「ほふほふはん」

独「……飽きた」

空「早いですよ」

山から二枚引き抜き床に置く

独「どっちにする」

空「賭けですか？」

独「そうだよ、勝てば好きにしてOK」

空「……」

数秒の間、それはきつと神頼みの準備だろう

空「左」

独「じゃあ右」

左は11のハート

右は13のスペード

独「残念」

空「くっ殺」

独「……」

じゃあしちやおうか

独「じゃあ部屋に来て」

空「うわー鬼畜（棒）」

独「うっさい」

部屋

防音設備完備

監視なし

いやーいいね

空「うう、ひどい」

独「なぜ下着以外全部脱いでんねんあほらしい」

空「え……」

独「まあええか手っ取り早い」

空「ちよっ」

コートを着せ、宝石箱から一つの勲章をつける

空「…これって」

独「これをとったのは一人で多分十二個しか無い俺の絶対に捨てたくない宝物」

空「いったいこんなものをどこで」

独「さあね、すこししか実物は手に入らなかったよ、残りは模造品…その意味わかるよね」

空「…はい」

独「俺さ、この戦争が終わったらやめるよ」

空「え？」

独「こつちの人間はさ、頑張つて必死こいてしがみついているしどっか遠いところでき、またのんびりするから」

空「…嘘つき」

勝てないなあ

「そんなに演技下手か」

空「ええ、ちゃんとあなたという人間擬きを見てたらわかりますよ」

「…まったく…似てるなあ」

ほんと、嫌なこつた

「…ああ、そうだよ…ああいう必死な弱者を見るとふと絶望に染まった顔をみたくなるよな…」

空「結局戦争したいだけじゃないですか」

白「うっちゃいわりいか」

く「いいんじゃないですか、正義とか大義名分とか自由とか捨てて、ただ自分の欲望と言う正義を掲げ虐殺し、虐げ、見下し…ふつつ、これが私ですか嫌ですね」

白「誇りなぞ狗にでも食わせておけ…今の自分で考え、行動しろ、例え世界が否定し拒絶しても俺は味方だ」

ワインのみたなってきた

空「わかっています」

白「さて、じゃあ太平洋制圧の祝いとしましょうか」

空「飲みたいだけでしょ」

第16話 平和の形

ふざけた内容だな
なにもかもがだ。

独「降伏勧告？面白いジョークだ」

くー「そうでしょ、一応戦力比は人類1に対して私は7、あいつらは12これじゃあね」

白「はあ……蚊の一撃をよく理解していることで」

ため息をつきながら紅茶を淹れ紙を読む

内容は別に悪くない

表面上は

ただまあ、コイツ一人一人なぶり殺しにでもしたいのか
少なくともこれは影響が出る。

ペンは剣より強い何て言葉もある。

独「こんな、うわべだけ甘い条件出されたら国内の左翼連中は総じてOKだよ……ただの「武装解除」と「人権確保」だけじゃなあ、国を取るわけでもない、破壊もなし、血判条ときた」

くー「戦争なんてこの時代の人間は基本嫌うよう洗脳教育されてますし」

独「戦争好きなんざそういねえよ」

くー「少なくとも軍と国内は割れますね、実際問題あの馬鹿が堂々と「殲滅する」なーんて言うから国内が団結、右翼左翼関係なく生きるために戦争の手伝いをするんですよ、こーいうのは勝った方が正義、何でもいいんですよ」

いい加減本題言うか

面倒だし

独「そういえばさ、お前の用意してる人造兵器……いや、量産型艦娘の計画、どうなんだ」

くー「えっへへえ、後はマスターである総統さんが居れば起動できます……」

独「はあ……うちの艦娘の血からDNA取ってクローン作るなん

てよお、監視してなきやわからんかったよ、とゆーか、加賀さんとグルとはなあ…… まったく」

くー「いったいどこまで筒抜けなんですかね」

独「言うわけないでしょ」

逃げるように目を合わせない彼女の口にマカロンを入れる

独「はあ……で、結果は？内戦には間に合うか？」

くー「……正直きついです……あの艦装を加賀さんに奪われたのは痛手です、あれは唯一無二の総統さんの動きについてこれるようになった特注品でしたから、正直今の加賀さんじゃ八割出せて満足程度です、そもそも数秒先の行動をできる兵器何ても自体不可能だったんですよね」

独「あれに時間取られたか……八割か……まあ、言ってしまうえばあれは「考えたときのはやっている」なものだからな……」

くー「艦娘の方も正直数は揃えれます、ただ産まれても数秒で体が持たず全身壊死で機能停止、成長障害によって識別機能がなくなつて戦力にもなりません、さらにあの拗れよう……正直、艦娘自体が提督という存在ありきの生き物、私たちがみたいに強い感情を頼りに生きていく訳じゃない、だからといって捕まえた人間を洗脳改造して提督にしても提供元の連中があれなせいで臨時提督秒殺ですし……まさかDNAレベルで刷り込まれてるなんて」

独「うちの子がさらつとあれ扱いされた」

くー「あの艦装の費用をやらなければ……ん」

独「……考えたな」

くー「ならいつそのこと加賀さんを総統さんと同レベルに改造すればいいのでは」

独「いいねえ」

使えないなら使えるようにさせればいい、難易度こそ高いが不可能じゃない。

くー「まあ、その件はあとにしましょう、今は今についてです」

独「だな、一万の艦娘を作っても30程度しか使えず、その三十もまともに運用できないなら無意味だ……まずは一万の戦力を一万で

使えるようにしなければ量産の意味がない」

くー「……ですよね……一応何度も試していますが構造に限界があるんですかねえ……」

独「……雑すぎるのが悪いのかもな……いつそのこと完璧を目指した物を先につくってそれから少しずつグレートダウンさせた方がいいのでは」

くー「完璧……ですか……間に合いますかね」

独「…仕方がない、機甲師団用の工場と研究所の費用を全部回せ、あんなのおまけだ、なくても勝てる……てゆーかさ、うちの妖精どもがさまうまうで終わる言うたせいかたまに変なの作ろうとして面倒なんだよ」

くー「へんなのって……ビッグザムでも作ってるんですか？」

独「うん、超兵器なんじゃないのかこれってレベルの兵器を極秘裏に費用ちよろまかして作ってやがる……初見殺し超特化という実用性があるせいで文句言えないのが辛い」

くー「あららあ」

独「やつばモンスターとカール許した方が良かったかなあ……航空機も完璧に近いし……てか後カイザーVで終わるし……」

くー「あはははは……じゃあそういう手筈で」

独「わかった……で、まだあるだろ」

くー「……あれはまだ試作です」

独「あんな超大型の機装をよくまあ作るよ」

くー「……あんなのただの怨念の塊ですよ……あれを飲み干すのは」

独「あれを寄越せ、うちで試すよ」

くー「……正気じゃできませんね……あなたも知っているでしょ、あれに入ったものは提督、軍人、艦娘、深海棲艦、姫、鬼、水鬼、基地……全てその水を呑みきれず潰され壊れました……はじめはサイコガンダムでも作ってた気分なんですけどね……まさかできたかと思えば装置の部分が凶悪すぎて誰も無理だとは思いませんよ……」

独「……そうか…… 装備や機能は」

くー「……わかりましたよ…… 共同で試しましょう…… 防御面はありません、いえ、正確には取り込んだ鉄骨とか軍艦とかが無数にあるだけで基本は生物みたいな感じですね、機動力や運動性能もでかいだけではありません、ただ取り込むだけでなんでそこら辺の島なり要塞を取り込んでしまえば装甲は十分、と、言うより本人を攻撃されないなら基本大丈夫です、武装も万をこえる砲が全身に、それに核熱線やドリルもあるので攻防ともに完璧です…… 攻防は」

独「…… 攻防は…… かあ…… つまり最初が難関過ぎるだけか」
くー「ええ、そうですね」

あ、餅焼けた

白「餅焼けたし食うか」

くー「ですね」

食事中しばらくお待ちください

、(・ω・、*)

白「さてと、そろそろなんか来るかな」もちい

くー「来るでしょうねえ…… 降伏勧告からもう10時間…… 刻限まではまだまだですが動きは出るでしょう」もちい

扉をノックもせずまるで重要なことを言いに来たかのように長門が入ってくる

とりあえず水を渡し持っている紙を確認する。

独「なんだ、そうか」

空「動きあり、ですね」

長「提督、今すぐ動かないと」

独「分かっている、今すぐ応援に数人送れ、こりゃあおもしろえ」

国会は降伏勧告に全面受諾して完全に呑み、わかりきった軍部は完全拒否。

一部じゃもう鎮守府襲撃まで始めたか

ただまあ、規模が小さすぎる…… 保身的なやつが騒いでるだけなんだろうな

独「さあ、いつ立つ」

空「そういえば例の件、そろそろしては？」

独「言うてなあ……」

望遠鏡を使ってとった写真を並べ紅茶を用意する。

いつものように白い机でたった二人で作戦会議……

独「隕石なんざそう簡単に狙った位置に落とせるものじゃないぞ……」

空「ですがこれだけ大きいなら一撃でオーストラリア程度更地にできますよ」

独「できるけどなあ……別に大気圏突破用の砲弾もある、距離も十分なんだけどさ、問題は当たるかだよ」

空「うわーぐつちやぐちや」

なん万通りもかかれた無数の計算式を並べる

どれもこれも一つも満足のいくダメージをあたえられるほどのものはない。

まず大陸にすら命中しない

当たっても島の一部が消し飛ぶ程度

独「宇宙世紀だったら簡単だった」

空「どこかの地球から遠く離れた隕石にブースター着けて落とせばいいだけですからね」

独「はあ……たかが石ころひとつ落とせない」

空「……ん？落とす……」

独「まーたへんなことおもいついたなー」

空「落としましょう、星」

独「……おいこら、まさか地球に月でも落とす気が、作品違いすぎるわ」

空「いえ、星は星でも人工衛星です」

独「……ああなるほどね」

むちやくちやだよコイツ

でも好きだから許しちゃう

独「それなら好きなきに好きな場所に落とせるな」

空「ふっふーん」

独「大気圏に耐えられるならなあ!!」

空「…… あっ」

独「別に大気圏突入用の舗装もできなくはないけどさ」

空「…… どうしよ」

独「まあ、この件はまだ保留だな、期間はあるんだ、また別がある」
くー「まあ、そうですね」

のんびりと空を眺めながら話が出るが答えは出ず

されどわが道に敵こそ万あれど味方無し

しかしその道に価値あり故に進もう

きつとまた嫌なことが起こるよ

第17話 空母と空母と空母

今日も明日も戦争日和

毎日怨嗟の声が聞こえてる

正義に平和

どうでもいい

進むために犠牲はある

犠牲のない発展は無い

発展を捨てれば破滅のみ

あながち間違っていないんだよなあ

あの人もアイツもそこだけは

「結果」は同じなのに「過程」が違う

だからいつも喧嘩ばっか

リスク、リターン、コスト

これが基準を満たすから行動できる

やれるならしようとは思うがコストがおもけりややる気は無し

ならコストが見合うなら？

今すぐやろう、すぐやろう。

「.....」

何だろうか、話が聞こえる。

声からして場所は客間、居るのは四人。

いや、鼓動の数からしてもう少しいる。

音を殺し気配を殺し

存在を無に帰し近づく

嫌な予感するね

仏「俺もアイツもさ別に自分を悪とは思ってないし正義とも思っていない、ただ気分で人類を抹殺してみたいなんて考えがあるだけさ」

なんであの屑おるねん

紅茶のみたなってきた

加賀「その理由が発展のためにですか」

ずい「やっぱり無茶苦茶よ、人類相対の発展のために人類の九割を死滅させ残った一割を団結させて発展させるなんて」

何てやつに話してやがるあのやろー

仏「発展ねえ、まあ、「答えは」そうだな、ただ俺とアイツじゃあ「過程」が違いすぎる、あいつは「一撃で全てを終わらせる」ことで簡単に済ませ、誰にでもわかるように簡単に物事を進める、俺は「時間をかけてゆつくりと」どうしようもない状態に持ち込ませて進化を待つ、それだけだ、だから何度も喧嘩するし気が合わん」

ずい「でも、今は違うでしょ」

仏「まあな、今はそれをするだけのリスク、リターン、コストがある、でも価値がなくなった、それをする意味すら無いぐらいに対象に興味が失せた、だから俺もアイツも発展じゃなく、戦争を楽しむために行動するだけさ……あいつからすればお前らは邪魔なんだよ、戦争したいのに敬いたいやつが近くにいる、いうならなんだ、そのあれな、好きな先輩の前だけは本来の自分でいたくないなやつ、実際あいつまだ理性で動いてるし、いつもの気分で殺し、気分で助けるってことをしないからこっちも接し辛い」

どうしよ、コイツのせいでいづれ風評被害紛いのこと言われそう

くー「あれで理性的……なんですか」

仏「ああ、何年も一緒にいると理性で動いてるか気分で動いてるかの感じがよくわかる、気分で動いてるときのあいつは常人が側に居てみるS A N値チェックで確定発狂コースだから、ほんと酷いぞありやあ」

ずい「……それが、最後の敵……になるんですか」

仏「ああ、あいつは平和では生きられない生物、いや概念かなにかだよ、そうだな人間のいや「生物の闘争心」の同体とゆうか塊とゆうかそういう争いそのものな感じだよ、あの空白の瓶にはいい酒だよ、なにをやってもとめられない、あいつ本人は降りる気なし、じゃあもう世界平和のためなら殺すしかない、簡単だろ、そこの親玉同様和解不

能の最後の敵だ」

くー「総統さん……」

これは酷い

別にやることすんだら降りてもよかつたんだがなあ……これじゃあ降りられないじゃない

仏「復讐がすんだ時点であれは空の器、あの怪物に注がれた酒は平和や道徳ではなく愉悦や傍観者としての感情だ、それも姉に注がれものだ…… 実にあの人らしいよ、「生きるなら今を楽しむ」だ。世界とか人道とかそんな小さいものは人生の邪魔でしかない、ただ自分の好きなように生き、選択する、それだけだから解りやすく、決めやすい、何度も何度も苦勞して考えを導いた結果尊いものができるのが人間ならあいつはそんな思考無駄と処理する、だってそんなことしなくともみんなを幸せにする方法はしっているからだ、無駄だろ「最善の答えをもう一度考え直す」なーんて無意味なことはよお」

もうええや、工場いこ

仏「なあ傍観者」

仏「おーいちよつとー、いるでしょー」

白「……」

仏「おーい…… いっちまった」

工場

嫌な予感って二度三度あるんだな

ほーんと

面白いことには尽きんよ艦娘つてさあ

独「ありやりや……ぶよぶよじゃないんだから」

大和「あは…… あははは…… はは」

うわあひどい数の艦娘…… それもなんかうまく繋げてるし

独「これ、加賀さんのやつ？」

大和「はい、前までは邪魔だから捨てて帰ってきてたのですが最近
はほら、改装とか新造艦とかで増えたので帰って帰ってきたんです
よ……なんか血涙流しながら正論いってましたが」

独「内容は何となくわかるよ、そりやあ敵になるかもしれないやつ
を持つてきたくはないよ…… まあ戦力になるしいいか」

大和「けどこれ結構いますよ」

独「てゆーかき、わし放置勢だけど姉に垢乗つとりされてたよな」

大和「え？本当ですか」

独「ああ、久しぶりにリアルで艦これ開いたらまったく知らないや
つがフルレベフルカス指輪付きだったぞ、残高消えてたし、てか別
ゲーに無断課金されまくってたわ100万が消えてたし」

大和「あらら」

独「ご丁寧にいべ艦、甲勲章全部取得ランキングは以前とはちがっ
てくつそ下だけど普通にプレイは灰だった」

大和「……怒ってます？」

独「ちよつと三話作らないとね」

大和「顔が笑ってませんよ……」

まあ、煮干しでも食おう

とりあえず煮干し食つとけ

独「…… そういえば武蔵とながもんの改修って完全にすんだか？」

大和「ええ、先日終わらせたばかりです」

独「…… 加賀さん」

大和「残念ですが」

独「…… もう一回放置勢なる…… 改二来たら起こして」おふ
とうん

大和「…… それ、下手すれば永眠コースですよ」

独「運営が悪い、初期からあんなアホみたいな数持たせた運営が悪
い」

大和「あれ一枠で制空権取りやすくなる恐怖」

独「はあ……クーちゃんはアメリカ再建で手一杯だし、わしは資源供給あっても工場無いから暇やし、加賀さんは一日の八割艦装慣れだし、日本はなんか割れてるし、観光感覚で送った金剛達からはまだ連絡無いし、はあ……もうちよい大規模な工場ほしいわ……この要塞小さすぎる……いやまあ主にクーちゃんの全面支援が問題だけどちいせえ」

大和「確かにそうですね……鎮守府としての機能なら横須賀にいた頃のようにフル稼働は可能ですけど、戦争や籠城するならこの拠点は小さいですね」

独「でもそれにさく工場はないと来た……人員不足が悪いな……いや妖精不足か」

大和「それじゃあ集めます?」

独「あ、そんな簡単に集めれるのね」

大和「まあ、あの子達って簡単に言えば役職を与えられただけの人と変わりませんし、作業道具持たせたらたぶん建設用に回せますよ」

独「まじか、てつきり装備は装備と別れてると思った」

大和「じゃあ、私は他の暇な子を誘ってから来るので先に倉庫にある無駄な航空機とか単装砲を工廠に運んどいてくれませんか?」

独「他に暇なやつ言うてもここに居るのわしと大和と加賀さんと頭のぼいぼいだけだぞ」

大和「いえ、実は数日前から建造用の缶に冷凍保存しておいた第三空母機動部隊の皆さんがいるので」

独「……第三……ああ鶴天……ちよつ、冷凍保存っておい……いつちまった」

取り敢えず要塞内移動用のレールと倉庫を繋げ中にある邪魔なものを全てトロツコに積み出し工廠に蹴飛ばす

烈風とか烈風とか烈風を捨てるのは持ったいかもだけどジェット機がある以上やつはもう引退だ

なんかただの単装砲も邪魔だし出荷。

独「皆出荷よ(´・ω・｀)」

「そんなー」

取り敢えず大型トラック三台分の積み荷を工廠に送り届け自分もトロッコでレールを走る。

言うても距離はせいぜい一キロもない

独「とうちやーく」

大和「うう」

独「短時間で何があった」

大和「冷凍保管って意外と寒いですね」

独「そりやあお前、ちゃんと冷やさなきや生物は腐るしな」

大和「それはよりも提督、やっぱり何事もなく変えれましたね」

独「ブラツクだけどな、この建設部、仕事の日のみ24時間労働とか正気じゃない」

大和「そういえば要塞の設計図ってどこまで完成したんですか？」

独「1割」

大和「え」

そりや耳も疑うか

まあ、これだけやって1割だもんな

独「1割」

大和「どれだけ大きいものを」

独「まあ、土台が完成すればあとは余裕だよ……土台がまだ1割だがなあ、まあいいや取り敢えず要塞建設の件は今は大和が見といてくれ、俺はくーと実験するから」

大和「わかりました、設計図は」

独「明日部屋を出るとき机においておくから無いなら電話して、金庫のパスワード言うから」

大和「、（・ω・）ノはーい」

第18話 青い悪魔

無数の残骸

腕が飛ばされたもの
首を跳ねられたもの

胴体を爆破されたもの

全身を負傷したもの

地獄だ。

地獄だ

この海は地獄だ

独「速いな…：… くーちゃん、武装使用率と限界値は」

空「武装は100%、速度や反応速度はまだ89%です…：… 実践ならもう文句はないですが…：…」

独「ええい…：… なぜ上がらん、サイコミユかなんか変なの積んでるか？」

空「流石にしませんよ、ただ姿勢制御バーニアとかの本数をジ・Oの三倍には増やしましたね」

独「増やしすぎだ…：… てゆーか飛行機能、潜水機能つんでそれだけできるのか…：…」

空「うーむ…：… メイン武装をビーム兵器に変えましようか」

独「ビームに変えたところで軽量化と反動軽減するだけ…：… いや

重要か、大型の無反動バズーカじゃあ重いしな」

空「対艦ライフルと大型バズーカにヒートソード八本、隠し腕六本簡単に済ませましたけどやっぱり光学兵器の方がいいかもですね」

独「まあ、本人が空母の時点で艦載機の指揮とかに使われるしなあ
そういう言っている間に敵の前線基地は壊滅、まだミッドのダメージが回復していないのか敵の数も元々少なかった。

いやまあ

双方戦力を最大限に裂いてやりあったしな…：… うまく逃げられなかったらこつちもだな。

うーむ

別に有象無象は大丈夫、問題は瑞鶴

あいつのところのずいずいは明らかに他とは違う、あれは驚異になる。

その時、こちらに対策がなくてはならない。

独「しようがない、これ以上潰せばデータも取れなくなる……帰るか」

空「わかりました……それと」

独「なんだ」

空「戦艦棲姫の勢力でもついに超大型兵器の起動が確認されました、虎の子を越える虎の子を作ったのでしょうか」

独「他の動きは」

空「交渉中だった北方、南方、西方、東方全部あつちに」

独「面倒だなあ……周辺全て敵か……」

空「今こそ戦力は互角ですけどもし極地と欧州戦力、そして戦力を建て直された私は東に艦娘、北南西から戦艦棲姫の艦隊で数が間に合いません」

独「うーむ、現状日本は降服するかしないかで揉めてるから数カ月は動かないけど他はなあ……太平洋とアメリカ一帯だけじゃなあ……よし、クーちゃんラーテとマウスを分けるからそれで南米とカナダをとるといいよ、取り敢えず防衛ラインを横に並べないと」

空「わかりました、それと本当に全てのラインをアメリカに向けてもいいんですか？」

独「いいよ、こつちも要塞作るのに忙しいから、誰も動けないときに足場は固めとけ……つよ」

空「……泳いで帰っちゃった」

鎮守府？

いえ、もう要塞です

冷たいときは冷たい

潜水艦用ドックを開け、コートを着て入る。

相変わらず誰もいないただ洞窟。

いつそこに原潜入れとこうか。

独「・ω・」

暇だなあ……

意外と皆しつかりしてるからやることやらせとけば後は暇なんだよなあ

どうしよ。

夕立「ぼい？」

独「あつ、冷えるよな…… よいしよ」

帽子に引っ付いている夕立を放し、自分も椅子に座る。

そういえばこのへちやつてる夕立…… もとに戻るか？

まあ、いいか。

こうやってのんびりなにもない日が続くのも怖いものだ。

平穩ほど恐ろしいものはないさ

戦争ほど先の見えるものもないか

七十年前の再開…… 別に俺もくーもチェックメイトは決めれて
いる。

問題はしきれないところ

もしあいつらがあれを見たらひっくり返るだろうな…… よくも

悪くも最悪の事態を呼び起こす。

もう擬態何てふざけることがある時点であれだがな

そういえば奴等の超大型兵器とはなんだ、戦艦か移動要塞か

…… まだ戦車を作るほどの技術がないのがいいな、おかげで今は
有利だが技術はいずれ追い付く。

果てのない発展は破滅を呼ぶ…… 速めに人類と深海棲艦の争い
を止めないと二度三度の戦争が楽しめない。

それはこまる

「……く」

まずは比較しよう

そして状況を確認

処理したのちに答えをだそう

まず領土領海

領土はアメリカと太平洋のど真ん中にある島々

領土もミッドやハワイみたいな中央のみ

それにたいし敵は

「て……」

大西洋、インド洋、黒海、バルト海等々

陸も周辺の島は全て制圧済み、最近はイギリスとスペインが陥落

米国も一部勢力はヨーロッパ経由で来日…… 殺り損ねたなこれは

ミスだ

………ん

「提督……」

独「……？」

瑞鶴「提督さん」

独「ん？ああ、ずいずいか…… やっぱあいつんこと違ってオー

ラねえなww」

瑞鶴「あ、あれは」

独「無茶は言わねえよ、今のままでいいさ…… 冷た」

瑞鶴「そ、それはついさっきまで冷凍保存されてたからでっ

て……… あれ？なんで提督さんが触れるの？」

あえてだまつとこ」

独「♪」

瑞鶴「おおお……」

痛い（・ω・）まあ要塞内だから良いけど

瑞鶴「それと提督さん…… こっつてどこ」

独「大和からなんも聞いてない？」

瑞鶴「聞こうとしたら…… 居たの…… あの青い悪魔」

独「まあ、しゃあないか」

瑞鶴「うん…… だからこれからは一分も私から離れたらダメ……」

ん？

独「いいよ…… 瑞鶴がそう望むなら居るよ」

瑞鶴「本当？」

独「本当さ…… 可能な限りだけど」

瑞鶴「じゃあ、これからはお風呂や食事寝るときも
ん？」

瑞鶴「ずーと一緒に居てくれる？」

独「いいよ」

瑞鶴「提督さん……」

あれ？

なーんか雰囲気違うような

あれやつぱり信用度Ⅱ危険度かな

瑞鶴「じゃあ、一緒に寝よ？」

独「いいよ」

うーん

やつぱ妖精さんたちの言うとうり

信用Ⅱ危険だな

戦争じゃなきや信用できんか

まあええか

独「ωω」

あく、残念だけどこれ薄い本じゃないのよね。

薄かったらここでやられてた

瑞「…… なに…… これ…… 出れない」

備えあれば嬉しいな

なーんて感じで爆弾取り出してもいいか

なぜわしが毎度毎度コミュ内で受け絵ばっかだった理由はそう

「人外に対するパワーが無いから」

なにもできなきや良いじゃないか

ただが軍艦一隻要塞で止めて見せる

暇潰しにはいいなこれ……

くすぐつたい(・ω・)

大和「うわあ悪い人」

独「(・ω・)」

大和「分かってます、そうしないと」

加賀「まな板…… やっぱり居てはいけませんね」

ほらきた

すぐきた

こーなる

瑞鶴「…… 今の貴女何て怖くないわ、そう、提督さんの腕のなかにいる、だからもう何も怖くない」

加賀「ならば今すぐその綺麗な頭をぶつ飛ばしましょう、ええ、再生なんてできないでしょう」

瑞鶴「正気?!提督さんも」

加賀「提督は再生しますよ」

ネタバレはやいよお加賀さんはやいよお

瑞鶴「え?」

独「スヤア」

瑞鶴「え?本当」

独「……」

瑞鶴「答えて」

独「サボテンの花が咲いている」

グラサンかけて逃げの一手

瑞鶴「逃げないでください!!」

だめでしたー

独「……」

運よおこつちむけえ

こつちむけえ

ああ

ああ

瑞鶴「て〜い〜と〜」

「ずいずいが艤装を展開し始めると急に下が騒がしくなってきた。数は一

息は荒いが鼓動はそれほど

大方こちらで対処可能な急務なのだろう

独「まった、なんか来るからコップに水いれといて」

加賀「…こんな時になんでしようか」

瑞鶴「タイミング悪い…」

帽子をかぶりそれっぽくしてみよう

なぜだろうか

こうやって座っているのは慣れているはずなのに

おかしいな

まるで戦場にいるようだ…

面白くない

加賀「提督」

独「…はあ…なるほどね…いいよ」

加賀さんに一本軍刀を投げ渡し扉の内側に立たせる。

ああ〜ずいずいがぶにぶにするんじやあ

長門「提督緊急事態だ!!」

独「なあ、なぜ緊急事態で平然としてい…ちよっ

あ、首落ちた

「やっぱ偽物だ…何日前から張ってたんだか…ご苦労なこつた

死んで休め

独「はあ…いくら姿や声と同じでも…そいつそのもの気配は無理か…とゆうよりな、もう少し焦った演技しろ…」

瑞鶴「」

大和「水を…」

加賀「…」ツンツン

独「こらこら、首切断しても突つつかない。」

加賀「やつぱり指輪がありませんね……。それどころか勲章も」

独「やつぱり？まあいつもコート着てたのに急に着なくなったたら斬るよな」

お、ル級に戻った♪

なんだまだ生きてるな

独「加賀さん、そいつ動くよ」

加賀「知っています……。ほらまな板とPAD起きなさい敵ですよ」

瑞鶴「はっ……。敵っ」

大和「首……。取れますよ」

ル級「アア……。アアア」

？

すぐに言葉の意味を察した

あからさまにからだが動いてる

独「ああ、なるほど」

ル級の胴体の近づきあえて体を起こす

当然

ル級「……。ウアア」

零距离の砲撃

人間が戦艦の砲撃に耐えられるわけがない

人間が

……。熱い

独「……」

ル級「ド……。ウ……。ダ……。ナニガ……。アノ……。女……。ノ……。最

終……。兵器……。だ……」

独「……。ブンブン

ル級「……。エ？」

独「ふう……。所詮軍艦一隻……。戦艦一隻で海上要塞を沈められるか」

… 耳があ耳があ

鼓膜破れた

独「…」

加賀「鼓膜破れました？」（手話）

独「…」コクコク

加賀「」

独「なんか言った？まあその勇敢なゴミは処分しといて…
ちよっとうん」

加賀「わかりました」

独「お、治った」

さて、喧嘩吹っ掛けられたからやり返す準備をしよう。

第19話 ミッドウエーの激戦

……あれ

なんだろうか

……考えよう

横須賀支援↓元帥派を欧州へ↓戦艦棲姫の勢力を削ってくれる↓
横須賀派を謀ったなさせる↓欧州に固められた三勢力↓核☆攻☆撃
↓くーちゃん勝利ルート

あれ？これちゃんと山場を越えられたら普通に勝てそう

取り敢えず欧州に押し込むために北極南極基地を潰しておかない
とな

その前に取り敢えずオーストラリアだ

あそこには確かいろいろな鉱物とかあった気がする

取り敢えず順番を整理しよう

こつちがくーちゃん抜きでできることは

「朝鮮半島」「周辺の残存艦隊処理」とか

とゆーかな、日本本土があんなに要塞になってるんがおかしい

あの件といい、深海といい

てゆーか最近対深海棲艦用の大型ライフルとかあるらしいけど技
術革新はえぐいなあ

取り敢えず資源はある、でも工場不足、要塞も未完成

しようがない、太平洋に残ってる戦艦棲姫の拠点ぶつ潰すか

確かくーちゃんがはよしろはよしろ急かしてたな……まあえっ
か、こつちの手持ちは加賀さん、ずいずい、大和、ぽいぽい。

他全員本土で横須賀救援

まあ、もう数日もすれば帰ってくるな。

てゆーか今しかないな味方の視線が国内で

敵は支配権を完全に損失

誰にもばれずあの艦装の最終チエックができる

そうと決まれば行動だ。

独「加賀さん……あれ？なんで艤装」

加賀「提督がいかにも出撃したい条件がそろっていたので先に用意を」

独「お、おう」

加賀「場所は戦艦棲姫の太平洋における本拠点ハワイより北4kmにある海底拠点とつくに強襲用大型機の準備はすんでいます」

仕事はやすぎやしないかな

独「… 武装」

加賀「今回は試作艤装の件もかねて対大陸用兵器の神雷に光学兵器の付属型艤装、さらに対重要拠点降下に使う全方位型の艤装等を用意、いつもの艤装も一応は…… それと」

独「？」

加賀「提督が前回使用していた核攻撃用のバズーカを劣化複製して配備しました」

独「よくまあそんなものを、どうせ妖精さんが……ん？」

劣化？

おいこら

加賀「ばらしました」

独「…… いいか、じゃあ弾薬はちゃんと積んだ？」

加賀「もちろん」

独「じゃあ、行きましようか……」

妖精さん「はっちひらけー」

妖精さん「エンジン点火よーし」

…… のってあげるか

独「よーし…… 主翼展開… エンジン点火」

これ、ジェット機なのよね

てか、空挺機能持った爆撃機ってなんやいったい

ああガウか。

操作は一人でできるっていいなあ

じゃ、飛ばしましょうね

妖精さん「ふわー」ポヨンポヨン

妖精さん「いいばわーだあー」ポンポン

すぐに軸を合わせ自動操縦に切り替える

同時の武装の自動攻撃を解除、手動に切り替える。

これは戦争だ、よくある戦争系のアニメみたいにぎやあぎやあさわぐほどじゃない……

…… そんな遠くはないか

まあ、ここ自体前線だしな

光学迷彩を起動させ武装の機能を縮小、あとはまあ敵の頭に来るときにハッチを開けて部隊投下、直後光学迷彩を解除して通り抜ける。

てか抜けないと核攻撃で基地を吹き飛ばす気だからな

独「さてと…… どうしよう、全速で飛ばせしてるがまあ、いけるか」

さてと、一人一人が最強クラスのうちの艦娘に何分耐えられるかな……。

そういえばあの横須賀演習以来結構艦娘のよこせだとか演習させてくれとかうっさいのいたなあ

よー考えたら現状わしだけなろうレベルのチートなんだよなあ

まあそのせいでなんかラスボス判定食らうけど…… てゆーかあいつらも相当いかれたバフあるだろうが…… まあ、わしは世界平和

なんざもうどうでもええし、戦争しまくればいいからな。

というよりは敵がなあ

はあくくだらねえ

自分に嘘つかないって意外と難しいなあ

ただただ、殺しがしたいだけなのに…… こうも理由付けをしよ
うとする自分が醜くて仕方がない

誰かの上に立つのは嫌なもんだなあ、やりたいことにいちいち理由
がある。

回線を開き手動操縦に切り替える

総統「アーアーテストス… 三分後降下ポイントにつきまーす、各自降下用意をしてくださいーい」

レーダーを確認し、照準だけを先に向けておく
数は最低200

まあ、穴にいる蟻を掘り返すならそれほどか

独「ぐつどらつく」

光学迷彩を解除しつつハッチを展開する

すぐに全員が飛び出し降下を始める

もう、核攻撃は済んだ

爆風に吹きとばされないようにすぐにハッチを閉め、高度をとる

正直、爆発の範囲を聞いとけばよかつたよ

高度をあげ始めた瞬間後方で複数の巨大な爆発が発生し、敵艦隊の九割は消滅。

作戦は成功、ただまあ、本隊はいないかあ

それと同時にひとつの疑問が浮かんだ

「超巨大兵器」はどこへ行つた

写真からして明らかに300mはあるはずの怪物がどこにもいない

あれがケンプみたいなの組立式なら最悪だよ

加賀「提督… 各艦降下成功、敵残存艦隊は八方に逃走しました」

独「おふつ、はえーな、やっぱり光学兵器は使いやすいか」

加賀「はい、基本的にぶれないのと熱線なので装甲を簡単に貫けます… ただえねるぎーじえねれーターが重いのが問題ですね」

独「そいつあしやあない、小型化はゆっくりやればいい、じゃあ残つた敵はこつちで爆撃するから適当に避ける」

加賀「了解」

通信を切ると同時に適当に爆弾やロケットで数を減らす

それで数を減らしながら少しずつ高度を下げ、回収準備を進める
ただなーんかおかしいよな

太平洋を捨てるようなもんだぞこの数
いやまて

もし「太平洋自体に興味がなく」

すこし、海面を確認する

そこにあるのは無数の軍艦そして肉

…… やられた…… あいつら

「始めからこのつもりだったか」

すぐにくーちゃんに回線を回す

独「おいつ、そつちの大西洋」

空「やられたよ、あいつら「軍艦」を量産してた…… 軍艦の擬人化
が軍艦引っ張ってくるなんてね……」

独「…… おい、それはおまけだ、本隊は別だ、あいつらはなあ俺
らが量産型の艦娘を作るようにあいつらも陸戦用の艦娘…… 兵士を
作ってたんだよ…… えぐいぜ、あいつらも「あれ」を見てやがったそ
れも解読も済んでいた!!時間がほしかつたんだ!!」

空「わかつてるわよ…… まだこつちはマウスがあるからいいけど
あつちはたぶんユーラシア大陸全土を取る気だね」

独「ええい…… やっぱり元の領土の差はきついな、取り敢えず戦力
をできるだけ集めとけ……」

空「ええ…… 流石にお互い人類の押しつけ合いがしたいのね……
こつちに来る気配はないわ」

…… 仕方がない、こうなるともう、欧州諸国が勝手に艦娘増やす
手段を見つけてくれるの待っしかないなあ

核弾頭の残りは30

戦車師団は前から増えず

仕方がねえか

取り敢えずもう出るより先に足元だな…… あの要塞さえ完成すれ
ばな

第20話 横須賀立つ

さてと、俺にもできるだろうか
あの狂人の真似事が

いや、人が人になるのは無理だな

狂帝「嫌なものだなあ……ええ？この一瞬を待っていたのによお
狂ってるからわからねえや」

報告書にまとめられた全て

それはただ簡単なことだ

横須賀以下主戦派のクーデター

最悪のタイミングだなあ

第二次ミッドウエー攻撃を始めた直後だろーが

さてと、どう奴等を欧州へ向けようか……自力での突破はきつい
だろうな

加賀「提督……全艦帰投しました」

独「わかった、とりあえず様子見だ……とりあえずあの男の手腕
を見させてもらおう」

加賀「はい……それと」

独「わかってるよ、今回のキーは俺だろ……振り方は間違えんさ」

加賀「……それ」

二通の手紙でも見たのだろう

やっぱりな

独「そうだよ、片方は横須賀、もう片方は元帥だ」

加賀「……内容は」

独「横須賀は奴等が本土進攻時の背後攻撃、元帥は不干渉又は支
援……面白いものよ……賭け事じゃねえか」

加賀「自分達が危険にさらされればこのチャンスを気に牙を向く、
今なら双方ダメージを持った状態での戦闘、そして無傷で尚且つ個体
の戦力が圧倒的な私達の鎮守府、ただの取り合いですか」

狂帝「そうさ……最高じゃないか……ハハッ」

加賀「素直じゃない人」

独「む？なんだ」

加賀「なんでもありません、紅茶持ってきてますね」

…… わかっているよ、俺だって本当はもう炎に身を任せて戦争したいさ……

悪いな…… あの馬鹿のためなんだ勝たせてやりたいだけなんだよ……

全てすんだら全て破壊しような……

独「演じきれるかな、壊れるかな…… いや、どうでもいいか」

く「なーにがですか♪」

独「相変わらずどこからわいてきた、床か？」

く「さあ…… それは神のみぞとでも」

独「…… 勝てよ」

く「わかっていますよ」

お互い顔こそ見えず背を向けあっているが…… なんだろいな

コスパいいならなんでもやる…… か

独「…… まあ、横須賀が勝とうが元帥が勝とうが…… 日本は落ち

る…… 可能なら双方欧州にでも投げたいものよ」

く「…… 楽しそうですね」

白「本性剥き出しに戦うのも悪くはないだろ…… いや、はじめから数カ月で終わらせれることをわざと犠牲を増やすように立ち回ったんだそれだけ…… な」

く「ほーんと、そうですね、もし総統さんが人類の味方だったら多分一ヶ月でこの戦争終わってましたよ…… それが気がつけばここまで悲惨な状況とは…… もう、人類に勝機はありませんよ…… これ」

白「何を今さら…… 俺が望んでいるのはゴミ掃除をする奴だ…… 良いものだろ？元帥派が欧州にいる全戦艦棲姫傘下の艦隊を沈めている頃にはこっちの勝利は確実さ…… いやもう、王手だな」

く「大きな目で見るとまだ中盤でも実際はもう王手……」

白「勝ち確定のゲームはもうやらん、この戦争で俺はこの要塞で死

ぬさ…… 死体は持ち帰りたいなら帰れどうせもう俺が立つことなく
物語は終演を迎えるさ」

く「…… わかっています…… 日本本土さえ落ちれば後はもう消化
試合ですものね」

白「…… はあ…… 面白くない…… やつぱり指揮官とかはダメだ
なあおれ、無意識に王手狙いまくって気がつけば王一枚だけになるま
で手を打ってやがるこれじゃあゲームにならない…… まあこれもま
た…… か」

結局負けはしない

勝ちしかない時点だな

なあ、一体何度挑めばお前は勝てる？

いや、無意味か

加賀「提督」

独「あちつ： あ、紅茶か」

重要？いいえ重要です

月を背に輝く一本の刀

月の石なんてどこから用意したのだろうか

答えは簡単か

あれ

OPがでないぞ

白「おーいちよつとー」

周辺の無を叩きライトを探す

まずここどこだ

餅どこだ

てゆーかぜってえろくでもないことになる

思考と行動は同時にしろ

え？無理？そりやむりだ

まあ、ええか

白「えーと… ああ、本日皆様の …… めんどくせ」

さつさとほんだいしよ、面倒くささのあまり台本すら恐ろしく雑になるぜ

白「えーと、ああこれねはいはい、そういややってなかったね、暇だし編集の貼つとくか」

七これ舞台裏げきじょう

1：別作品

独「… 内政ばつかで暇だなあ、早く戦争になあれ」

ソ「しょうがないね、元々複雑なh o i 4をさらにモッドで複雑にしたから少しするだけでも時間かかる上に全員いれる時間も少ない」

独「こーゆーときにちまちま戦場見たり、つつちーしりーず書いた

り、コメント確認するのが日課なのがもう」

ソ「そういや観察日記はどうした、それとオリ作」

独「一応土虚メインが終わったたら小説は全部停止してるしマンガも基本A Iがやってくれるから絵を描いて後は自動でいいからならくだよ、動画の方もまた応用でおkだし」

ソ「そういうのを理由に新作作らないのは」

独「うっさい、元々気分だったからええやろ」

ソ「気分で昔は一話100万字は頭おかしいと思うよ、それも毎日」

独「あんときははしようもない一文さえも本気だったな」

ソ「そういやちよつと前に異世界転生」

独「もうやった、高級車は運転手撃ち抜いたトラックも吹っ飛ばした、殺人犯も殴り殺して雷は避雷針で避けた、これ以上どうしろと」

ソ「死ぬこと前提なんだ」

独「死ななきや転生できないらしい」

ソ「リアルチート不死身を殺せるアニメ」

独「不死身と言うよりただ勘がいいだけなのでは」

ソ「自分の事をただ勘がいい奴で済ませるような無自覚じゃないやろ」

独「はあ…… 確かに過小評価はしないけどさあ」

ソ「過大評価もしねえな」

独「そーいや新作どないしよ」

2：新年の撃ち落とし

独「おっしや新年やあ!!」

仏「うっわ…… 朝鮮半島が」

米「全土爆撃ww」

ソ「こりやひでえ」

曰「1／1朝鮮半島全土に原爆が落ちた…… じゃねえよ、インフラとか全部消滅かいな…… 港も空港も消し飛んでる」

伊「とりあえず近場の朝鮮半島を消すスタイルやめー」

英「こいついつつも核落とすな」

3：献上パワー

独「おっ」

伊「おっ」

日「おっ」

英「おっ」

ソ「おっ」

米「おっ」

仏「おっ」

独「あ、横ちゃん謀反始まった」

日「うわ補給切れた」

ソ「うーむ、前からくーちゃん、後ろから瀕死の横須賀一派……結構みなのは」

独「お、双方から物資くれた」

仏「無傷だからそりゃほしくなるわ、AIのレベル結構引き上げたしな」

英「しゃあない、取り敢えず倒すか」

独「さてと、加賀さんにカイザー持たせて海域に突っ込ませよ」

仏「ルート変更欧州へ退却」

日「まあ、そうするよな、これで壊滅すればゲームセット、後は雑魚処理だストーリーにもならん」

伊「取り敢えず核攻撃されないように戦闘機大量排出で耐えろ」

独「そんなことすんな、話のびるやろ」

ブチッ

白「ああめんど、ディスクがえもしたかねええええええあ、だる

仏「……いつものお前か」

白「もうやるきない……だーる」

パン「戦争キチもここまでくるとひでえもんだ」

白「うっさい……つぎのだいほんめく」

仏「……気分屋ってめんどうだ」

白「はあ……さて次……」

独「さあさあさあ始まりました、題して…… えーと…… あー……
助けてすたちちゃん!!」

ソ「まあ、こんなのを題をおけるわけないか…… ただのな」

独「…… ただのホラー紛いのものだしな」

ソ「まあ、そんなんでもな……」

独「…… そもそもこの企画脅迫だよね、わしの要塞大きいからつ
てっさ〜」

ソ「それでも断らないのがお前だろ…… 無関係な奴だったら首
切ってたろ」

独「そりやもちろん、もしあれがただの人間なら首はねて、焼いて、
骨でもコレクションしてたなw」

ソ「ハハハ（・▽・）」

独「まあ、じゃあやろうか…… うーんただの人間を風呂場に引き
込むだけじゃねえかあほらし」

ソ「そのアホらしいことに場所を提供したお前は愉快犯」

独「ぜひなーいネ☆」

1：十股野郎の場合

仏「らんらんらん♪」

独「…… すたちちゃん、ちよつとでかけてくるよ」

あのやろー、なぜ俺の秘蔵酒を

ソ「あれま…… てか、あの酒配備したの…… まあ、このまままっす
ぐ行けば」

独「…… これを五回か…… もうむりぽ」

ソ「まだ一人だぞ」

独「じゃあ現場いってくる」

ソ「お、そうか。じゃあまいくかけてけ」

独「おうっ」

窓を開け取り敢えず一階へ飛び降りる

埋まった

独「いてっ… えーと八番か」

駆ける… 距離でもねえか

ドック前の廊下を見る

ちようど引っ張られているころだ

「酒がぶちまけられている」状態だ

独「… やあ屑野郎」

仏「やあシスコン」

独「お、そうか」

仏「悪いんだけどさ、この足の錠はずしてくれよ」

手の掛かり用から多分二分。

待てるか

独「いいのか？そのまま艤装展開もしなけりや二分で引っ張られるぞ」

仏「俺はお前みたいな容赦なく誘いを避けられないしイカれてもいいねえ」

独「そうか、でも数が数じゃないかあ… ええ？」

仏「急に声変えるなよ… いやほんと」

独「さてと、じゃあ問題、ここは誰の家でしょう、君の前にいる奴は誰でしょう」

仏「… お前まさか」

独「今ここで蹴り飛ばせるんだぜ… えいつ☆」

そこからはもう、目も当てられないさ。

独「あ、実況席さーんみえますー？」

ソ「見えるから早く他もしなさい」

2 麺類

独「さてと、ここに隠しブロックおいてと… 床が抜けて下のドックにB☆O☆N」

ソ「おい、はよかくれろ」

独「(…ω…ω…ω)」

伊「もくきんきーん♪」

… 前方不注意で落下かよ

ソ「おおっと」

独「あ」

… あやつ、ギリギリ床を手で掴んでるのか

独「はよおちんかいあほ」

伊「げふっ」

ソ「けったあああああ」

3 紅茶

独「流石に工事中看板置いとけばまつすぐ罫に行くやろ」

ソ「… トイレ… 工事… あっ」

独「うちのドックはな、一部は普通に扉なんだよ」

ソ「トイレなあ…」

独「どうせあいつナイフ捨てに来るから…」

ソ「あ、きた隠れろ」

独「(…ω…ω)」

英「どこのトイレも清掃中かい… ったく、捨て場ねえなあ」

ソ「あいつあんな… あんなだったわ」

独「斬れたナイフ」

英「お、あつたあつた」

ガチャツバタン

独「… 南無」

ソ「ちよつwwどつからコンクリート」

独「即席やけどまあ、行ける行ける」

ドンドンドン

ソ「あ、ばれた」

独「…… もう固まり始めた諦めろ」

ドンドンドンドンドンドン

ソ「これだけ軽いと進行も楽だなあ」

独「じゃあ次いこう」

4 大和魂

独「あいつ勘がいいからなにやってもなあ…… っでことで初歩的な

突き落とし…… 流石に期間限定が○ぷら置いとけば来るやろ」

ソ「おいおい」

独「さて待機待機」

日「…… お、サザビーか…… 少数生産品かよ」

独「直感持ちには速攻攻撃!! くだばれえええ」

日「ごはっ」

ソ「おいこらそれ刀」

独「こうしなきや避けられる可能性があるからな」

5 メリケン

独「…… こういうのはな、こーするんや」ペタッ

ソ「…… バナナの皮w」

独「○リカやった奴なら一度はするやろ、バナナロード」

ソ「あいつたまに芸人魂出すからな絶対踏むわ」

独「www」

ソ「あ、もうすぐから隠れろ」

独「(・ω・)」

米「…… バナナの皮」

バナナ「……」

独「めとめがあうー」

ソ「しゅんかーん」

米「…… 閣下」

独「(っ・ω・)っ」

米「……」

独「(・▽・)」

米「……バナナ。踏まずにはいられない!!」

ツルツ

独「あく」

ソ「綺麗な滑りかただ」

ソ「えーと、以上」

独「……」

ソ「?おーいかつかー」

独「……なあ」

ソ「……おいばかやm」

ドボーン

独「…… お前も対象なんだよ」

どうしよ、気分で落としたらオチが

独「取り敢えずこうカメラをおいて……」

つつちー「えーあーうーあーうへっ…… えーとこれにて、七これり
ターンズシーズンワンは終了です、次回はまあ三月辺りにでも会いま
しょう♪…… それでは皆さん新連載ザビ☆バサシリーズやミニ播で
もみててくださいねさい。さよなら〜」

同時にガチャツというおとがした

とつきに右腕を見るとそこには手錠

加賀「…… 慢心は駄目ですよ」

独「……」

加賀「……」

独「…見逃して☆」
加賀「駄目です」
独「おう」

第21話 追撃！独帝艦隊！

地獄とはこの事か

絶望を教えよう

狂った回路に

独「…… 第一艦隊出撃用意……」

加賀「いつでも」

相変わらず仕事が早い

こつちがいう前には二手先のことまでやって待ってやがる。

独「敵」

加賀「遅くても二時間後には」

独「ルート」

加賀「現在確率が高いのは第三逃走ルート」

独「perfect」

加賀「これぐらいできないとダメですから…… どこかの戦艦と違つて」

独「もうさ、物事の大半が加賀さん一人でできちやうからわしいらんよなこれ」

いやもうほんと、策を出す前に読み取って配備とかエスパーかよ

加賀「…… 提督は私だけを愛していれば」

独「そーゆのため、砲弾飛んでくるか」

加賀「因みにこれ全員です、猫被りしてるだけで実際はただの変態どもです」

独「…… なぜだろう、素直に毎晩毎晩ぼんぼんで入ってくる金剛がましに見えてきた」

加賀「毎晩毎晩蹴り飛ばしてるだけじゃたราบくなりますね」

独「楽しそうに話すじゃないか」

加賀「いえ…… 邪魔な客がこんな会話を聞いていると思うとつい」

独「撤回愉しいだった」

気づかれているのを気づいていなかったのかわざとなのかはしら

ないが、床下から黒い泥が湧き出て少しずつ形になっていく

空「……踏みつける必要はないですよね、私、ちゃんとしてましたよね……」

こいついつつも不遇だな

白「あつ、コート」

加賀「やりました」

ん？

ああ

白「別にコートとらんでも今回は提督としているから」

空「コートでポジション変えないでくださいよ」

白「じゃあグラサン」

加賀「情けない姿……」

空「身内にすらいろんな意味で強すぎて手に終えない人の情けない姿……」

こいつら

独「お前ら、本音いってみろ、いい加減イラついてきた」

空「死体でもいいから欲しい、私の懐刀になって」

白「今すぐここで十七分割にしたるか」

加賀「戦場から遠ざけたい」

白「遠回しに死ねといつてない？それ……わし、戦場成分がないと死んじやう」

加賀「そういうのはベットでいいじゃないですか」

空「うわっ」

白「生々しい上にひでえ」

加賀「えっ」

とゆーかさ

白「おまえら……腕引つ張んな、千切れるから」

空「……こんなに胸を鷲掴みにしていてもですか」

白「おめーがそうしてるんだろ」

加「やっぱり、兵器になってますね」

白「……戦場とかだと背中預けれるぐらいなのに……もうやだ」

パンツ

ながもーん「そうだろうそうだろう、所詮自分を律しきれず戦時中
に行為に染まろうとする淫乱空母なんて」

空「誘拐主犯格がいったい何を」

加「黙りなさい。誇りも捨てて首輪すらつけ始めた忠実なだけの
犬」

白「そういうならわしの前であんなことしないでくれ、幻滅するか
ら」

な「(・ω・)(・ω・)(・ω・)」

白「ああ、ながもん、散ってしまふとは情けない… 後で全裸で亀
甲縛りにして部屋に戻そ… ついでにむっちゃん建造しとこ」

パンツ

話こじれるからくんな

アイオワちゃん「ふっふっふ、所詮敗戦国の艦、勝利のタイミング
もなにも」

加「黙れ米帝。提督のお気に入りだから勝ったつもりでいるの
か、無様なものだ」

空「お前が勝ったんじゃない、エンタープライズが勝ったんだ、しゃ
しやり出んじゃねえよ」

白「タイミング以前にな… 相手が悪いよ」

あ「… ひっぐ… なによ…」

そーいやそーうだ

白「… ほーんと、わしがいなくてこいつらいつ戦争してもおかし
くないな」

今夜ぐらい一緒にいてあげよ

パンツ

しつこいなあ

新手のコントか漫才か

YAMATO「ダメダメですねえ、よくヒロイン攻略にもあるじや
ないですか爆弾処理、あれを怠った」

加「長いうるさいすぐ出撃用意をしなさい」
空「PAD着けて恥ずかしくないんですか」
やまとちゃん「……ぐすつ……ふええ」
バタンツ

白「あ……腕が変な音でした」

加「ガン無視ですか……」

白「もうこんやろ」

空「それはフラグです」

白「言いながら力強めんな千切れるから」

バンツ

もう帰れ

もぶ「提督白夜!!貴様を今ここで我々……」

白「……なんだ、元帥派の兵か……よーここまできたな……」

取り敢えず頭に三発

加「このぼろ雑巾は捨てましょう、この血は使えません」

空「よく来ましたよほんと……」

そうやってふざけていようが腕は着々と伸びる

同時に肉がありえないぐらい伸び……

あかんこれ

白「意外と数時間は長いな……」

現実逃避ってさ、虚しいな。

意味のない逃避は本当に虚しいな

これだから優勢なのは嫌なんだよ。

これだから上に立つのは嫌なんだよ

これだから……

扉が再び開いた

今度は長門

手の資料からして勝敗か

長「提督。五分前勝敗が決した」

独「どつちに転んだ」

長「横須賀以下連合艦隊、被害甚大。急遽白夜中将の艦隊に追撃を依頼したい以上」

やはり、あいつらでも平均的練度の差は変わらないか

二人を振り払い立ち上がる

独「長門……今すぐ追撃用艦隊を出撃、ルートは第二七ルート、俺は第三ルートで観戦でもしておく」

空「うわっ」

長「了解した、それと提督」

独「なんだ」

長「……無意味な遠征には」

独「ならんよ、敵は二手に別れるさ、双方の被害が甚大なんだ、わざわざかたまって行動するか、危険だが個別に移動する方が遭遇時の被害はましさ」

長「わかった、もし敵が来なかったときは」

独「来るさ……」

長「……それほど」

そういうとながもんはドアを閉めすぐに艦隊を向けた。

まあ、大嘘なのはわかるよな

まあ、あそこは逃げる敵じゃなく「欧州連合艦隊の艦娘がわんさか来るといっただけなんだよな」

別に雑魚の相手なんざ火力ある奴等で十分、追撃は機動力だ。

独「……おいっ引っ張んな」

加「……私がやります、そういう約束です」

独「やだっ!!戦場が呼んでいる」

加「数十分程度前の会話も忘れちゃった?」

白「知らん……」

空「……ええ」

まあ、そんなぐだぐだしながら第一艦隊の皆と行ってはや数時間。元帥派の艦隊が見えてきた。

一目見ても大半が中破、残りは大破。

まともに戦闘できるほどの戦力はもうないか

独「今ここで核弾頭をぶっぱなしてもいいがそれだと後で文句言われるしな……まあ、陸路で逃走なんて考えないだけ正解だよ……」

現在陸路は横須賀派の根回し（威圧外交）で全面的な閉鎖

陸で欧州は不可能に近い。

それに欧州方面への海路ならインド洋と地中海は比較的安全だしな

加「提督、長門からの連絡です」

そうやって思考を回していると勝利報告がやって来た

独「勝ったな、ならすぐに」

加「欧州連合の艦隊は殲滅セリ、しかし戦闘中謎の超大型深海棲艦により、艦隊は半数が大破、継戦不能」

真つ白になった

深海棲艦

不味いかもしれない

戦いとは本来そう何度も同じ相手とはしない、故に必殺技を先手でだし相手を倒すそれが殺しあいだ。

考えるまでもないか

ただただ欧州方面の残存艦隊を殲滅した。

これだけか

独「俺のミスだ……」

加「……援軍だと思つたらまさかの敗残兵ですからね、提督に非はありません、そもそも、人間なら誰にもわかりませんよ」

独「それをわからなかったら死ぬだけだ……少なくとも欧州方面は戦艦棲姫の勢力圏と言う事実がわかった、だがこれで元帥派は孤立か……数だけなら倍近いのだがな……」

加「確かに、提督の最初の目的である「横須賀派と戦艦棲姫派と元帥派の全面戦争」は不可能になりました」

独「…大西洋を二分してもらわなきゃ困るんだよ……マウスだすか……いや……とりあえず長門たちには退却命令、進路は空母棲姫の領域にある第八十七要塞を通過、そつからなら戦闘はない」

加「わかりました」

地図の駒を置き直しているとき急に鉄扉が開き、慌てた様子で夕立がきた

独「追撃か？今は」

ぽい「違うっぽい！」

独「追撃待ちじゃない？まさか、あいつら殿でも」

ぽい「きたっぽい」

独「クツソ!!運悪い！」

まあ、そうなるよな。

敵さんからすれば、現状被害ゼロで尚且つ、艦娘個々の戦力が圧倒的のうちが提督直々に来たんだ。

最大戦力を引つ張ってきたとも思うだろう。

ならやることはひとつ

まず絶対に逃がすべき戦力や人材を足の速いものに載せ逃走。

それだけじゃあ追い付かれる可能性もある、それを防ぐために戦闘可能な一部艦が特攻。

死を覚悟した兵士ほど恐ろしいものはない。

たとえ局地的に無意味であつても、時間は稼げる

ここで追つてももう意味はない

独「今は一隻でも戦力がほしい、敵は追い返せ、それでも来るなら

沈めろ」

夕立「わかったぽーい」ピョーン

…窓からの飛び降り移動手段じゃないぞ

独「まあ、あの男にも手土産がいるよな……」

加賀「……ここから少し進むと数か月前に、建てられた大型の海

上要塞があります、そこに核兵器も」

独「わかつてるくせに……」

加賀「ですが、本当にあんな男に核兵器なんて」

独「ばーか、核兵器なんざ乱用する奴はそういねえよ」

加賀「……」

独「……まあ、そのね、うん。じゃあ進路は海上要塞、目的は核兵器の確保で任せるよ俺はもう一方の仕事でも済ませるから」

そう、誰も必殺技が一個しかないなんて言っていない。

言った奴は殺せば言っていないことになる。

別にあれを倒してしまっても構わんだろ

第22話 轟砲よ全てを砕け

諸君、ちよつとしたお話をしよう
といつてもそれほど難しくはない
ただの口径と砲のお話だ

列車砲ドーラといえらばどうだろう
というよりもだ

同じ口径の銃や砲でも長さや弾そのものが違えば火力は大きく変わるものだ。

実際うちの戦艦クラスは全員80cm砲を採用している。

そう、「80cm砲」まだ口径は言っていない

何が言いたいのか？本題言え？

馬鹿らしい

もうわかつてるだろ

悲しいかな、軍艦にそれそのものはつけないんだ

そう、軍艦そのものには

「接続開始……全ロック解除」

「砲弾装填」

「照準捕捉、全安全装置解除」

誰も、「本物の列車砲」を持つてくるとは思わなかったろうな。
敵も味方も

独「……重いな……小型化してもこれか……」

空「まさかアメリカ本土にまだこんな粗大ゴミがあるなんて思い
ませんでしたよ」

お互い面白半分本気半分の話し合い

こんなものがよく残っていた

過去のロマン砲は今や人類救済の可能性を出す砲になったか

実に不思議だ

こいつを撃てば反動で全身吹っ飛ぶ可能性まであるのに全然恐怖がない

むしろ喜びの感情がわいてくる。

白銀の砲身

黒を主体とした土台

そして鉄十字の印

素晴らしい

独「まあ、すまん、こんな無理難題言つて」

空「いいですよ、これぐらい持つてこないと無理ですし」

独「……素直じゃないな」

坦々とだが悠々と

砲弾を最終装填し発射形態に移行する

照準はもちろん決まっている

敵は1つ

独「敵超巨大戦艦……誤差零……」

ロツクを始めると同時に全装置を解除、ただ、矢を放つのみ

空「これが力……ですか」

独「ふんっ……そんなこと知るか……天よ我に道を開けよ」

引き金を引く

直後轟音とともに衝撃波で周辺が揺れる。

放たれた砲弾はただ、一寸の揺れもなく

敵の胴体に直撃し、砕けた

敵の奥の手を一撃で沈める

これを越える快感があるだろうか

圧倒的な強さ

圧倒的な力

圧倒的な狂気

素晴らしいなんてものじゃない

独「最高だ……」

そうだなあ

空「…… 両腕吹き飛んで言えることですか」

白「…… たちゆけて、腕飛んで足が熱で焼けて内蔵が衝撃でぐちゃぐちゃになった」

空「こんなラスボスがいてたまらない」

白「（・ω・）」

空「はあ、まあこれで戦力比は五分五分ですし…… 望みどうりの三つ巴ですね」

白「とりあえずこつから三年はあのあほどもの行動を見ながらのんびりマウマウ改造したり艦装改良を繰り返すだけだろうなあ…… そうだ、そつちは工場とか艦装どう」

空「とりあえず帰りましよ…… みんな心配していますよ……」

白「……」

抜けない…… いや、動けない

補助が壊れてるのか外れない

白「へるぷみー」

空「…… これがあのかにもラスボスって感じの人ですか」

白「（っ・ω・）っへるぷみー」

空「はいはい、ちよつと待ってください」

一時間後

どうしてこうなった

どうしてこうなった

どうしてこうなった

あ、大事なことなので三回言いました

どうしてこうなった

ベツトに張り付けて……

独「…… 流星に安静にしておこ……」

動こうかと思っただけどまだ足も内蔵も腕も再生しきってないどころかなぜか要塞ぼろぼろだった

独「…… 敵はいなくなっただけどき、本気でやる必要ないじゃん…… 許可したのわしだけどき…… 自宅でガチ喧嘩して自宅半壊はないよ……」

空「…… まあ、総統さんが居ないからただのコンクリや木でできた海上要塞ですしね」

独「…… とりあえず腕だな、次の手を考えないと」

空「と言っても、三日は寝たきりですね…… 首から下が悲惨すぎです」

独「いやあ、まさか一発ぶっぱなただけで内蔵ぐちゃぐちゃ全身やけど、足に関してはもう切り落とした方がいい状態とはなあ…… おかげで現状肉だるまだよ」

空「反省の色も感じませんね」

独「戦争したい」(ω・ω)

空「敵はいません、部下は内戦してますよ」

独「戦争…… したいなあ」

空「…… 無理ですよ」

独「いいから敵探してこい、すぐにもころしたくてしゃあない」

空「…… いい加減他者を傷付ける以外の娯楽見つけませんか？」

独「ケチ、一航戦、かわいいよ」

空「どつちですか」

独「…… さあ…… 少し寝よ」

(・ω・)

???

なんだこり

川？

独「…… おつかしいなあ少し寝てたら死んでたのか」

まあ、あいつらしっかりしてるし、大丈夫か

……ん

……ん

動かん

いや何で、なんで動かん

独「……いや、これ重いだけか」

足のおもりをはずし少しずつ川に向かう

川辺に一枚の看板があった

独「？」

看板をとりあえず確認する

→アズレン

←艦これ

↓異世界

↑無

なに……これ

……え

独「とりあえず電話…… まあ圏外だよなあ」

なんかの罨か

というよりどれもこれもなんか意思を感じる

正直なところ

この川の向こうはアズレンが待ってる

最高だと思う

なぜかって？

少なくともやり方さえ気を付ければ好感度は上がらず

戦争はしほうだい

無駄に人の心に土足で踏みいつて来る奴はきつとしない

その上止めるやつがないどころかついてきてくれる可能性もある

職場としては結構良好そう

なんだけどなあ

↓はなんか別作品で何度もひどい目見るし

↑はなんか探求心そそっちゃうなあ

独「……今ここであのめんどくさい奴等を捨てるのは簡単だ、どうせあそこもう勝ち確でまず戦争はないしな」

でもなあ
でもなあ

まだ、終わっちゃいねえのがなあ

まずどこにいこうが人の上にたつのが嫌な時点でどれも無理か

独「しやあないか、もう一度賭けよう」

鎮守府

盗み聞きは感心しないなあ

独「はっ（……ω……）知ってる天井だ」

空「……あ、ついさつき面白いことになりましたよ」

独「どったの」

空「なんかインドネシア辺りが日本に併合されました」

独「そうなの」

は？

独「併合？詳細知ってる？加賀さん」

「……（……ω……）」

独「あ、放置して遊ばせればよかったな」

加賀「……はい、実は提督が寝てから約一時間後、横須賀派が日本製府を掌握というより乗っとりして、軍部主体の日本国にした後急に周辺諸国に領土要求」

独「ちよいまち、あいつら国乗っ取って直後に侵略したの？」

加賀「そうなりますね、当然ロシアや中国は拒否、まあ、現在は艦娘使って周辺を破壊しまくってますね」

独「こりやひでえ、で？国内では徴兵制度でも」

加賀「出来ました☆」

独「いえーい☆……じゃねえよ、深海棲艦どうした」

加賀「あの糞空母どもは提督が前線海域の総司令になることと鎮守

府から艦娘や提督の引越で手引きですね、的どもは継続して戦闘

独「……うわー、あいつ俺に裏切れ言う気だ、事情知っているとすげえ酷いことに、つまりなんだ、この太平洋の最前線部分はここ以外もぬけの殻にただけで不可侵か」

加賀「最前線全域と施設と提督を無償ゲットですね」

独「今頃あの馬鹿どもは前線の本当の広さを知らずに戦力を少し奥に引いてるんだろな」

加賀「まあ、なにも知らない目線から見ると太平洋のごく一部ですからね前線…… 実際は北極から南極まで広いのですが」

独「誰も極地までびっしり部隊敷ける戦力あるとは思わんよ、てかなんだ、前線全部ってことはたしか大型のレーダー施設とかも全部か」

加賀「はい、一部引越せられたぐらいで残りは」

独「はあ、こうなるならあの馬鹿に従っとけばよかった、あいつらきつと俺がこの情報知らずに全力であいつらと潰し合うと思ってるよ」

加賀「まあ、提督がもし急にあっちにつけば戦力差逆転しますし、なら敵に釘付けにしておけば後方の憂いはなく、前方に意識を集中できますしね」

独「戦線が減るから戦力回せるし、いざとなっても防衛線を下げたからなにかとカバーがきく、資源はまあパクればいいしな」

加賀「それと、実はジェット機の開発が」

独「まあ、もう咎める憲兵も居ないしな、全力でできるだろうな」

加賀「それと、日本にいた米軍の一部がここに隠れたいと」

独「沈めろ」

加賀「……」

独「場所はミッドウェー近海あの馬鹿のところだ」

加賀「わかりました」

そういうとすぐ行動するため部屋を出ていった。

はじめから予想していた癖に

独「擬態うまいなあ加賀さん、なあそう思うでしょ戦艦棲姫……おたくの粗大ゴミを粗大ゴミにしたのは謝らんど、あくまで貴様らには互角で殴りあってほしいのだから、それと流行ってんのかその忍者ごっこ」

戦「相変わらず切れる男よ」

…… 撤回

コスプレ忍者ごっこだ

独「けっ……随分な格好なこと」

戦「……やはり無理か……あの馬鹿の言うとおり欲がないな」

独「人間の三大欲求なんざ昔の薪にした、今はそれっぽいのを演じるだけだ」

戦「……もう、わかるよな」

独「無理するな、俺はお前を今は敵と見ていないし、お前も勝てないのを確信している」

戦「……そうか、ひとまず帰りは保証されたか」

独「……堅苦しいのは嫌いではない、案外、お前みたいな堅物と組んでる方が楽しかったかもな」

戦「少なくとも、発展をみたいお前では私とは組めなからう」

独「ああ、その件も面白いよ、飽きた、人類が滅ぼうが勝とうが興味ない、最後は俺が一人一人殺って終わり」

戦「これはまたずいぶん大きく」

独「……いい加減本題に移れ」

戦「……」

突如空気が軽くなり、違和感も消える

戦「あの馬鹿を止めてくれ死んじゃう」

独「は？」

戦「……実はな」

クリスマス

戦「……アメリカによやく上陸か……」

ル「?!?!」ゆきゆき

戦「なんだ?……え」

ドカーン

ツウシンイソゲー

ナンダアレー

ナンノヒカリイ

カクダーカクダー

ドカーン

戦「えっちよ、あの爆発」

中「(「。ㄩ。」)「オーイ!」

戦「うえっ」

チヨドーン(AA略)

独「……」

戦「おかげで先行部隊含め壊滅」

独「へえ、で」

戦「その後貴様が渡した戦車が知っての通り」

独「……」

戦「更に周辺海域全部マウスで轢かれ今となっちや欧州だけよ」

独「…… そう、じゃあ苦しんで逝ってね」

戦「問題はそれ以降よ」

独「？」

戦「貴様の狂った願望は知っている、だがあのポンコツ何をしてる
と思う」

…… あっ

独「ああ」

戦「約束ガン無視でこっち来てる…… てゆーか現状私たちと欧州
連合が共同で殴ってる」

独「……」

戦「まあ、話のわからないやつらは潰したが…… な」

独「それもわしがスクラップにしたからピンチと」

戦「そういうことだ、もしここで止めなければ敵が消えるぞ、あの屑私たちの大元まで殺して本気で終戦に向けている」

独「・・・それは困る、わしはお前ら三者が恨みあって殺しあって最後に生き残ったやつを潰したいのにそれを止められるのは困る」

戦「よかった・・・」

独「話をつける、だがなぜあの能天気か」

戦「・・・私は知らないが、貴様が強すぎるのが問題なのだろう」

独「かもな」

戦「随分わかったような言いぶりだ」

独「どっかで止まってほしいんだろうな・・・」

戦「わかっていてそれか」

独「なんか変な気分になる、もう帰ってくれ・・・」

戦「・・・これは「私」として言っておく、あなたは一度墮ちるべきだ・・・」

独「・・・だが、聞きはしないか」

独「・・・長門、もう張らなくていい、客人を返してやってくれ・・・」

そう言うのと彼女はもうなにも言わず部屋を出る。

ここまでは読んでなかった

一度墮ちるべき

確かに一度世界の見方を変えればいいかもしれない

世界の敵だ味方だ下らない

戦争ではなく、命の取り合いに興奮している・・・

わかっているさ、結局ほしいのはスリル

そうやって騙している自分をさ

無理だな

第23話 月下美人

静かなものだ

こんな朝早くから一人で外出するのも数カ月ぶり

まあ、今踏んでいるのは土ではなく水だがな

風は冷たく

そして重く

呪いでも乗せているのか

…… おやさしいこった

ゴールは見えているんだ、そこまで行けるかは見物だな

鎮守府

暗い

だけど閉鎖感はあまり感じない

ずっといるからだろうか

愉快なのか

ん？

なんか作戦会議室が明るい

なんか言ってたっけ

独「（・ω・）」

加賀「諸君、今回の定例会議だが」

……は

なんだあれ、ラスボス的な風格を感じる

とゆーよりなんか違う

加賀「今まで幾度となく掛けた攻勢に今回で終止符を打とうと思
う」

だれ、だれ、だれ

あんな某少佐的な加賀さんしらんで

加賀「そう、今まで私たちがセオリー道理戦うのが不味かった、故に！今回は圧倒的変化球をもって目標を攻略する、そしてそれはこれだ」

……わしのぽそこん

おい、どこ操作してんだおい

加賀「そう、安価よ」

馬鹿かこいつ

確かにえげつない変化球は飛ぶだろうが絶対無理だよ
パチパチ

なぜ拍手なのだ…… そうだ、こいつらはこういうの詳しくは知らないんだよな、そりゃああんな片寄った説明出せばな

てかあれ、わしのさいと（・ω・）

加賀「と、言うことで始めるわ」

ああ、絶対ろくなことに

1 「総統さん」05:03:11

レス題どおり、ねてください

>2

>4

>6

採用

2 「SS No34」05:03:30

アイスコーヒーにサツ

3 「パン生地」05:03:44

おかのした

4 「鰯天」05:04:00

デート（予告なし）

5 「Mob」05:04:29

随分変わったことをしてますね

6 「SA No02」05:04:33

なにしても看破ぶちギレコンボ決める閣下に何かしろとかいう無理ゲー

まあ、お風呂ぐらいなら身内認定してたら行けそう

付き合ってらんない

独「もしもしくーちゃん？ わしなんじゃが… ちよいと話があるだ」

空「話？ いいですけど」

十分後

カツ井とライト

そして一対一の空間

そう、取り調べだ

独「さあ、吐きなさい、なぜいうこと聞かずにやった」

空「… 白々しいですね」

独「(・ω・)」

空「お互い考えが読めてる時点でこんな取り調べ茶番でしょう」

独「(#・▽・)」

空「たしかにこつちに非はありますけど… やっぱり、その」

独「(ω、#)」

空「暇すぎて」

白「(？-？)」

く「なんかしゃべってください」

白「暇潰しで楽しみ潰されかけたんだが、あいつがなにも理解もできん馬鹿なら色々不味かったんだが」

く「総大将に会うことで死ななくなるは普通誰も思いませんよ」

白「まあ、大西洋にはちよかいかけんな、それよりも今は静観に徹しておけ」

く「ずいぶんと先を見えますこと」

白「ふぎけるなよ… わかってるくせに」

く「(・ω・)」

待ってるのか？

わかんね

白「そういえば最近なんか静かすぎないか」

く「元帥派は現在欧州諸国で色々手続きがありますし、横須賀派もあなたが急にへそ曲げて出ていったせいで戦力ズタボロで動けない上に国内にまーだ反乱分子が工場破壊とかの嫌がらせも多いですし」

白「まあ、内閣総辞職させたらな…」

く「なんなら、陸自と空自が手を組んで集団ストライキですから」

白「これじゃあ周辺諸国は逃げるチャンスだろうな」

く「現状倒しかたわからないですからね、陸路利用で… まさか」

白「満州」

く「… 本気ですか」

白「まあ、相手さん次第だがな… 泣きついてくるか見栄はって逃すか」

く「… ルートは一本、恐らくシベリア鉄道」

白「まあ、全員は無理だしな」

く「何の罪もない… わけでもないですね」

白「おいおいおい。そこはさあ」

く「やっぱ無理ですよ」

白「まあええか、じゃあ話しはしまいだ」

く「… 次のステージに移行しますか？」

白「いや、まだいい、まだあいっただけしか擬態ができないからな… 少なくとも、俺の死が全てのターニングポイントさ」

席を立ち帽子を深く被る

もう先が読めた

わかっている

く「人の上に立つのがそれほど嫌ですか」

白「嫌だ」

く「はあ…」

ため息にしては随分嬉しそうではないか

ま、言ったら投げられるかな？

白「ふふっ…… ため息にしては随分嬉しそうではないか」

く「…… そうやって土足で踏みにじるのはどうかとおもいますよ」
後ろから飛んできた拳銃を弾きドアを開ける

白「なにも考えてない、なにも見ていない、なにも思っちやいない、それが俺さ、だから人の心に土足でずかずか入っても文句はない」

く「うわーないわー」

第24話 希望が絶望に

ふぎけるな

ふぎけるな

ふぎけるな

ふぎけるな

ふぎけるな

白「ふぎけんじやねえよ!!」

全力で机を叩く

「音はだす、だが衝撃はない

我ながら浅はかだった

どうせあの後ちよつといぎごぎしてすぐにあいつらが奇襲掛けたりして戦争できるんだろうなあ〜

なあんてなろうもビックリするレベルの事になると思ったらどうだ

なにも来ないし何も起きん

こいつはひでえ

白「はあ…二年か… うわ〜めんどくさ」

行動するなといったの俺だしなあ

敵がいなきや好き勝手してもいい言ったん俺やしなあ

どうしよ、傍観決め込んであまりにも静かだから暴れまくるとかないわー正直ないわー

てゆうーかほんとひで

あいつの事だから数カ月以内に奇襲かけて総大将ぶつ倒すと思っ
てこんだけ待ったのに二年も音沙汰なしなあ

どうしよ

最近欧州方面は人類優勢でせつちん奥の手だす一歩手前だし

元帥と横カスがなんかこつちに牽制かけてきたし

横カス去年から毎月参加するよう泣きついてきて鬱陶しいし

あのお花畑はなんか艦娘クローン計画に本腰入れる用意できたとかいつて消えるし

裏で揃えた第一艦隊専用特殊艦装は戦争NA☆Iからお披露目できんし

なんならヤシマ作戦したかったのにあいつら戦争しないから日本ガチガチだし

もつと言えば双方万全なせいで被害甚大になるからっていちいち勧誘暗殺を繰り返すから埒が明かないし

妖精さん達はなんかリアル鋼鉄の咆哮でもしたいのかってぐらいわけわかんないことするし

いろんな意味で裏目だよこれ

まあ、膠着状態を動かすのは俺の仕事だよな

膠着を崩して苦しませれば

それだけの対価が払われる

総「… えーさんろく、るーくはち」

「… びーななさん、ぽーんななにい」

独「… 俺は一人で出るから、あいつらがついてこようとしたら足止めお願い」

「了解しました、マスター」

クローンねえ

こうやってゆるふわしてるときはいいけど戦闘力がなあ

え。あいつ誰かって

ワシも知らん

あの頭花畑が加賀さんを元に作ったクローンになんかイージスシステムとか色々詰め込んだ量産型艦娘の最終型らしい

わしもわからん

一年と半年ほど前から急にいた

きつとNFだろう

因みに毎度のごとく吹き飛んで死ぬけど自動再生するからえぐい

あいつが頭おかしいのはよくわかる

「装甲の費用とか機動力の低下は面倒だし再生能力あげまくろう」

おかしい

兵器が自己再生はおかしい

生物兵器じゃないか

てゆーか、あのバカまた懲りもせず最終型作ってから劣化版頑張ってるよ、どこの宇宙世紀だよコスト度外視の究極兵器作ってから安価なの作るって

まあ、俺も人のこと言えない性格だからあれだけどき

何て言っつてうちについちまった

やなもんだ

まだまだ愚痴はあるってのに

白「… んで、どうやってあの警戒を抜けてきた？あいつは少なくとも三百体程度居るんだぞ」

加「確かに三百いえ、五百はいましたがあの程度私には全くちやつかり操縦席取ってやがる

白「流石に本体以外じゃあきついか」

加「行き先は横須賀要塞ですか？」

白「ああ、これからあの野心丸出しの野郎の軍門に下ろう」

加「もう話をつけてあるでしょうに、私が代わりにいきますよ」

白「いらん、むしろ一人でいかせてくれ」

加「普通なら逆でしょうに」

そういつてすぐにエンジンをかけ目的地に自動運転で向かう

正直定員オーバーだおめーら

独「なんだサイコパス兵器のチェックか」

空「いやいやあ、そんなわけないじゃないですかあ勿論報告とチェックですよ」

「… ええと」

独「ほら、さっちゃん困ってるでしょ」

空「あ、アップデートしないとね」

加「…」パサッ

室内での粉塵爆発は危険です

さつちちゃん「こーどあつぷでーとますたーけんぞっこう」

空「うーん、やっぱり安定度が違いますね、大元があれなのが仕方がないとはいえ」

独「そうか、まあなんとかなるさ」

加「… 邪魔そうですね」

さ「加賀さん、出ましようか」

加「ええ」

別にでなくても（・ω・）

空「… ヒトラー暗殺計画って知ってますよね」

独「… まあまた」

空「正直、一人で行くのは危険です、せめてあの子か加賀だけでも、私は確定で」

独「これからが気になるか」

空「もちろん、ちゃんと自分でも潜り込んでみないと」

独「… わかったよ」

空「ではこれを」

そういつて彼女は小さい物を取り出した

独「… 小瓶… てかこれ」

空「私の欠片です、本体の私はここで待つので」

独「… じゃあ、加賀さんつれて俺は行くからこの船から出るな

よ… 帰るとき多分要るから」

空「… ダイナミック帰還でもします?」

独「できるか?」

空「勿論」

独「かっこいいよね、あれ」

空「ふふっ」

加「つきました、それではいきましょう」

独「だな」

まどろっこしいよね

そういえば諸君には今の日本の現状をいつてなかったな

まあパン辺りの作品のちよろつとだけ出てるけどな
まあ、大まかに説明しよう

現在は日本国から改名、大日本帝国としている

まあ世界は認めてないけどなそう、世界の一部だけな
というよりはもう世界言うてるが

この国随分でかい

国土はざつと

日本

朝鮮半島

中国

ヨーロッパ圏外のロシア

オーストラリア

インドネシア等の諸島

インド

後なんかネパールとか辺り

それに中東全土

あとアフリカ南部全土

おかしいだろ

アメリカが深海棲艦の領域な今

ヨーロッパと北アフリカ以外全部領土

もう酷いことになってきたよ

じゃあなぜ無理かって？

まあ賢い諸君ならわかるだろう

なんかパルチザンが沸いて処理が間に合わないから本土防衛をわ
しに任せたいらしい

まあ、これに乗れば横須賀派全軍がパルチザン処理に向かうんだ面
白いもんだ

俺を警戒するのに全軍の半分も構えてやがった

でだ、まあなんだ

国家方針は全部横須賀派所属の大將10人と元帥本人の一人を足
して11人で進めてる

内容もひどいもんだ

まず日本人優遇され過ぎというより他へのいじめがひどいひどい
どれくらいひどいつて産業革命時のイギリス並みにヤバイ

まずインフラは普通にいい

だが工場がありすぎてもう普通に汚染水まみれ

空が本当に産業革命時のイギリスと同じかそれ以上の空気汚染と
油や薬品ぶちまけられ過ぎて悲惨

それどころかそこかしこに線路を引かれまくられるせいで都市が
三十ほど消えた

難民はアホみたいに沸くし

治安も正直最低

まあ、中国に残ったやつらもまさか自分らの国土の九割が軍事施設
に変わるとは思わんよ

台湾なんて全土ミサイル、空軍基地だし

オーストラリアもほぼ全土が原子炉

他の国もほぼすべて工場敷かれて住処は工場を建てづらい山

山だと今度は工場の煙で燻製されちゃうし

というよりさ、一番ひどいのは中東とアフリカ

砂漠が全部アスファルトになった

テクスチャ変更とか埋め立て工事とかそんなちやちなもんじゃね

え

もつと恐ろしい片鱗を

つてなかんじで最悪

まあ、あいつら山岳地帯に行軍するの面倒だからって一部の山岳を

爆薬で吹き飛ばすしな

それにこいつらのバックには頭花畑が資源送ってさらにその資源
の一部をせっちや… 戦艦棲姫に送って挟撃の構えをとってる

まあ、攻撃しないせいでせっちちゃん死にかけだがな

じゃあ日本はって？

まず天皇制何てものはない

国会は一応ある

警察？憲兵でいい
国民？みんな幸福らしい
まあ本土だけ平和を謳歌してるからな
国外全部この世の地獄なのにさ
まるで鎖国してんじやねえかってぐらいの温度差だよほんと
過剰供給しても国外にぶちまければすぐ消えるし
核のごみ？ミサイルに積んでヨーロッパにでもぶっばなせばいい
よ

独「さてと、悪趣味だなあ」

目の前にあるのは巨大なビル

ほんと金かけてるかんじがしすぎる

憲兵「遠路はるばるどうも総統さん」

ん？

独「ん？君」

加「こんなところまで」

憲兵「はい、私は潜入隊の一人です、まあ、ここの憲兵はほぼ全員

我々なので」ボソツ

独「がばがば過ぎないか」

憲兵「ではここで武器をということで仕事ですがまあどうぞ」

空「ご苦労様、私のことはいいから仕事してね」

憲兵「はい：：あ、加賀さんにはこちらの休憩室で艀装を外して
待っててくださいね、代わりの艀装も運んできますから」

なにも言わずただただ罨に飛び込むのも一興か

空（ちよつ）

独（数は三十：：出るときには決まるね）

空（？何してるんですかその箱って）

独（火薬だよ）

空（抜け目がないですね）

準備を終え本題に移る

別に本題って言うけどそれほどでもない

独「… 居ねえ」

居ない

いや冗談ちやう

手紙だけって

独「来るとはわかっていた本土を頼む…… 読まれてたのか」

空（恐らくあれを送ってた頃にはもう軍を動かしてたんでしょ
うね）

独「… なんか濡れてるな」

水… というにはなんか

炙るか

空（… え）

これはひどい

「そうそう、この本部なんか深海棲艦だらけだから警戒しといてそれ
と今そこにはあの頑固どもの手先がいるから全滅させといて」

独「ただの成り上がりではないよなあ…」

空（やっぱりあいつらグルじゃないですかやだー）

独「まあここで俺を殺せれば戦力比はましになるしな、最終的に敵
になる可能性があるやつをずっと置きたくもないか」

空（そういいながら何で天井にいくんですかねえ）

独「まあまあ、黙ってなさい」

これからが楽しいのだから

雲より高い人工の建造物ってそうそうないよね

月が綺麗だ

満月の夜に命の取り合い

楽しいよね

独「ハアイ♪サイコパス」

仏「…」 バァン

ちよっ

ショットガンかよ

独「……ヘツシヨはねえよ」

空（……これ、艦装ですか……やばい）

独「流石に痛いな……こっから地上に約30秒……」

内ポケットから拳銃とナイフとスイッチを取り出しながら落下地点を固定する

別に焦りはない

高揚感はある

そして次に起こる事態はこうだ

独「死亡確認ごくろうさん」

飛び降りてきたヤツを起爆スイッチで爆破させた爆弾の爆風で引き飛ばす

独「まあ、死なないよなどうせ下に……は」
諸君。

ダメージブーストというものを知っているだろうか

よくアクションゲーである「わざとダメージを受けて加速」するこ
と

うん

あの馬鹿自分の爆弾で軌道を無理やり戻した

このまままっすぐ先に降りられれば頭に散弾が直撃しちゃうね

独「……くーちゃん、遊ぶのやめだ帰る」

く「え？なんか不味いことがありました？」

独「いやー、気が乗らん」

く「……いつもでしょ」

何て馬鹿なこといつてる場合じゃない

このまっすぐ落ちれば死

そう、このまま

独「……まあもうタクシー来てるしええか……」

空「……なんか無人の道路を凄スピードで走ってる車がいるんで

すが」

独「ナイス…こつからはカーチェイスといこうか」

空「…先に帰って船の用意しますね」

独「逃げるな」

空「…」

うわゝ薄情

といつてもどうしよ

流石に数が多い

…音

そう、ワシは知った

いや、ついさつきまで誰も知っているはずがなかった

マツハで突っ込んでくる戦闘機が複数いることを

独「…ん？なんだあれ、エンジントラブルか…このままだと周辺に墜落しちゃうな」

戦闘機を眺めているとなにか液体が額に落ちた

その液体は赤く

そして生暖かい

そして再度戦闘機を確認すると一部に穴が開いている
なるほど

独「…楽しくなってきたよ」

横から突っ込んできた車の窓に腕を差し込む

割れた窓の先端がちよつと刺さってるけど問題なし

独「hey!!嬢ちゃんあの車を追ってくれ」

加「了解…気が乗らなかつたので？」

独「気が変わった」

加「わかりました…無駄でしたね」

独「まあ、良いじゃないの…ちよつと本気出すから全力で飛ばし
ちやつて」

同時にスピードが少しずつ上がり時速130kmぐらいで敵を追

う

…？

独「ん？なんだこの死体…」

加「ああ、それですか… 運転頼んでも話聞いてくれないんで」

独「上院議員…」

ちようど直角のカーブを曲がったところだろうか

左右からショットガンを構えた男が左右に三人ずつ

おおこわいこわい

独「… めんどくさい」

刹那

同時に打ち出された無数の銃弾

数は459発

こままなら直撃弾231

独「これさあ、人間だったら死んでたよ」

拳銃の弾一発

左右の散弾をほぼ全部跳弾ではたき落とす

もうちよつと大きかったら指で弾けた

まあ、ドアは吹っ飛んだけどええか

希望は絶望に変わるものさ

その瞬間はいつかって？

簡単さ

それは通じる手が無くなったときだ

独「元帥派の人たち御一行は日本帝国本土密航ツアーで全滅デー
ス… ぐっばい」

右側の車の中に酸素魚雷を叩き込んで蹴り飛ばす

蹴ったと同時に左の車に跳び移り車を持ち上げ走る

独「加賀さん、どいて」

加「!?」

上院議… 車をおもいつきり前方の車に投げ飛ばす

飛ばされた車は垂直に飛んでいき前方車両を木端微塵に吹き飛ばす

帰ってきたの血と肉と鉄そして殺気

独「…………… まあ、だよな」

爆煙の中から出てくる一匹の鶴

そして人擬き

独「ハアイ元氣イ？」

仏「…………… せっかくのコスプレが…… オメーの投げたゴミのせい
で……」

独「おい、ここ敵地だぞなにふぎけてる」

後ろから加賀さんが車で突っ込んできているの気づいてんだろ

流石に180kmまで加速した車にぶつかるのは不味いだろ

「目的は一緒だろ……」

「過程は違うだろ」

「でもなあ…… お前の号令ひとつでお前の艦隊が動く、それをさ
ちやあ詰みだ…… だから話をしに来た」

「先に殺しにきたやつ…… は、ないか。先に殲滅しようとしたのは
俺だな」

「はあ…… 根回しは済ましてもお前がうごきや全部おしやかなのが
なあ」

「どうした、内応でもしてたかまあ勝手にしろ、奴さえ生きていればい
くらでもチャンスが来る、俺は奴だけは生かす…… 戦争のためにな」

「…………… 正直、お前とやりあうと死にかねんからなもういいよ帰る」

独「そうか、じゃあ後ろの車に撥ね飛ばされて海へ帰れ」

仏「やなこった」

直後煙幕を張り左右に避ける

まあなにもできなかつたワシは車に直撃

まあ壊れるのは車だがな

独「強靱☆無敵☆最強」

加「…………… ああ…… からあげが」(∩_∩_∩)

独「∪(・ω・)＊」作ってあげるから泣かないで」

まあ、大乱闘……じゃなくて大内戦かな？…に参加しよう

第25話 審判

そうだなあ

次は真面目に何をしようか
別にどうでもいいのよ

人も世界も秩序も悪も法も意思も

もう見る価値もない有象無象に興味はない

だからどうでもいい

それよりは無色の紙に色をつける方が楽しいのさ

悪であれ正義であれ

結局は命ひとつ

人は紙に善人であることを望む

紙は悪を己で触れなければ分からないから基本は正義に染まり善人になる

紙にも材質がある特徴がある

だがどんな紙も何度も何度も染め上げれば最終的にはその色になる

くだらん

だがどうだ？

善人も所詮は人

人を知り悪を知り悦を知る

だがコーティング済みの紙にインクが染めれる場所はない

故に紙は否定しそれを滅ぼそうとする

これは人だ

異端を嫌い拒み

怖いのだよ

自分のわからないもの

自分に制御できないもの

自分ではなにもできないものが

例をあげるならそうだなあ

宗教戦争だろうか

奴らは実に下らなくそして美しい

何故かつて？当然だろう

端的に言えば「こいつ異端者だから殺そう」

なんと素晴らしい発想なのだろうか

愚かすぎてそれすらも美である

神は幸福を与える？

神は全てを平等に見る？

ばからしい

世界の主導権を握るのは人だ

神などという存在にすがる弱者なぞ所詮長生きはできんさ

そいつが幸せなら良いではないか？

それは本当にそうか？

正直に言おう

人なんて奪い合ってなんぼ

殺しあってなんぼ

裏切ってなんぼの生物だ

その汚さは忌むべきものではない

本来持つべきものを捨ててまでいるのだろうか

そんな答えは俺は持つてない

お前は「自分が好きなものは何ですか？」と質問して

相手が全部答えられるエスパーとでも思ってるのか

アホらしい

まあなんだ

ほしけりや奪え

いらなきや捨てろ

殺りたけりややつちまえ

救いたきや救え

目の錯覚ってあるだろ

例えば俺は今特殊な加工を施した「丸い蠟の物体」を持っている
じゃあ角度を回してみろ

あら不思議

丸い蠟が四角くなりました

・・・だからなんだって？

さあ、俺でもなぜこんなくだらんことを話しているのかわからないべつにええやろめんどうやし

正義の基準悪の基準それは人によって異なる

それを上の奴らはあーだこーだ言うけどさ

別にどうでもいいんだよ

だって正義の反対はもう一方の正義でしかない

正義という主張だろ？

なら主張が二つあれば論争は起こりそれは争いに繋がる

簡単なこつた

まあ、なに。

その、あれだ。あれ

別に社会が絶対的正義じゃないからな

「自分の決定」が正義だから

まあ、その決定を第三者視点から見てもあーだこーだというのは実に愚かだから

だってそうでしょ

第三者とはいえそれは結局

「自分のやっていること」を「もし自分が見ていたら」でしかねえ

共感しか普通は湧かんよ

それ以外が湧いたのならそれは自分が弱いからだ

決定すらできんやつは進むこともできないさ

ああ、決定できないからな

白「……………なんでさ」

ああ〜、無になりたい

そして今度はなんか白い淫獣にでもなっているんな子と契約して絶望のどん底にでも落としてみたい

要塞建設も一段落ついたし、戦況は進まねえし

やる気も急に失せたのが悪かったのかなあ

あの子どこ行っただらうか…… こういうときに助けてよ

…… (・ω・)

まあいつか

白「戦艦3空母1…… 上出来だよ」

空「奪い合いもここまで来るとひどげふっ……」

白「…… こまったよくうえもん人類が殺しあいをしらないんだ。何
回い道具出してえ」

空「しようがないなあ、しろた君は……」

白「？」

空つ四者会議

なるほど

白「じゃあ今すぐオメーらトップ四人で話してこい」

空「…… すまんしろた。この会議八人用なんだ」

白「!？」

な、なんだって

空「面子と流れはこうだ、まず私、脳筋、元帥、横須賀の四人が来る、そしてそれぞれもつとも信頼のある奴を置いておくのも許可されているだから八人」

「ほお、そうか。それはまた随分なことだ」

空「でまあ、表向きは最後通牒、これ以上の戦争は双方が悲惨なことになるからやめようという事さ、だが実際は別さ」

「だろいな」

空「…… 実際はただの降伏勧告…… そこだね」

「俺がそつちで立てと」

空「ぴんぽーん、現状戦力比だけならほか三勢力が一斉に殴れば負ける可能性もあるわ、だけどね」

「この会議は全人類、深海棲艦のお茶の間に出しちゃうからいつそ俺がオメーとぐるなのを示してしまえばいいってか」

空「そう、あいつらは気づけるわ、これからお互いが潰しあっても所詮それはただの茶番劇、本当の敵には勝てないってね」

「だがな、それ欠点でかすぎだぞ」

空「……耐えなさい、代わりにこの世すべての快と悦を賜わすから」

「嫌に決まってるんだろ、俺は戦争がしたいこれは譲れん」

空「……わかったわよ、わかったわよ……」

おや物分かりが良いではないか

空「あの三人誘導して貴方をフルぼっこにして死体だけ貰うわ、死体なら抵抗できないし改造手術を施して一生私から逃げられないように……いえ、足りないわそれじゃあ私だけの存在にはならないもの」

「こえーよ」

空「でもこれ昔言ってたじゃないですか」

「さあ。どこのヤンデレ嫁の台詞だったかなあ」

空「うわ、とぼけ始めた中の人貴方な癖に」

「うっさい、取り敢えず日程」

空「今日」

「わかったいこう」

空「……冷酷……ですね、誰かが望んでいないのにそこまで徹しますか」

「望んだ？望んでない？あほらしい。ただの気まぐれだ」

空「一つの駒には見えませんが、いいんですか棋士になって」

「……なあ、もしお前がチェスでキング以外の駒を全部奪われたらどうする、ちなみにこれは待たできず負ければ死ぬぞ」

服どこだっけか

空「簡単な質問ですね」

コートまた減ってるよ

空「対戦相手を殺す、簡単ですね」

総「正解、別に代理戦争ごときにむきになるな、目的さえ達成できれば勝ちさ、別に駒を取り合って勝った負けたはいみねえよ」

空「……名前のない怪物、はつきり言ってそれはただの未知の存在」

独「聞こえてんぞ」

空「(・ω・)」

一夜を越え海をわたればろーま

ここで全部決めるのか

いや無理か

空「やあやあ諸君集まってくれてご苦労」(・ω・)ノ

面子もずいぶんなこった

ま、寝てよ

そーいや例の件やってくれたかな

……ん？

なんか痛い

あ、なんかフード吹っ飛ばされてる

独「……(・ω・)」

元「……まいったなあ」

戦「うわあくまじか(棒)」

横「!？」

空「……」ニヤア

独(悪い顔してんな)

仏(深海棲艦より人の上に立てよ)パチパチ

独(やだ、めんどくさい、お前が立てよ)フリフリ

独「……さて、寝てて何も聞いてなかった」

戦「ただそこの花畑がイキってただけだ」

独「そうか、真面目に答えなくてもいいぞ」

寝よ

横「いやまで中将……なぜ君がそいつに」

独「…： ただのお茶友達ですよ、こいつボツチだったんで」

空「うぐ」

仏「…： 白けたわ、いやまあそいつの下らん降伏勧告を何度も聞いていたのもだるいけどさ」

元「確かに、君の言う通りであつたな、じゃあ会談はただの舞台装置でしかなかったな」

戦「なあ、横須賀殿、貴殿の最終兵器がまさか自分のバックにいた奴の懐刀とは思わなかつたなあ…： ふふ」

空「じゃあ先の約束通り私は相互不干渉で降りるから。帰るわよ白夜「中将」さん♪」

仏「こいついつつも異世界では女作つてるなそれも癖もんばっか」
独「作つてねえよ、勝手に来た」

仏「もう本気で白けたわ、もうちよいすれば全土を瑞鶴で爆撃したのにさ、元帥さん俺は先に帰るわその狂人との会話はもういらね」

横「…： おい」
うわ、黒塗りの高級車かよ、車種は詳しくねえんだよなあ俺

てかずいずいww
グラサンに黒スーツはないわーww

独「おいおいwwずいずいww流石にそれはねえよwwどこのSPだww」

仏「それな（・ロ・）」
元「…： これは危なそうだ…： では例の技術の提供ありがとう」

独「…： 頭をあげてください元帥殿…： 私はただあなた方が苦しんで殺し会うのを期待しているだけです」

元「…： 人に絶望したからかい？」
独「…： 答えは戦後にでも」

仏「いやああああ、閣下パス」
？

なんだこの…： あ
独「爆弾やんけ、くーちゃん死ねえ…： あ、じゃあここ危ないんで

どうぞ帰路にお着きください」

空「ちよつ死ぬつ、あいつのはアカン… えーとはい脳筋」
戦「ええ私関係ない」

横「おいこら…」

あ、やつべ、一番の被害者忘れてた
てかあんにもやろもう逃げやがった

俺も帰ろ

独「さてと、爆弾も押し着けたことやし」
帰れないよねー

横「貴様… 数日前までは我々に協力的ではなかったか」

独「ええ、貴方が人の上に立てる人と予想したので、いや、そう
いえば前にあつたパーティーもずいぶんまあ信頼してくれたよう
で… ええ」

横「分かっているよな」

戦「えーと… よし白。一応命の恩人だが私たちは形式上は敵同
士だ、だからやるぞ… えいつ」

横「!？」

空「やべつ爆発五秒前と見た さつちゃんキャッチ任せた」ぴよ
ん

独「テメエエエ!!俺… 今… 艦装…」ぴよーん

横「まずいつ」

運任せ

それしか俺にはできん

だから爆弾を横須賀にぶん投げて俺は海岸の警備兵を吹き飛ばし
飛び降りるのみ

独「あるんだよなあこれがよお」

そして艦装展開

直後全身を焼くような熱に炙られながらまつ逆さまに

あ、やヴあいお

全身の機能が死んでるお

おつ (ゝ 3ゝ)

独「おつ (ゝ 3ゝ) おつ (ゝ 3ゝ) おつ (ゝ 3ゝ) おつ (ゝ 3ゝ) ★」

加賀「そのままゆっくり落ちてくださッ」

長門「別に踏み台にしてしまっても構わないのだろ」100
なにやっとなねんあいつら…あ、白
ん？おや

長門「ふっ、所詮空母か…このまま痛ッ」

アイオワ「ノンノン 貴方も落ちなさいナガト」グキッ

… おめーら… あ、黒

独「おそすぎだ、俺はもう入水三秒前だ」

アイ「… アウチ」

空「よいしょっと」

独「おいまて流石に杭はアカンしぬう」
ピトッ

戦「… えと」

(・▽・)

戦「もう良い帰る!!」

独「… そうか、助かった、離してくれ…」

空「あ、やべ」

？

戦「なあ、白… このまま持ち帰って生体ユニットにでもしてい
か」

アカンこれ

独「死体でよけりや」

戦「そ、そうかなら今は返す、絶対に死んだら取りに来るからな
ええ(困惑)

独「何でこんな奴らと話し合いなんて考えたんだろ」

さ「… さあ、マスターが先を見ないでやったバカだからじゃない
ですか」

独「まあ、なんだ、もう、ね、うん。寝る、次の手を考えよ」

第26話 勝者と正義

さてと、これからどうしようか

あの会談、正直流れと気分だったからなあ…

寝れないよなあ

別にもう手を下さんでも人が勝手に進むだろうしもうどうでもい
いんだけどなあ

もう上に立つ必要のないにまだこの足場があつて邪魔だよほんと
だからといって土台を全部蹴っ飛ばせるかと言うとなあ

「何故居る…」

く「書類審査とか面倒だから全部部下に丸投げで逃げてきた」

白「… お茶いる？」

く「相変わらずその切り替わりの早さどうにかしたら？あ、緑茶頂
戴」

白「で？何をすっぽかしてきた… ほい緑茶」つ且

く「いやー、横須賀派の提督や軍人、議員の上層部がねこつちに
げたがってんのよ」

白「… 理由は何となくわかる物資の需要と供給がつぶれたろ」

く「そりやあんな独裁してたら反感買うし前線も広すぎて追いつか
ないし、結局私が裏で糸を引いてたからなんとかなつてのよね、誰も
彼も私たちがグルとは知らなかったからこそ… ね、あの男は警戒こ
そしていたけど所詮警戒程度、危険視じゃない時点で詰んでた
わ… わさび…」

白「正直お前とよりはあいつの方がまともな関係だったよ、オ
メーが話聞かず約束無視した回数覚えてるか…」

く「指じや数えられないからノーカンってことで」

白「まあ、すんだからいいよ… でだ、あいつら、どうやって俺
の警備を抜けて来る気だ… 俺はこの戦いの時はオメーの敵だから
な」

く「さあ、あいつらが北極までこれる可能性はないし闇夜に隠れて
じゃない？」

白「…… さあ、案外一戦交えるかもな……」

く「…… 日が全てを焼くか、それよりも先に星に全てを照されるか」

白「急に…… いや、その飴玉の味はきつと何も無いでしょう」

く「どう転んでも良いのね」

「俺は人の願いを叶えるだけだ、それ以外もう何も残っちゃいねえ」

空「飽きました?」

「飽きたな、戦争ばかりしていても残るのは…… な」

空「まったく」

騒ぎつてのはき、起こるべくして起こるもんなのよ

だからね

全てに決着をつけたいならそれ相応の覚悟が居るのさ

長門「提督…… 三分前に双方の陣営が動き出した」

「そうか、なら…… これまでだな」

長門「……」

「各艦に通達、『自分に従って行動しろ』とな」

空「……?」

…… あれ

そういえば加賀さんどこ

長門「…… 舞台には邪魔…… ということか」

「そうだ、さっさとどっか行け、正義をねじ曲げるつもりならなにも言わん」

酷いもんだ

こうまでした殺りたいか

いや、それだけの価値があるな

彼奴と喧嘩してるときだけしようもない理由で本気になれる
戦場に立ち戦士としてではなく

人の望んだ狂帝としての演技でもなく

個人として本気になれる

空「いいんですか？」

「もういいよ、ずいぶん長く短い生活だったけどよ」

空「…まだ、話し合ったりしたいでしょうに」

「知るか…」

空「誤算でしたね…」

「なにがさ」

空「あなたは私たちを敬っている、そして一人の少女としても可愛がっている」

「…なるほど」

空「でもまあ、それは人としてのあなたじゃないですか」

「いつから…いや、最初からか空母棲姫」

空「そんなのだから、敵である存在の私とかとしか話さない」

「うっさい」

空「たぶんこれ、また言われますよ」

「知ってる、だからうっさい」

空「人の上に立ち、その願いを叶える狂帝としてはずいぶん情けない」

「そういやいつてたな、堕ちるべきだって…確かに全てを捨て墮落しきり、人としていれば別だったかもな、だがな、そんなの俺が許さない」

空「…わかりましたよ…狂帝として戦い、ここでその仮面を捨てなきや後にやってられないんですよ」

「…」

空「子供みたいな人ですね、ただ戦場にたち戦士としてでなく、だからといって人々が望んだラスボスとしてでもなく、人として、素で殺りたいだけなんて…まったく」

「この一瞬だけでもさ…いいじゃねえか、ただただ下らん大義だの理由だのを捨てて『ただ殺したいから殺した、なにか問題あるか？あるなら死んでくれ』って自分らしくできる一瞬があってもさ、意外と難しいのだけ、全てを捨てて素で居るのって」

空「あなただけですよそれ」

「気休めはいらん」

空「そうだ… さっちゃん、随分と大量のデータがありましたね…
今最終段階です」

「… そうか」

空「… とりあえず今あなたはこの決戦の舞台一つだけですから、
存分に楽しんでください」

「全機甲師団を配備済ませておけよ」

空「わかってますよ、まさか、百万両のマウスができあがるとはお
もいませんでした… 本当にアルマゲドン起こすのが好きですね」
「やるならド派手にな…」

もし、ここに立っているのが俺ではなく、別の誰かならどうなのだ
ろうか

人が皆何も持っていないわけではなければ心を失ったわけでもない

恐怖… あの蛆虫共はそんな下らないものを抱き立っている

愚かだよ

力がないのに力を求めず

まずは群れで行動を起こそうとする

下らん。

優しさは弱者が持つものではない。

圧倒的強者が最後に手にするものだ

それを知らずただただ手を合わせて進む？

あほくさい

今のやつらは弱いだけ

分かっているよ

言いたいことぐらい

知ってるよ

自分なのだから

だがそれがどうした

結局は下らない事なんだよ

ああもうやだよ

「人類の勝利…… そんなものはもう無いのに……」

何故こんなに楽しいのだろうか

やっぱり違うか

そうだな

己の為に全てを捨てる

これさえ覚えてりやなんとかなるさ

第26. 5話（番外） 空白の二年纏め

「泥沼の始まり」

独（まあ、すぐ終わるだろうし今のうちに引きこもりNF取って研究と整備進めよ）

仏「ああくむりぽ」

独（……）

こんな感じだったはじめ
気がついたらこれで五年たった

「這い寄る魔の手」

独「なんか前線に二百三百はいるな」カチカチ

ソ「ヨーロッパ連合が固有NFの要塞計画取ってくれたお陰でなんとか耐えてるな」

仏「よし、ずいずい強化計画終わった」

日「てか、おかわり多すぎだろこれ」

独「まあ、いま人的資源が100Mぐらいあるし、それも一番軽いやつ」

米「こつち、根こそぎとか言う一番やばい奴で100k程度なんです」

独（なんかくーちゃんのNFヤバイことなってるな）

ここでちゃんとNF見てたらよかったと後悔

「ルーマニア降伏イベント」

NF確認をしなかったせいでヤバイことに

独「…… 現時刻を持ちルーマニアは（中略）双方の主義主張による国民の疲弊を防ぐため深海棲艦との友好関係を気づくことに専念する…… あ、ルーマニア領が」

ソ「あつ、ルーマニア軍が全部空母棲姫軍に」

日「交渉言いながら実質支配なのが草」

独「…… えーと、皆様にお話があります、これはクレイジーです」

仏「… まじかこれ」

米「なんかあった？」

独「この不自然すぎる降伏、くーちゃんのNFでした」

伊「あつ察し」

日「あつ」

ソ「あつ」

米「ハモんな、まあ、無理もないけど」

仏「これには鱈もだんまり」

英「… 外交なんやつたんや、こんなにあんまりだよ」

独「でな、これ、このままいくとイギリス、フランス、ドイツ、の三国以外全てのヨーロッパ圏の領土が空母棲姫領になります、それでイギリス、ドイツ、フランス、北欧、ポーランド、スペイン、ポルトガル、イタリアが揃うとほぼ無条件でラスボスが召喚されます」

ソ「閣下の出番もうすぐじゃねえか」

米「… ん？」

仏「つまり、俺ら全員死亡でこいつ一人ヨーロッパ支配してゲームセットになるから気を付けろってことだ」

独「ちなみに、わしも拘束系のNF取られて軍事干渉、物資支援、交渉参加が約三年できない、三年過ぎたらなんとかできる」

仏「おめーのそれはほぼ自業自得だろ」

独「(・ω・)」

「北欧連合降伏」

北欧連合降伏イベント

独「ああゝ召喚されるんじゃあゝ」

日「やっばい、戦線短くなるから圧が凄い」

仏「教えてくれ閣下、ずいずいは後何人沈めればいい、ストロングゼロはなにも答えてはくれない」

独「そのZEROはなにも答えないよ」

ソ「これアカン」

「日本焦土化」

独「：…ん？うわww」

仏「wwwwwwwひっでえ、ついにお得意様からラスボスを引き取りに来たwwwやっべえww」

ソ「断った腹いせに日本本土消滅しとるwww」

伊「友好関係最悪でも取引してるよこいつらwもう祖国とかどうでもいいのか」

独「ww取り敢えず建て直してあげよ」

「スペイン・イタリア降伏」

独「：…おうふ、ついにか」

日「もう鳥公寝ろ、無理だ、どれだけ頑張ってもNFにはかてへん」

ソ「これはくそ」

米「マンハッタン計画完了したけどもうむりぽ」

「もつと酷い泥沼に」

独「：…これでいつか」

ソ「なんだこの決闘者にある音楽」

米「お、三年経過してる」

独「俺は政治力500を消費し魔法カード欧州核攻撃計画を発動！滅びのバーストストリーム!!」

欧州核攻撃イベント

仏「きたー(。▽。)」

ソ「おっしや、欧州前線全軍消滅と土地消し炭や、これでカウンター決めれる」

米「wwwちよつ、ほぼ全ての戦線が平地になったw山が消えたぞww」

英「お、降伏してた国も全部戻ってきた、これでイベントはなんとか回避したな」

連合イベント

仏「よし、連合イベント来た、これでレジスタンと戦艦棲姫勢と欧州国家で殴りあいができる」

独「……」(面白半分で蹴ったろ)

ソ「工業倍はすごい」

日「……さすがに全面核は不味かったろこれ」

独「あ、連合入り蹴ったからNF進めれるな」

仏「……おいこら、連合入ればそつから独仏同盟とってそのまま大逆転endだったぞ」

独「……」

「さっちゃん」

独「?なんだこの補給イベント」

仏「試作型量産型艦娘の実験配備か…… 20隻無償配布かよ、なんか裏があるぞこれ」

ソ「量産型wwwもうこいつら人類補完計画でもするきだな」

独「下が量産型艦娘の最終形の配備こつちは一隻か」

米「量産型の試作品か完成形か……どっちもやだなあ」

仏「てか最終型ってwwwコスト度外視過ぎるだろ、これ母船だわ母船」

独「……うわ、レールガンとビーム持ってる」

ソ「どつちにせよするんだろ」

独「まあ、下でいいか」

「暇」

独「……結局押されるのが拮抗するのに戻っただけか……」

仏「暇そうぞ」

独「もう15年は戦ってるぞ」

仏「せやな、死者がなんか凄いわ、三億だってよ、合計」

独「宇宙世紀よりはまだましか」

仏「てかさ、やっぱ面倒だわ」

独「でしよーね」
仏「この調子で行けば面倒なことに」
独「(・ω・)」

第27話 開戦

静かだ

これでいいのだよ

あいつらも

あの馬鹿も居ない

たった一人の世界

たった一人の戦場

歓迎しよう丁重に

祝福しよう残虐に

人の願望

人の意思

人の決意

それは美しく醜いものだ

故に美味である

この手で掬えるぐらい少ない人を……

いや、今は誰も望んじやいないか

じゃあやめだ

全力で潰す

相手は所詮有象無象の蟲

なにもかわらん

だから潰す

背中に刃物はない

ならあとは全力でぶん殴るだけだ

取り敢えず頭の中を全部右ストレートでぶん殴るって統一すれば

いいか

この要塞も結局は今の1手ではなく詰めの一手なんだよな

俺の考えはいずれ別の俺が気付くさ

まったく顔も知らない数年先の赤子かもしれない
生に絶望した若者かもしれない

なんなら、今を生きている身近な奴等かもしれない
結局演じているだけだ

くだらないものだ

何もないから何かを演じるなんて…… それもその役がずいぶんと

まあ

もうあの日々ほど殺意を抱くことも

狂ったような思考回路になることもない

人としての俺が死んでいま生きているのは脱け殻

いや、脱皮した蛇か？

違うな

わからないから取り敢えずなんでもかんでも啜えてしまう赤子と

一緒だ

答えなどあるものか

ないから演じている

なのに答えを探す愚かな男よ

ああ、もうやだやだ、今から殺し合いを始めるんだ

なにも考えずただその殺している感覚に酔い

泣き叫ぶ蟲共の悲鳴を噛い

ただ殺そう

別にいいか

「行つてきます」

まあ、誰も聞いちゃいないか

…… 嬉しいのかな？

守る人がいないから

なんの心配もなく

……か

完全な世捨て人にはなれんな
可能性ってほんといいよね

「……俺に扱えるだろうか」

それにしても殺人的な加速だなあ
飛行だけで内蔵がぐっちゃぐちゃだぜ

「……ーっ」

？

「そ……い」

通信か

「そのひこ……」

煩いんだよ

海面まで残り20メートル

数は艦娘140 護衛艦30

三分だ

みつけ

仏「可能性のない人間だけさ」

独「……」カチツ

じゃあね加賀さん

止めるのが遅かっただけさ

「……」

2つ3つ4つ

弾幕も遅いな

いや、この艀装が修正が追いつかない速度で動いてるだけか
ただビームバズーカを艦橋に叩き込むだけ
簡単なことさ

何故思考回路を回している

敵は倒した

なぜだ

いや、まだ生きている

でなければこの感触はなんだ

…こいつでしらいだ

仏「…ずいぶんと派手なご登場で、こちらツ…ぶねえ、海底からロケットつて…まあいいよ、で？こつちはもあつちももうたつた三分で吹き飛んだのだが？ほーんと二時間の死闘が無意味になった」

独「…じゃあここで貴様も死んでくれ」

仏「どうどう…次食らったら即死だつて」

独「…はあ」

独「悪いな、無理言つて」

仏「いいつて」

独「…」

じゃ、終わろつか

仏「!？」

バズーカの引き金を引き

三発で動きを制限し

本命を刺す

決まった

この一秒

全てで決まるんだ

独「フツ」

ああ、終わったな

…ん？

何故あつたていない？

なぜ俺は

… 視界が赤いな
なんだ血か

ちよつと無意識になりすぎたか？
もう少し回りを見るべきだったな

それよりも誰だ

完全に見えなかった

いや、違うな

見えなくて当然か

「最悪だよ、まーたおまえかずいずい」

仏「あつぶねえ… 加賀さんが来てくれなきや瑞鶴も間に合わずに
詰んでたよほんと…」

… ひでえもんだ

いや、嬉しい誤算か

なるほど、そうきたか

ソ「あくあく、そのリアルチーター今すぐ戦闘ぎやあああ
うつせえ」

「… ちつエネルギー切れだよ」

仏「… ワイヤーを巻いて言う言葉ではないな… それにあいつ
らやつぱバカだわ、いや、無理だ、保護者とか無理、オメーがどうに
かしろ」

「… あいつらあ… 誰が裏で頭下げてまでやったと思ってるんだあ
の無能共!!ここは俺の戦場なんだよ、無駄に汚すんじゃねえよ亡霊風
情が!! ったくもお」

仏「親の心子知らず… つぶね… さつきから海底から魚雷とか
ロケット飛んでるけどまじでやめろ」

あくもうやだ

なにも考えないわけにはいかないよなあ……

嫌なもんだよほんと

「……さてと、ならここはもう双方一時退却ってことで……おい
なんだそのレコーダー」

仏「君のところの優秀な空母が作った嘘の内容」

投げんなよ……ここ海上だぞおい

とりあえずつけよ

音声「……もし君がそれその対応をするというのならこちらにも方法がある、わかるな？ 白夜中将」

おいおいまじかよ、どこで集めた

「……馬鹿馬鹿しいこんなもので」

仏「そうだな、まあそれは1手だ王手にはならんがまあ詰めにはなるんだよ」。(口)ノ(紙)

だから投げるな

「……なんだこの捏造資料」

仏「すつげえだろ、全力でお前を死なせない道具……加賀さんから全部聞いたよオメーの死が勝利条件だったよ」

「……ははっ……最悪だよ……これじゃあ何やっても死なねえ
じゃねえか」

仏「まあ、こつちでもオメーの評価は高いからさ、親族の命握られてるって嘘出せばな」

「ばっかみたい……で？ これじゃあ俺があいつを打って終わりじゃ
ねえか」

仏「だな、少なくともこれから起こることは一つ、まずあの難攻不落の要塞に横須賀派が入る、あんだけキレておいて結局はあれだ」

「それで俺に死守でもさせてあいつらはミッドウエーの空母棲姫に泣きつく、それも艦娘すらうっぱらって己の保身か」

仏「そゆことじゃあ閣下俺と組もう」

「死んでくれ」

仏「わふっ……知ってたよ！ そーゆーやつだって知ってたよ！」

「…」
「(・ω・)」

調子狂うなあ

独「… お前らも結構ピンチなんだな」

仏「おっ、やるか」

まあ、こういうのも一興よな

独「せいぜい足掻け」

そろそろ来るな

ずい「？」

独「… うちの馬鹿共が世話になったよ」ワシヤワシヤ

ずい「(∨ω∨)」

仏「… 俺にもやらせろって… あ」ワシヤワシヤ

痛い

いやまあそうだよな

でも引きずることはねえよ

白「… (・ω・)」

加賀「… (・ω・)」

白「わかったよ、死にたいのだから、じゃあ最後まで付き合うよ… ったく」

第28話 人類の願望

正義は見方によって変わる

そんなことはどうでもいい

別に人類が滅ぼうが世界のシステムが壊れようがどうでもいい
遅かれ早かれ訪れる

別に虫けらどもの為に身を粉にする必要はない

救いたい人間だけを救えばいい

守りたいものだけ守ればいい

人は神になれない

だが英雄や救世主になら誰だってなれる

人の願望は叶えよう

それがどんなものでもさ

それだけの力がある

それだけの冷徹さを持っている

1のために10を切り捨てる

これは別に間違いじゃあな

有限の救済なら切り捨てるのは当然だろ

今も、さ

敵はもうすぐそこ、味方は過半数が戦闘続行すら不可能に近い艦隊
だが不思議だな、援軍なき籠城には勝利はないというらしいが今心
にあるのは絶対的な勝利だ

奴等は所詮既存の戦いしかできないのだから

「…嬉しい誤算はあの馬鹿どもが全ての艦娘を捨ててくれたことだ
な…… ついてるついてる」

「提督」

おや、加賀さんだろうか

いや、違うね、招かざる御客さんだね

「降伏しろってかい？ ねえ、ずいずい」

「… 無理とはわかっていたわ… ただ、これから始めるのは」

「愉快なものよなあ」

紅茶どこだっけか

「所詮貴方に見えているのはただ自分を楽しませるだけの道具なのね」

独「悪いか」

「そういうところ、提督とにているわ、なんでいつもいつもそうやって…… ああ」

「勝手に納得するな、帰れ」

「ハイハイ、帰るから」

…… マジで帰っちゃたよ

これから始まるのはなんの意味もない殺し合い

分かってて帰るか……

さてと、ちゃんと真面目な話をしようか

正直この包囲網

勝てない

弾薬燃料修復材こそあれど援軍は来ないしあつちは無制限に本土から持つてくるし

士気も正直高くない

それどころか一部の艦はあつちについてるし少なくともあの捨てられた奴等はまあ苦しいよな

要塞自体は無敵でもそれを運用するには色々問題がある

敵も射程内に入ってくるほど馬鹿じゃあねえ

入れば即ガトリング砲で蜂の巣だ

初見殺しの兵器も一度で終わり

できるだけ壁に引っ付いてもらわないとな

兵糧攻めでもしてくれればなあ

ん？空襲警報？

「…… ノーダメだしいか」

取り敢えず計画書でも作っておかないと

まず奇襲だな

取り敢えず潜水艦使って海底に機雷撒き散らして一斉浮上で吹っ飛ばすか

となると陽動が重要だな

電磁パルスでも使ってレーダーとソナーをぶっ壊すか

そのつぎはどうしよう

… マウスだなうん

少し残ってるしマウスで轢けばいいか

ロケットもいいな

あれだけいると精度が雑でもあたるしな

倉庫にあつたv2ロケットでも追撃用に全部使うか

追加機装の数は十分だしゆっくりやるか

正直まだ列車砲の射程内でしかないしもつと布陣を近づけさせないと

もつともこんなに頭回すのは相手が悪い

あいつら絶対俺が艦娘を歩兵運用すること気付いてるよあいつらいなきや本陣ぶつ叩いてさっさと轢けばいいんだろうけどな

ほんとどうしよ

ジェットパックで空から強襲も初手が強いだけ、あの規模には意味がない

いつそ戦略爆撃機大量に飛ばすかいや、それは最後だ航空機は射程がすごく長いからな、もつと範囲ギリギリまで離れたときだな

こつちはどうやって相手を一手ずつ引かせて殴るだけ

ん？

そういえば今日は何月だ

11月

まじかもう冬か

冬…

あれ

何か普通に籠城してれば勝てそうだな

加賀「提督、空襲の被害です」つ白紙

独「白紙だされても（・ω・）」

加賀「敵の損害です」つびっしり

独「・・・途中から46cm砲まで飛んできたのかよ・・・てか、結構飛んできてたな」

加賀「計画どうりですか？おかげで皆の気分も結構良くなってきました、やはり空襲を無力化出来るのは安心感が大きいようで」

独「そうなの、じゃあ地下通路の案内と地下水路の警備をお願い、まあ、あつちからこれとは思わないけどさ」

加賀「それと食料問題は特に問題ありません」

独「どうだったシジュールだろ」

加賀「はい、まさか」

加賀「ビニールが爆弾を弾いていました」

今にも笑いそうな顔してるw

独「見てみたいなそれ・・・」

加賀「それと潜伏している夕立ちちゃんからの報告です」

独「・・・あの子何見てたの」

加賀「来いよベネット」

独「まあいいや、私物がとられるなんてよくあるし、で？」

加賀「補給は届いているんですがいかんせん敵が敵なのと場所の問題で全艦隊を賄えるだけの補給物資と食料が厳しくなってきたそうです」

独「まあ、ここ太平洋のど真ん中とは言わないけど結構真ん中だしな、周辺の島は全部核で沈めたから建て直しも無理だし海上にずらつと船をおいてるだけ、正直豪華客船でも持ってきたいだろうな」

加賀「持ってきたらすぐに沈めるのを警戒してそんなもの持ってこれないようです」

独「バレてるか・・・まあ、あいつらにはもう少し劣悪な環境で生きてもらうよ・・・艦娘もあれだけいたら収容しきれんよ」

加賀「それと攻撃許可がほしいという要請も」

独「この要塞の見学させればしない理由もわかるだろういいかそれでも来るならすぐに手は打つよ、先に要塞を見せるか艦娘で殴るかだけの違いさ」

加賀「数を減らせば各個撃破、数を揃えれば環境と補給でじり貧、一発で逆転ですね」

独「もしこれが陸や魚人ならこんなふざけた籠城はしないがな、まあなんだ、戦いにかつてのは別に難しくねえ、ただ自分が勝てる状況を作ればいいだけだ」

加賀「提督的には世界全部がこっちに向かってくれの方が良いでしょうに」

独「ムリムリ、まだ深海棲艦を殲滅してないんだいつ背後を突かれるかわかったもんじゃねえ、だからこの戦いはあくまで元帥派と欧州連合の義勇兵と横須賀派の戦いの規模でしかない、だからそんな高望みせず取れるものを取ればいいさ、二の手三の手で叩くだけさ」

加賀「まるでナポレオンのロシア侵攻を連想させますね」

独「不毛を通り越して液体の大地だがにたようなものか」

加賀「では、私はそろそろ案内に」

独「行ってらっしゃい」

パタム

ドアがしまるときの音ほど寂しいものはないのかな？

まあいいや

そういえばナポレオンといえは不可能は無い云々あったな

食老保存も当時はガラスの瓶だっけか

そう考えると面白いもんだよ

とはいえ、ドームとかガラス天井でも爆弾を弾くって相当シユールそう

まあこんな観光旅行的な土地に育つもん何てたかが知れてるが無いよりましか

てゆーか、うちの食料ほぼ全部深海棲艦のお肉っていうこと気付いてるのかな？

これしつてんのわしと加賀さんとくーちゃんだけだしなにか

ほんと、イ級が海老つぽいから養殖しようなんてあほなことを考えたせいで酷い目に遭った、五年程度は毎食イ級のお肉を食べる事になるよ。

さて、計画も準備も終わったあとは根気比べだ大方今宵にでも潜入してくるだろうし先にトラップでも仕掛けさせてもらうか

そうだな、計画名キラークイーンだなうんそれでいこう

この厚さ10mの巨大な鉄板はこの要塞唯一の出入りもんだこのもんはわしの操作かこの門上にある歯車を回すしかない、なら簡単だ

「……この最後まで爆薬たつぷりの偽の歯車を置いてしまえばいい……よいしょつと……侵入用の窓も何気なく一個だけ開けておこう」

後は俺が開けた門から入ってくる奴を堂々と要塞内の移動式バルカン砲で蜂の巣にしておしまいさ、できれば爆薬たつぷりの艦娘人形を用意したかったけど流石に怪しまれそうでやめた

ただまあ、それだけじゃあ返しません

逃げられた用にボロボロの爆薬たつぷりの艦娘人形も用意した

今日は雲が多く月光もでないからな、そうばれやしないとと思うがそれはこつちもなんだよ

逃げれば逃げたであぼんさ

ま、どうなるかは神のみぞ知るか

第29話 武器も士気もあるんだよ

風は南東に強く

世界は暗い

月光もなく、潜入するなら好都合ではある

ただこの頂から見ているだけ、まだ前哨戦

本番はまだ先なのだからな

きたか

無人の警備を無駄に警戒しゆつくりと爆弾に近づく愚か者

数は30か

わざわざ開門装置なんて書いたんだ、回すよな

バレないように、怪しまれないようにこつちで開ける

……遅い

全部が中に入ったな

じゃあ死んでくれ

生きたきや海中でも泳げよ

右手のスイッチを押す

同時に門の上で大きな爆発が起こり

下の侵入者に血肉の一部が引っ付いちやう

気付いたかな？

気付いたか

そうだよ、もう海中以外逃走経路がないのさ

始まったか、少しだけ発砲音が聞こえてくるよ

じゃあ次はどう来る

この場合どうする

考えろ

……やってみるか

伝令を飛ばす、場所はもちろん

「……アドミラルよりビスちゃんへ、今すぐ警報と照明をつけろ、あと

雑に焚き火して」

「了解したわ」

「提督さんより大井つちへ、敵が防壁から10メートル以内にある程度入ってきたら一斉にガトリング砲と誘導酸素魚雷で潰せ、迫撃砲やミサイルはまだ見せるな」

「わかりました♪」

「アーテステス、白より特別潜水艦隊今から十分後ソナーとレーダーをぶつ殺す攻撃をするからすぐに機雷箱を積んで海底ストレスを潜航するようにタイミングは任せる」

えーとあとどうしよ

よし、少し離れるかもだけどやるか

「提督な白さんより特殊艦装部隊へ、敵が退却の場合爆薬艦娘人形を抱えて追跡、ある程度の距離になれば熱赤外線機動の起動とタイマーを解除同時に周辺に煙幕とチャフを乱射、二十秒後退却するように」

……さてと、これで三分か

RPGどこだ

あつたあつた

とはいえ、弾薬も鉄もせいぜい十年持てばいい程度

倉庫をもうちよつと拡大しとけばよかつたよ

「提督」

「なんだい加賀さん？報告？」

「…はい」

なんか変だな、読まれてるのか？

「殲滅か、じゃあ今すぐ場所を戻しておいて」

「なぜ内側で殲滅しないのですか？少なくとも提督がいる限りこの要塞は傷ひとつつきません、後は私の跳弾技術と要塞内の移動式兵器で」

「確かに、相手が相手ならしたさ… だがな、俺ははじめからあいつしか敵とは思っていいえ、それにさ、こっちにもほんの少しダメージが来るからやめてほしい」

「…嘘っばかり」

「知ってるなら聞くな」

気まずい

もう分かりきってるのにそうやって濁らせる貴様らがどれだけ

いや、もうなにも意味を成さない

地獄まで着いてくるならせめて迷わないようにゆっくり引つ張ればいいか

「・・・俺にできることは人の願いを叶えるだけだ、この道は変わらんぞ」

「この世界に人なんて貴方自身しか居ないでしょうが止める気も濁す気もありません、ただ、そうやって「狂帝」なんて演じてる必要はもう無いのにまだこの状況でしているのが聞きたいだけですよ」

愚問でもないか

まあ、愚問でもあるか

「気に入ったからやってるだけだ、人がいようが居まいが誰かの上に立つときの俺は白夜とかいう気に入った偽名を使い、救う価値もない自分の下に居る塵を救い、ただ眺めるだけさ」

「気に入ったと言う理由で人間が数百万人死のうが苦しもうがそれすら一種の悦楽として楽しむだけですか？」

「面白い事を言うな、さつきから下らない正義感擬きを持って正義の味方ごっこか？善人ごっこか？実際こうやって見たり聞いたりした時間こそそう多くないが付き合いはお互い長いだろ、いや、もう三年とかそこらいくか、うん、取り敢えずなんだ、鉄仮面着けてるつもりだろうが目が笑っているぞ、隠すならパーツ一つ一つを騙すことだな」

「(・ω・)」

「なあ、俺はいま戦場しか見ていないんだ、黙られると反応できない、後その危ないクスリはしまおうな、さつきから変なオーラを感じるんだよそれ」

「……イイエコレハアブナイクスリデハアリマセンタダノヒロウカイフクノクスリデス」

「……それ、赤城さんと五航戦に盛ったでしょ」

「(・・ω・・*)」

「なら証拠を出してやろう……この要塞内で人体実験すんじゃないやねえよしつてんだよそれ危ないやつつて」

「(「。D」)オーイー！」

「まあ、大井つちがそんなことするわけ無いよな、同期解除なんて面倒だしバレると一発でアウトだし」

「……ついでき心で」

「嘘つけ。ちゃんとかメラをベットのの中に入れて音と映像消してただろ」

「(・・ω・・)」

さてと、時間だけどあつちはどうだろうか、いや、行けるな

ほんの一瞬跳ぶだけ

射角、風力、距離、効果範囲全て計算済み

敵は輪型の陣を組んでいるがそれは愚かだよ

放たれた一本の鉄の塊は軌道を変えず空中で爆破するだけ

ついでに回りの陣形も確認するか

流石に暗いな、ただ大雑把に見るだけでも矢印？ああ、突撃用の陣形か

なら梯子ぐらいは持つてきただろうな

対艦ライフルでも揃えておおえば良かったな

包囲の一角を崩せばそこを抜け逆に挟撃に持ち込むことだってできる、戦いは数だがよ

その数を一撃ですりつぶす兵器があったらどうする

一騎当千の兵が何百もいればどうする

防衛することに特化した要塞ならどうする

数をひっくり返すぐらいそう難しいことじゃあない

おや、世界がひっくり返った
自由落下だな

さてと、第二ラウンドだ

「よつと、加賀さん？報告はある」

「第一要塞壁に多数の艦隊が接近したので防衛装置を起動、どうやら大型のミサイルの様なものを数人で抱えていたらしく」

「なるほど、壁を吹き飛ばすつもりか」

「それと南と北西の敵包囲網に穴が空き、包囲の縮小を開始」

「まあ枚数は有利だしな、ガトリング砲の射程よりは遠いなら縮めるのも手か」

全てを知っていえば良策ではないな、でも俺だってそうするさ

「取り敢えずここらで一度休めるか・・・要塞防衛班は一時退却、変わりに俺に火器兵装の操作系統を回せ、それと敵は弱っているがこれ以上の攻撃は禁止、ちゃんと要塞内の兵器の射程に納めるまでは前哨戦だ」

「・・・楽しそうですね」

「生憎、殺しの事しか本気になれない性分だね」

「そういう人でしたね」

調子狂うなあ

「・・・そうかい」

第30話 演じるもの

初戦はもう決した

目も耳も死に

海底の狩人にも気付けない病人どもに何ができたであろうか
いや、違うな

戦術的戦略的勝利でありしかし戦略的敗北でもあるな

だが一時ぐらい勝利にわくのも俺は許そう

さて本題だ

これからどうやって防ぐ

ただただこうやってにらめっこしてるところで勝利はなく
打って出ても恐らく罨だらけときた

もう二度と初戦のような所見殺しの戦法は使えん

それよりもよく見抜いたなあ

千を超える艦娘の中からスパイを見つけ出すなんてよ

まあそれはいい。

今ならまだロケットや迫撃砲の射程内だがまだ足りない

爆撃しようにも連中はすぐに残存艦隊で対空警戒に対潜警戒

核を使おうにも敵は中途半端

手札があろうと被害がうすけりや意味はない

確実に叩き込むことが重要であって使うことではない

ただまあ、なんだ、手がないわけではないか

勝てる見込みはある、負ける見込みはない

とはいえ、負ける条件はある

それを満たすのが不味いだけさ

それにしてもなんか寒いな

起きるか

起きて何しよ

兵器？

もうやりつくしたしなあ

クラツキング？

意味ない

料理？

そういえば最近てかこの頃何もくつてねえ

まず艦娘自体重要な場所の奴等以外と話もしてねえ

朝起きて敵陣眺めて計画練ってるだけだったな

頭いたい

昨日戦勝祝いにウオツカとかテキーラとかスピリタス出したしな

痛くて当然か

頭いてえ

・・・はあ

この馬鹿どもも服脱いで寝てやがる、風邪引くかもしれないのに

「そもそもこれ、一人用のおふとうんなんだけど」

朝のほのぼのとした雰囲気は実に良い

まあ、それはそれか

「おい、ツラ見せろ隠れんな」

「(ノ・ω・)ノ」

「・・・」

「その無言でショットガン構える癖やめろ」

「だってよ二股野郎、一応敵じゃん」

「とりあえずそのお姫様だっこやめろよ」

「嫌に決まってるんだろ」

「確かにふもふだけどき、人の前でやるな」

「用件はなんだ」

「話切るの好きだなあ。あ、帰っていいか？」

「良いけどそれだけじゃあないだろう」

「まあ、これから本格的に冬ですしおすし、ね」

食えるか

「そうかい、じゃあ先に行けよ、もう俺はここで待つだけで勝利条件満

たせるからな」

「じゃあ、最後に伝えること伝えて帰るわ」

・・・それもそうか

そういえば他人の部屋ってそうそう入らないよね
「うわっ」

部屋の中身とは思えないなこりや

弓に槍にナイフにライフル銃

どれもこれも使いふるされてる

ベットどこだ

熊のぬいぐるみが・・・

ベットは綺麗だな、いや、使ってないだけか

『記録』

加賀さん（・・・）

こういう日記とかってさ、見ると絶対不味いよね
では見よう

その前にベットに寝かせよ

「さてと、何が出るだろうか」

『こ』

？

なんだこれ

捲るか

『れ』

？

ん？

『を』

ペラ

『み』

パラパラ

『て』

『い』
『る』
『の』
『は』

買かこれ

・・・あるえ白紙だあ

あれ、次のページから黒い

いや、これは文字だな

パラ

『もう何度目だろうかしらこの悪夢は。何度彼女と組んでも一度だつて勝てはしない。もう疲れた もう限界 でも諦めはしない 全てを捨てた怪物に勝つには全てを捨てる』

『命、心、身体・・・全てを切り捨てても』

『敵は提督を騙る狂帝 白夜』

『人の全てを叶え演じるものが相手ならば私は全てを捨てて皆の器になれば対等になれるかしら』

『いえ、勝たなければ全てが無意味』

はあ

嫌なもんだな

空っぽの人間に入った水を気に入らないか

何も無い人形を操るだけの糸は嫌いか

「人として他者を愛するのは一人と決めているんだ、無理な願いを叶えさせないでおくれよ・・・まったく」

人が弱いから化け物の仮面を被って演じているのに

どうしてあいつもだが人でいけないと固執するのだろうか

どれもこれも俺が弱いからだよ

人はまだ神にはなれない

救えるものも有限だ

だけど全部救いたい

だからこの狂帝の仮面は必要なんだよ

ただのおまじないかもだけど

気に入ったからかな

演じたくなるんだよ

人の願いが詰められたこの仮面を被って

「はは・・・やっぱおもしろいよ、このイカれた感じがさ」

人を見て人を演じているだけの獣

実に愉快なものよな

もう自分ですら何がしたいのかわからなくなってきたよ

どれもこれもこんなイレギュラーがあるからだろうな

答えはまだ出ていないんだ

もう少し待ってくれるかな？

手に届かないからこそ愛しいものもこうやって近くにあるとどう

でもなってくるよ

でもそれはそれで悲しいな

・・・よし

「お休みなさい」

さあ、これからどうやって行こうか

第31話 狂帝

我ながら下らないと思ったよ

飽きてしまった

面白くない

人の死や不幸程度で満たされるものか

本当に下らないなあ。

何もない真つ白なキャンパス

そこに殺意だけでも込められたそれぞれ赤いペンキと黒いペンキの入ったバケツを雑にぶっかけただけの絵

くだらないなあ。

命なんてどうだっていいんだよ

価値観なんて無意味なんだよ

結局は己の信念で動けばいいだけさ

総大将のいない戦いなんてやってられないだろうしな、潮時か。

「長門お、扉の向かいに居るのはわかってんだ、さっさとあの居候どもに帰るところへ帰るように促してくれ、こつちも全面降伏する準備があるんだ」

・・・戦いは終わったよ

誰もシヨーが終わったといっていないけどさ

「でだ、おめーらさっつきからくだらんことをするな、盗聴器程度無駄だつて分かれ」

念入りに壊すか

核兵器

光学兵器

実弾兵器

まだ数はあるんだ、シヨーをするだけなら十分さ
完全に勝ち逃げみたいなものだけど構わないか。

とはいえ、ねえ

流石に無責任すぎるか

いや、そんなこと考えるだけ無駄か。

誰の願いでもない

誰からの依頼でもない

己の決めた答えだ

それが俺の答えであってオレの答えではないのだけは断言できる

難しいけどよ

いい加減力も自由も呪いもあるんだ

下らない日常を騙すための仮面なんざ捨てないとな

そうだな、とりあえずこの戦いにかけて次の手を打つか

人の願望器である狂帝とはここでお別れだ、こつからぐらい己の覚悟で生きなきや損だよな

ただもし、人が望むなら

人が騎士ではなく衛兵でもなく、狂帝を望んだらどうしようか

その時は・・・

また精一杯演じてみるだけか

この空っぽの人間の脱け殻で良ければいくらでもやるさ
何も無いから人の喜ぶことをする・・・は、おかしいか

わらうなよ

そうだ、ちよつと今日は気分がいいふざけるか

人の命？知るかそんなもの

家族？下らない

護りたいのなら命を捨てる

なんか話が長くなってきたな、何がしたいのだったっけか

ああそうだ、ちよつと核をぶっぱなしたくなつたんだな
深淵を覗き手をいれ身を引き抜く

力つてのは案外軽いものだ

人間は神にはなれんよ

だが神を覗くことはできるし、真似をすることはできる

まだ見ぬ深淵

この世の真理

星の最果て

命が惜しいよ

たかだか80年なんて短すぎる

もつとだもつと

知るために俺は人であることすらやめよう

終演だ

もう誰の願いも聞かない

誰の声も

もう知らん

ついてきたいやつはついてこい

止めたきや止める全力で潰す

この星は俺のもだ

いや、もつと欲しいものだ

知識、発明品、生命

いやいや

やっぱ男ならもつと大きなものを取らないとな

そうだな、銀河だなやっぱ

この世界は実に良い

人体の限界が見えない

ああすばらしいよ

艦娘や深海棲艦の細胞

あれは結局ブラックボックスだけどさ

何もかもを暴いたらとても面白そうだ

俺だってロマンは好きさ

男として生きているならやってみないとなあ

究極の生命体なってみることを

いや、これは不味いな、きつと慢心して火山の岩盤で吹っ飛ばされ

て地球から星外追放を受けそうだ

よし、そのためにまず反抗的な全人類を間引くどころか皆殺しにしてまおう

とりあえず石仮面と赤石作るか

いや、もつとばかでかい物を作ろう

だがまずはこの戦いに終止符を打たなければなら

後はあの花畑が勝手にやってくれろさ

「提督 各艦隊整備完了、後は号令ひとつです」

ああ、やつぱりばかだよおまえら

でもそういうところも良いよね

「もう知らないぞ、ここまで本気させたのはお前らだ、このあとどうなるうと俺は一切の責任を負わない」

じゃあ生か死か

最大で最後の狂帝の仕事でもしましょうか

「加賀。各艦隊に通達。これより敵連合艦隊を要塞内部で心中に巻き込む、思い残すことを無いようにとな」

「・・・」

俺は見えないからわからないが笑っているのか？

随分と雰囲気を変えたじゃないか

悪いな、最後まで下らないことに付き合わせて

お互い五体満足で会えたらどっかに連れてってやるか。

第32?話 閉幕

11:59

一一五九

決戦まで一分もなし

艦隊を纏める

純粹に無理ゲーだな

防衛艦隊

大和型2

長門型1

ビスマルク級1

金剛型4

アイオワ型1

もうやめよこんなのいみねえよ手持ちは自分の艦隊だけうん簡単
とりあえず相手はこっちの軽く百倍はあるってだけだ

だが不思議だな

これだけを聞くとどう考えても負け戦なのに負ける気がしねえ
むしろ勝てるぐらいだ

いや、勝ちは無理か

ただ刺し違いでの相討ちは可能か

超巨大口径の主砲

無数の光学兵器

万を越える現代戦闘機
核

そしてあいつら

勝てはしねえが負けはしねえ

信じみるさ、自分の全てを賭けたんだ

フトフタマルマル

終わりだな

「敵艦隊砲撃開始」

「敵機接近数三万」

「敵艦隊要塞接近方角は全方位！」

豪勢なこった

「初期計画に基づき各自行動せよ、オレが死なない限りこの要塞は梯子でもかけない限り入り口は正面門のみ、全方位がなんだ、圧倒的技術力で消し飛ばせ!!」

後ろの床に刺しておいた黒い大槍を引き抜く

ヴォルケンクラツツアアと言えばどうだろうか

壁の一部を破壊して槍を構える

「波動砲装填開始、全機関機能臨界、照準固定終了」

敵主力艦隊を一撃で消し飛ばせるだけの兵器はないわけではない

「風ぎ払え我が咆哮よ!!」

黄金の柱はまっすぐ正面にいた艦隊を一撃で回避させるまもなく飲み込む

「本場は違いますねえ」

「うおお」

「ハイハイ、通信班は集中、第二射は無いからね」

結局この要塞のルートはそう多くない

所要所に艦隊をおけばそれできるとかなる

二時間でも三時間でも殴りあってやろうじゃないの

「全戦線今だ優勢、破損箇所なしだそうです」

「敵艦隊ガトリング砲の射程内に接近、全要塞兵器起動確認」

「南部の水中弾が欠乏、アスロック、対潜誘導魚雷に切り替えます」

「北部に列車砲輸送完了敵補給艦隊に砲撃開始」

「西部に空母起動部隊配備完了しました爆撃を始めます」

「敵空母艦隊発見八時の方向、巡航ミサイル発射」

「そうか、じゃあちよつと艦隊見てくるから対処よろしく」

圧倒的ではないか

サテキヤがないのが辛いがまあ気にしないでおこらう

核兵器はまだ本格的にはつかわないか

そういえばまともに口を聞くのもこれが始めてか
いつも部屋にこもって計画練るだけだしな
勝つためとはいえ随分と大掛かりだよほんと
さつきからヒリヒリするな、攻撃が激化してきたか
まだ数分だろうに

まだ第一防衛線の時点で一部はいるし、お守りに女神でもこっそり
渡すか

「……ガチャガチャうるさいなあ何隻いるんだ」壁・

うわ、めっちゃいる、食堂でこいつら武装整備もしてやがる。

まあ出撃用ドックに集中的に砲撃されるしな、閉めていようと衝撃
くるしこっちの方がいいか場所も中央だしなんならここの水路から
各戦線に動けるし

あ、潜水艦組が水路から上がってきた

あくそっちの方向は入渠用ドックの水路か

我ながら実用性しか考えないせいで色々ひどいな、水路ももう少し
繋がればよかった

でも誰も池が他の部屋に繋がってるとも思わないだろうなあ
なんか今はいっぱいいるし後でいいか
それよりも修理施設とかの方を見ないと

……そういえばここ扶桑もびつくりな違法建築だったわ
確か地下二階だよな

エレベーターは統一して助かったよ
うわーひでえ

12階から地下7階まであるよ

てゆーかこころ辺にも線路敷いてるのか……額縁の裏にドリルと
か機銃もあるのが面白いな

お、ここか

「うわ、なんだこれボロボロすぎるだろ」

「あ、提督。そりゃあそうですよ、これ全部第一第二艦隊の人達が出した廃棄物ですから」

「夕張・・・どういうことだ、俺はまだ第一第二艦隊に出撃おいまさか」
「あの人たちは新手の空の魔王ですかっつてはなしですよ、ああもうこんな旧式さっさと分解して最新に変えましょ」

「いやそれ、46cm三連装砲」

「レールガンとか100cm三連装砲がメインな時点でこれはもうごみですよゴミ、使うだけ使つてさっさと捨てるに限ります」

「そういえば奥で何やってんだ？ここって確か前の方だろ」

「ああ、今はこのゴミの中から使えるパーツを私が集めてそれを奥の明石さんに運んで即席の爆弾とか主力兵器の修理パーツとして直したりしているんですよ」

「あるえそれ金剛の艦装それも星とかだったようなあ」

「ゴミです」

「あつハイ」

ごみつて

ほぼすべて既存艦娘の艦装がごみになってんぞ

あれなんだあの鎧みたいな艦装

「ん？これ直さないのか？」

「あ、それ加賀さんがどっかの研究所からパクったらしいのですが構造が意味不明なんですよ、なんか金属置いとけば自動修復するのでそれ任せです」

なんだこれ原型ないぞ

おいジ・Oの原型どこだ

始めてみたときと比べてもおかしいよ

試作3号のあれだこれ

「そうか」

「ユウバリサーンゴミトドゲース」

「貰っておくよ（なんだこれ砲身が曲がってるどころか吹っ飛んで

る)」

「またゴミばかり、もう」

「ちよつとその完全に使えんごみをクツキングするか」

「どう使えばこんなはずたぼろに」

「はい完成、艤装を要塞内に取り込んで排出した砲丸です」

「・・・泣いていいですか」

「使えるパーツ外しはできないから頑張つて」

「妖精さん達が此処が最後の見せ所と言ってマウスを全部持っていつ

ちやつたんですよねそのせいで人員不足で」

「まだ新品の旧式艤装も見ると結構辛いね」

「他人事じゃないですよ・・・こんなのはつかりだとほんと」

「廃人提督どもが無限に周回したせいで生まれる無限の艤装を使い潰すわ捨てるわほんとひでえ」

ドタドタ

「夕立さんが来ますねこの足音」

「このごみ山に隠れれそうだな」

「ちよつ」

「夕張さん、睦月型装備の廃品回収を頼むっぽい」

「あのね、夕立ちちゃん、流星にそろそろ休まない？もう100セットは艤装捨ててるよ」

「・・・たかだか100セットっぽい」

「・・・そこに修理のすんだアトミックバズーカ置いてあるから」

「提督さんを本気にさせないために夕立たちは頑張らないといけないから助かるっぽい♪」

(その本人いますよ)

うわ、なんだあれ磁石かよ何個装備背負ってやがる

「はあ、こんな感じ他の人も来るんですよ、神風アタックで何も残さない加賀さんだけが救いです」

「神風アタックで救いとか末期だな」

「提督の影響か意外と私たち平気でブラックなことができますからね」

「まあ頑張つて、ここまで敵が来れば多分俺は本気になるから」
「それってこの鎮守府吹き飛ばすって意味じゃないですかやめてくださいよそんなこと」

「まあ低速の夕張はね、内閣総辞職ビームの回避はできないからね」
「うう、分かっているけど辛いです」

「またくるよ」

「次来るときはおにぎりでもください」

b

さてと、とりあえずこの鉄屑投げるか

「そこらじゅう妖精さんだらけだなあ、ここでいいか」

「ここら辺から海を眺めるのがいいんだよねえ」

まあ、その海は今地獄絵図だな

「射撃修正、全砲門斉射!!」

うげっ

「ここでレールガン連射してたのか大和」

「あっ」

「もういいよ、勝手にしろって言ったのオレだし、とりあえず砲丸投げしに来ただけだから」

「え、ええと」

「ピッチャー投げます!!」

うおっやべっ

「砲丸貫通・・・」

「なんだこのパワー、本気で使うとここまで行けるのか、奥の艦隊に狙うか。大和、レールガンで観測できるか？」

「はい、おそらく」

「よしきた、このゴミクズの砲丸を一度取り込んでばらして散弾にしたろ、石ころも速度があれば凶器なんだ、鉄だっこれぐらい」

まっすぐ投げる

ストレートっていうんだっけか野球は興味ないのよね

「敵艦隊に少し被弾、着弾は全部貫通、そのうち二隻は機関部を抜いたのか爆発を確認。斉射、始め！」

「お、なんか水平線の向こうで爆発が」

「とりあえずもう少し増やすか」

「もう一発」

お、航空機

「急ぎの第三球投げます！」

「風ぎ払うように投げるって考えてやると難しいな」

「・・・提督・・・ハイってます？」

「やっばい、楽しいわこれ、あ、球切れた」

「私も弾薬が丁度切れたので補給に戻ります」

「そう、なんか球なくなって覚めたわ、他のところいつてくる」

「あつ」

そんなみえみえな罠に引っ掛かるわけないだろうが

一旦状況確認でもするか

「提督より連絡班へ被害状況を報告せよ」

「連絡班より提督へ被害今だなし、しかし各戦線の弾薬の消費も想定
の倍を越えるため長期戦は不可能」

まあ、あいつが俺を相手に小出しなんてしないか、やらなきや確実に負けるって知ってるもんな

「第一要塞壁を爆破する、全部隊を下げ弾薬もすべて第二壁に運送急
げ」

「了解」

「提督より第三第四艦隊へ、第二要塞壁にて待機、また循環艦隊のロー
テーションをαからβへ移行」

こんな真冬の日に全軍突撃かあ

ほーんといやなこった

要塞壁を爆破したら一旦休むか、航空機は双方後がねえほど吹き飛んだ

こっからは本格的にひっくり返してみるか

第一正面門

まずはガトリング砲でもくらえばいいよ

「辛いよなあ侵入ルートがここだけなんて」

弾はちやんと徹甲弾だからな

とはいえ多いなああれだけ沈めてもまだまだわいてくる

一歩一歩

自然に下がっていかないとなあ

「提督、退却は完了しました」

「了解つと、じゃあ敵さんには埋まってもらうか」

そもそもこの要塞、俺ありきの構造だからその柱がないなら結構簡単に自壊して崩れるんだよ、あんだけぶっばなしてたら普通はな

「……とりあえず第一フェーズは勝利か」

予定より速いな

これは今日持てばいいぐらいだな

それよりもなぜあいつは居なかった

正直あいつが正面から突っ込んでくれば俺か加賀さんが絶対に出ないと……まさかな

いや、やるはずだ

あの男はそういう男だ

クソツタレ

とりあえず会議室で集まるか

「提督、先の戦闘の結果報告書です」

「ああ、ありがとう加賀さん、それよりもなんかおかしいとは思わなかったか？」

「居ませんでしたね彼女」

「?どうしたの加賀さん、さっきからソワソワしてるけど」

「実は・・・長門お願い」

「・・・絶対に不味くないか?」

なんだいったい

「構わん、言っておくれ」

「・・・実は敵の艦隊の八割を沈めました」

?

は

?

俺の楽しみは?

え?

マジで勝てる?

いや、ええ

「加賀、長門、アイオワ、ビスマルク、大和は固定でこの中からこの報告に本気で喜んでるものは部屋から出るアンポンタン」

うわ、マジで出ていった

「・・・はあ!?何でそうなった!!あいつはナイフとフォークの使い方し
か知らんかったのか!?!」

「そもそもなあ、俺から見ても義とかは条件は全部向こう持ちだろう
がなぜ押し込めないんだ」

「誰だよいったいあの突撃厨、指揮官無能じゃねーかやっぱ人類無能
すぎて大っ嫌いだ!!」

「いや、ガチガチに対策とってメタ取りまくったの提督」

「加賀さんそれは黙って、とりあえずあの糞雑魚艦隊どものせいで計
画台無しだよバーカ!!」

「そもそもなあ、ルートが決まってるんだからそこに沿って突っ込んで
こいよ、無駄に堅いところを攻めて何になる」

「付け加えるならなあ、無駄に包囲が長すぎるんだよ、あの糞環境で長時
間包囲は無理だって気づけよ!!」

「あっちの上層部はしっかりと環境の確認もできん無能かい」

「奴等は持久戦と短期決戦を見極める判断力が足らんかった」

「故に負けたんだよ、あいつならマジギレして官僚肅清まっしぐらだったよそうスタちゃんだよ!!」

「ああもうこれ下げろ、目に刺さりたくない糞報告書が」

「はあ、なんかどうでもいいよもう、こうなったら中途半端に手を抜くのもやめよ、疲れた」

「これから多分この要塞に核が降ってくるからちやんと中にいろよ、俺は少し予定を組み直すから何かあったら地下の整備室にいるから」

「提督・・・」

「多分最終ラウンドは午後6時だよ」

もうなんか疲れたよ

あれだけの物量差が本当にこんなあつさり覆ってさ。

命の取り合いもここまで来ると面白くはないな

下らないと言えば下らないな

やる気の無いやつ相手にムキに攻撃しかけるんじゃないやねえよまったく

さてと、こうやってのんびりするより。

本気の殺しあいをしてしないな

今度はいつも来るだろうし

「襲撃回数19 撃破艦約23900 損傷箇所無し 防衛ライン最終 大破艦無し 残弾なし 光学兵器過半数機能停止 核兵器10発のみ」

完璧ではないが、十分だ

一八〇〇

これで敗けだな

「通信班より各戦線へ上空より生命体反応」

ほらきた

すぐくる

お届けもんだ

防ぎきれねえよな

相手はマツハで飛んできてんだ当てるのは無理か

「爆弾の投下を確認!!」

でかいな、一撃で吹き飛ばすつもりか？

落とされた鉄の卵は空中で破裂し大きな赤ん坊を産んだ

これが人類の作った火なのだろうか

くだらない

この程度の炎でこの俺を焼けるものか

「被害報告を急げ」

・・・久しぶりに血なんて流したな

「全出撃用ハッチ融解!!」

「第一装甲蒸発!!」

「全地表兵器消滅!!」

「地上設備消滅!!」

「地下施設被害甚大!!」

「防衛機能の九割が機能停止!!」

「第三ドック消滅!!」

面白い

面白い

「提督より最後の通達だ」

「総員、投降の推奨だ。以上で俺からの指令はもう無いお前らのやり
たいようにやれ」

あくまで推奨

自爆シヨールに付き合うならくれればいい
通信機も破壊しとくか

いや、あえて残すか

「ほんと、笑うしかねえよ」

少し待とうか

l a s t e m p e r o r

「ハハハ……最悪だよほんと」

どうしてこう知るのが遅かったのだろうか

こんなにも尊いというのに

「提督……提督ッ!!」

「加賀……俺はさ、望みすぎたのかな？力を求めるために全てを捨てすぎて、さ」

「もう……これ以上は」

「ごめんね、もう前も見えないし、暖かさも感じれないんだ、もうすぐ俺は死ぬ……だからさ、もういいんだよ」

「そんなの……そんなのはあ」

「そういえば俺はみんなの願いを叶える一種の願望器として居続けたけどさ、加賀さんの願いだけはまだ聞いていなかったね」

「えっ……」

「もう……時間なんて……残ってないけど……この死体でも叶えられることはあるんじゃない？」

「俺さ、不器用だから……姉さん居ないと何もかもが中途半端……ハハハ」

「私は……っ」

「願い事はあるんだね、その声でわかるよ」

「私はもう一度あの日に戻りたい」

「フフッ……そう、戻ってもこれの繰り返しだよだって俺は何が出来るかと「狂帝」だもん」

「いいえ、提督は提督です……実際夜は」

「……どうだろうね、もうわかんないよ、男としてなのかただの願

望器としてなのかなんてさ」

「ッ!!」

「やり直すんでしょ、じゃあこれを持っていくといいよ」

「えっ……」

「過去へ飛ぶ程度造作もないことだよ……全てを知るものならね」

「提督……」

「だからさ、この終焉に向かう未来を無くしてよ……全部に終止符をうつて」

「……提督」

「どうしたんだいずいぶんと決意を抱いているようだけど」

「あなたの命を私にください」

「……フツフハハハハハハ……ごふっ……ふふっ」

「もう、提督は「狂帝」である必要はありません、私が必ず!」

「そう、じゃあ賭けるね……こんな力しか見ていない馬鹿を止める時が来るのを」

「提督ッ」

「ああ、それでいいよ、この体さえ取り込めれば君は最強の艦娘だ……どうしてこんなに悲しくて暖かいのだろう……」

「はあ、随分と手を焼かされたがこれで世界の終焉を迎えられるな、ああ、貴様さえいなければなあ!!」

「提督……いえ、狂帝。貴方はその体にいるべきではないわ、今すぐに消えなさい」

「ハア?俺は俺だ、これ以外の生き方なぞ知らん!!」

「ふぎけないで……貴方はただ空っぽの器に蔓延るただの害虫よ」

「その害虫がなければ俺はいないさ……この空の盃に入っているのは憎悪と殺意だけだ!」

「ならば力で押し通しまで」

「ハッ！どれだけほぎこうが所詮その程度か……好きだったよ加賀」
ドスツ

「ううう」

「随分と計画が狂ったものだよ、イレギュラーもここまで来ると目をつむるのは不可能だよ、ねえ、加賀」

「……黙りなさい」

「はあ、その目気に入らないなあ、何日目だい？」

「さあ、もう何日目かしら、それでも私は諦めない、貴方さえ倒せば提督は」

「くだらん、結局空の器に毒の代わりに水をいれるだけだ、なにも変わらんさ」

「んっ……気のせいかなにか懐かしきもあつたな」

階段を登る音が聞こえる

きたか

「ふう」

「よお、ふっちゃん、今日は何日目だ」

「……」

「じゃあここで死ぬがいい」

第9999話 エピローグ

抜刀

純粹な居合い

ただの居合い

下手な小細工もない

ただの一降り

これは産まれて刃物を持った頃からずっとしていらしい
そんな記憶はどうでもいいさ
裂けた

この要塞を裂いた

だがもうどうでもいい

本当にどうでもいい

今ほど楽しく何もかもを思考停止したい時はない

「good-bye」

敵を叩き落とし要塞の自爆スイッチを起動する

「おっと、綺麗な炎だ」

すべてが崩れる

全てが灰になる

もはや同期なんて全くしてない

もう終わりだ

退路は双方もう無いようなもの

こっからはノーガードの殴りあい

回避不能

行き着く先はなんとやら

「全戦線弾薬欠乏！」

「全兵装使用不可!!」

「要塞機能消滅！」

「核兵器射出完了!!」

「機甲師団壊滅!!」

「第三艦隊全艦大破!!」

「修理材欠乏!!」

あつけないものよな計画が完全に狂ったよ
もう数年殴りあいをするのもよかったけどこうなったらな

「敗けだ敗けだ敗けだ・・・でも勝った」

「実際そうだろ、お前らはここに居すぎたんだよ、おかげで今ごろ本当の敵が刃を磨いで待っているさ」

「なあ、ふっちゃん」

「・・・そうだな、戦術的勝利。戦略的敗北さ」

「じゃあ聞こうか、その同期、あと何分持つ？俺は無制限だぞ」

「さあな、もうすぐ活動限界さ。ついっさきまで、夕立と加賀に時間稼がれたからな、だが、お前の同期も大丈夫か？」

「仕組みもお見通しか・・・」

たしかにそうだな

無制限ではある

だがそれはあくまで要塞内の話だ

要塞外ならもって2時間

いや、被害の面からしてももう数分か

お互い、こういう分野への研究には余念がなかったか

「なら、そうだな、本気でやるか」

「喋りながらガトリング砲向けるのはやめておくれ」

「おっとすまんなにも考えてなかった死んでくれ」

予測射撃

跳弾

この二つはやっぱり得意だな

やっぱ人間得意不得意あるんだな

「おいおいよしてくれよ閣下もう全身に弾がめり込みやがった」

「じゃあもう一度吹き飛ばせ」

拳を低くする

足を置く

あとは雑に跳べばいい

正拳突きって言われるやつだ

そしてすぐに回って踵落とし

おっ避けたな

じゃあ即座に爆弾で吹き飛ば

「火力が上がってきたなあ」

「……」

さーてと、不意打ち効かない奴にどーやって勝とうか

後五、六分もすれば全体に火が回るな

思考なんて邪魔だな

考えて斬るじゃあ間に合わん

全部直感便りでいくか

「はやっ!?!」

何が起こったか? 理解不能?

もう思考もない

これで良いのだ

一撃殴れば衝撃で奥の壁が壊れ

一度脚を振り落とせば地面が割れ衝撃は下層まで届き

一刀は全てを両断する

そこにもはや思考はない

獣かなにかだ

だが、それゆえに強いのだよ

なあ、お前のやり方結構合ってたわ

この世のありとあらゆる攻撃を覚え

この世のありとあらゆる防御を覚え

この世のありとあらゆる反撃を覚え
それを全て直感で動かす
純粹故に強く
純粹故に脆いがな

俺は人一倍

他人を殺す術を学んでいたのだ

経験は裏切らん

人生の大半が武器の作り方や急所の確認に

効率的な攻撃と防御そして反撃

人生経験？

学習？

前者は無いが

後者は取ったな

まあ結局復讐さえおわつちまえば無用だったがな

事実は小説より奇なり

好きだったよなその言葉

本当に奇妙だよな

気がついたら

変なところにいて

気がついたら絶望して

愉快なものよなあ

!?!?

「はあっ」

「ようやくか、あぶねーなほんと、途中で同期切れちまって死ぬと思っ
た」

血だと

いや違う

時間切れか

糞、脳天ではないにしろ心臓か
一度引くか

「クソツ!!一旦退却か」

ん?

生暖かい

そういえばここは修理用入渠ドックの上か思考回路止まってたからわからなかったが無意識に来てたか

お、酸素魚雷だ、ついでに

「逃がすかよ、お前のことだそこにある酸素魚雷で下半身を吹き飛ばし、この要塞のそこらじゅうにある艦娘でも取り込んで復活する気だろうがそうはいかねえ」

「おいおいおい、そんな大槍で首切断しながら言うことかよ」

「こうしねえとお前痛みねえから逃げるだろ」

「そうか、そうかそうかそうかあ!!ならばここで貴様が我があ!!」

「黙れ、テメーは今からその体で一階まで戻ってもらうぞ」

馬鹿め

「ハハハハツハハツハ!!さながら三部のようだなあ!!」

「?!?!」

「貴様の言うことは正しい。だが!!貴様はこの要塞の構造を叩き込んでいなかったなあ!!」

「まさか」

「そのまさかやお!!ここは入渠ドックの上だ、つまり俺を踏みつけら貴様はミスをおかしたのだ!!」

「待てっ!!」

「oh、そういえばその酸素魚雷と体はくれてやるぞもう不要なんだよ」

これが俺の逃走経路だあ
なんちつて

「ああ、貴様のおかげでこの肉体のほぼ全てを艦娘と同様のものにする、貴様この俺との知恵比べに負けたのだあ!!」

熱い

肉体が一瞬にして再生

強化

増殖

力がわいてくる

力だ

力こそがすべてだ

力で全てを統べる

それこそが全てよ

接続

把握

汚染

プログラム改変

システムの起動を確認

再生

再生

再生

再生

再生再生再生再生

破壊

プログラムの起動を開始

error 非承認

汚染

error

error

プログラム変更

適合

深海棲艦の適合を確n

させねえよ

「フハハハハハハ、最高だ、これが力か、不死身、不老不死、艦娘パワー!!今この瞬間をもってこの俺は全ての生物をぶっちぎりで超越したあつ!!」

「野郎・・・」

「聴こえているぞ、貴様、この俺が高々数十メートル先の声も聴こえないほど者とは思っていないかろう」

反物質装填

照準確認

終焉だ

「回避不能さ」

二七発の黒い雷球は周囲を飲み込みつつ爆発

この一撃だけでもう普通なら決着はついている

「ふんっ、遅かったなあ、随分と手こずったな」

天より降り注ぐ数百発の砲弾

大方あいつらか

「攻撃を避ける意味もない邪魔だな失せろ」

「嘘だろ、あいつ全部素手で弾きやがった、あれ一応対重装甲用に開発した多層弾頭式の徹甲弾だぞ」

「だいたいこのぐらいか」

「!？」

「別にここまで跳んできただけだ驚くか？」

「別に・・・ここが罠だつてことなだけさ」

なんだこの糸

いやワイヤートラップか

「ならばっ」

上下から砲撃

糸!?

次は右と前か

また糸

やるな

流石にまともに食らえば駄目か

「次に貴様の言う言葉はこうだ」

「二閣下、貴様は確かに艦娘と相当の存在になったしかしそれは完全な化け物になったわけではない、もし貴様は時間停止なんてものを持っているいたら俺に勝ち目はないがここで貴様の全てを明かさせてもらう!! ツハ」

「だがこれ以外に手はない半径二十メートル俺の最後の策!! ワイヤートラップ!!」

数二千方向全方位

ならばよからう

「そうか、ならば俺も全てをだそう、そうこの俺の艦装の真の能力『ルフトシュピーゲルング』でなあ!!」

蜃気楼システム起動

「消え「遅い!!」かはっ!？」

決まったな

なにい!!

こいつ蹴りを食らった瞬間に俺の脚をつかみやがった

「ふっ、確かにルフトシュピーゲルングだな、蜃気楼とは言ってしまえば気圧の変化とかで起きる幻影みたいなものさ」

「ええい」

再起動

「おっと、消えちまったか」

「仕舞いだあ!!」

「ぐっ……流石に至近距離でそんな攻撃を食らえばただじやすまんか」

「貴様あ!!その力、まさか」

「ああ、女神を一撃で数匹吹き飛ばされるとは思わなかった」

やはりな、こいつははじめから両腕と足だけをか

「貴様の蜃気楼は発動中こそ全攻撃をすからせれるが攻撃もできんのだろ」

「いや、物理干渉を不可能にしているだけさ、だがな、こうやって捕らえていようが倒さねば何も変わらんよ」

「オメーもう限界かよ、実は俺ももう無理だわ」

はあ、ずいぶんなこった

「名残惜しいがもういい、満足だ、俺はもう境地に立った、後は貴様らに任せるもし、再起動を願うやつがいたら別だがな」

体が耐えきれず左腕が落ちたか

おもしろいな

「フハハハハハハ、提督より全残存艦隊へ、直ちに戦闘終了、投降せよ」

天地が反転する

もう全てが終わったのだろうか

誰も起こさないだろうか

もう疲れたよ

なぜだ

なぜこんなにも熱いのだ

「……まだか」

まだなのか

ん？

腕？

ああ、加賀

そうなんだ

「……泣くなよ……少し運ぶぞ」

この棺桶でいいか

「……そういや渡し忘れたな女神……お疲れ様、俺の最高の……」
鍵はいらんか

接続

適合可能

異常無し

ふはは

最後に借りていくぜこの左腕

まだ俺は望まれているみたいだ

もうすぐ月が落ち始めるか

最高だ

「やあ、地獄のそこからこんばんわ」

「……どうした、地獄で引き取り拒否でもされたか」

「ああ、狂帝は奪われたけどどうやら提督は不要なようだ」

「ふっ、面白い、お互い結局まだ殴りあい足りないか」

「どれだけ力を手にいれようが結局は生身の殴りあいか」

「ラツシユの早さ比べといくか？閣下」

「ふっ、本当にもう最後だ、面白いものを持ってきてやる」

「なら九秒待ってやるよ」

「ふっ、なら、始めようか」

もはやなんの意味もない戦い

ああ、これだよこれ

いいなあこれ

最高に楽しいよ

「ラツシユは俺の勝ちだあ!!これが最後の蜃気楼、これより発動時間
時間十二秒で貴様を倒す!!」

「やってみろ」

「ルフトシユピーゲルングシステム起動！」

さあ、あれを持ってこようか

「一秒経過」

「元帥超高速で接近するがあっつ」

「なに!？」

「いいものだなこれは」

「二秒経過」

「元帥が海に落ちた!!救助班急げえ!!」

「三秒経過」

「超高々度から落としてやるよ」

「四秒経過」

「これで最後か・・・」

「はい、加賀さんはもう」

「五秒経過」

「二人がいなくなったらもう、どうすれば良いんでしょうか」

「・・・それは」

「六秒経過」

「帰ってきたぞ悪友!!!」

「七秒経過」

「これが俺とお前の最後の勝負だあ!!」

「八秒経過」

「これが最後よ!!」

「九秒経過アアア!!!」

「成層圏ギリギリが落として来たわ戦艦大和だあ!!!」

そう、それは超弩級戦艦大和であった

直後二人は同時に拳を構え再建造された大和を全力でぶん殴った

「オラア!!」

「フハハツハこの戦闘すごいよさすが生身の殺しあいだ!!」

「十秒経過・・・まだだあ!!」

「十一秒経過ぶっ潰れろお!!」

一撃入魂

放たれた拳は大和をそのまま地上まで押し潰したが

「これで終わりだあ!!」

途中で大和は完全に粉碎し

双方ともに地上に落ちた

ああ、もう本当にダメだ

「お休み」

まだ地獄は迎え入れてくれないのか

悲しいなあ

「もう、服もボロボロじゃねえか」

「・・・おいおいおい、もうむりだってなんだよお前、やっぱ化け物だわ」

「……日の出だな、貴様の最後は俺が見届けよう」
介錯というよりかは追い討ちだなこりゃ

「……まじかよ」

「じゃあなあ!？」

熱源体反応!？」

これは

「ツツツツツツ!!」

ザブーン

巨大な波の音と同時に迫る巨大な敵

「何?!」

「ちいつ」

「いや、深海棲艦か」

「今さら来たところでなんになると言うのだ!!」

「しゃあない、俺も勝者を今さら負かす気はない

「褒美だ、受けとれ」ドンッ

「うぐっ、お前」

「提督!!」

「……」

あーあ、最後に見れてよかったよ

第一部 完

第貳部 極帝死闘 第33話 真の敵

s y s t e m e r r o r

c o d e 2 2 0 1 2 0 9

e r r o r c o d e 6 6 6 6 6 6

侵食率100

自己再生開始

データより更新点を呈示

自己進化開始

m e m o r y の 消 去 を 開 始

e r r o r

権限移行

侵食率59

脅威沈黙

冷たい

どこだろうか此処は

それよりも誰だ？

記憶がない・・・のか

暗い

深淵とでも言おうか

暗く冷たく、光が全く届かない海底か？

「もう、お休みください、誰にももうあなたを起こさせはしません」

誰だ？

後ろか？

「フッフフハハハハ!!」

なぜ笑える？

もう自分がなにかすらわからなくなってきた

「ほお？そうかそうか、誰も俺を望まないか、そうかそうか・・・そ

のわりには随分と苦しそうではないか」

「……苦しくなんか、ありませんよ」

「そういう奴ほど苦しんでるんだろうが、違うか?」

なぜ顔を隠すのだろうか

なぜ目を見て話さないのだろうか

あの目はなんだ

何を語りたいのだ

「……あなたに助けてもらおうのは何か違うような気がするんですよ」

「随分と弱々しいな、下らん」

マントは……ボロボロか

コートもひでえな、焼けてやが……ん

なぜ俺はこれを手を取った?

まあいいか、きっとこれさえあれば本気になれるのだろうな

「……私ってほんとダメですね、あの時からもう三年なのに全く日

本侵攻出来ないなんて」

「そうか……辛いか」

なぜ共感する

なぜここまで歪んでいる

まるで楽しんでるではないか

いや、楽しいか

楽しい楽しい

逆境だからか?

もうわかんないや

「姫……艦隊を揃えてさっさと行くぞ」

「えっ……待って、それだけは」

めんどくさい

「構わないさ、もう全ての用意は完了しているのであろう?」

「……出ています、全ては私の理想、あなたの願いのために」

「嫌いじゃないよ、その瞳、しっかりと見据えている……強くなっ

たな、ただの頭お花畑のお姫様が気が付けば一人前の指揮官じゃない

か・・・」

「えっ？今、なんて」

なぜこんな言葉が出たのだろうか、まあいいか

さてと、天使と踊ってみるか

「艦装吸収・展開・・・完了」

「・・・後戻りはしません、私はもう一度だけ、あなたに頼ります、弱くてもいい、ただ勝ちたい、あの絶対的な強者に」

「了解した、ならば始めようぜ、人徳も価値観も切り捨てた最悪の戦争を」

「ふふっ、そうですね・・・空母棲姫の権限を持って命じます、全クローン部隊起動を許可」

蜃気楼システム起動

大気圏突破用ブースター装着

うん？

なんだこれバスターライフルか？

なぜまっ先にこれをというよりなぜこれがそうだと

まあいいか

「先陣は貰うぞ」

「殺人的過ぎませんかその加速」

ブースターに火がついた瞬間

世界が一瞬歪んだ

だがまるでそのあとの恐怖すら楽しんでいるようだ

怖い

これほどの加速は久しぶりすぎる

だが、もう慣れた

目標まで残り三十秒

推進材残量にまだ余裕はある

三次元戦闘艦装に変換

核融合開始

脚部艤装自立起動開始

目標捕捉

月はないか、悲しいな

撃破目標200

空母無し

修整完了

発射

狂っていた、命をたやす炎

これは到底使つてはいけない禁忌の兵器

故に面白く故に素晴らしいのではないか

これほどの命が燃えるその一瞬こそが

「遅いな、対空射撃もこんな小型の人には当たるまい」

空から水中へ

水中から水上へ

艦橋や船底にバズーカや魚雷を叩き込み一隻一隻確実に仕留める

もはや音速で動いている人に爆雷もミサイルも三式弾も意味を成

さない

それどころか目視不能だ

もう雑を通り越している

狙つてないようにしか見えん

再充電の終わったバスターライフルの引き金をもう一度引く

この一瞬は無防備だ

だが射程外からの狙撃なら意味もないか

「・・・目標沈黙・・・新規目標捕捉・・・補給部隊か」

背中に背負っていた長い棒を変形させる

バスターライフルの装甲を一部抜き変形させたロングバレルを装

着し実弾をする

観測機無しの超遠距離狙撃

普通なら無理であろう

だがなぜだろうか、こいつならいけるような気がする

hit

まずは一隻

またhit

今度は機関部だ

体が覚えている

どうすればいいか

どう殺せばいいか

どうすれば敵を簡単に殺せるか

目標撃破

策敵範囲内に敵性無し

撃破数212

上々だ

弾薬は尽きたがまあ、まだそこら辺の砲や魚雷を使おうか

侵食を開始

復元不能

権限の移行確認

艦娘の汚染開始

抵抗率0

汚染終了

自爆機能の付属

完了

自動航行機能使用

目標横須賀鎮守府

自爆機能使用

自爆開始地点横須賀鎮守府ドック内部

そういえばあいつらおそいな

「三年といえど所詮この程度か」

「やっと追い付きましたよ」

遅い、まあいいか

「遅い、一艦隊潰す暇はあったぞ」

「素晴らしいですけどね、こっちはクローン部隊の初使用なんですよ」
「結果は？」

「問題なし、やっぱり有り無しじゃ違いますね……とはいえ、今回は一旦退却ですねこれは」

流石に主力のひとつを潰したかもしれないからな、しようがないか
「とりあえずクローンの運用も本格化できるのであれば話は別だ一旦帰って計画の練り直しだ、そうだな、とりあえずこの三年で何があつたか細かく確認したい頼めるか」

「わかっていますよ、勿論大丈夫です……弾薬欠乏って、何隻沈めました？」

「百程度だとおもう」

「主力ですね、空母が居ないってことはこの付近の基地でも吹き飛ばしに来たのでしょうか」

「知らん、だから帰って確認するんだ」

戦いに情報は必要不可欠だししようがないね

第34話 三年間

無数に並ぶ鉄の水槽

黒色の鋼は海を埋めつくし

世界はこんなにも紅いのか

溢れ出すこの衝動はなんだ？

前々から思っていた

この■■■■■■■■■■はなんだ？

たまに走るノイズが煩わしい

こいつもあいつもどこか底が見えない

わからない

恐いのだろうか

「以上がこの三年間の出来事よ」

「そうか、連中もいい加減追加艦装に手を入れ始めたか」

「ええ、あなたの要塞の破損データを執念に集めて作り上げているわ」

「で？気が付けば連中はその生産量と艦娘の数で押ししてきたと」

「ええ、練度や数は圧倒的に不利だったのを無理矢理圧倒的に技術力で覆っていたのにそれすら追い付かれ始めたわ、まあそれももう終わりでしょうけど」

そういつてスクリーンに移された計画

「ほお、ついにこの合金の再現まで可能になったか」

「ええ、これでああなたの望みを・・・私の理想を叶えられるわ」

『播磨計画』

随分とまあおぞましいものを取り出したなあこの女

「月面や隕石の希少金属を含んだ特殊合金なんてよく考えたわよ、人類じゃあこれは不可能だわ」

「まあこれは完全に理論上可能なだけで実現不能だからな」

「ええ、これなら対艦娘の核兵器も効かなかったわ」

ん？

「効かなかった？なんでもう作ってたのか」

「ええ、私と貴方はこの金属を使ったもの、まあ、そんなものはどうでもいいわ、本題はこつちよ」

やっぱりか

「懐かしいな、このプロトタイプ計画案」

「自己再生、自己増殖、自己進化最悪の兵器ねこれ」

「世界に産み出した私が言うのもなんだけど、本当にひどいわ」

「周辺の物質に侵食なんて馬鹿げてるな、それどころか自己増殖を繰り返して無限に兵器を生み出すとかひでえもんだ」

「コアさえあれば動き続ける・・・から」

「泣くな、お前が弱いからといって泣いてもなにも変わらない」

「その弱さが貴方を起こしたのでしょうね」

参ったな、答え方が思い付かん。

「まあいいさ、クローン艦娘は便利よな、心がないから逃げもせず、艦娘らしく学習をする、クローンだから作成は簡単、人道？しるかそんなもん」

「全てを総統さん一人に背負わせるところさえ除けば勝てますよ」

「・・・自分の未熟さを嘆くな、俺だって弱いときはあった、だがな」

「捨てるものを全て捨てて俺は力を得た、たったの十年かそこらでさ、結局精神論なのさ、やれると思っただからできたそれだけの話、だから進め、進んで成長しろ、背中や小道の石くらい俺が取り払ってやる、全力で走れ、走って倒れてまた走れ」

「わかっていますよ」

おもしろいな

「泣いてるか？」

「泣いてません」

「やっぱ泣いてません」そうか、なら戦争のやり直しだ、地図出せ地
図」

うわ真っ赤

太平洋と北米だけかよ

「戦線に対して部隊数が十分回っているな、要塞線も出来てるし上出
来だ」

「もう覆せるでしょうけどね」

「それだけ条件が揃いすぎたからな、じゃあ先についての手を打とう、
とりあえず無理に日本列島を落とす意味はない」

「え？ですが」

「逆だ逆」

「逆？……逆ですか」

まあちよつと意地悪だったかな

「よく考えろ、王手打てば勝ちだってことだ」

「王手……王手……周りを固めてからですか？」

「普通はそうだな、俺もそう思う、あんなガチガチの要塞に全面戦争な
んて賭けやるわけねえよ、まず補給線を絶つてやるだろうな俺のいつ
た逆はそうじゃねえよ、なにも王手の打ち方が一つじゃあねえもつて
ド派手にやるんだよ」

「まさか……」

読めたなこれ

「別に日本列島を落とす必要はないつまり沈める」正解っ」

「いやどこが逆ですか」

「王手」

「王手の逆って……何もない……何もない……ええ」

「別に王手がチェック何て言っただけよ、王手だもん」

「酷い」

別にこれだけの資材があれば人工的に津波を引き起こして沈める
ぐらいできるだろうな

別にこっちは人道とか知らん、ただ殺すそれだけのシンプルな答え
だ

計算上射程範囲だしこれが最高なんだよな。

「だからまあ、爆薬の準備でもしておいてくれ、開始は来週だ」

「……それはいいですけど……いえ、そういう人でした貴方は」

第35話 蘇る恐怖

「人間」は結局同じ過ちを繰り返す

「俺」は英雄でも救世主でもない

「私」は「俺」だ。

ただの脱け殻になにができる

あんな下らないものをみてなんだ

愉快ではないか

結局「人間」は「人間」だ

なら消すか？

間引くか？

面倒くさい

世界のために己を犠牲にするほど俺はできちやいねえ

効率よくやれるなら構わないさ

そうだなあ、ざつと十年か？

余生も満足に生きるために掛けれる時間は。

ああ、あつたではないか

人間を効率よく消すことができる世界が

ここなら平穩に暮らせる

あの糞貯めみてえなところに居なくてすむ

まあ、今まで積み上げた成果を全部捨てるってのが条件なのが辛いがまあまた積み重ねよう

「爆薬セット完了しました」

「……敵艦隊は」

「来てはいますが間に合うはず無いですよ、あとその体勢……」

いいやもう限界だ

「押すね！今だ!!」カチツ

直後連鎖的に海中が爆破し小さな揺れは次第に大きく

全てが計算通りだ

昔、陰謀論だったか忘れたが津波を兵器として使える兵器があつた

そうな

所詮人間の創造よ

ならばこの俺がそれを形にしてやろう

今、この一瞬をもつて俺はまた一歩進んだ

この瞬間はいつも清々しい気分だ

なんとさえばいいだろうか

そうだ、マラソンや短距離走の世界大会でnew recordを出したときの感覚だ

俺は効率よく殺す

だが効率的すぎるのは勿体ない

被験者は何億といるのだ

考えろ

長すぎず殺りすぎず

手段があるから殺れるのさ

だから考えろ

次はどうするのか

よし、こうしようか

「敵の反応は？」

「どんだん日本に押し戻されています……」

回避不能の死

無駄だったな

そういえば暗いな、記憶が確かなら防壁とかもあったろうに

……いやまて

おかしいぞ

初めから防げないとわかっているくせになんだこの大量の艦隊は

あいつなら多少の想定をするはずだ

俺があいつを出し抜けた？

いいやない、津波兵器ぐらいこのぐらいの技術があると知っている
ならわかっているはずだ

まさかカウンターか？

もし最高のカウンターを放つなら

『なあ、加賀さん、この馬鹿デカイライフルなんだと思う?』

『プラズマ砲・・・ですか』

『まあ、そうだな、日本の全発電所を使った戦略兵器とでも言おうか、まああれだ凄いビーム砲程度でいいぞ』

しまった

「あれ」だけは間に合わずに放置していた

あんな兵器あいつならすぐに何かつてわかる
ならばあるのはひとつ

「どけっ!!!」

不味いな、ロックはすんでいたか

だが、これが最善だな

「総統さん!?!」

日本を捨てても大将を消せば勝利だもんなお前ら

国なんてもんは土地と人さえあればいくらでもできるしな極論

銀色の閃光

ああ、これが走馬灯か

いや、無いね絶対にな

この俺にそんなものはない

俺は狂帝だぞ

人の願望を叶えるために

戦術的敗北はもらってやってても

戦略的勝利はやらん

だがなあ

俺はこんなことで死ぬか

たかだか数兆アンペアだかその程度だろうか

第36話 黒き月は鉄十字の世界を見るか

がらんとした倉庫

もはや原型もない無数の鉄の残骸

帰ってきた

帰ってきたのだ

だが、この廃墟には誰もいない

それもそうか

この要塞は完全に潰れていたもんな、数年でどうにかなるわけ無い
か

黄金の甘い酒

いや、蜂蜜酒だ

うん、こうやって一人で飲むのも良いものだな

全てはここからか・・・

いい加減捨てないとなあ

ただ、愛着もわくしな

目を背けることが悪いとは思わないが

いつまでも放っておけばそれはそれで面倒だよな

まだ先が見えるだけ・・・かあ。

結局力を手にして何がしたいのだろうか

虐殺なんてもう下らんし

果てを指そうにもいずれ・・・

ああ、そうだったあのために力がほしかったんだな俺。

なんだ、良いのかよ。

これから先もずっと戦争しかないのだ、もう考える意味もないか

もう壊れきっていることぐらい自覚はしているが酷いものだな。

なにも考えなくていい

ただ戦いを楽しむだけ

それが欲しかった

それを得た今になってなぜか虚しいな

どれだけ殺そうがなにももう感じない

ただ面白くないだけだ。

殺すことにつまらなさを感じるなんて珍しいものだな。

いいや、違うね

そんなの気紛れだ。

上に立つ必要がなくなつて良いではないか

わざわざ導く必要がないんだ。

責任から逃げているだけ？

実際は誰かに任せたいだけだ。

誰かがやってくれるなら

俺は自分のやりたいことに没頭できる

だがそれも終わっちゃまった

長いようで短いのだな。

少し。

明かりが欲しいな

「中には誰もいませんよ♪」

メルヘンチックなお姫様

月明かりにただ一人黒い軍靴で動き出す

されどそのお姫様には色がありません

それを傍観しているあなたはきつと赤い薔薇で染め上げられて
いるでしょう。

「……提督……私は」

は？

「黙ってる」

鳴り響く大きな音

ただの平手打ちにしてはずいぶんと感情的ではあった。

「泣くな、戻るな、後悔するな、知っててだろ」

「………そんなの」

いつもこうだ

いつも？

「常に完璧を求める必要はない、別に俺が完璧を目指したからってそこまでを模倣する意味はない、悲しいけど、繋がりがあって大事だわ、まあ、うん、すまないな、全部丸投げして、言葉がみつかんねえやほんと」

もう満足してんだよ、これ以上、何があるんだ。

「もし、百万の兵を退けたのなら、希望はある、故にその刃まだ留めておくと良い……星を調べ、異物を受け入れろ……これは最後の助言だ」

なに言っちゃんでんたろ。

信じている……か。

他人を信じるのって結構難しいものだけどなあ。

栄光も名誉も地位も価値もなにも要らない。

だから敵をくれ

永遠と殺せる敵をくれ

一種の芸術でも見せておくれよ。

「どうでした？久しぶりにあえて」

「……意外と苦しいな……俺は強いつてわけじゃあないからさ」

「あの人の言う通り見てて楽しかったですよ、あんな情けない顔」

「おめーな」

今にでも泣き崩れて良いなら泣きたい

その前にこいつは縛って海に捨てるか

「まあ、これからどうするつもりだ？攻め続けてればかてるが時間はかかるぞ」

「取り敢えず姫、鬼辺りを世界中にばらまいて戦争でも始めましょうか」

「……しゃあない、太平洋戦線は俺が毎日攻勢するからその部隊は遊撃部隊にでも回しとけ」

「……いつそ太平洋戦線の部隊を全部引っこ抜きましようか」
「は」

は？

「別に、私達とほんのちよつとの量産艦娘でなんとかなるでしょ」
そこまでしろとはいってないのだがなあ。

まあいいか。

「採用」

「王が素っ裸だけど最強だから大丈夫戦法」

「不採用」

「(*・ω・)そんなー」

「ヾ(・ω・)」

第37話 独帝再臨

深い

そこは光も届かない深淵。

ここは全ての船の墓場なのか

私は演じるだけだ。

何を演じればいい？

了解した。

その瞳に答えようではないか。

「燃料タンク補給完了。カタパルト用意完了、出撃用意できました」
さてと、少しだけ、いつてきますか

「……随分と解析が進んでいるようで何よりだ」

そのうち光学兵器も本格的な用意ができるかな？

「じゃねえーとーと直結した大型ライフルって随分と余剰火力じゃありません？」

まあ、そうだよな、宇宙世紀でやってけるもんだもな

まあ、ロマンがあるからいいじゃないの

「一撃で戦艦を沈めれるんだ、わざわざ機関部に対艦ライフルぶっばなすよりらくさ」

「あと、あれ以上ブースター積むと加速で死にますよ」

「俺は耐える、それだけさ」

「いやいやいや、あんなの一日足らずで地球一周はできますよ、その意味わかります？」

「体が千切れるな」

殺人的な加速っていいよね

「あれだけブースターと補助のバーニアも倍増しておいたので多分追いついてくれない様なことにはなりませんよ」

「そうか、なら予定通り敵主力艦隊をたった一人で蹴散らしますか」

「数は大体1000ですはい」

無理ゲーかな？

「あれ、武装は？弾薬足りる？」

「八連406mmガトリング砲とミサイルコンテナと51cm砲とかフルアーマー状態ですし」

あ、きついな、核いるな

「アトバズ無いの？」

「メガバズ有りますよ」

「じゃあない、第一射だけはそれでいいか」

「あなたの場合当てそうで怖いですね」

「別に、当ててしまってもかわんだろ」

盛大なフラグを言いつつカタパルトの上に乗る。

ぼこぼここと蠢くと言うよりは沸騰しているようにも見える赤黒い泥が全身を覆い、肌を焼き、皮膚と混ざりあい凝固していく。

「・・・これがはじめてのフルスペか？」

「・・・正直、その異形の怪物のような姿は見たくありませんね・・・」
射出と同時に背中中のエンジンが一斉に点火され艦娘でさえ肉さえ千切れるような加速に肉体はもはや使いものにならなかつた。

死んだ

その事実だけだ。

だがな

もう肉程度無くても良いのだ。

鎧の隙間からこぼれ落ちる己の肉体だったものの一部を眺めつつさらに速度を上げて空高く上空へ昇る。

やり方はいたって簡単。

大気圏ギリギリからの敵艦隊総旗艦のと周辺艦隊への狙撃。

大体成層圏あたりだろうか、敵の艦隊の一部が見えた。

やっぱり、来たか。

そう思いはするがもはやこいつには関係のないことでしかなかったな。

何一つ顔色変えず砲を向け、チャージを始める。

それに気づいたのか一部艦娘主体の陣形が崩れ始めたがそのとき

には

天より落ちた黄色い光が何もかもを焼き払っていた。

空っぽになっているはずの悪魔はなぜかその一瞬だけ笑っているようにも見えてしまった。

「さてと、軍艦さえなけりや艦娘なんて航行距離はたかがしれてるんだ、一気に決めさせてツ!!」

海上から放たれた一本の矢をとっさのところまで避けはしたがメガバズはもちろんのように爆発四散した。

いや、はじめから狙われていたのだろう。

どれだけ速かろうが止まるときは止まる。

ああそうだった。

もう、周辺の艦隊は始末したんだったな。

ほんの一瞬の出来事。

ただ最大速度で突っ込んで砲撃。いたって簡単だ。

「・・・肉体は飾りだったな・・・弾薬も全部叩き込んだし、なあ、戦略的退却を薦めるぜ」

「提督・・・戻ってほしいとは願いません、もう、眠ってください」
数は一？

俺はそんなアホなことは教えた覚え

いや、違うか。

「加賀さん、俺はさ、もう俺じゃねえよ」

「知っています、その殻が全てを語っています」
全部見透かされているのは面倒だなあ。

刹那、世界は書き変わった。

なんの前触れもなく海面は凍り、全身に穴が空いた。

「・・・いてえな、不意打ちかあ・・・」

「・・・本体ではありませんね」

気づくの早いな

「まあな、じゃあ、このリトルボーイと一緒に吹き飛ばうか」

栓を抜いたと同時に海底を全速で動き、戦線を離脱する
海底に足をつけたと同時に大きな爆発音が響いたような気がした。
何故だろうか、なぜこんなに楽しいのだろうか。

殺しなんてもう飽きたはずだ。

今さら戦争を楽しむ？

アホらしい

こうやってじゃれあってるのが心地いいだけなのか？

もう敵の主力はいない帰ってもいいではないか。

「……生きてるな、あの程度でくたばる訳はないか」

ガトリング砲やバズーカを捨て、手から大剣を作る。

結局、重火器なんか弾がなけりや邪魔なだけなんだよ、最後は殴り

あいだ。

残りの燃料からもう短期決戦のみ。

勝機は無いがまあいいだろう。

「加賀……その手でもう一度……」

彼女はもう物言わず刀を抜いた。

わざわざ弓を捨ててまでだ。

戦いとは常に同じ敵との戦闘はそう想定してない。

故にとつたのは至極真つ当

血が飛び。

内のものが流れ出した。

「……だめかあ」

大剣を投げ、注意を向けた直後に全燃料を使い裏手に回った抜刀か
らの流れるような牙突。

結果はご覧の有り様

胴体に思いつき斬られた傷口があるだけ。

満足だよ

「……………何故、なぜそんな真似をした

『加賀』」

本当にくだらない。

なんだいったい

糞が

俺の体だろうが

お前は退場だ『深海棲艦』

「この化け物をなぜ……………知っているはずだ貴様は……………はやくどけ

「一体何時、私が人類の味方になったとでも?」

「……………ふざけるな、そんなもの艦娘……………まさか、貴様!!真つ当な艦娘ではないな」

もう遅い、気づくのが数分違ったら結果は変わったな。

「ええ、私が『狂帝』いえ、『演じるもの』な、だけですから♪」

「馬鹿な……………ことお……………」

うまくやったよ。

ほんと

考え方を変えたな。

「始めに何があった……………かは、大体想像できよう……………貴様は空母加賀の霊でありながら、その身はただの借り物なのだろう、ただ形を変えただけの怪物」

ん?

何処へ行くのだ?

いやまさかあれか

バカ言うんじゃない、自殺行為じゃねえか。

「……………彼処まで、あそこまでいけば……………」

「わかりました……………もう少し見逃してあげましょう、そこまでするなら止めはしません」

もう、諦めればいいものを。

第38話 役者

もう少しだ。

こんな世界間違っている。

壊さないといけない。

こんな悪魔どもは滅ぼさなければならぬ。

這うのだ、命なぞ軽いものだ。

「・・・流石に連戦は無理だったよ。くー」

「それはそうですよ、そうだ、例の装備の解放が完了したので・・・場所
は地下二回の13ドックです」

勝った。

本体さえあればもうこのおどましい存在も、あの棒を抜けた怪物も
消せる。

世界を正常にするのだ。

思い出した。

私の使命は異物の排除。

いずれ来る異物を排除することだ。

消してやる

もう何百回目だこいつらに世界を破壊されるのは。

巨大な黒い物体。

まさにこの世ならざる兵器だ。

さあ、全ての憎悪で排除しよう。

「・・・知っていますか？13つて一部では裏切りを意味するらしいで
すよ」

「!?」

待て、止めろ

混ざるな

まだ足りないか

何億殺せば気がすむのだ

無限だよ

無限に殺したいんだ

殺すことしかもう何も無いんだ

今の俺は殺すことしかもう感情として残っていないのだよ。
復讐からはなにも生まない？

下らんジョークだ。

産まれたじゃないか

殺意しかわかなくなった狂った皇帝が。

望まれたから産まれたではないか

私が。

空っぽの人間にも案外出来ることはあるんだよ。

「これで完全にあなたは退場です、深海棲姫……気付いたのは昔、
とある施設で見たレポートです、そう、あなたが眠っているときにで
すね、全て知ったんですよ」

そうだな、力は良いものだ。

軽く振るえば数億の人間が死ぬ。

最高だ

面白くなくなつたおもちやを掃除するには最高の力だよ。

もう一度生命の未来を見てみたいのだよ。

不老不死なんて夢が叶つたんだ。

何度でも消して何度でも作つてやる。

殺しつてのはな。

効率良く殺るもんだよ。

チマチマやつてたらくつだらねえよほんと。

爆破テロ？核兵器？

くつだらね

全ての生物を殺す生物兵器を産んでばらまけば簡単かつ広範囲の
生物を消せるではないか。

まあ、うん。

ぶつちやけどうでもいい

簡単かつ大量に殺せるならなんでもいい。
人殺しに時間はいらねえんだよ。

じゃあ殺ろうか。

素敵なパーティーでも。

艦装は収縮し変形し異形の何かへ変貌する。

それはもはやこの世のなにかとは思えないものだ。

億万とある眼球

無数の一部が裂け肉が見えたりする尻尾からただれる黒いどろつとした液体

所々にある口のようなもの

常に動き続け形を変える赤黒い装甲。

殺すためだけの舞台装置だろうか。

いいや、もうどうでもいい。

これで仕舞いだ。

「滅べ滅べ滅べ……我が理を敷き全てを無に還そう……どうだ、いいかな？」

「うーん、ダメですね、なんか下らないです」

「(*・ω・) そんなー」

「まあ、戦いは終局ですし、いえ、最大級の厄ネタが居ましたね」

知ってたのか。

「そうだな、記憶があっても正直そりやあとんとんだしなあ、実戦経験、素の性能両方負けてるってこりやねえよ」

「そもそも、あなたが拗らせなければこんなことにはなりませんよ」

「うっせえ、ついこの瞬間が楽しくてループさせれるの知ったからループさせたら加賀さんぶっ壊れちゃったよ。なんて想像できるか」

「加賀さんはほむほむじゃないんですよ」

「まあ、うん、人類滅ぼしても多分俺になり変わろうとしてる時点でしょう、ろくでもない」

「で、どうするんです？ 艦装はとんとん、記憶もとんとん、経験と基本スペックガン負け×2 + αであんな感情のないあなたをどうやって止めると、全裸なんかよりたち悪いですよあれ、フツーにアウトレイジ射撃で殺されそうなんですが」

「うーん、取り敢えず深海棲姫絶対ぶつ殺せんと記憶戻ってこないのは確定だしなあ、そのくせあいつこの本体毎度毎度別の海底に隠すから掘り出し面倒だし・・・」

「あなたがさつきと素直になれば良いじゃないですか、こんな体にしてたくせに」

「うっせえ、八百回以上殺しても折れない加賀さんがおかしい、俺は悪くない」

「でもあなた心ボロボロですがってくる女即殺したことあるじゃないですかやだあ」

「うるさいうるさい。折れないから好きなんでしょうが、だからぶつ殺す。でももう勝ち目無くなってきたよ、なにあれ、トレース？ トレースなの？ マルパクリされたんだけどwww」

「ええ・・・人間味あつてもこんなに拗れちゃいみないですよ」

「あいつといいお前といい・・・まあいいよもう。少し寝る、作戦考えるわ」

「じゃあ先に卑劣な死者蘇生でもしてますね」

「そんな亡霊風情であんなの倒せるか」

「1ダメ入れば御の字ですよ」

「それもそうか」

寝室

で、あんなのどうしろと。

後ろから狙撃しようが避ける

二百トン程度の爆薬じゃあノーダメ

核兵器を投げつけてくる

なんか自己再生自己増殖自己進化する。

艦娘を強制爆破できる

艦娘生やせる

射程距離地球

刀パクられた

どうしろと。

寝よう。

(例の音楽)

「昨夜はお楽しみでしたね」

「開幕やめろよ、後取って付けたような服は止めろ」

ほーんと、こりゃねえよ。

「で、役者は揃いましたが、どうするんですか？」

「無理だ、もうこれ以上ハツタリ効かん、負けだ負けww」

「あなたが諦めて人柱になれば世界は救われるんですよ、あなたが勝とうが負けようが記憶保有時点で自殺確定の時点で駄目なんですよ」

「私は白夜さんではない、ただのしがない演じるだけの役者だ」

「情けないやつ!!そんな大人修正してやる!!」

右ストレートがおもいつきり顔面に直撃した。

これが若さ(?)か

「許せ、楽しくなつてつい死んじやうんだ」

「・・・」

「どうせ今回もあいつは俺になり変わろうと虐殺をする、そして俺は自爆する」

「バイツァ・ダストじゃないんですよ、あなたが自爆って」

「遊び尽くしたゲームはそれ以上価値がないのだ」

「そういえば前のループでそんなこと言っていましたね」

「普通に殺つて勝つても面白くないからふぎけ始めたら加賀さんの精神崩壊起こつたのはなんかもう悪いとは思った」

「じゃあさつきと人柱になってくださいよ、あなたがふぎける毎に何方と言う船の魂が燃え尽きては再生しているんですよ」

「知ってる知ってる、でも俺は自爆する、いや自爆しなければならぬ」

「もし今ガトリング砲ガン積みの艤装を纏ってそれをいつていたらグーでひっばたいていました」

グーって、そこまではいらないだろ。

「まあなんだ、全部俺の責任だ、だが私は謝らない」

「たった二人だからってぺらぺらぺらぺら言いますね」

「・・・そうだな。そうだ、あの青い悪魔を止めるの無理だから自爆するね」

「おいこら」

「へーきへーき次の加賀さんはうまくいく」

「・・・あなたがちゃんと加賀さん抱けばいいんですよ、なーんてどのループでも他の有象無象はあっさり許して、加賀さんだけ冷遇なんですか」

「・・・正直な、俺、望まれたらなんでもやるけどよ、本音は戦争だけて、寝たい人間だからよお、止まりたくねえ」

「その戦争に飽きた結果、こんな無責任なことに」

「知らんよ」

「やっぱりこんな男、修正しないと」

「そういう物騒なのはよせ」

「総統さんもお甘いようで」

「ヘッドショットやめーや・・・いてえ」

あー、血が止まらない。

「・・・落とし前つけてください」

「それも千回以上聞いたよ、だからバイツアダストするね」

「逃げないでください」

「やだっ、どう頑張ったてあんなの勝てない、だから自爆して時間巻き戻して逃げるー」

「ほんとあなたって人は・・・」

お、折れたか

「さてと、自決用爆弾で」

「・・・で、この糞みたいな茶番いつ終わります?」

・・・

「正直ね、今回は勝てる自信ある」

「・・・毎回そう言ってるワルプル戦ばかりじゃないですか」

「へーきへーき、今回のループは次回への布石だから」

「・・・あのぐしやってなる感覚嫌ですねえ」

「取り敢えずロケットとか核弾頭数千あるし、なんとかするよ」

第39話 最高の相棒

黒い空

荒れ狂う風

下がり続ける空気

海底より這い出る巨大な黒い化け物

もう何度目だろうか。

途中から負け始めたけど悪い気はしなかった。

負けても勝ってももつとも楽しいのはこの瞬間だ。

戦争は素晴らしいものだ

下らない正義と正義を殴りあいをするだけの下らん遊戯だ。

数億の人が死ぬその瞬間は実によい

人の悪意が作るのはなんだ

人の悪意が産み出すものはなんだ

人の悪意が起こした悲劇と喜劇はなんだ。

なんでもいいか。

そうだなあ、もうこの世界には人間なんて全くいないのか。

なあ、何でそんなに成り変わりたい。

戦う理由が無くなれば俺が死ぬとでも？

愚かな

ただ、演じるだけの仮面に感情はない。

なにもわかつちやあいない。

正義と悪を持つてる時点で俺は殺せんし止めれない。

さあ、今回も失敗だ、お前の負けだよ加賀

もう一回殺して、戻ろうか。

何度でも何度でも進め。

「なあ、くーちゃん、隕石はちゃんとあるよな」

「どのループでも隕石はありますよ」

レールガンから放たれた十三発の弾は真つ直ぐ地球から飛び出し、ただ、隕石群の機動を変え、砕け散った。

「26発ですか・・・核で弾かれなければ」

「うつせえ、あいつが下の人類どもに気をとられているうちにけりつけるから急いで兵器を集めとけ」

「そうはいいますけどね、今回は研究中心でゼーんぜん、兵器なんて揃えてませんよ」

「それでも大型ロケットとかあるだろ」

「はいはい」

懐中時計を開いてちようど十二時になったとき26個の隕石が真つ直ぐ落下していった。

それらはすべて直撃したが、装甲を弾き飛ばす程度だった。

実験は成功だ。

「やったぞ、効いた、流石に空からは無理か」

「まあ数万発の実弾よりは有意義とはいえ、次はきついでしょうね」

「それでもあれだけ当たれば良しさ、弾薬さえ残れば勝算はある」

ああ、これがいいな、この絶望を越えてみたい。

あいつのあの無力を認め崩れ落ちるその一瞬が見たい。

もう、頑張らなくていいのにさ。

よほど俺が嫌いなんだろうな。

進んで転んで立ち上がって。

もう、こつちの精神もズタボロだったのに無茶しやがって、だから粹組みから抜けるのはやめろって言ったんだ。

もう少しでゴールなんだ、行くところまで行ってしまえ

「・・・あーあ、艦娘弱いなあ、もう全滅か」

立ち上る黒煙。

赤く染まる海

本物の化け物ってなんだと思う

・・・

なんだろうな

「なにか面白いことでもっ」

「なあ、クーちゃん、俺はさ、こつちに来てから面白半分生きてるけどよ、こーみえても根はあるんだ」

「怪物があんな純白のお姫様を汚すなんて実にダメな人」

「そのとつてつけた笑いはやめろ、まあね、原因はあれだけどきあ、見てみたいじゃん、縛り付ける鎖がなくなった獣の姿」

「艦娘という枠組みから剥がせば・・・無責任ですね、その結果があれですか。実に結構」

「うーん、そうだな、うん。正直ね、もうそろそろ俺は降りる」

「おや、もうそろそろゴールですか?」

「ああ、もう少しすれば俺は死ぬよもう、勝てる気がしねえ、いやもう、勝つ意味も負ける理由もないってのが正解か」

「演じるだけの皇帝様もそんな嬉しそうな顔できるんですね」

痛いところ突かれるなあ。

こんな奴に良くまあ時間かけてくれたよ。

「・・・お前はもう帰って良いぞ」

見つけたな。

ああ、あと少しだよ。

「帰れと言つてももう、帰る場所はありませんよ、ゼーんぶ。射程内ですから」

「それもそうか・・・」

はあ、もう思い出せないか。

「・・・良かったんですか本当に」

「なにがさ」

「記憶を代償にループなんて、一応残してはいるんですよ」

「・・・俺はずいぶん弱いし下らない奴だよ。こうでもしなきゃ俺は俺でしかないんだよ」

「情けない奴」

チヨップ痛い(・ω・)

「ストレートな物言いだね」

「なーんで、貴方は世界単位なら完全なまでの悪役を出来るのに女や部下一人にはそんなに情けないんですか、ずっと組んでる相方の私からすれば恥ずかしい限りですよ」

「なあ、結構きてんだろ、感情的だぞ」

「誰だつてこうなりますよ、第三者からすればカリスマも能力もあるのに近くにいればただの情けないダメ上司ですから」

「酷いなあ、それでも身内には優しいんだよ俺」

「ええそうですねえ、身内には無駄に甘くて敵対者には特になにも感じることも良心の呵責もなくぶつ殺すし核兵器を罪もない敵国の一般人に数十発ぶちこむんで、裏で戦争起こして本人は高場から酒のんで愉悦。ええ、実に」

「・・・メンチ切らないで、こわいよ、なんか」

「それどころか正義や悪をめんどくさいの一言でポイ捨て、他人の価値観全否定を乗り越えてガン無視、やってること言ってることぜーんぶ屑のそれ」

「いやあの、今すつごい照準向けられてるんだが、そう襟を捕まれると」

「停滞嫌いの癖になーんにも教えずニヤニヤ眺めるだけ」

「痛い痛い、絞まつてるよ」

「それでも、後ろをついてくる人いるんですよ。何故か分かります」

「・・・」

やっべ、苦しい、意識飛ぶ

「・・・あつ」

「・・・くるちい」

「はあ・・・情けない人」

「・・・泣くなよ、俺なんてこの程度なんだよ、俺は演じるだけの役者じゃ無いんだよ」

「これが最後かもしれないの・・・なにバカな話してるんでしょうね、私」

悲しいかな。

いや、いいか。

もう、狂帝はいない。

いや、もうこの役はやめよう。

でも、誰かがこれをしないと、きつと。

また俺は戻ってしまうんだろうな。

この温かく冷たい仮面に

「・・・もう、最後か」

「・・・え？」

難しいな、人に服を着せるなんて姉さんぐらいだからな。

あ、取れた。

「よし、これでいいんだ」

「あの・・・これは」

「お前がやれ」

「ちよ・・・」

「お前がやれ」

「・・・ええ」

「お前が「もういいです」(・ω・)」

「そんな顔しないでください、言いたいことは分かりますよ」

「悪いな、こんな押し付け・・・」

「捨てきるためにずいぶん遠回りしましたね」

なかなか様になってるなあ。

「ああ、そうだな、俺は弱いなあほんと」

「戦場に立つてるときのあの強さはどこですか一体」

「その服に全部あるさ」

「うわっ、すっごい清々しい」

うわー、なんかとんできた。

「そんな目で見るとよ」

「はあ、これがあの悪魔のような男の本来の姿なんて嫌なもんですねえ」

「人間こんなもんさ、英雄なら別だろうがな」

さつきから砲撃が痛いな。

「・・・もう、進まないのですね」

「もちろん」

「・・・はあ、もう一緒に立てないのですね」

「悪いな」

「このループが終わればもう敵同士、お互い殺し合うなかですか」

「だな、面白いだろうな」

「……」

「黙るなよ、こつちもこまるでしょーが」

「黙りますよ」

「(・ω・) まあ、うん、勝手にだもんな」

しようがないよなあ

もう、最後なんだし。

まあ、いいか、その程度。

「人類なんてどうでもいいんだよ、ただ、こうやってのんびりしてる方が合ってるだけさ」

「……ずいぶんと遠回りでしたね」

だなあ。

「じゃあな、相棒」

全兵装起動

目標数1

機能限界点突破

全海底兵装接続

照準固定

「……はじめは全く逆だった。お互い長い時間殺しあったよなあ」

一発一発確実にロケットを叩き込む作業。

無数の光

無数の命

全て無価値だ。

この一瞬は本当に世界が止まったようだ。

泣きたくなってきた。

ただの人になにができる

いや、まだか。

まだ俺は俺か

最後の演劇だな

やってやるよ

それを望んだのだ。

「一斉掃射でけりをつけるか」

世界は綺麗だが人間は醜いな

その醜さが気に入ったのだがな。

ああ、そうだなあ、何を

ああうん

そうだね

「さようなら、役者」

「……て……い」

もう、忘れちまったな。

なにか大切な、大きなものを。

ああそうだ

次はどうしようかうん。

最終話 l a s t d a n c e

崩れ落ちる黒い肉。

全てが終わった。

これで全てを捨てた

ああ、これでいいのだよ。

もう俺は不要だ。

後は、な。

帰ろう

もうこれで全てが終わったのだ。

怪物はもう不要だ。

この選択に悔いはない

ようやく全てが終わったよ

なあ、次からはなにも背負うなよ……。

ただ、迷惑な客は居るようだな。

全く、全部台無しではないか。

傍観者は仕舞いだ

「やあ、さつきごぶり」

「うわあ、台無し」

こうやってふざけるのももう残りわずかなのか。

「・・・後何分だ」

「死亡確認から20分経ったので後10分で戻りますよ」

「そうか、なら、最後の舞踏としゃれこもうか」

ジェットエンジンを一齐に点火し、一気に空を駆ける。

肉体なんて良く考えれば邪魔なものでしかなかった

今、この瞬間ほど気分がいい日はないな

バズーカのリミッターを解除し、外付けのパーツを加える。

やっぱりいいよね、トールギスⅢ

無数の対空砲火、狙いこそいいが所詮この程度か

人間壊れるところまで壊れば行けるんだよ

どこまでもどこまでも

でもそれもおしまいかな。

「これで狂帝は本当に終わりだ」

引き金を引き、一撃で頭からぶち抜く。

00:00

あつっ。

あつっい

なんかうるさい

「んう……うっさい、なんか用？」

近くにあったサングラスをかけ椅子から起き上がり砂浜にたつ。

「いえ、ただ演習結果を渡しに」

「そんなもん加賀さんがすればいいよ、ワシは寝る……なんか……な」

「……提督……」

「どうした、そんな思い詰めた顔をして」

何故だろうな。

「許してください」

「……どうした、今回はボロ負けか？まあ、相手が相手だししゃあないよ」

「……いえ、そんな生易しいものではありません、ただ……」

「なにも言うな、きつと加賀にとつては辛い事だったんだろう」

そんな目で見えるなよ、悲しさしか感じ取れねえよ。

「まあなんだ、取り敢えず艦隊の練度をちゃんと上げないと、最近入った子を連れてまた遠出してきてくれる？」

「……はい」

……なぜそんなに落ち込んでいるのだろうか。

まるで大切な人から大切なものを奪ったような目だ。

後悔か？

何に後悔している。

「それはそうと、一体いつまでここにいる気だ、深海棲艦」

「あらあら、そんなこと言っちゃいます？」

女の声は随分と聞きなれていた

不思議だな、初対面なのに

「……あまり感心せんな、今ここにいるのは人間と人類の敵だぞ」

「……そうですね、ですから？そんなもの私には関係ありませんよ」

「そうか、なんだその目は。何がおかしい」

見透かされているようで怖いなこのドイツ軍服みたいなの着たやつ

「ゼーンぶあなたの筋書き通りですよ『狂帝』さんいえ、今は『人』でしたっけ？」

「……何を知っている、随分と見抜いてるようだな」

「全部ですよ……全部、あなたの書いた絵のように進んで終わりました……お疲れさまでした」

？

そういえばなにかが抜け落ちていたが。

このことか？

「……なぜ敵にそんなことを言われねばならんのだ」

「……そうですねえ、強いて言えば、『代償』でしょうか」

「……そうか」

代償？

記憶か？

なんだろうか

「居なくなってるし……まあいいか、寝よ」

??????

レ?????
クイエム

私は一体

なんのために戦ってきたのだろうかしら。

枠組みから外れ

同じ世界を繰り返し

何もかもを切り捨ててまで

届いた思っていた

掴めたと思っていた

それは全部

私の身勝手な妄想であった。

「お前が兵器である限り、俺はそれを使うだけの破壊者でしかない、始めっから人の感情を使う理由もないんだよ」

一体どこで間違っただのだろうか。

「・・・下らんな、これが戦争か」

どこで近づけば

「あーあ、また、死んじやったか」

後どれだけ強ければあの人から涙を無くせたのだろうか

あの絶望しかない心の中を

「あいつだってもとは人だ、まあ、他者が望んだからって化け物になれる奴は人間かはしらんけどな」

止められなかった

殺しても

殺されても

滅ぼしても

消し去っても

あの心は・・・いや、無い

あの人に心は無かった。

皆騙されていた

皆測りきれなかった

でもそれは仕方がない。

ただただ、人間が化け物になって、その化け物が人間の側に入り込み、無数の人間を分析し、ただ一流の役者のように人間を演じていた。そう

ただ人間が人間を演じていた。

気づけるはずがない

ガワだけは全て人間でしかなかった。

人が人の心を演じ

人が人の思想を語り

人が人の感情を出していた。

だけど違うかった

あの人は本当に空っぽの何かだった。

あの瞳には何が写っているかわからない。

ただ、破壊を好み

殺戮を行い

正義を生み出し

人を人にするだけ。

あの人は弱者が嫌いだった。

自分が弱者であつたから気に入らなかった。

なぜ気に入らなかった？

きつと大切な人のためだ。

あの人は別に本気で人類が嫌いなわけではなかった。

あるループでは一人の少年に拳銃を持たせ

あるループでは一人の男の野心を叶えさせ

あるループでは一人の凡人の心に刃を持たせた。

どれもこれも世間一般では犯罪の助長でしかなかった

それでも

これまでの行いのなかで見えたものがあつた。

こうやって落ち着いて考えれるからこそわかるのだろう

あの人は「停滞」を嫌って「進化」や「覚悟」が好きな人だった。これらも歪んではいるが

世界を変えたいと言う少年に力を貸していたときはあの人は「俺はただあの男が栄光をつかむか下らん末路を往くか見ただけだ、別に深いものはない」と、言ったが、目がとても笑っていた。

なにかを変えたい、なにかを乗り越えたいそういうものを何でも良いから全ての人間に持ってほしかったのだろうか。

どれこれも

敗者の戯れ言ね。

所詮先を恐れただけの一人の女。

平穏や栄光、名誉、権力、財、女

全てを捨ててそれを全て己の欲求につき込んだ怪物には勝てないのよ。

実際

あの人は神の領域何て言われたところでさえ平然とまるで友人の家に行くみたいに土足で入り込み、荒らし回って

そして全てを得た。

それは普通のことなのだ。

他者を殺すのも

人を唆すのも

世界の平穏を率先して乱すのも

全部普通のことだった。

ただやりたいと思っただからやった。

はじめから勝てるわけがなかった。

何を血迷って私はあの天をも貫く巨大な何かに挑んだのだろうか。

「まだ、鎮魂歌を奏でるは早すぎるのでは？ レディ」

いつもの……

嘘

そんなはずがない

何故

何故何故

なぜその服を私が着ているの？

あり得ない

どうして

「……鏡つてご存じで」

私に向けられた鏡を私が覗く

その鏡には

私があの人を着ていた

どうして

これじゃあもう

「まだ諦めきれないじゃないですか」

泣いた

こんな心の底から泣いたのは少ない。

ああ、まだ希望はあるんだって思ってしまった。

全てを知ったからこそ

この希望は

最後の一矢になりうるものだ。

「……あまりこういうおふぎけは嫌いなんでちやつちやと確認とまとめをしますね」

「ええ、いい加減その姿を見るのも嫌になってきました」

本当に憎たらしい

「まず、あの人はあの人なので殺せません、というより、殺しても心無いんでなにもなかったように生き返ってなにもなかったように暴れます、まあ、今のあの人は『狂帝』ではなく『白夜』ですのでなんとかなる可能性はあります、あ、ちゃんと聞いてます？そんなライフ

の整備なんて」

「聞いているわ、それより続きを」

「・・・あーはいはいわかりました。じゃあちゃんと言いますよ、今回は今までと違い『狂帝』ではありません、よって少なくとも人類を本気で滅ぼす気も、深海棲艦を使って荒らし回るって気ではありません、ただ、傍観を決め込み、時に双方どちらかを唆して支援する程度、それが上限です、少なくとも世界が望めば、戻るでしょうが、世界が望まなければあの人はあの人のままです、ですがだからといって短期決戦でもありません、短すぎるとこの件を知っている空母棲姫がやらかしかねます、ただ、何があろうと落ち着いていけば良いです、まあ、本音言う結構絶望的です、あの人があのループのように『狂帝』ではあるが『白夜』であるのは厳しいです、正直言うあの人が『白夜』である条件は姉がいることだけであって、それ以外ではただの心無い化物ですよあの人、多重人格のぽいわりに実はどっちも本性ですは初見じゃ分かりませんよ、まあ、これが強みですね、あれがどっちかを判断できるのは圧倒的アドバンテージです、針に糸を通す以上の精密さを要しますがまあ、できなきゃここまでこれませんよ」

「誰も望まなければ役者にはならない、むしろ私たちが望めば良い、そういうことね」

「うわー、端的、だから嫌いなんですよあなた、ええはいそうですよお、あくまで役者しかできないのならさせれば良いだけですよええ、よくある恋愛ゲームの好感度管理ですよええ、まあ、その管理だけじゃあ強制バッドエンドコースなのは知っていますようけどね」

「それをやってしまった結果、こんな惨めなものになったもの、もうしないわよ」

「そうですか、じゃあ、あの人の言葉を借りて言いますよ」

汝、何を切り捨て何を願う

栄光か

権力か

世界か

貴様の覚悟によつては

私は君に力を貸そう

みせておくれ

その代償と報酬の結末を

「……似てません」

「許せ私、あの人の声、老若男女子安池田丹下とめっちや変わるからやりづらいのだよ」

「そう……じゃあ私は『世界』を切り捨てて、『世界』を望むわ……これからは本気の殺しあいよ私であつて私でないもの……いえ、空母棲姫」

「うわっwwばれてたwwこんなにチャラくふざけてたのにww」

「口はチャラくてもどうやら、それ以外は全ていえ、今はあなたが『狂帝』ですか」

「あーあ、もうやだ、まあ良いや、お互いあの人にバレないように取り合ひましようや、あの人ああ見えて姉さん譲りの魔性ですからね、下手に戻られても困りますよ私も」

「ええ」

ある昼下がりの鎮守府

七人の男が別々に執務室で遊んでいた

「はい、国士無双十三面待ちね、ドラって乗るっけ」

「あああああああああ」

「まーたこいつ最速で糞役決めてきた、こいつに運が絡むゲームやめよや、確かドラは乗ったろ、あ、リー棒あるし裏ドラも乗りまくったな」

「はあ、こいつ次は緑一色出しそうだな、あ、俺降りる、こいつのツモ連打にぶつ殺されるのは限界だ持ち金全部死ぬ」

「さて、ふつちゃん、いい加減やめよ」
「……ああ。俺のお」

なんだろうなこの虚無感。

ああ、そうだった。

空っぽか

「ん？どうした閣下、嬉しそうじゃねえか、殺しの案件作ったか？」

「……ん？俺が嬉しい？そんなに顔が笑ってるか」

「は？ありもしねえ心が嘲笑ってるからだろ、やっぱ変だな、こっち来てからずつと変だな」

空っぽ

空っぽなのに

なぜこんなに楽しいのだろうか

ああ、そうだ

分からないけどな

うん。

「そうかな」

(*・・ω・)

最高だよ。

「ああ、かもな、うん、とりあえずお前ら全員帰れ、部屋が煙草臭いし
いい加減寝たいんだ」

「今昼だぞ閣下」

「まあ、書類まとめた後に邪魔されたしな、俺は帰るわ、帰って響を頭にのせるんだ」

「あ、じゃあ俺もけえるわ、いい加減新兵器のテストしないといけないし」

「そうか、スタちゃんもムツソ帰るけどお前らはまだいるんか？」

「じゃあ、俺も帰るわ、どうせ、お前らもお開きしたいんだろ」

「そりやもちろん」

まあ、うん。

そもそも軍属がこんなことしてるのもあれだけどいいか。
どうせ、興味ないし

「(っ・ω・)っほら、帰った帰った」

邪魔物たちが消え、少し煙臭い執務室。

今日もか。

鏡の前に立ち、自分の顔を見る。

また、『嗤っていた』何にだ？

楽しんでるのか。

飲み込まれるような

深淵そのものような

ただ、闇に見せかけた無

何か狂っている

何かを忘れている

ずっとそうだ。

私は誰なのだ

死人がしゃべるわけなからう

何を切り捨てたらそんなおぞましい悪魔になれる。

人とは

もういい、どうでもいい

考えるな。

寒い

今、夏だよな

なんでこんな

気にしなくていいか。

ほんと、下らないことばかりだ。

???
火種

．．．
．．．

満月が屋根を照らす頃

黒を主体とした服を着た一人の男が屋根の上で寝ていた。

瞳は光を失っており、そこから覗けるものは

底の無い悪意のみ。

あらゆるものを代償にした結果でしかない。

笑えるものではない。

風が荒れ、海が騒ぎ、月は下界を照らす

何も感じない。

何故かって？

簡単さ

感じるだけの心が無いだけさ。

わかるわけがなからう。

ああ、そうだ、ただただ、人のふりをすれば良いだけだ、実に下らんよなあ。

「提督」

!?

あれ、うん？

「．．．．あ、『加賀』．．．」

一体何時から居たんだろうか。

まあ、気にする必要はないか。

「例の輸送部隊の件ですが」

「ああ、どうかしたの？」

「積み荷の中身、全部弾薬だとあえて情報を流した理由が聞きたくて」

弾薬？

弾薬

ああ、うん。
なるほどね。

「……『加賀さん』、知ってていつてるでしょ」

「……ッ!!」

やっぱりか

「なんで別の前線から別の前線へ本気で渡すと思ってる……ただの奇襲だよ」

「……弾薬の供給をすると嘘をいって無理矢理激突させるつもりですか」

「人道なんざ知らねえよ、少なくとも当日はあの海域に霧が出る、どの戦局もじり貧のままならな突っ込んで死んでも構わんよ、持っていくのは弾薬ではない部隊だよ、わかってるでしょ」

随分と気に入られないような目だな。

いや、なにか違うな。

嬉しさと悲しみを感じる。

俺の気のせいかな？

「……戦場は化かしますね」

「……人間、なんやかんやでも成長するさ、まあ決行日は明日だし、早く寝たらいいよ、空母組にはちよつと試したいものがあるから」

試したいもの？

まだ、なのね。

まだ

完成ではない。

まだ、光は消えていない。

「……新型の飛行甲板ですか？」

「?よくわかったね、なーんにもヒントいつてないのに」

「空母と聞けばそれぐらいしか差別点がありませんし」

「……じゃあ、明日の朝5時に頼むよ、テストは6時だしね」

そういつてまるでいつもの事のように屋根から飛び降り闇夜に消えていくあの人。

やっぱり時間はそう長くはないのだろう。

翌朝

・・・我ながら

俺自身の考えが全くわからんな。

なぜこうやって作れたのだ？

何もない一からなのにもまるで体が覚えているよにこの艤装を作れた。

戦略爆撃機の運用

馬鹿なのだろうか。

艦娘は従来のものより小型化されているからって拡張艤装を取り

付け無理矢理、戦略爆撃機を飛ばすなんてな。

私は随分と愚かだよ。

でも、何故だろうな。

絶対に成功する自信がある。

ジェットエンジン・・・。

ロケット

誘導弾

核

ああ、そうだったな。

もつともつと

先はあるんだ、見つけないと。

クラスターを弾頭に出来ないだろうか。

衛星兵器

生物兵器

人の業とは一種の進歩だ。

・・・体が重いな。

流石に無理だったか。

「・・・時間通り・・・あれ?・・・ちっちゃい・・・大和?」
「(ノワノ)」
?

ああ、お腹すいたけどまだ、食堂しまってるからか。
にしても変なの作ったな、なんだこの生物。
チヨコレート突っ込むか。

「(・w・)」

・・・指ごととはまあ豪快な。
・・・はあ。

「ずれてるぞ」

・・・あれ、PADが
直らん。

ぷにぷに

ぷにぷに

ぷにぷに

うん、ぷにぷにだなこの生物。

じゃねえ。

・・・ここかあ。

「(・ω・)」

「ほら、もうすぐ作戦時間だから戻り」

・・・今何時だ。

「提督」

うひゃあ

「ワザップ」

「テストの件とはこれのことでしょうか」

・・・そういえば。

一番始めに作ったのもこれでしたね。

ミッドウエー海戦に備えて何年も艤装の研究と製作の失敗を繰り返して出来た初の発明。

あの頃は私も一人の兵士でしかなかった。

「……製作……何年かかったんだろうな、三年か？……ハハ」

「……遂に、遂に完成しましたね……」

問題動くカタパルト

巨大な板へ続々と降りていく巨大な爆撃機。

この時ほど気分が高揚していたのは

……そして、これはきつと絶望の前触れだったのね。

ここで止めれなかった。

ただ、力が欲しかった。

あの力しか見ていない人に見られたために力が欲しかった。

側に立ちたかった。

でも

これは愚かな私がいけなかった。

誰もあの人の本質を見抜けなかった。

誰もその獣を見れなかった。

知りうるものは全てを悟っていた。

一番近かったと思っていた。

確かに近かった。

でもそれは近いだけだった。

近いだけであってその距離は水平線の向こうほど遠かった。

あの人に凡人の物差しを一度でも当てた私は愚かでしかなかった。

結果は現状

だけ

光がまだ指すのなら

空が私を見放していかないのなら

世界が狂った皇帝を望まないのなら。

私は何度だって立ち上がって見せる。

「……全機、発艦着艦問題なし。運用は可能です」

「ならば今すぐこの艦装の設計図を元に幾つか量産、それと実践運用も試すか」

「……設計に問題はありませんが、これをならすのには相当な時間と負荷がかかりますよ」

だろうな、でも心配無用なのよねえ。

「言うと思ったよ、まず重量が本来の十倍にまで跳ね上がるし、搭載機の数も結構増えるからな」

「……ブースターでもつけてます?」

「?……答えいつてないののよくわかったね、うん、姿勢制御バーニアを結構積んで機動力とバランスは取ってるからね、別に全面艦装にしてロボットみたくするのもいいけどそれするのむずそうだし、繋ぎだよ」

調子狂うなあ。

なーんか見透かされている気分。

「まあ、問題点は現状無さそうだし、一応適当な戦略爆撃積んで作戦海域に飛ばしといて、俺は新しい案を思い付いたからちよつと考えてくるよ」

「わかりました、提督も時間だけは大切にしてください」

寝てないのバレた?

結構隠してるつもりなんだけどな (*・・ω・)

???
力と代償そして得るもの

空は落ちてきた

いや、違うな。

落としたのか、私は。

そうだ、落としたのだったんだ

頭がいたい。

体が急に軽くなった。

何かを忘れている。

何か進むごとに忘れていく。

それを捨ててまで何が欲しかったのだ。

誰に望まれた？

思い出せない。

何故だ。

なぜこうも

笑っていられるんだ？

・・・そっか。

そっかそっか

まあ、いいか。

わからなくても、いつかわかるさ。

「正義は必要ない、この選択は間違いじゃない、俺は・・・まだ見つからなくていいか」

鈍い光から目を背け、そっと世界を閉じる。

先に見えているものになぜか暖かさを感じた。

・・・いや、ただ暑いだけか。

いつもそうだ

答えなんてものはない

結果なんて無い
あるのは『無駄』

違うか？

知るか

わかるわけがないな。

わからない？

わからないか

わからんよな

もう全てが終わる。

いや、終わっていたのだ。

まだ終わっちゃいねえ

そういう下らないのは嫌いなんだ。

まあよいか。

そういうのもひとつの娯楽だ

さあ、そんな下らないことはほっておこうか

諸君

戦争の時間だ

「・・・各艦隊の連絡は？」

「今来ました！・・・被害軽微で完勝です・・・」

部隊は壊滅か、まあ別にいいか

「主力艦隊は後退、加賀以下主力打撃部隊は予定通り計画を進行、それと第二艦隊は行動を少し早めとけ」

「了解しました」

伝令を飛ばしているこの一瞬も戦場は変わり、戦局もいつ引っくり返るかわからない状況。

でもなぜだろうか

このなんともいえない虚無感
なにかが違う
気にすることはないか。
ああ、下らない。

燃える海域

無数の屍

血で染まる海

ここに神も悪魔もなく

あるのはただの命

全ての悲劇の始まりで全ての悲劇の終末

空っぽの殻は何も感じはしない

通信から微かに聞こえたその声は何もない

安堵

歓喜

慢心

殺意

何でもない

ただ、潰した

殺すことも面倒くさがった

ただ潰しただけ

だから感情はこもっていない

そういう人だった。

どれだけ変わろうと根は変わらない。

きっと世界が違いすぎたのだろう。

命の価値を知っているからこそ

ここまで非情になりきり、冷酷になれる

この力は
代償にしては小さすぎた。
そして私達に得られたものは全くだった。
壊れれば壊れるほど
真理に近付き
あの人は別の何かになる
そんな怪物は上っ面だけだった。

不気味ね。
私もあの人も

開戦から三時間
空が荒れ
少しずつ激しくなる雨。

……ぶっちやけるとさ。

俺は誰だ
ずつとそうだ。

記憶が曖昧すぎる。

私は確かに数カ月前にあそこにいた。
なぜだ

なぜ空白の時間が

たった一瞬のはずなのになぜ『十数年以上』の時間を感じてしまう
？

俺にはさっぱりだ
私にはさっぱりだ
我には理解できん
僕は誰だろうか
おかしいな

変な笑いが込み上げてきた

・・・ただ、まあいいか。

いや、やっぱだめだなんかこう足りないのがわかった気がする。
誰もいないからだ。

横に誰もいない、それが違和感だ。

そしてなんだ。

「下らん来客よなあ・・・敵がこんな真ん中で何のようだ・・・この俺を誰だと知ってここへ来た『姫』」

「ッ!?!」

ん?なんだ。

こいつもか

加賀と同じような反応だ。

何を知っている

・・・探ってみるか。

記憶を探せ

何かあるはずだ

断片でいい

なにか

ああ、これかな

「・・・ああ、うん・・・あ?思い出した」

「えっ、まだ」

まだ?

なにかトリガーでもあるのか。

「・・・ああ、そ「提督!?!」っ長門か」

なんてタイミングだよ、あと一歩じゃねえか。

「一時退散ですね・・・」

黒いマントの裏側から飛び出た小さな飛翔体が部屋中に散らばり爆発する。

煙が晴れる頃にはもう壁に大きな穴が開いて奴は居なかった。

「小型のミサイルか？明らかに軌道がおかしいぞ」

ん？

あ、長門が埋まっとる。

腕を突っ込んでとりあえず二の腕辺りを雑に引つ張る

「・・・重いな・・・」

あつこらつねるな。

いつてええ

作戦は成功

戦略的には大敗ね

皆、浮かれているけど本当に。

『あの人』の勝利は『殲滅』であつて。

『敵』の『壊滅』じゃない・・・海底に居る素体も全て・・・。

私は知つた。

あの人は絶望した

彼は願つた

私は叶えようとした

でも、私は女であつてしまった

たつた一つの投げ所だった。

それを自らの手で潰してしまった

だからこうなつた。

運命は残酷ね

そして、こんな蜘蛛の糸よりも細い希望・・・。

「・・・」

・・・

音？

何かしらこれ

反応？

・ ・ ・ 誰も気づいていない・ ・ ・ 。

まさか・ ・ ・ 。

「はいハイ第45番前線鎮守府のみなさくん、空母棲姫ちゃん☆で
す♪」

不愉快極まりない存在感

ふざけたような声としやべり方から感じるあの人に近いタイプの
プレッシャー

瞳は何も捕らえては居ない

だけどなに。

反応がも一個

あの人にしては小さく

だけど似ている

「皆。落ち着いて・ ・ ・ 相手は姫でも一人・ ・ ・ 」

「ですが加賀さん!!あの敵はなにか違いますよ」

「あれが姫?どう見たってその程度の実力じゃないよ・ ・ ・ あんな
の・ ・ ・ 」

流石に無理ね。

実力があるということは相手の実力も自然とはかれてしまう。

とはいえ。

何故

「うーん、加賀ちゃんは良いとして、他が赤城や大井、夕立とかですか、
うくん。よし、あー、面白いものだしたいなあ」

目の鋭さが変わった。

彼女が指をならすと同時に海底からなにか巨大なものが飛び上
がった。

それは気配にしては小さく。

そして、一瞬でわかった。

あれは艦娘だ

彼女はおそらく先の海戦で轟沈した五十鈴。

でもあれはあの人そのものの気配。

答えはひとつ

「んあ？ありやりやく恋敵は気づいちゃいましたかく、いや／＼察し良いですねえ、ええこのどこかの鎮守府の雑な命令で沈められた五十鈴ちゃんを回収して修復してちよつと洗脳して、面白いシステム埋め込んでやつちやいました☆」

「what!?!いったいどういうことになってるネー」

「簡単に解析しますと、『直した艦娘を弄くった』といたいののでしよう」

「そ、そんなの・・・あ、提督ならやつちやいそう」

この姉妹は察したのかしら。

いえ、無いわね。

「どつかの人は言っていました、「うっさい黙れくたばれ小娘!!」つつつぶねっ」

「加賀さん!?!」

流星にクラスター爆弾の矢をこの距離で射つてもだめね。

「いやつぶねえ。なに貴女急にそんな国際法ガン無視の危険兵器乱射するんですか、死にかけたじゃないですか」

「知らないわ、あの人ならきつとそんな長話キレて殺しにかかるでしょうからそれを真似ただけです、ええ、決して、時間の問題じゃないですよ」

弓を構え、じつと見つめる。

「あー、なんかも死にそうなので要件纏めて帰ります」

「ええ」

「私思っちゃんです、あの人为世界が進めば自分はようなし言うので世界をあの人にしてしまえばあの人はずもう、何もなくていい、そう思って面白いのを作っちゃったんですよ、ええ愛ゆえにですかね、果てを目標せば見てもらえると思っただけいかにたまたまなんですよ」

う。ってなわけであ、この五十鈴ちゃん、NTTDでダミーなエグザムでアリスなファティったゼロいシステム通称『ホワイトナイトシステム』略して『HNS』を搭載した試作品です。ええ、もちろん普通の艦娘にあの人の真似なんて不可能なので数分でこの娘は自壊しますが、まあ」

「貴女方が死体に成ればノー問題ネー☆つじやあでゅー」

そういつて海底に消えた瞬間。

全身から血を吹き出しながら

この世ならざる怪物が襲いかかってきた。

(・・・)

「・・・うん、盗撮だね♪」

「えと・・・その」

「別にいいんじゃない、俺にはこういうの良く解んないし」

「えっ・・・」

以外と綺麗に撮れてるけど、盗撮だよなこれ、技術つてすごいな。

「勝手に売り買いすれば良いって言ったんだ」

「あの・・・どこまで「全部」・・・その、軽蔑します?」

なぜそこまでいくのだろうか。

やっぱ人の心はわからんな。

「いいや、別に気にしていない。興味ないし、うん」

「じゃ、じゃあ一緒に寝ても「子供か」・・・駄目でしょうか」

「? 何故そうなる、別にその程度良いだろ、まあ、執務室修復までソファで寝るから・・・」

そーいやあのときはずっとソファだったな。

パソコンに目を通しておく必要多いからしょうがないか。

(ーωー) Zzz



人類はいつもこうだ。

弱く、脆く、儂く、愚かで、下らない戯れ言を述べ、気に入らない。腹が立った。

奴等は平穩しか望まない。

それで未来があるのか。

許せなかった

気に入らなかった

だからさっさと殺そう。

でも面倒くさかった。

明らかにかける労力と時間が見合わない。

だからやめた。

他人任せだ

だがどうだ。

運命とは実に素晴らしく

実に鬱陶しい

・・・あれ。

なんだっけな。

うん、そうだったな。

絶望したってことは希望を見いだしてもいたな。

泣かないさ。

もう、「提督!!」

ん？

気のせ「提督!!」

「うるさい・・・何かあった？」

アイマスク被ったままだから見えんけど声は大和か・・・どうせ

「加賀さん率いる遠征艦隊が・・・全艦大破、加賀さんだけは小破ですみました」

・・・

嘘だろ。

全員指輪と穴開けでフル改造のカンストなんだけど。
なに、敵なによ

「おつおとおちおち落ち着け、うん。敵は？」

「一隻・・・それも瀕死です」

・・・ええ。

「そうか・・・この件は黙っておけ、流石に常識を逸脱しすぎているし、こつちが黙って改造した艀装のテストもしたんだ、情報抹消に今は集中させてくれ、それとその敵は沈めたんだよな、命からがら逃げ帰ったのか？」

「確かに沈めた様ですが・・・」

籠り始めた大和の声

大方自分自身も半信半疑なのだろうな。

ん？下からこつちへ誰か来るな。

「大和、煎餅とお茶、あとおにぎり用意してもらえる？ちよつと結果報告書とか全部見たいし」

「あつ、はい、すぐに持つてきますね」

まあ、ここから食堂って飛び降りなきや10分程度かかるんだけどな。

さてと、どうしたものか。

たった一隻、それも瀕死の奴と来た。

あのしゃべり方からしてろくな敵じゃないのはたしかだ。

大方、改造された艦娘を無理矢理動かしたのか、はじめからそういうものだったのか。

「・・・随分と、思い当たる節があるようで？加賀」

ついさつきまで下の階にいたのにもう、ベッドで寝転がってるよ。

ここ、大和の部屋なんだけどなw

「……今回の敵は……本当に何もかもが違いました」
「……あ、これあかんやつ。」

人類負けたなこれ

「一言で言うなら、人工の怪物でしょうか」

「人工の怪物？……なんか薬漬けとかで変なの搭載したとか？」

凶星か……

「……今、凶星だなんて思いましたでしょう」

「ああ、その手の震え、明らかな真だ、敵はなんだ」

「……あえて言うならそうですね、『果ての存在』でしょうか」
果てかあ、研究者や探求者みたいなもんかあ。

最果てに立っている奴かあ。

「すまんがもう無理だ、とりあえず敵の予想はついた、勝てんわこれ」

「……でしようね、ここまで来ると詰みですよ」

ん？もうちょい粘ると思ったけどこの様子だと敵は解ってるな。

「……なあ、加賀さん。知っててそれかい」

「演技がうまいこと」

ありやりや、ばれてるよこれ。

「……うん、本当はもう無理だとすら思ってるよ、聞くのも無駄、知っても無駄、どう考えても相手が悪い」

何故だろうな

普通ならこういう時つてもっと違う対応をしているはずなのに。
なんか

「なあ、加賀教えてくれ、俺は……誰だ……なんか違うよね」

もう訳がわからない。

なぜ今、俺は襟をつかんでそこまで必死なのだ。

「……全てを捨てる覚悟が、貴方にはありました」
は？

そんなわけない……だろ。

「自分の欲の為に全てを使い潰して、大切なものを全て切り捨て、ただ一つの答えを手にいれました」

「そんなの・・・ただの」

ただの独善？

いや、違うな。

どうでもいいんだ

「ええ、誰でもない、ただの破壊者、ただの殺人鬼、ただの人間です」

「・・・随分と苦しいそうに言うね」

・・・もうどうでもいいや。

「当然ですよ、このせいで無数の命を溶かして何度も虐殺を繰り返して、何度も挑んで結局、私は本当の意味で一度も勝つこともできないで、全てを失って、今のこの状況ですから」

切り替わる空気

穏やかだった雰囲気はいつの間にか少し暗く燃えるように感じ

世界は一転した。

思い出せない

でも

どうでもいい。

俺は強い

全てを捨てて強さを手にいれた。

人間性？善意？価値観？

覚悟？勇氣？愛？

要らねえよ、そんなものゴミ箱にシユートだ

そんなちっぽけなもの何が手にはいる

力が無いから失った

力を持たないから奪われた。

もつと何かあったが

今はどうでもいい。

「・・・やっぱり、そっちが提督らしいです」

俺は演じるだけだ。

でもな

もう観客が居ないんだ。

舞台もない客もない

ならフリーの役者はただの人さ。

あれ？

おかつしいなあ

俺って役者ではあるが役者じゃあ無いだろ。

まあいつか。

「俺にこの服はやっぱ合わねえわ」

アイマスクをぶん投げ、服も脱ぎ捨てる。

「て、提督……その」

「あっ」

「（*・ω・）すまん、ここ大和の部屋だったな、まあいいか、俺の服どこにしまったっけ」

……そうだ、倉庫か。

黒い軍服

銀の指輪

いつもの刀

なぜだろうか

なんかもの足りないや。

まあ、これが落ち着く。

「……やる気はないけど、頑張ってみますかねえ……加賀、戦争を始めるよ」

破 空虚

8月14日

戦争を始めよう。

といつてもまあ、まずは戦力の比較だね。

まあこれは要らないか

比べるだけ馬鹿馬鹿しい。

キルレ1：2000でもしなきゃ話にならんよ。

とりあえず物資問題だよなあ。

別に後方からの補給で現状維持『は』できるけど、侵攻は無理だ。

てゆーか人道とか気にしてる時点で正直人類とかもう興味ないわ。

まあ人類なんて玩具壊れてもいいか。

艦娘と深海棲艦なんて新しい玩具と戦争と言うゲームがあるし。

うん。

とりあえず近場の基地からプチプチ潰してみるとして。

「いやあ、なにこれ、基地まみれやんけ、無理やん、百はあるぞおい」

無理ゲー臭い

核兵器まだ手にはいつてないんですけど(・ω・)

ほーんとこれひつで。

人員足りない基地足りない、地盤無いかクソゲーだわー

「やってらんね、いくら個々の質が高くて土台なけりやむりやん」

「いやあの提督、本来は複数の「あんなカス共使えるわけねえだろ、ブ

ラックボックスに触れるのを恐れる弱者なんて粛清だよ粛清」・・・

はあ」

加賀の言うことがもつともだけどさ。

無理だよ、連中足とろいし、自分の絶対に管理おける範囲でしか拡

張しないし。

ミサイル待ちだよなあこれ。

「ねえ、資材ぶちまけて作った兵器工場の稼働率って知ってる、12%

だよ、何故かつて？人員の妖精さんが居ないからだよ、糞みたいだよ

ね、自動車工場みたく自動化してる部分を足しても43%、アホかい

ね、ねえ加賀、人的資源ないの」
「ありません」

あゝあ。

艦娘量産できたらなあ。

・・・あれ。

なんか引つ掛かるな。

「よし、今俺の直感が名案を出した」

「何ですか、絶対ろくなことではないですよ」

「艦娘量産しよう、プルクローンならぬ艦娘クローン計画」

「・・・良い案ではありませんが」

？

まあ、わかるよ。

でも知らん。

「それ、要は深海棲艦擬きの量産ですよ」

「・・・うん」

「まだやめときましょう」

「でもさあ、戦力差ひどすぎてもう勝ち筋ないよ」

「いえ、今は待っていた方が」

・・・待つても無駄な気がするんだけどなあ。

あーあ、打って出れば勝てるよ、でも資源持ち逃げが関の山だよ、てか今までもそうだった。

・・・数が数だしなあ。

相手が人間なら流言でもぶちまけて内部崩壊も狙えるけど相手は兵器だしなあ。

「対艦クラスター爆弾の量産まで待つしかないか」

「ですなあ、提督の技術は普通にどれもこれも使えますし、資源強奪を繰り返しつつ武器を揃えるしかありませんね」

「にしても不思議なもんだよ、何故か体がこうすればいいって覚えている感じだしな、ま、今は待つしかないか」

柵からクツキーを取りだし、紅茶を淹れる準備をし始めるとき、何

か変な気配がここにいた。

いつからだろうか。

「紅茶とクツキーは三人分でいいかい？」

「良いのでは？帰るつもりは無さそうですし」

黒いマントと帽子

その瞳の奥は闇と焰。

明らかに、別格だな。

「数日ぶりだなあ、お 姫 様」

「いやあ、今日は面白い話を持ってきただけですよ、ほらテレビつけてくださいよ」

？

特に気にせず適当にチャンネルをつけてみる。

そしたらどの放送もなんか玉音放送してた。

え？

いやその

「えっ」

「いやー、前線の屈強な提督たちをすっぱかして背後の政治家国民連中は己の命欲しさに無条件降伏、いやー、ばっかみたい、このあと戦後の裁判で全員死刑なのに」

「・・・」

言葉がでない。

感情が沸き上がる

感覚がさえ始めた。

「まあ、これを皮切りに欧州の戦力も立ち上がれないでしょうね」

「・・・で？降伏勧告かい？」

別に気にせず紅茶を淹れて差し出す。

「まあ、そんなところですね、一応こちらとしては一般人は全員再教育、艦娘は全員汚染装置で深海棲艦に提督は捕虜ですはい、まあいいじゃないでか毎朝毎晩美少女に拷問されるんですから」

「まあ、あなたはそういうの興味ないですよね・・・」

「・・・」

「加賀さんストップ、今ちよつと堪えているんだ、本気にさせないでくれ」

いやうん、最高だよ。

「アハハハあつっははっはあっは……っふっふふふ……はあ」
「うわあ、相変わらずどす黒いですねえ、貴方、正直深海棲艦の私でもドン引きですよ」

「……答えなさい、空母棲姫あなたは「やめとけ、どうせ手引きしたやつがいるんだ」……」

クツキーにレモンをこっそりとかけ、テーブルに置く。

「相変わらず勘のよさは健在ですね、ええ、ちよーと提督と政治家を本拠地に招待してなにもせず返したんですよ、そしたら無条件開城いやー、すつばらしいですね……うえっ」

「……なるほどまあ、こんな糞みたいな物量見せられたらそうもなるよ」

「……ふふっ」

加賀さん嬉しそうだなあ……そんなにこんないたずらにはまるのが楽しいのか。

てか、なにも言わず扉にたってるのいいね。

「……もう少し、遅かったら面白いことになったんじゃがなあ」

「いやあ、もう少し遅かったらあの数万は軽く越える対艦用のクラスター爆弾に潰されると思うとほんと助かりましたよ、あれちよつと超兵器すぎませんか、何ですかあの自動誘導機能」

「なんだ、見てきたんだ、他にもあつたらろ」

「ええ、拡張艦装に携帯兵器にジェット機対応の新型飛行甲板、艦娘の歩兵運用と機能向上を目指していましたね」

……ずいぶんと、知られているけどほんといつから居たんだ。

「で、本気で何しに来た、徹底抗戦するかしないかは貴様次第だぞ、空母棲姫」

……なんか違うな、うん。

「……そうですねえ、今ここで『狂帝』の再来望んでもいいのですがねえ」

・・・不思議だな、無性にイラついてきた。

同時に感じるこのほのぼのとした暖かい感じ・・・不思議だな。

「加賀さん・・・足音たてないの」

「あらあ、怖い人ね」

「しゃあねえ、このまま平行線を進めても無駄か。」

「答えは出たよ」

「えっ」

「提督!？」

・・・気が変わった。

よし、やろう。

「なあ、くーちゃん、別に君、人類とか艦娘とか興味ないでしょ」

「・・・ええ」

絶対的な王は一人だ

もう、引き際は無いな。

「・・・俺は降りるよ」

？

なんだ、まるでわかっていたような感じだな。

「では・・・しばらく盤上の外よりお楽しみください」

そういうとまた溶けた影のように消えるくーちゃん、相変わらずまどろっこしい。

「加賀さん、全ての兵器を隠しといて、俺はこの糞つまらん戦場に興味はないから面白くなったら起こして」

「わかりました、場所は」

場所かあ

ええこと思いついたわ

「全ての始まりって意味で・・・真珠湾だな」

これでは道化だな、だが、それもまたよかろう。
相変わらず甘いやつだよ俺は。

人に望まれたからってこんな道化しちゃってさ。



無数に並ぶ白と黒の駒。

だけどこの卓上に座る敵は無し。

悲しいかな？

チェスも将棋も相手がいなきやゲームにならない。

この盤上の全ての駒を動かせるのは下らないのだよ。

この数万の駒を一人でだ。

面白くない。

数万数億数兆の攻め手守り手がある。

その面白さが一人じゃあるわけがない。

ならもうこんな盤。

捨てちまおう

もう俺は役者である必要もない。

そうだなあ。

これからどうしようか

これから決めよう、時間はまだあるしな。

「提督!!提督!!」

「加賀、うるしい、なにかあった?」

朝日が上り海底を照らし続ける。

冷たいけど陽の光はいつまでたっても心地いい。

されど戦場は俺を望んだ。

人々が望んだ

だから立とう。

他ならぬ人の為に。

道化だつて演じるさ

「・・・ああ、そうか、そろそろなのだな」

結局、誰も席に座っては来れなかった。

悲しいな。

体を起こし、黒いマントと帽子を手取る。

「……眠いな……」

「駄目です」

「(´・ω・) ねえ加賀さん、こういうのやっぱりダメだと思うの」「これ以上待っても無理です」

諦めたくなかった。

でも、諦めよう。

弱者はいつもそのままなんだ。

もう希望なんて要らない。

もう、飽きた

殺そう

滅ぼそう

作り直そう

弱いのなら

強くすればいい

神にでもなればいいのか

楽しそうだな、新世界の神って

まだ、待ちたかった。

でも、時間切れだ。

「……ねえ、加賀さん」

「なんででしょうか」

光が鈍いな。

「俺がよ、最低最悪の魔王になれると思うか」

「無理ですよ」

うわー、即決。

「そう、なら、全力で道化をするさ……俺だって結局は人間なんだよ……」

「ええ、貴方を理解するのにずいぶん時間がかかりました、ですから全力で壊れてください、誰も貴方を愛しません、誰も貴方に期待しません、ただ、帰りを待っているだけです」

「……」

現在進行形である意味期待されているんだがまあ、いいか。

「あーテステス、白さくん、そろそろ道化を演じる時間ですよ」

「ったく、あの野郎、やっぱお前らを粹からはずすのは生涯最大の誤算だった、ああもういいよ、やってやるよもう」

ドアを蹴り破り、場所へ向かう。

過去を踏み

時代を踏み

鉄の床を歩く。

俺は俺でしかありたくない。

姉さんのいない世界で『狂帝』なんてやってられなかった。

何度壊しただろう

何度噛っただろう。

もういいか、これが最後の破壊だ。

完膚なきまでぶち壊そう

この星を二度と生物が生きていけない世界にしよう

もう、絶対に過ちを起こせないように消し去ろう。

楽しくもない戦争に興味はない

だから

どうやって殺そうか

「・・・うわあ、すっごくいい」

黒い艦隊

この海を潰せるような黒い波。

最高だよ

「・・・諸君、君達は悲しい兵器だ」

俺は道化だな。

ああ下らねえ、こども下らん戯れ言を言える自分が下らん。

「人類は余りにも脆く弱い、だがそれは罪ではない」

自分も人間だろうが・・・

「諸君、我々の力にて、この盤上より人間と言う劣等種族そのものを引

罪

骸の山

雨のように降り注ぐ紅の水

異臭漂う地獄に

我は一人

黒い空

終演

そう、終わったのだ。

何もかもを切り捨てた世界

まあ、いいか。

これが終演

これが世界

これが願望

これが俺だ

狂いきった皇帝は居ない

・・・まあ、いいか。

我ながら馬鹿らしいな。

子供みたいに心の内側をぶちまけてサア

結果的に数十億の人間が死んだ程度かよ。

やっぱだめだわ。

誰かの下じやねえと全く面白さがない。

じゃあ殺そう

じゃあ滅ぼそう

だから殺した

だから滅ぼした

結果的に満足した

結末に不満だった

世界を掴んだところで何も無いなら、な。

本気になれなかった

願望器になれなかった

これしかなかった

これしか知らなかった

これだけよかった

これ以外を知りたくなかった

絶望した

知って絶望した

見て絶望した

聞いて絶望した

人なんかでありたくなかった

弱者はなにも救えない

弱者はただ、強者にすぎり

強者は更なる強者に打ち倒される

弱者は悪だとは思わん

だが、弱者であったからこそこの結果なのだ。

人類は弱者だった。

だから滅んだ

俺ごときに滅ぼされた

たった一人の男の野心に滅んだ

これが結果だ

これが弱者だ。

これが絶対的な力だ。

「・・・なあ、加賀、空母棲姫、お前らさ・・・下らないんだよ、全部
すんだら俺が人になるとでも？ アイツと似ていて甘いやつだ
な・・・」

・・・許せとは言えないな。

艦娘、深海棲艦、妖精、人間、植物、動物。

全部を滅ぼした。

全部だ。

笑えるよなあ

敵も味方も皆殺し

本当に愉快だ。

狂いそうだ

嗤いそうだ

逃げたいとも思っただ。

・・・甘かったな。

俺も

お前ら二人だけは生かしちやつてさ

なあ、いつ傷が治る

いつ立ち上がる

いつ殺しにされる？

「・・・なあ、楽しませろよ」

全部ぶち壊したんだぜ

お前らが

己の欲望第一で動いたから

全部全部

自業自得じゃねえか

なあ。

この地獄に

何を望んだ

何を希望した

俺は俺でしかない

なあ、何を望んだからこうなつたと思う。

笑えるか？

まあ、いいか。

ゆつくりとゆつくりと

壊れていくのかもな。

私は

お休み、愛しかつた二人とも。

また、明日起きて、頑張つて殺しに来てね。

「・・・星が・・・綺麗だ」

もう、何も無いなこの世界にも星はあつたな。

・・・うん。

一世紀前の子供なんかか

草にねっころがって星を見るなんてな。

我ながら馬鹿らしいな。

風は冷たく

世界は静かだ。

陽の光はもうなく

月の光がこの荒廃した赤い世界を照らす。

もう、この世界には時間の概念がない奴しかしないから、永遠とこ

の命なき世界を楽しむしかないな。

なあ、もう、地球は生き返れないさ。

本当に面白いね

ああ。

今日も

世界は

静かだ

私は

・・・私だつたな

七帝これくしよん
— E N D —

打ち上げじゃあああああ

※ただのリアル会話の切り取りです
次回作が気になる人だけ見てね☆

独「打ち上げじゃあああああ」

ソ「糞エンドで草」

日「俺らが負けたからってこりやねえなww」

仏「当て付けか、当て付けか、おい、おい閣下、当て付けか」

米「まあ、うん、途中から察してた」

英「やっぱ最後まで閣下だったわ、何年やったらろ」

伊「まあ、そうなるよな」

独「俺じゃない、お前らがやったことだ、知らない、済んだことだ」

仏「ないわ、まあ、お前だから知ってたよ」

ソ「狂帝してないとただの控えめに言ってロリコンシスコン愉快犯

殺人鬼だからな」

独「類い稀を見ない糞エンドだけどまあね、うん、負けたお前らが悪い」

米「全力で核兵器と空挺乱用ダメだと思うの」

独「でもさ、そうしないと上れないんだけど」

英「だめだこりや、それでオルタ先生次回作」

日「こいつ諦めちまったよ」

独「・・・ごめんなさいね、過去に出したPV完成してなくて」

ソ「で、長期はどれなんだ」

独「いやまあ実はさ、うん、最近あるタイプのコメント多いからやろうと思うのよ」

伊「あああれね」

ソ「なにそれ、そんなのあるん」

独「うん、じゃあ、次回のメインPV出すか」

「この狂帝を呼ぶとは貴様もまたおかしな輩よなあ」

これが

全ての運命の始まりだった。

仏「あ「だまれ」はい（・ω・）」

「さあ、この一撃をもってこの物語の終演としようではないか、殺生院……いや、自己愛にまみれた一人の人間よ。貴様ほどの者、隣に居れば随分愉快な物語が見れたのであろうなあ」

「私の命令だ。俺の手を取り、我が冒険譚をより愉快なものにせよ雑種!!」

これが全ての冒険の始まりだった。

「フハハハッハハッハアハハハハ。どーだどーだ天草四郎時貞。貴様の欲した願望器はただの汚染された物であったなあハッハハッハハッハ」

ある時は優勝景品をゴミクズにして。

「……そのなんだ、すまんな桜さん、うちのマスターがあれなせいで」
またあるときは欲望に従って桜を拉致らせて。

「さあさあさあさあ、これより行うは全能狩り、我は全てを否定し全てを統べよう」

またあるときは根源への挑戦

「フハハハハハ、良いぞ、良いではないか、この戦場は我にぴったりだぞ雑種」

「フン、せふあーるか……星の尖兵だかなんだかは知らないが同じ神を滅ぼす者なら仲良く行けると思ったのだがなあ」

またあるときは月で世界を征服したり

なんか出てきた外宇宙的な奴等を殲滅したり

「フハハハハハ!!その程度かアインツベルンのホムンクルス」

「ぐぬぬー」

ある時はなんか花札して

「えくすかりばー!!」

「?!?!」

気分で優勝商品の温泉をかりばーでぶつとばしたり

「にやにやつこれはまずつぎやあああああああ」

「なんだこの猫みたいなナマモン、解剖しよ」

またあるときは冬木の街で生物を捕まえては遊んだ。

「どけセイバー!!アーチャー!!ここは俺の道だ!!」

またあるときは何故か聖杯を掛けたレースで乱入して優勝杯をぶんどったり

「・・・ふん、セイヴァー・・・最後までこの我に勝つつもりだったか」

ある時はあの屈辱を晴らし。

そして

「ほお、随分と愉快なものだ・・・『特異点』というのか・・・これはまた愉快的な冒険譚の始まりだ」

2017年

地球

この世界は今までとのように甘くはなく
厳しいものだった。

「BB 「どけええ!!」 キャアアア」

「BBチャンネル☆」

帰還したときにBBが観測した違和感。

それは

「……わあお、破廉恥」

「うわあ」

「よいいこう」

なことによってよりカオスになっていた。

「……うん、殺生院臭いな白亜帝都にするか」

「ねえ、これどうするの」

「へーきへーき、そのうち来るから」

新たな冒険譚

「私たちは人理保障機関カルデア」

「私たちはこの特異点を解決するために「渡せねえな」っえ」

増える桜

「先輩!」

「バーサーカー……ちよつと確認」

「ほいきた」

「何ですか先p……えっ?」

「BBが……二人」

「wwwwww」

ソワカソワカ

「あら、あの時のお二方では」

「にぎやああああああ、わしかえる」

「いやまって、連れてってよお!」

これはいろんな時代を探る冒険譚。

Fate／grand order moon lost m

e m o r i a l

星を見る者達

秋公開

独「疲れた」

ソ「そーいやもう、結構前だったなこれ」

独「んじや、これにて終わり!!」

仏「あっけない」